

農山村地域復興基盤総合整備事業 関連遺跡調査報告2

桶師屋遺跡

2018年

福島県教育委員会
公益財団法人福島県文化振興財団
福島県農林水産部

農山村地域復興基盤総合整備事業 関連遺跡調査報告 2

おけしや
桶師屋遺跡

序 文

平成23年3月11日に発生した東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故から、6年が経過しました。壊滅的被害を受けた沿岸部でも、防災集団移転促進事業と連携して海岸防災林の造成等が進むなど、復興に向けた取り組みが着実に進んでおります。

本県の基幹産業である農業についても、福島県農林水産部において復興に向けた農地整備を行なっております。

福島県教育委員会では、こうした復興事業に対応して埋蔵文化財を適切に保存・活用していくため、発掘調査を実施しております。本報告書は、農地整備事業に伴い発掘調査を実施した桶師屋遺跡について記載しております。調査において、古墳時代中期・後期、奈良・平安時代、中近世の集落跡が発見されました。特に、特殊な構造をもつ10号井戸跡は本県では稀有な例であり、学術的にも大変価値のある発見となりました。これらの成果が、地域の歴史を解明するための、また県民の皆様の文化財に対する理解を深めるための一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査及び報告書作成に御協力をくださった福島県農林水産部、南相馬市教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に、厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

福島県教育委員会

教育長 鈴木 淳 一

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模開発に伴う埋蔵文化財の調査を実施しております。本報告書は、東日本大震災からの復興事業の一つである農山村地域復興基盤総合整備事業にかかる埋蔵文化財のうち、平成28年度に実施した南相馬市鹿島区に所在する桶師屋遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

桶師屋遺跡の発掘調査の結果、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の集落跡が確認されました。古墳時代の集落跡は、外縁を方形に巡る溝跡に囲まれていました。また、土器類の他に当時の祭祀に用いられた石製模造品と呼ばれるものも出土しました。当時の集落の景観とそこに暮らす人々の生活を復元できる貴重な発見となりました。

奈良・平安時代の集落跡からは、掘立柱建物跡の他に、井戸跡も発見されました。この井戸跡からは、県内でも珍しい丸太材を半裁し割り貫いて作られた井戸枠が見つかりました。

本報告書が今後の歴史研究の基礎資料として、さらには生涯学習の場やふるさとの歴史を解明するなど、「ふるさとの文化」を理解するために幅広く活用していただければ幸いです。

終わりに、東日本大震災からの早い復興が達成されますことを祈念するとともに、今回の発掘調査にご協力をいただきました関係諸機関、ならびに地元住民の皆様に厚く御礼申し上げます。また、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 福島県文化振興財団
理事長 杉 昭 重

緒 言

- 1 本書は、農山村地域復興基盤総合整備事業関連遺跡調査において、平成28年度に実施した南相馬市鹿島区に所在する桶師屋遺跡の発掘調査報告書である。

桶師屋遺跡 福島県南相馬市鹿島区北右田字桶師屋 埋蔵文化財番号：21200683

- 2 当遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が福島県農林水産部と協定を締結して実施し、調査に係る費用は福島県農林水産部が負担した。

- 3 福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。

- 4 公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

副 主 幹 能登谷宣康 専門文化財主査 谷中 隆^{*1} 文化財主事 菅野美句
嘱 託 松本 茂

臨時的に文化財主査 植松暁彦^{*2} と文化財主事 山田和史^{*3}の協力を得た。

※1 公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターより出向

※2 公益財団法人山形県埋蔵文化財センターより出向

※3 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センターより出向

- 5 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。

- 6 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、2万5千分の1の地形図、ならびに福島県農林水産部相双農林事務所が作成した工事用地図を複製したものである。

- 7 本書に掲載した自然科学分析などは、次の機関に委託し、その結果を掲載している。

加工材の樹種同定・放射性炭素年代測定：株式会社 加速器分析研究所

テフラ分析：株式会社 パレオ・ラボ

- 8 引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、本文末にまとめて掲載した。

- 9 本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

- 10 発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関および個人から協力・助言を頂いた。



南相馬市教育委員会 玉川一郎 岡田清一 猪狩正志 森 幸彦
堀江 格 小倉徹也 及川良彦 廣瀬直樹 高橋 学 水久保克英

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 表記がない遺構図はすべて図の真上を座標北とした。
- (2) 縮 尺 各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。
- (3) 標 高 断面図および地形図における標高は、海拔標高を示す。
- (4) 座 標 平面図における座標は、平成23年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」による歪みを補正した平面直角座標系のⅨ系の数値を示している。
- (5) 土 層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせで表記した。
- (6) ケ バ 遺構内の傾斜部は「 III 」、相対的に緩傾斜の部分には「 IV 」、後世の攪乱部や人為的な削土部は「 V 」の記号で表現した。
- (7) 用 例 挿図中の網点等は同図中に用例を示した。
- (8) 遺 構 番 号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は略号で記載した。
- (9) 土 色 土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修『新版標準土色帖』に基づいている。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。
- (2) 番 号 遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、写真図版中では「1-1」と示した。遺物番号の後の（ ）内には、遺物の取り上げ時に付した番号と出土層位を示した。
- (3) 断 面 須恵器の断面は黒塗りとし、瓦質土器の断面は下記の網点で示した。粘土積み上げ痕を一点鎖線で表記した。
 瓦質土器
- (4) 用 例 挿図中の網点は以下を示す。これ以外は、同図中に用例を示した。
 黒色処理
- (5) 計 測 値 各挿図中に示した。()内の数値は推定値、[]内の数値は遺存値を示す。

3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

南相馬市…MSC	桶師屋遺跡…OSY	竪穴住居跡…SI	掘立柱建物跡…SB
柵 跡……SA	土 坑……SK	井 戸 跡…SE	溝 跡……SD
小 穴……P	トレンチ……T	遺構外堆積土…L	遺構内堆積土…ℓ

目 次

序 章

第1節 事業の概要と調査経過	1
事業の概要(1) 調査経過(1)	
第2節 地理的環境	5
第3節 歴史的環境	8
第4節 調査方法	13

第1章 調査の成果

第1節 遺跡の概要と基本土層	15
遺跡の概要(15) 基本土層(17)	
第2節 竪穴住居跡	18
1号住居跡(18) 2号住居跡(26) 3号住居跡(34) 4号住居跡(38)	
5号住居跡(42) 6号住居跡(44)	
第3節 掘立柱建物跡	46
1号建物跡(47) 2号建物跡(49) 3号建物跡(50) 4号建物跡(52)	
第4節 区画溝跡と柵跡	58
5・6・11号溝跡、1号柵跡(58)	
第5節 土 坑	70
1号土坑(71) 2号土坑(71) 3号土坑(71) 4号土坑(72) 5号土坑(72)	
6号土坑(72) 7号土坑(72) 8号土坑(74) 9号土坑(74) 10号土坑(74)	
11号土坑(75) 12号土坑(75) 13号土坑(75) 14号土坑(75) 15号土坑(76)	
16号土坑(76) 17号土坑(76) 18号土坑(76) 19号土坑(78) 20号土坑(78)	
21号土坑(78) 23号土坑(79) 34号土坑(79) 35号土坑(79) 36号土坑(81)	
37号土坑(81) 38号土坑(81) 39号土坑(81) 40号土坑(82) 41号土坑(82)	
42号土坑(82) 43号土坑(82) 44号土坑(83) 45号土坑(83) 47号土坑(83)	
49号土坑(85) 50号土坑(85) 51号土坑(85) 54号土坑(86) 56号土坑(86)	
57号土坑(86) 59号土坑(86) 60号土坑(87) 61号土坑(87) 62号土坑(87)	
63号土坑(87) 64号土坑(89) 66号土坑(89) 67号土坑(89) 68号土坑(90)	
69号土坑(90) 70号土坑(91) 71号土坑(92) 73号土坑(92) 74号土坑(92)	
75号土坑(92) 76号土坑(93) 77号土坑(95) 78号土坑(95)	

第6節 井戸跡					96
1号井戸跡(96)	2号井戸跡(97)	3号井戸跡(97)	4号井戸跡(97)		
5号井戸跡(99)	6号井戸跡(99)	7号井戸跡(100)	8号井戸跡(100)		
9号井戸跡(100)	10号井戸跡(102)	11号井戸跡(112)	12号井戸跡(113)		
13号井戸跡(113)	14号井戸跡(113)	15号井戸跡(115)	16号井戸跡(115)		
17号井戸跡(116)	18号井戸跡(118)	19号井戸跡(119)			
第7節 溝跡					119
1号溝跡(119)	4号溝跡(123)	7号溝跡(124)	8号溝跡(124)	9号溝跡(124)	
10号溝跡(125)	12号溝跡(125)	13号溝跡(126)	14号溝跡(126)	15号溝跡(126)	
16号溝跡(128)	17号溝跡(128)				
第8節 小穴群					128
第9節 遺構外出土遺物					131

第2章 総括

第1節 遺物について					139
古墳時代中期の土師器(139)			古墳時代中期の石製模造品(139)		
古墳時代後期から平安時代の遺物(140)			中・近世の遺物(141)		
木製品(141)					
第2節 遺構について					141
遺構の変遷(141)	10号井戸跡について(144)				
第3節 まとめ					147

付章 自然科学分析

第1節 出土加工材の樹種同定					149
第2節 出土加工材の放射性炭素年代					154
第3節 テフラ分析					159

挿図・表・写真目次

[挿図]

図1	南相馬市の位置	1	図33	掘立柱建物跡出土遺物(2)	56
図2	桶師屋遺跡位置図	2	図34	掘立柱建物跡出土遺物(3)	57
図3	桶師屋遺跡事業範囲	3	図35	5・6号溝跡、1号柵跡	61
図4	南相馬市域の地質図	7	図36	5a・6a・11号溝跡	62
図5	周辺の遺跡位置図	10	図37	5・6・11号溝跡、1号柵跡	63
図6	グリッド配置図	14	図38	5号溝跡出土遺物(1)	66
図7	遺構配置図	16	図39	5号溝跡出土遺物(2)	67
図8	基本土層	17	図40	6号溝跡出土遺物(1)	68
図9	1号住居跡(1)	19	図41	6号溝跡出土遺物(2)	69
図10	1号住居跡(2)	20	図42	1～8・35号土坑	73
図11	1号住居跡出土遺物(1)	22	図43	9～18号土坑	77
図12	1号住居跡出土遺物(2)	23	図44	19～21・23・34・36～38号土坑	80
図13	1号住居跡出土遺物(3)	24	図45	39～45・47・50号土坑	84
図14	1号住居跡出土遺物(4)	25	図46	49・51・54・56・57・59～62号土坑	88
図15	2号住居跡(1)	27	図47	63・64・66～69号土坑	91
図16	2号住居跡(2)	28	図48	70・71・73～78号土坑	93
図17	2号住居跡出土遺物(1)	30	図49	土坑出土遺物(1)	94
図18	2号住居跡出土遺物(2)	31	図50	土坑出土遺物(2)	95
図19	2号住居跡出土遺物(3)	32	図51	1～5号井戸跡	98
図20	2号住居跡出土遺物(4)	33	図52	6～9・11号井戸跡	101
図21	3号住居跡	35	図53	10号井戸跡	103
図22	3号住居跡・出土遺物	36	図54	10号井戸跡・出土遺物	104
図23	4号住居跡・出土遺物	39	図55	10号井戸跡出土遺物(1)	107
図24	4号住居跡出土遺物	40	図56	10号井戸跡出土遺物(2)	108
図25	5号住居跡	43	図57	10号井戸跡出土遺物(3)	109
図26	5号住居跡出土遺物	44	図58	10号井戸跡出土遺物(4)	110
図27	6号住居跡・出土遺物	45	図59	10号井戸跡出土遺物(5)	111
図28	1号建物跡	48	図60	10号井戸跡出土遺物(6)	112
図29	2号建物跡	50	図61	12～15号井戸跡	114
図30	3号建物跡	52	図62	16～19号井戸跡	116
図31	4号建物跡	53	図63	井戸跡出土遺物(1)	117
図32	掘立柱建物跡出土遺物(1)	55	図64	井戸跡出土遺物(2)	118

図65	1・4号溝跡	120	図77	出土加工材(1)	151
図66	1号溝跡出土遺物(1)	121	図78	出土加工材(2)	152
図67	1号溝跡出土遺物(2)	122	図79	出土加工材(3)	153
図68	7~10・12~17号溝跡、出土遺物	127	図80	暦年較正年代グラフ	158
図69	小穴群出土遺物	130	図81	暦年較正年代グラフ (マルチプロット図)	158
図70	遺構外出土遺物(1)	134	図82	分布図	161
図71	遺構外出土遺物(2)	135	図83	火山ガラスおよび角閃石の 屈折率測定結果	161
図72	遺構外出土遺物(3)	137	図84	1φ・4φ篩残渣中の粒子の 実体および偏光顕微鏡写真	162
図73	遺構外出土遺物(4)	138			
図74	遺構変遷図	143			
図75	丸水舟転用井戸枠出土類例	146			
図76	10号井戸跡出土木製品転用前想定図	147			

[表]

表1	周辺の遺跡一覧	11	表5	試料とその特徴	159
表2	出土加工材の樹種同定結果	151	表6	試料の湿式篩分け・重液分離の結果	161
表3	放射性炭素年代測定結果(1)	157	表7	4φ篩残渣中の鉍物組成	161
表4	放射性炭素年代測定結果(2)	157			

[写真]

1	遺跡遠景	165	16	3号住居跡	172
2	遺跡遠景	165	17	4号住居跡全景	173
3	遺跡近景	166	18	4号住居跡	173
4	調査区全景	166	19	5号住居跡全景	174
5	調査区全景	167	20	5号住居跡	174
6	調査区全景	167	21	6号住居跡全景	175
7	1号住居跡全景	168	22	6号住居跡	175
8	1号住居跡(1)	168	23	1号建物跡全景	176
9	1号住居跡P1遺物出土状況	169	24	1号建物跡(1)	176
10	1号住居跡(2)	169	25	1号建物跡(2)	177
11	2号住居跡全景	170	26	2号建物跡全景	177
12	2号住居跡(1)	170	27	2号建物跡	178
13	2号住居跡P1遺物出土状況	171	28	3号建物跡全景	179
14	2号住居跡(2)	171	29	3号建物跡(1)	179
15	3号住居跡全景	172	30	3号建物跡(2)	180

31	4号建物跡全景	180	65	1号住居跡出土土器(1)	205
32	4号建物跡(1)	181	66	1号住居跡出土土器(2)	206
33	4号建物跡(2)	182	67	2号住居跡出土土器	207
34	1号柵跡、5・6号溝跡全景	183	68	3号住居跡出土土器	208
35	1号柵跡、6号溝跡全景	183	69	4号住居跡出土土器(1)	208
36	1号柵跡全景	184	70	4号住居跡出土土器(2)	209
37	1号柵跡	184	71	6号住居跡出土土器	209
38	5号溝跡	185	72	1～3号住居跡出土石製品	210
39	6号溝跡	185	73	1号住居跡出土木製品	211
40	5・6号溝跡	186	74	2号住居跡出土木製品(1)	211
41	1～8号土坑	187	75	2号住居跡出土木製品(2)	212
42	9～17号土坑	188	76	1・3号建物跡出土木製品	213
43	18～21・23・34号土坑	189	77	4号建物跡出土木製品	214
44	35～42号土坑	190	78	5号溝跡出土土器	215
45	43～45・47・49～51・54号土坑	191	79	6号溝跡出土土器(1)	216
46	56・57・59～63号土坑	192	80	6号溝跡出土土器(2)	217
47	64・66～70号土坑	193	81	45・47・49・68・78号土坑出土土器	218
48	71・73～78号土坑	194	82	3・10・16・18号井戸跡出土土器	219
49	1～4・6号井戸跡	195	83	6・14・17・18号井戸跡出土木製品	220
50	5・7～9号井戸跡	196	84	10号井戸跡出土木製品(1)	221
51	10号井戸跡井戸枠・東側土留め全景	197	85	10号井戸跡出土木製品(2)	222
52	10号井戸跡(1)	197	86	10号井戸跡出土木製品(3)	223
53	10号井戸跡(2)	198	87	10号井戸跡出土木製品(4)	224
54	11～14・19号井戸跡	199	88	10号井戸跡出土木製品(5)	225
55	15～18号井戸跡	200	89	10号井戸跡出土木製品(6)	226
56	1号溝跡(南北溝)全景	201	90	1号溝跡出土土器	227
57	1号溝跡	201	91	小穴群出土土器・木製品	228
58	5a・7～9・11号溝跡全景	202	92	遺構外出土土器	229
59	4・7～9号溝跡	202	93	4号住居跡、45号土坑、5・6号溝跡、 小穴群、遺構外出土土製品	229
60	12・13号溝跡全景	203	94	6号土坑、5号井戸跡、1・5号溝跡、 小穴群、遺構外出土石製品	230
61	10・14・15号溝跡	203	95	5号住居跡、18・21号土坑、小穴群、 遺構外出土銅製品・鉄滓	230
62	16・17号溝跡	204			
63	小穴群	204			
64	1号住居跡P1出土土器	205			

序 章

第1節 事業の概要と調査経過

事業の概要

平成23年3月11日、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震が発生した。この地震により太平洋沿岸を中心に高い津波が襲来し、福島県内では相馬港で高さ9.3m以上、小名浜港で3.33mの津波を観測し、福島県内沿岸市町村面積の5%にあたる112km²が浸水するとともに、東京電力福島第一原子力発電所の事故が発生した。

南相馬市を含む福島県沿岸(浜通り地方)市町村では、震災以前は地域農業者を中心に農業用施設並びに農用地の保安全管理が行われてきたが、原子力災害の影響により、その一部が避難指示区域に指定され、農業用施設の適切な管理が不可能となり、農用地については作付け制限が課せられるなど、営農再開自体が困難な状況となった。これを受けて、福島県農林水産部では、ほ場の大規模化等による農業生産性の向上及び担い手農家への農地集積を促進し、効率的かつ安定的な農業経営の確立を目指す農山村地域復興基盤総合整備事業(農地整備事業)を実施している。これは被災農家を含めた地域住民の帰還の促進や農村地域の再生加速化を目指した、農林水産省の福島再生加速化交付金の採択事業である。(能登谷)

調査経過

福島県教育委員会では、福島県農林水産部のほ場整備の計画を受けて、平成24年度から事業予

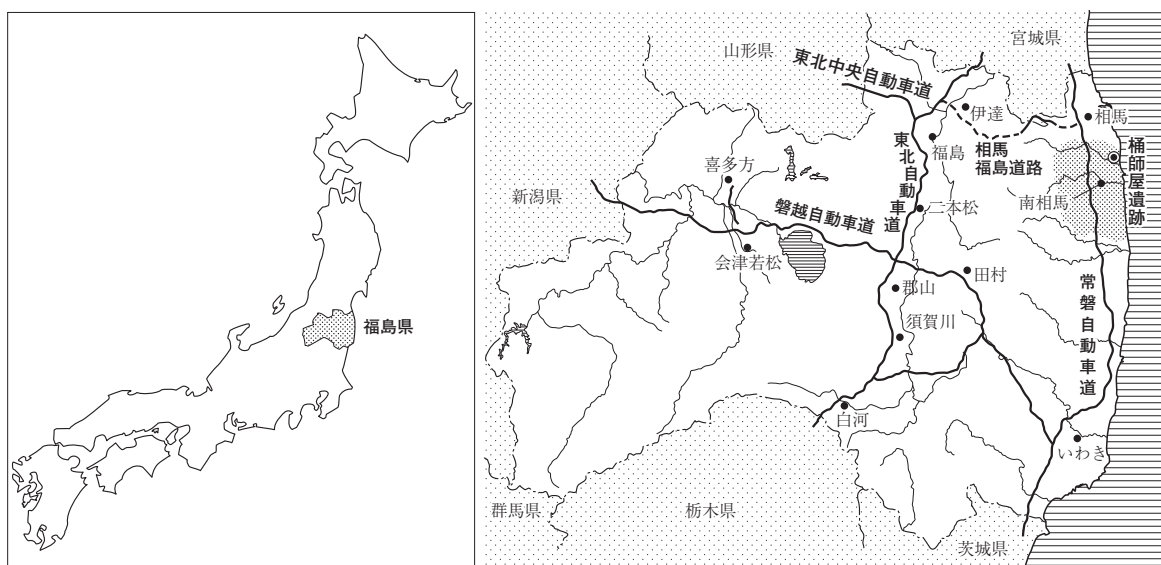


図1 南相馬市の位置

定地区内を対象とした分布調査を実施し、南相馬市右田・海老地区では平成24年度に12カ所の遺跡推定地(試掘調査により遺跡の存否を確認する地点：MSC-ME.B3～5・7～15)を確認した。

平成25年度からは遺跡推定地の内、用地等の問題が解消されたものから順に試掘・確認調査を実施した。南相馬市右田・海老地区の試掘・確認調査の結果、桶師屋遺跡(MSC-ME.B13の一部)、竹花遺跡(MSC-ME.B13の一部)、八龍町遺跡(MSC-ME.B12の一部)が確認され、それぞれ埋蔵文化財包蔵地台帳に登録された。その内、桶師屋遺跡は平成27年度の試掘・確認調査の結果から、古墳時代の集落跡であることが推測され、東西約29m、南北約45mの範囲1,300㎡が遺跡として登録された(図2)。

桶師屋遺跡については掘削を伴う開発が予定されていることから、平成27年度内に福島県教育委員会と福島県農林水産部で協議が進められ、平成28年度に発掘調査を実施することになった。

平成28年度、福島県教育委員会は、農山村地域復興基盤総合整備事業に関わる遺跡発掘調査を南相馬市鹿島区右田・海老地区の桶師屋遺跡と同市原町区金沢地区の谷地中遺跡で実施することとし、公益財団法人福島県文化振興財団(以下、公益財団法人を省略)では、4月1日付の福島県教

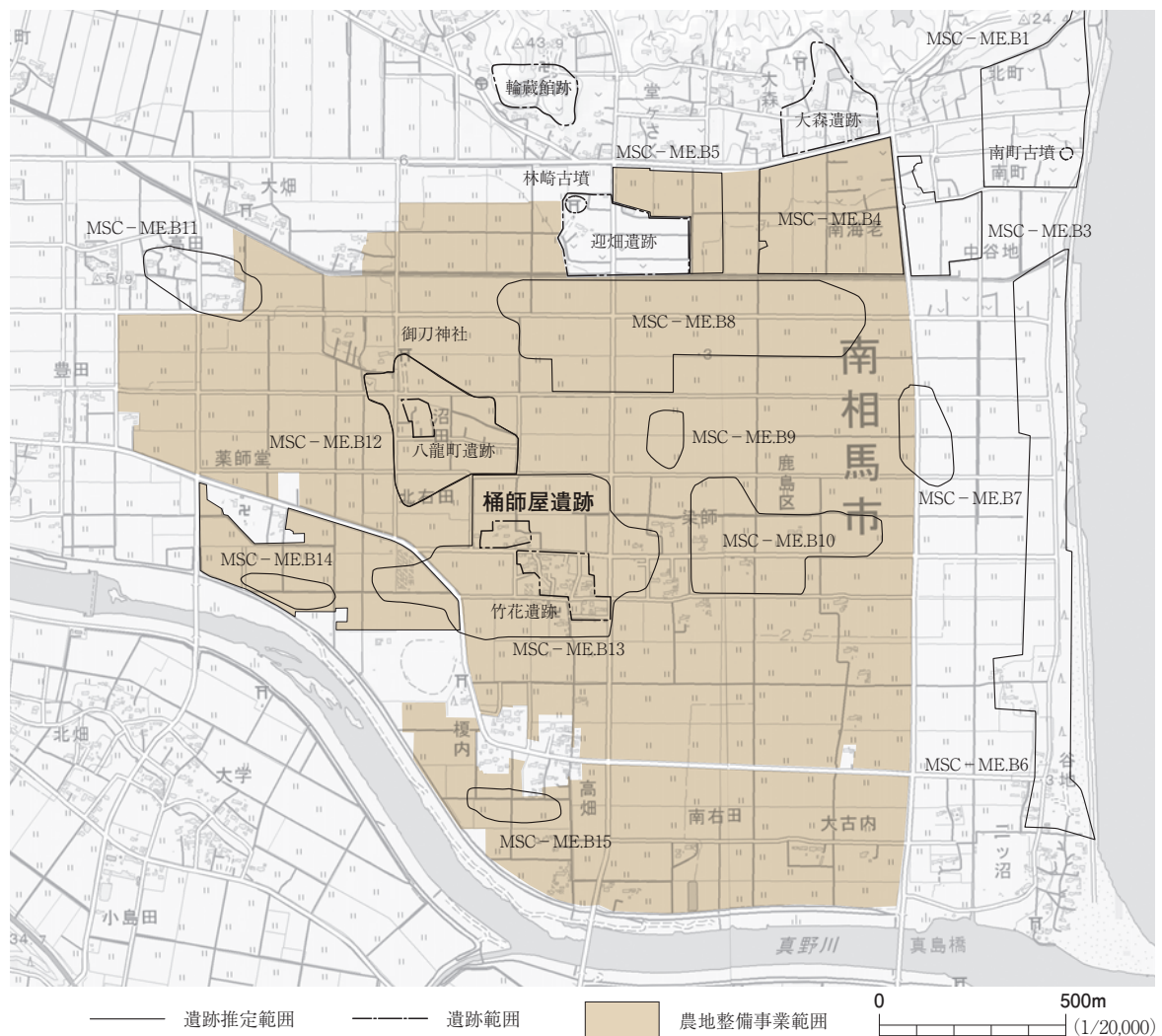


図2 桶師屋遺跡位置図

育委員会との委託契約に基づき、遺跡調査部調査課の職員を配して、両遺跡の発掘調査にあたることにした。

4月8日の福島県教育委員会・福島県農林水産部・福島県文化振興財団による連絡調整会議では、本遺跡の調査範囲、調査連絡所及び作業員駐車場の位置、排土置場、調査工程等について確認し、福島県農林水産部からは工事が平成29年度になることから、調査終了後に排土を埋め戻すよう要請が出た。この会議を受けて、4月11日付で福島県教育委員会から福島県文化振興財団に1,300㎡の発掘調査の指示が通知された(図3)。4月中は調査連絡所のプレハブ・仮設トイレの設置準備や作業員の雇用準備、重機の契約事務等の発掘調査の準備を行い、5月10日までに調査連絡所のプレハブ・仮設トイレを設置した。翌11日からは作業員14名を雇用して、調査連絡所及び駐車場の環境整備を行うとともに、重機による表土剥ぎに先駆けて、平成27年度の試掘・確認調査の際の試掘トレンチを人力で掘り上げて基本土層の確認作業を行った。23日からは重機による表土剥ぎを開始し、表土剥ぎを終えた北西隅から人力により遺物包含層の掘り下げと遺構検出作業を開始した。重機による表土剥ぎは25日に終了した。

6月上旬には調査区北部から古墳時代の竪穴住居跡や土坑・溝跡などが検出され始め、遺構群は調査区の北方及び東方にも展開していることが推測された。これを受けて、平成26年度試掘調査で除外とした北方にも遺跡が広がる可能性があることから、福島県教育委員会では6月8日に福島県農林水産部と遺跡範囲の再検討の必要性を協議し、再度、調査区北方の区域について試掘調査を実施することになった。福島県教育委員会による試掘調査は14～16日に実施され、竪穴住居跡や溝跡が検出されるとともに、古墳時代後期の遺物が多く出土したことから、桶師屋遺跡が北方に広がることを確認した。そこで、福島県教育委員会では新たに保存区域を設定するとともに、本遺跡

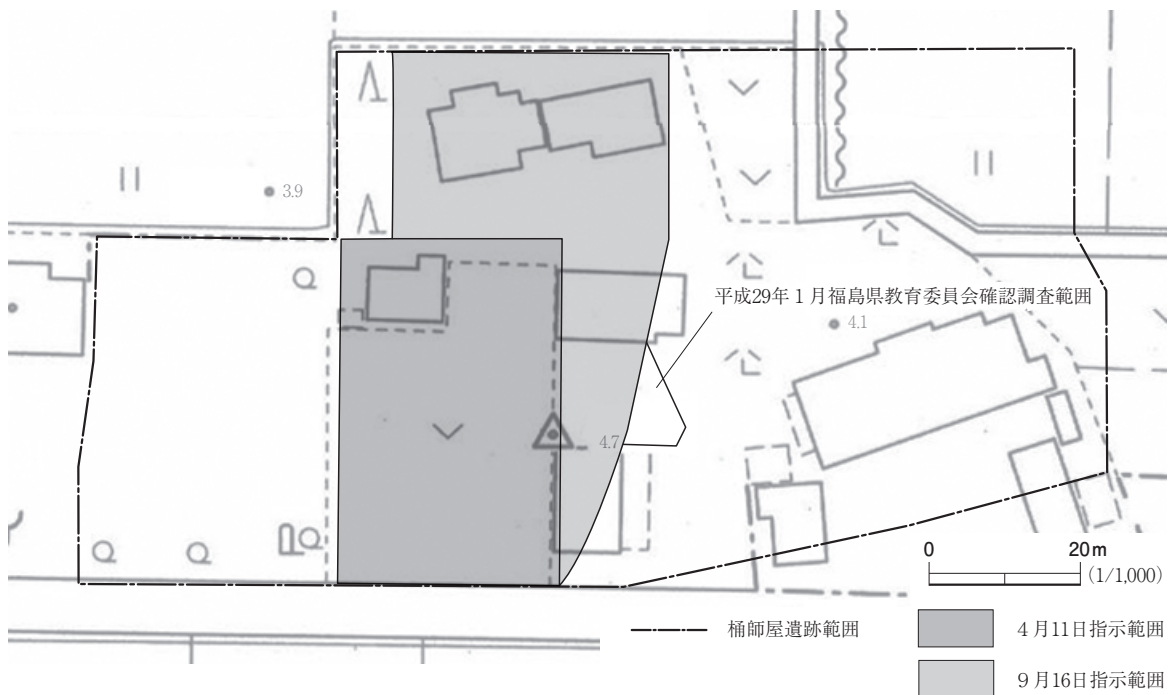


図3 桶師屋遺跡事業範囲

の包蔵地範囲をその周辺も含めた範囲(図3の一点鎖線)に変更した。一方、福島県文化振興財団による発掘調査では、竪穴住居跡は6軒になり、その他にも多くの小穴や土坑・井戸跡も検出された。下旬には遺構検出作業が終了し、遺構の掘り下げに着手した。なお、梅雨の時期となったことから、雨天による影響を受けることが多くなり、排水作業も並行して行った。なお、雨の翌日などは地盤が適度に軟らかくなり、再度の遺構検出作業ではさらに多くの小穴が検出された。

7月に入り、調査の進捗を図るため、4日より作業員を9名増員した。7月中は雨天による作業中止や中断が少なかったが、遺構数が多いことに加えて、遺構の重複が激しいことから、調査は難航した。

8月上旬は連日の猛暑で、熱中症に注意しながらの作業となった。ところが、8月中旬から月末にかけては、台風7・9・10号が約1週間おきに襲来し、作業中止はもとより、台風襲来の翌日は水没した調査区内の排水を行いながらの調査を余儀なくされた。8月下旬には小穴の調査が一段落したこと、古墳時代の竪穴住居跡の調査を中心に進めたところ、早速、1号住居跡や2号住居跡から遺物がまとまって出土した。

9月中は雨天が多く、遺構内には常に水が溜まり、排水しながらの調査となった。9月中旬には、当初、土坑として調査していた遺構が掘立柱建物跡の柱穴であることが判明し、古代の遺構も存在する可能性が出てきた。また、9月下旬には丸太割り貫きの井戸枠が設置された井戸跡が発見された。なお、9月16日には、6月に福島県教育委員会が試掘調査し、保存区域とした箇所1,300㎡に関して、福島県教育委員会から福島県文化振興財団に対して発掘調査の指示が通知され(図3)、現地において両者の間で調査範囲と排土置場を確認した。これを受けて、福島県文化振興財団ではこの区域の調査準備を進めた。

10月に入り、5日には遺跡全景及び遺構の空中写真撮影をラジコンヘリコプター搭載カメラにより撮影し、18日には丸太割り貫きの井戸枠が設置された10号井戸跡を除いた遺構の調査を終了した。10号井戸跡に関しては、9月16日付で通知された区域(以下、追加指示区域と呼称する。)と一緒に調査することとし、同区域の表土剥ぎのための重機の手配が整うまで調査を一旦中断することとした。20日の福島県教育委員会・福島県農林水産部・福島県文化振興財団による連絡調整会議では、福島県教育委員会から追加調査に至った経緯と実施、現地説明会についての説明があり、福島県農林水産部からは井戸跡の調査では工事の掘削深度に関係なく、すべて掘り上げてもらいたい旨の要請と、当初からの要請であった調査後の調査区全域の埋め戻しの確認がなされた。この他、掘立柱建物跡が調査区外西方へ延びていることが推測される箇所に関しては、西側に拡張することとなった。なお、その後、調査区全域の埋め戻しについては、28日に福島県教育委員会と福島県農林水産部の調整により、深い遺構のみを埋め戻すことになった。また、同会議において、10号井戸跡出土木製品の保存処理法等についても検討した。

10月31日から調査を再開し、重機により追加指示区域の表土剥ぎを開始するとともに、11月1日からは作業員による先の調査区の未了遺構の調査と遺構検出作業及び遺構掘り下げを行った。重

機による表土剥ぎは9日で終了したが、遺構検出作業が進展するにつれて、新たに土坑・井戸跡・溝跡と共に多数の小穴が確認され、溝跡は調査区外へ延びていることが判明した。

12月に入り、上旬には10月まで調査していた竪穴住居跡群を柵跡がL字型に取り囲み、さらにその外側に幅が広い溝跡が巡っていることが判明した。8日に行った福島県教育委員会・福島県農林水産部・福島県文化振興財団による連絡調整会議では、井戸跡の調査は工事の掘削深度までとすることに変更になり、さらに、年度内に福島県教育委員会が調査区東方に延伸する溝跡の確認調査を実施することが確認された。また、10号井戸跡出土木製品の保存処理及び現地説明会、引き渡し時期についても議題となり、調査終了予定が年明けの2月10日であることを確認した。12月中は強風や雪により作業を中止することもあったが、16日に遺構の養生をして年内の調査を終了した。なお、19日付で福島県教育委員会から福島県文化振興財団に対して本遺跡の現地説明会の開催についての協力依頼があった。

年が明け、調査を1月10日から再開し、遺構精査を進めた。18日から31日までは10号井戸跡の井戸枠の取り上げ作業も並行して行った。一方、12日には福島県教育委員会と福島県文化振興財団の間で調査区南東部に隣接した区域の確認調査についての打合せを持ち、16日から25日まで福島県教育委員会により調査区南東部に隣接した区域の確認調査が行われた。6号溝跡の南東端と土坑・小穴が検出されたが、その内、6号溝跡のみが調査された。

1月中は雪による作業中止が1日あったのみで、調査は順調に進捗し、26日には遺跡全景及び遺構の空中写真撮影をラジコンヘリコプター搭載カメラにより撮影した。さらに、28日には福島県教育委員会主催の現地説明会に約110名の来跡者があった。

2月は残された遺構の調査に精力を傾けるとともに、収束に向けた作業も並行して実施し、10日には全ての遺構調査を終了した。さらに、17日までに調査連絡所のプレハブ・仮設トイレの撤去及び器材撤収を終え、27日には福島県教育委員会・福島県農林水産部・福島県文化振興財団の三者により、調査終了確認と工事側への現地引渡しを行った。(能登谷)

第2節 地理的環境

福島県は東北地方の南端に位置し、面積13,782km²と全国第3位の広さを有している。この内のおよそ8割が山地で占められ、東部には太平洋に沿って阿武隈高地、中央部には奥羽山脈、西部には越後山脈が連なっている。これら高地・山脈によって、福島県は太平洋側より「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の3つに区分されている。本報告に掲載した桶師屋遺跡は、浜通り地方北部の南相馬市に位置する。

南相馬市の地形は双葉断層(双葉破碎帯)を境に西と東とでは対照的である。西側では標高500～700mの阿武隈高地が広がるのに対して、東側は標高100m以下の低平な丘陵と平野からなる。

双葉断層は双葉破碎帯の内の最も大規模なものに対して名付けている(久保ほか1990)。現在、

地表で見られている双葉断層は、白亜紀に生じた横ずれ剪断帯としての双葉破碎帯が、第三紀以降に西上がりの縦ずれ断層として再活動して生じたものと考えられている。その延長は、北は宮城県岩沼市南方から南は福島県いわき市久之浜町までの約100kmにわたって連続する、北北西－南南東方向の大断層である。現在の阿武隈高地は、主として双葉断層の活動によって阿武隈高地側が北方に傾動しながら大きく隆起した結果生じたものであるとされている。なお、双葉破碎帯に平行して西側には畑川破碎帯、両破碎帯間には北東－南西方向の社地神剪断帯およびこれと共役な方向に発達する断層系が存在する。

阿武隈高地は従来から隆起準平原と考えられており(三野1942など)、山頂部や山間部には小起伏の地形が認められ、これら小起伏とそこに突出するいくつかの独立峰によって構成されている。

太平洋岸には丘陵、河川沿いには平野が広がる。丘陵は主に鮮新統の堆積岩類で構成され、開析が進んでいる。丘陵の標高は北ほど低くなる傾向にあり、北部の相馬市付近では丘陵の一部が沖積層に埋没して、分離丘陵の形態をとっている。平野は沖積平野と段丘で構成され、沖積平野は自然堤防と後背湿地からなる。段丘はその背後に主に分布し、高位・中位・低位に大きく3区分され、さらに中位段丘はⅠ～Ⅲに、低位段丘はⅠ・Ⅱに細分される。段丘面と現河床との比高は、丘陵と同様に北ほど小さくなる傾向にある。段丘は大半が河成であるが、海岸沿いの中位ⅠおよびⅢ段丘は海成段丘で、中位Ⅰ段丘面が後期更新世最終間氷期の最大海進時に形成された南関東の下末吉面に対比される。

主な河川に共通する特徴として、上流部では比較的勾配が緩く谷底平野を伴っているが、中流部では勾配が急になり深い峡谷を形成し、下流では再び河川勾配は緩くなり、氾濫原を形成している。

汽水湖の松川浦の南方には八沢浦が存在したが、大正～昭和初期にかけて、干拓により消滅した。縄文海進時に湾入していた海が、その後の海退により閉塞されて形成された潟湖と考えられる。

海岸線はほぼ直線状である。丘陵や段丘が直接海に面するところでは、比高10～30mのほぼ垂直な海食崖が発達する。一方、沖積平野が海に面している部分では浜堤が形成され、その後背に小規模なラグーン(潟湖)とそれが埋積された湿地が見られる。

南相馬市の地質は先デボン系から第四系まで分布する。下位より、先デボン系の山上・松ヶ平変成岩類、助常変成岩類及び未区分の変成岩類、デボン系～二畳系の相馬古生層、中部ジュラ系～最下部白亜系の相馬中村層群、下部白亜系の高倉層、下部白亜系の花崗岩類を主とする貫入岩類、中新統の塩手層・天明山火山岩類・霊山層・大内層、中新統～鮮新統の仙台層群及び第四系(高位・中位・低位段丘堆積層及び沖積層)からなり、古第三系は分布していない(図4)。

本地域の最古期の岩石である山上・松ヶ平変成岩類は片岩を主体とし、助常変成岩類は苦鉄質変成岩を主体に、泥質及び珪質変成岩を少量伴う。松ヶ平変成岩類は縄文時代においては主に打製・磨製石斧などの石器石材として、また現在では庭石として利用されている。

相馬古生層は下位より合ノ沢層(上部デボン系)、真野層(下部石炭系)、立石層(下部～中部石炭系)、上野層(下部二畳系)、大芦層(中部二畳系)、弓折沢層(上部二畳系)の、いずれも海成層か

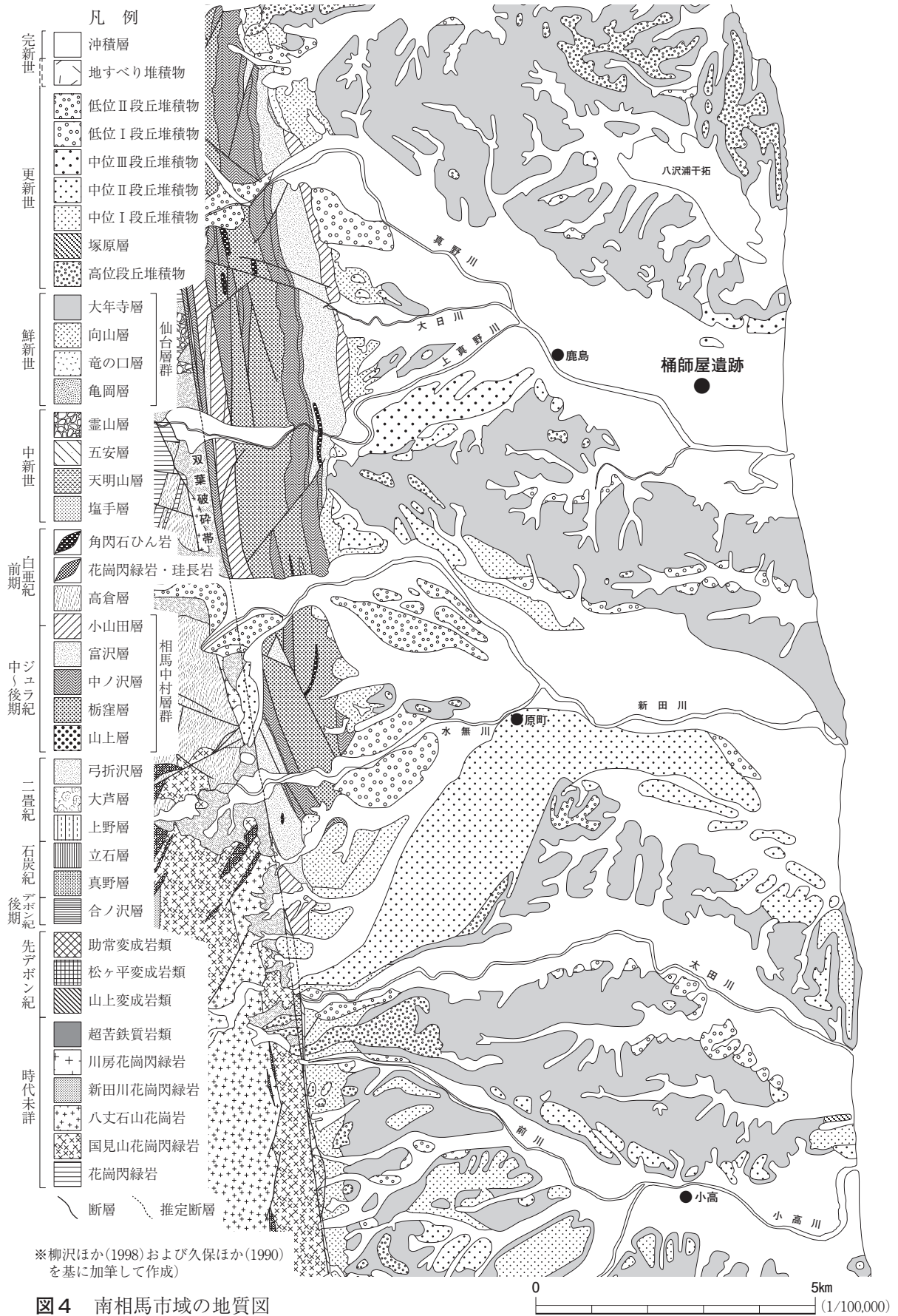


図4 南相馬市域の地質図

らなる。立石層は石灰岩を主体とし、他は頁岩・砂岩・粘板岩・礫岩・凝灰岩から構成される。この内の粘板岩や頁岩は、縄文時代においては打製石斧等、弥生時代では石庖丁等の石器石材として利用されている。

相馬中村層群は下位より栗津層、山上層、栃窪層、中ノ沢層、富沢層及び小山田層からなる中部ジュラ系～最下部白亜系で、主に碎屑岩類からなる浅海成層と陸成層よりなる。

高倉層は安山岩ないしデイサイトとその火砕岩からなる下部白亜系で、白亜紀深成岩の貫入による熱変成とその後の圧砕変形を被っている。これらの内、緻密でガラス質に富む岩石は石器石材として利用された可能性があり、今後、本層起源であるか特定するための分析が必要と指摘されている。なお、碎石場が原町区高屋敷にある。

高倉層堆積後の白亜紀前期、本地域は広範な深成活動の場となり、国見山花崗閃緑岩、宇多川花崗閃緑岩、八丈石山花崗岩、花崗閃緑斑岩及び珪長岩などが貫入した。いわゆる阿武隈花崗岩類の年代よりもやや古いことと、磁鉄鉱が普遍的に含まれるため岩石帯磁率が高い岩石学的な特徴などから、畑川破碎帯以西に広く分布する阿武隈花崗岩類とは明瞭に区別されている。

中新統(塩手層・天明山火山岩類・霊山層・大内層)は、主に双葉断層の西側に分布する。石器石材として利用されているいわき地方の湯長谷層群桐平層の流紋岩は、この内の塩手層に対比されている。

本地域に分布する仙台層群は下位より、亀岡層、竜の口層、向山層及び大年寺層の4層からなる。双葉断層の東側に広がる低平な丘陵地を占めて広く分布する。亀岡層は陸成層、竜の口層は亀岡層から漸移する内湾性海成層からなり、向山層は竜の口層を不整合に覆う陸成層、大年寺層は外洋性の珪藻化石やクジラの化石を産出する海成層で、上部の泥岩層中には大規模な海底地すべり層が発達している。

第四系は主に段丘堆積層と沖積層から構成される。段丘堆積層については前述の通りである。高位段丘堆積層は山地に近い部分では礫層からなり、一部で三角州～浅海成層からなる。中位及び低位段丘堆積層も礫層を主体とするが、中位段丘は海岸近くの一部では海成と推定される礫混じり砂層を含む。沖積層は各河川に沿って沖積平野を形成して分布する。この他に地すべり堆積物がある。典型的な地すべり地形を伴った比較的形成時期の新しいと推定されるものと、地すべり地形のはっきりしない古期のものがある。いずれも山地斜面を構成する先第四系基盤岩とその基質をなす表土からなる。(能登谷)

第3節 歴史的環境

桶師屋遺跡は南相馬市鹿島区北右田字桶師屋に所在する。近年の南相馬市域では常磐自動車の建設や東日本大震災の復興事業に伴って、埋蔵文化財の発掘調査件数が増加している。ここではこうした近年の調査成果も加えて、桶師屋遺跡が位置する福島県浜通り北部地域の歴史的環境を概観

する(図5、表1)。

本地域で人類の痕跡が見られるようになるのは、後期旧石器時代以降で、多くは段丘や台地に立地し、表面採集によって遺物が確認されたものである。大谷地遺跡(55)などがある。

縄文時代に入り、早期には遺跡は阿武隈高地縁辺部に集中する。前期には阿武隈高地縁辺部に加え、河川の低位段丘上に遺跡の分布が広がる。中期には比較的規模の大きい集落跡が増加し、八幡林遺跡(50)、高松B遺跡(92)などが挙げられる。植松C遺跡(118)では、丘陵谷部の包含層より前期後葉から中期前葉の土器が多く出土した。後期・晩期には河川流域の低地部や海岸浜堤まで分布が広がる。天神谷地遺跡(116)や御所内遺跡(16)など、中期と比較すると小規模で分散居住的性格がうかがえる。

弥生時代に入ると、縄文時代と比較して丘陵の海岸側、河岸段丘や自然堤防上の沖積地へ遺跡の分布が移動する。真野川南岸段丘上に立地する天神沢遺跡(67)は弥生時代中期後葉の遺跡で、相馬古生層から産出される粘板岩(頁岩)を素材とした石庖丁が大量に出土したことで有名である。桜井A遺跡(129)をはじめとする周辺の遺跡は、本地域の弥生時代を代表する桜井式土器の標識遺跡である。これら粘板岩製の石庖丁や桜井式土器は近隣の遺跡で出土している。

古墳時代に入ると、遺跡は新田川流域と真野川流域の丘陵部にまで分布が広がる。新田川南岸に立地する桜井古墳群上渋佐支群(130)は、古墳時代前期の前方後方墳である1号墳(国史跡桜井古墳)を主体とする古墳群で、周辺には高見町A遺跡(127)などの集落遺跡も分布している。一方、真野川南岸には柚原古墳群(61)や高田古墳(70)が、北岸の山頂部には前期の前方後円墳の可能性のある永田古墳群(10)が築かれる。前期の集落跡は近年調査事例が増加し、真野古墳群と隣接する八幡林遺跡(50)からは「船」を推測させる線刻土器が発見された。谷地中遺跡(81)では、丘陵裾部に集落跡が営まれ、土師器の大型壺が出土した。

古墳時代中期には際立つ古墳の造成は認められないが、新田川流域の桜井古墳群上渋佐支群(130)は2号墳が中期に相当し、埋葬施設として割竹形木棺が確認されている。上渋佐前遺跡では竪穴住居跡が検出され、南小泉式の土師器と石製模造品が出土している。真野川流域では、反町遺跡(42)でL字形に延びる溝跡から遺物が多量に出土した。

古墳時代後期になると、新田川南岸では桜井古墳群高見町支群(128)、新田川北岸では荷渡古墳群(104)や北山古墳群(101)といった群集墳が数多く築かれる。真野川流域でも群集墳が多く築かれ、南岸の丘陵部には100基を超える大規模古墳群である国史跡真野古墳群A・B(47・49)が出現する。現状では40基ほどが遺存しており、A地区の49号墳からは刀子や斧を模した石製模造品が出土し、前方後円墳である20号墳からは金銅製双魚佩や直刀・馬具などの副葬品が出土している。真野川北岸の自然堤防上には、横手古墳群A・B(18・21)が築かれ、現状では16基が現存し、円筒埴輪片が確認されている。また、丘陵頂部や平野部に造営場所は移り、烏崎古墳群(79)では丘陵頂部に前方後円墳が確認されている。

古墳時代終末期には、各丘陵部の崖部に数多くの横穴墓が造営される。原町区の国史跡羽山横穴

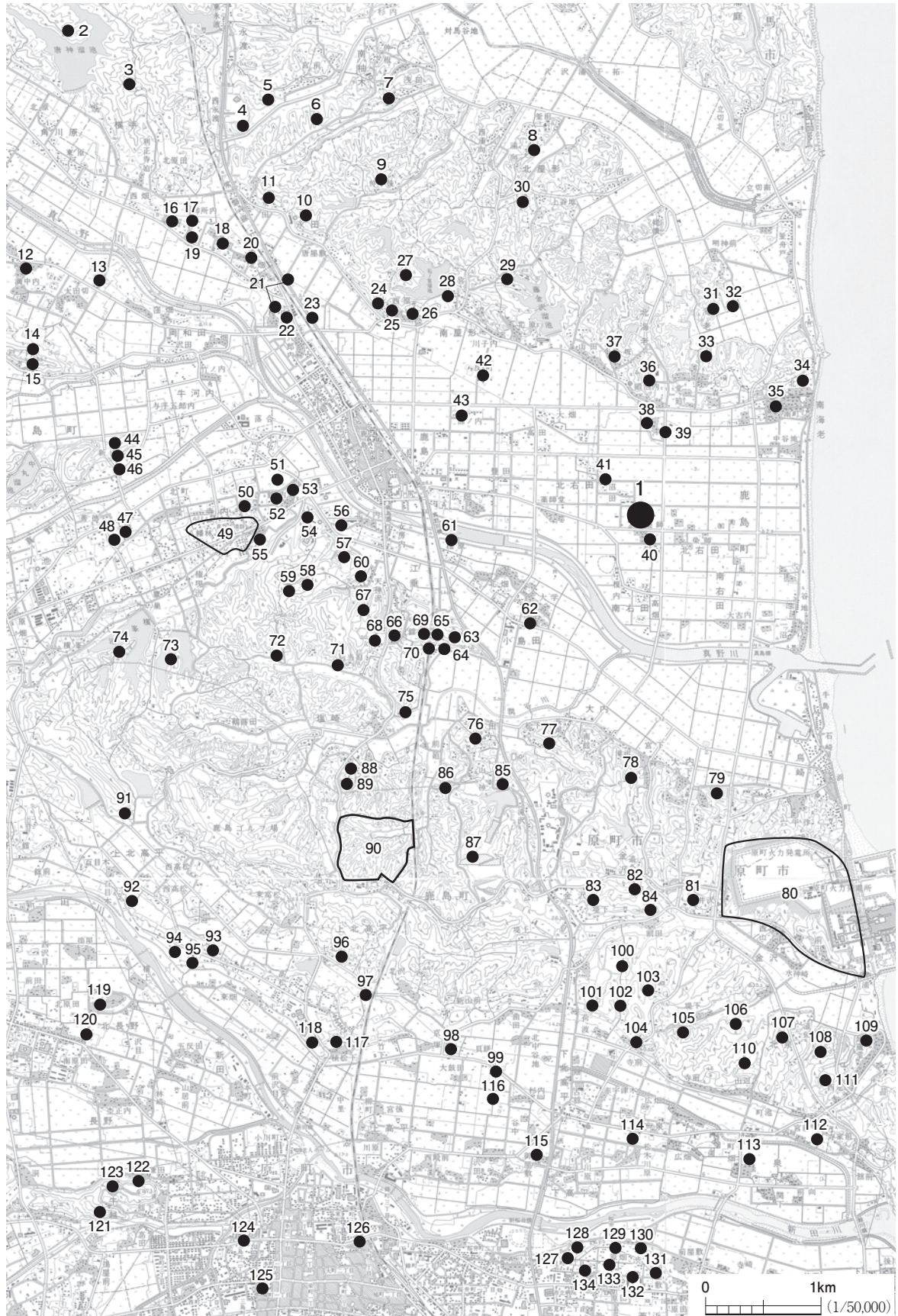


図5 周辺の遺跡位置図

表1 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	桶師屋遺跡	古墳・奈良・平安・中世・近世	集落跡	68	日向館跡	中世	城館跡
2	唐神横穴墓群	古墳	古墳	69	高田館跡	中世	城館跡
3	寿性寺館跡	中世	城館跡	70	高田古墳	古墳	古墳
4	永渡横穴墓群	古墳	古墳	71	別当迫横穴墓群	古墳	古墳
5	南柚木横穴墓群	古墳	古墳	72	酪迫遺跡	奈良・平安	製鉄跡
6	玉木道上製鉄遺跡	奈良・平安	製鉄跡	73	横峰製鉄遺跡	奈良・平安	製鉄跡
7	水神下横穴墓群	古墳	古墳	74	横峰製鉄B遺跡	奈良・平安	製鉄跡
8	釜前製鉄遺跡	奈良・平安	製鉄跡	75	船着横穴墓群	古墳	古墳
9	平後横穴墓群	古墳	古墳	76	川子古墳群	古墳	古墳
10	永田古墳群	古墳	古墳	77	深沢横穴墓群	古墳	古墳
11	永田横穴墓群	古墳	古墳	78	大内館跡	中世	城館跡
12	浮田古墳	古墳	古墳	79	烏崎古墳群	古墳	古墳
13	細内遺跡	縄文・古墳	散布地	80	金沢地区製鉄遺跡群	縄文・弥生・奈良・平安	墳墓・窯跡・製鉄跡
14	小山田古墳群	古墳	古墳	81	谷地中遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	集落跡・製鉄跡
15	小山田横穴墓群	古墳	古墳	82	物見山遺跡	弥生	散布地
16	御所内遺跡	縄文	散布地	83	物見山B遺跡	平安	窯跡
17	御所内館跡	中世	城館跡	84	迫合遺跡	弥生	散布地
18	横手古墳群B	古墳	古墳	85	中谷地横穴墓群	奈良	古墳
19	横手廃寺跡	奈良・平安	社寺跡	86	前迫製鉄遺跡群	弥生・奈良・平安	製鉄跡
20	細谷館跡	中世	城館跡	87	大迫遺跡	奈良・平安	製鉄跡
21	横手古墳群A	古墳	古墳	88	大月平窯跡	近世	窯跡
22	榎内遺跡	古墳	古墳	89	大月平製鉄遺跡	奈良・平安	窯跡・製鉄跡
23	柳町遺跡	縄文	散布地	90	割田地区製鉄遺跡群	奈良・平安	製鉄跡
24	南屋形古墳群	古墳	古墳	91	入道迫瓦窯跡	奈良・平安	窯跡
25	南屋形横穴墓群	古墳	古墳	92	高松B遺跡	縄文・弥生・平安	散布地・集落跡
26	阿弥陀寺館跡	中世	城館跡	93	高松遺跡	縄文	散布地
27	石ノ宮製鉄遺跡	奈良・平安	製鉄跡	94	高松C遺跡	縄文・奈良・平安	散布地
28	石宮古墳群	古墳	古墳	95	北新田の御壇	中世	塚
29	藤金沢製鉄遺跡	奈良・平安	製鉄跡	96	北沢横穴墓群	古墳	古墳
30	藤迫館跡	中世	城館跡	97	植松新田遺跡	縄文	散布地
31	糖塚横穴墓群	古墳	古墳	98	大鼓田遺跡	縄文	散布地
32	糖塚古墳群	古墳	古墳	99	貝持遺跡	縄文	散布地
33	玉貫窯跡群	奈良・平安	窯跡	100	広平遺跡	弥生	散布地
34	北原古墳群	古墳	古墳	101	北山古墳群	古墳	古墳
35	南海老南町遺跡	古墳	集落跡	102	北山遺跡	弥生	散布地
36	輪蔵館跡	中世	城館跡	103	堤下A遺跡	弥生・奈良・平安	散布地・製鉄跡
37	北海老古墳群	古墳	古墳	104	荷渡古墳群	古墳	古墳
38	林崎古墳	古墳	古墳	105	堤下B遺跡	弥生・奈良・平安	散布地・集落跡
39	迎畑遺跡	奈良・平安	散布地	106	天化沢A遺跡	弥生・奈良・平安	製鉄跡・集落跡
40	竹花遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	集落跡	107	浦頭遺跡	奈良・平安	製鉄跡・散布地
41	八龍町遺跡	平安・中世	集落跡	108	脇遺跡	縄文・弥生・平安	散布地
42	反町遺跡	弥生・古墳・平安	集落跡	109	地藏堂B遺跡	弥生・古墳・近世	散布地・集落跡・その他
43	田中城跡	中世	城館跡	110	町池横穴墓	古墳	横穴墓
44	新山古墳	古墳	古墳	111	西走B遺跡	弥生・平安	製鉄跡・散布地
45	新山横穴墓群	古墳	古墳	112	泉官衙遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	官衙跡・集落跡
46	新山遺跡	縄文	散布地	113	広畑遺跡	奈良・平安	集落跡・散布地
47	真野古墳群B	古墳	古墳	114	牛渡前遺跡	弥生	散布地
48	長沼遺跡	縄文	散布地	115	谷中遺跡	弥生	散布地
49	真野古墳群A	古墳	古墳	116	天神谷地遺跡	縄文・弥生	散布地
50	八幡林遺跡	縄文・弥生・古墳	散布地・集落跡	117	植松廃寺跡	奈良・平安	社寺跡
51	鷺内遺跡	縄文	散布地	118	植松C遺跡	縄文・平安	集落跡
52	西館古城跡	中世	城館跡	119	北原田B遺跡	奈良・平安	散布地
53	館内遺跡	奈良・平安	散布地	120	北原田A遺跡	奈良・平安	散布地
54	桜平山遺跡	縄文	散布地	121	左衛門館跡	中世	城館跡
55	大谷地遺跡	旧石器	散布地	122	牛越城跡	中世・近世	城館跡
56	大六天遺跡	古墳・奈良・平安	散布地・集落跡	123	城下横穴墓群	古墳	古墳
57	新城遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	散布地	124	三鳥町遺跡	平安	散布地
58	田村掘切跡	中世	城館跡	125	西町遺跡	旧石器	散布地
59	山ノ神遺跡	縄文・弥生・古墳	散布地	126	東町遺跡	縄文・奈良・平安	集落跡
60	新城館跡	中世	城館跡	127	高見町A遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	散布地・集落跡
61	柚原古墳群	古墳	古墳	128	桜井古墳群高見町支群	古墳	古墳
62	小鳥田館跡	中世	城館跡	129	桜井A遺跡	縄文・弥生	散布地
63	大窪古墳	古墳	古墳	130	桜井古墳群上洪佐支群	古墳	古墳
64	大窪横穴墓群	古墳	古墳	131	桜井C遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	散布地
65	中館横穴墓群	古墳	古墳	132	桜井D遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	散布地・集落跡
66	中館跡	中世	城館跡	133	桜井B遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	散布地
67	天神沢遺跡	弥生	散布地	134	高見町B遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	散布地

では、渦巻文・人物像・馬・鹿などが描かれた装飾壁画が特筆される。糖塚横穴墓群(31)では家の線刻画、大窪横穴墓群(64)では線刻や朱描きされた壁画が複数見つっている。

古墳時代後期から終末期にかけての集落跡は、真野川低地南岸に位置する大六天遺跡(56)や、新田川北岸の河口付近に位置する地藏堂B遺跡(109)がある。本遺跡の南に隣接する竹花遺跡(40)では、礎板をもつ掘立柱建物跡が確認され、本遺跡と一連の遺跡である可能性が高い。

奈良・平安時代には、律令制の施行とともに当地域は陸奥国行方郡となる。平安時代中期に編纂された『和名抄』には、行方郡に吉名・大江・多珂・子鶴・真野・真歎の6郷があったことが記されており、『延喜式神名帳』には、「鹿島御子神社」や「御刀神社」の記載がある。

新田川の北岸に位置する国史跡泉官衙遺跡(112)は、行方郡家と目される遺跡で、郡庁院・正倉院・運河・寺院などが確認されている。仏教寺院もこの時期に広がり、植松廃寺跡(117)や横手廢寺跡(19)などが確認されている。丘陵部では生産遺跡が増え、入道迫瓦窯跡(91)は植松廢寺跡に瓦を供給したと考えられ、玉貫窯跡群(33)は8世紀代の須恵器窯跡である。また、製鉄関連遺跡も多く確認されている。中でも金沢地区製鉄遺跡群(80)では、7世紀後半から9世紀中葉にかけて鉄生産及びその燃料となる木炭の生産が行われ、周辺の遺跡とともに古代における一大製鉄拠点であったことが明らかになっている。9世紀代に入ると、製鉄関連遺跡は丘陵の内陸側に多く分布し、割田地区製鉄遺跡群(90)などがある。

集落跡は河川流域の沖積地や河岸段丘上に多く分布する。大六天遺跡(56)は古墳時代後期から平安時代にかけて継続した集落跡で、行方軍団の存在を窺わせる「少毅殿□千之」とヘラ書きされた須恵器が出土している。また、本遺跡の北西500mには、御刀神社に隣接して八龍町遺跡(41)が所在する。このように近年の調査で、真野川北岸の沖積地の自然堤防状の微高地には、本遺構を含めて竹花遺跡や八龍町遺跡などの、古墳時代から中世の遺跡が集中していることが明らかになってきた。

中世の集落遺跡は調査例が少なく、様相はよくわかっていなかった。平成28年に発掘調査された南海老南町遺跡(35)では、掘立柱建物跡が46棟発見され、12世紀末から13世紀前半の大規模な集落が海岸近くに存在していたことが明らかとなった。掘立柱建物跡の規模や配置・出土遺物から、一般的な集落とは異なる性格の集落と考えられ、本地域の中世の主要な遺跡であると推測される。

南北朝期の相馬一族の讓状や軍忠状等には、本遺跡が位置する真野川北岸一帯を指すと推測される「千倉庄」の地名が見え、仁木田村(右田村)など新しい村々の開発が進んだことが窺える。なお、この後、千倉庄は北郷と改称されている。

戦国期の相馬氏は宇多郡、標葉郡を掌握するとともに仙道へ侵攻し、伊達氏などと領土を争った。抗争の中で多くの城館が築かれ、北郷(現在の鹿島区)内にも多くの城館が構築された。中でも田中城跡(43)は相馬領の要の城として重要な役割を担った。慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いでは、相馬氏は戦いに参加しなかったが、相馬利胤の弁解によって所領は安堵され、相馬中村藩が幕末まで支配を続けた。街道や宿駅は整備され、浜街道、相馬街道、西街道が発達し、現在までにつなが

る南相馬市の基礎が形成された。

明治期になり、廃藩置県によって相馬中村藩は中村県となり、平県、磐前県を経て福島県に編入された。明治22年には町村制施行により、行方郡内に鹿島村他11村が成立し、明治29年には行方郡と宇多郡が合併して相馬郡となった。明治30・31年には12村の中から鹿島町・原町・小高町が誕生し、昭和29年にはそれぞれの町が周辺の村と合併することによって、原町市、相馬郡鹿島町・小高町が誕生した。さらに、平成18年に市町村合併により現在の南相馬市となった。

平成23年3月11日、東日本大震災が発生した。地震による大津波によって太平洋沿岸部は壊滅的な被害を受けた。震災発生後、防災集団移転促進事業や災害公営住宅建設事業、津波被害を受けた農地のかさ上げに伴う土砂採取、被災地再利用計画に伴う工業団地造成など「ふるさと」を取り戻す施策として震災復興事業が進捗している。 (菅野)

第4節 調査方法

桶師屋遺跡の発掘調査を実施するにあたり、測定の基準として遺跡全体をカバーする10mごとの方眼(グリッド)を設定した。本遺跡で用いた測量座標は、世界測地系に基づく国土座標第IX系の座標で、グリッドの原点の座標値は遺跡の北西に位置するX=189.020、Y=102.250である。各グリッドは10mごとに東へ向かってアルファベット、同じく南に向かって算用数字を順に付し、それらを組み合わせてA1グリッド、A2グリッドのように呼称した。このグリッド番号は、遺構のたまかな位置表示を行ったり、遺構外出土遺物の出土位置を表示するのに使用した。また、必要に応じてこのグリッド内を4分割し、北西端から時計回りにアルファベットの小文字a～dを順に付し、出土遺物の出土位置を表示した(図6)。さらに、遺構平面図の作成の際は、グリッドを1m四方の方眼に分け、それらを基準とした。

表土は重機を用いて除去した。表土より下層の堆積土については、原則的に人力で遺物の出土状態に留意しながら基盤層まで掘り下げ、掘削途上で現代の攪乱と判断した部分は、重機で掘り下げた。排土は重機や一輪車を使用して、調査区の東側に設定した仮置き場まで随時搬出した。

遺構の掘り込みにあたっては、遺構の特性や遺存状態に応じて、土層観察用の畔を設け、遺構の埋没状況や遺物の出土状況を確認しながら精査した。なお、堆積土の観察には、『新版標準土色帖(2000年版)』を参考に用い、その表記法に従って記載した。遺構内の遺物は、出土状況に特徴のあるものについては詳細な記録を作成した後に、層位(ℓ1・ℓ2など)ごとに取り上げた。

井戸跡の調査にあたっては、当初全掘を予定して掘り込みを進めていたが、文化庁による復興調査の指針を受けて、福島県教育委員会の指示により、工事の最大掘削深度までを調査の対象とした。

発掘調査の記録は、遺構の実測図作成と写真撮影を行った。実測作業は、遺構の性格や特徴を表現できる縮尺1/10・1/20などで図化し、調査区の地形図は1/100の縮尺で作成した。小穴群は数が多く、重複も激しいことから、1/40の縮尺で平面図を作成した。写真撮影は、調査の過程に応じ

て随時撮影し、同一被写体を35mm版モノクロームフィルム・カラーリバーサルフィルムとデジタルカメラで撮影した。さらに、調査区全景などはラジコンヘリコプター搭載カメラにより空中写真撮影を実施した。遺物写真はデジタルカメラで撮影した。

木製品は現場での選別が難しかったため、すべて仮番号を付して取り上げ、洗浄後に観察した。さらに、「出土遺物の取り扱い基準(福島県教育委員会通達)」に従い、遺物と認められたものは保管の対象とし、その他はサンプルを採取して現場へ戻した。

発掘調査で得られた各種記録や資料は、整理作業を実施し、調査報告書を作成した。報告書刊行後は各種台帳類を作成し、福島県教育委員会へ移管し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館に収蔵・保管される。(菅野)

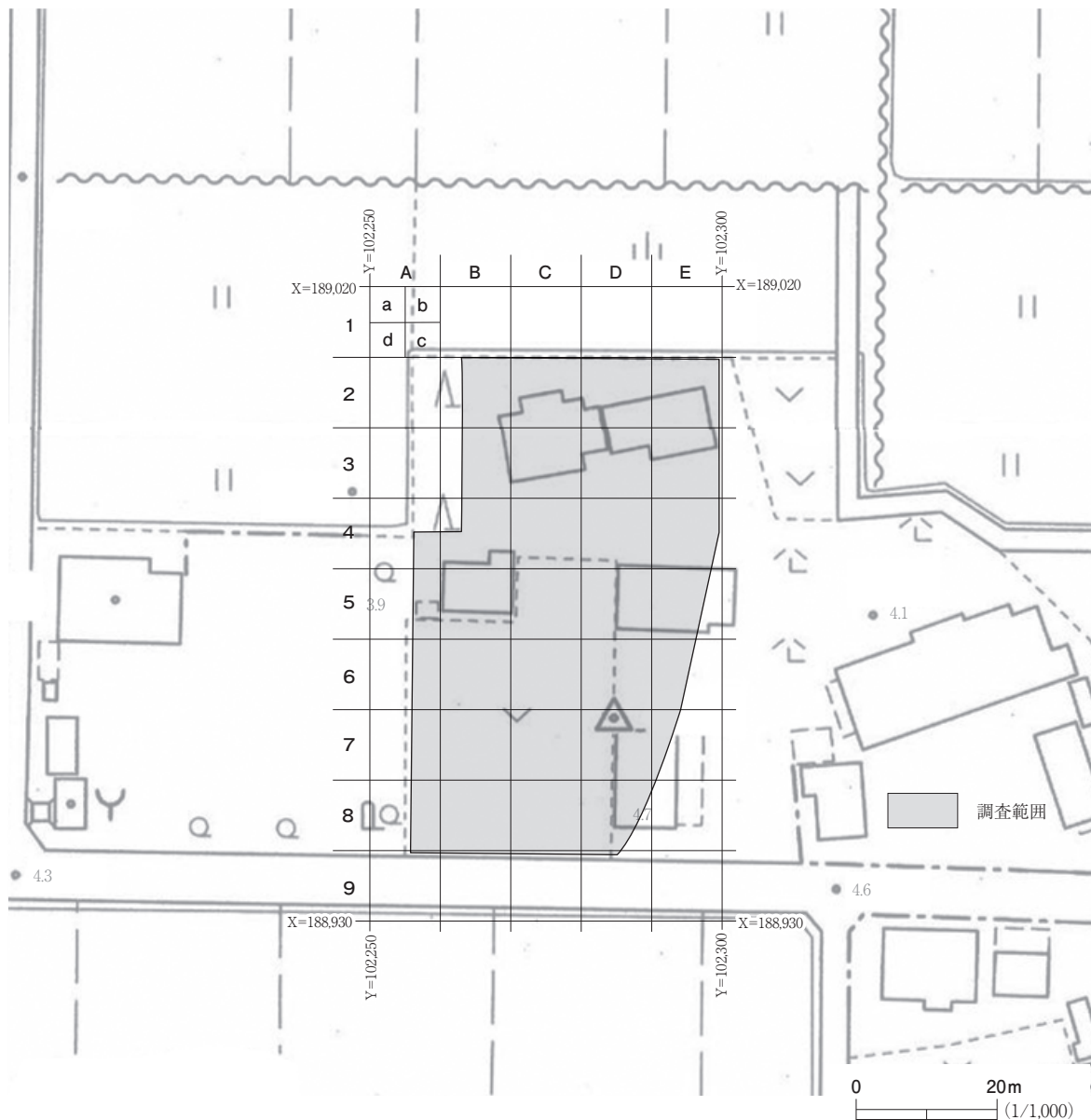


図6 グリッド配置図

第1章 調査の成果

第1節 遺跡の概要と基本土層

遺跡の概要（図7、付図1）

桶師屋遺跡は福島県南相馬市鹿島区北右田字桶師屋に所在する遺跡である。本遺跡はJR常磐線鹿島駅の東方約2kmの地点に位置し、海岸線から約1.6km内陸に所在する。本遺跡の南西約500mには真野川が所在し、本遺跡は真野川によって形成された沖積地、旧河道に伴う北西から南東へ延びる自然堤防状の微高地に立地する。この微高地には八龍町遺跡・竹花遺跡も所在し、震災前までは宅地として利用されていた。延喜式内社の御刀神社も遺跡の北西約500mに所在する。本遺跡の標高は海拔4.2mで、基盤層上面の地形を微視的に見ると、調査区中央部から東西へ向かって緩く下降している。

今回の調査で確認された遺構は、古墳時代中期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世のもので、竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡4棟、柵跡1基、土坑59基、井戸跡19基、溝跡15条、小穴2,127個である。すべて同一面上から検出され、遺構の重複が激しい。

時期別に遺構の構成を見てみると、古墳時代中期の遺構は竪穴住居跡6軒とそれらを囲む柵跡・区画溝跡である。竪穴住居跡5軒は方向を揃えて建てられている。柵跡と区画溝跡は並行し、住居跡群の北と東をL字形に囲んでいる。

古墳時代後期の遺構は、調査区北東側の複数の溝跡である。この内、5・6号溝跡は古墳時代中期の区画溝跡を掘り直したもので、新期の6号溝跡の堆積土中には群馬県榛名火山を噴出源とする榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)が堆積し、溝跡内からは遺物が多く出土している。

奈良・平安時代の遺構は、掘立柱建物跡4棟と井戸跡1基(SE10)である。掘立柱建物跡はいずれも南北に主軸をほぼ揃えて建てられている。規模は東西2間、南北3間と考えられ、柱穴の底面に礎板が設置されているものが多い。井戸跡からは丸太割り貫きの井戸枠が出土し、掘立柱建物跡と同年代の放射性炭素年代測定結果が出ている。この井戸枠は丸木舟を転用したものと推測され、他にも井戸跡の構築部材として建築部材を転用したみられる木材が多数出土し、県内でも非常に珍しい井戸跡であることが明らかになった。

中・近世の遺構は、柱穴とみられる多量の小穴と井戸跡18基、溝跡1条である。小穴は調査区中央部から南部にかけて密集し、重複が激しく、掘立柱建物跡等の作り替えを何度も行いながら長期に渡って生活していたと推測される。小穴の底面には礎石や柱材が残っているものもある。井戸跡は18基と調査区の面積に対して数が多く、近接して存在する。溝跡は一度掘り直されており、出土遺物から中世から近世まで長期に渡って使用されたことが窺える。



図7 遺構配置図

遺物は弥生土器片2点、土師器片18,075点、須恵器片88点、赤焼土器6点、かわらけ片13点、瓦質土器片43点、陶磁器片271点、土製品22点、石製品40点、剥片6点、鉄製品7点、銅製品16点、鉄滓17点、木製品113点、種子7点、礫(礎石・金床石等)17点、粘土塊9点が出土した。土師器片は竪穴住居跡及び5・6号溝跡から出土したものがほとんどを占め、1・2号住居跡からは完形の土師器が出土している。瓦質土器片や陶器片は1号溝跡及び井戸跡から出土している。石製品は石製模造品が約半数を占めている。木製品は10号井戸跡から多く出土した木材がほとんどを占め、他にも竪穴住居跡や掘立柱建物跡から柱材や礎板が出土している。(菅野)

基本土層 (図8)

基本土層はL I～IVの4層に分けられた。土層の観察は、5号溝跡の延長線上の調査区西壁(図7-ア)、16号井戸跡付近の調査区東壁(図7-イ)、調査区南壁中央部(図7-ウ)の3地点で行った。同一の土層でも、観察地点によって色調や特徴が若干異なっている。

L Iは現表土で、遺跡の中央部から南側は畑の耕作土、それ以外は宅地の盛土である。厚さは20～70cmで、遺物を包含していることから、調査の際には調査員立会の下、重機で慎重に掘削を行った。

L IIは黒褐色土で、層厚は約10～20cmである。遺物を多く含んでいる。調査区南端や中央部で僅かに確認できるだけで、大半は圃場整備等により削平されている。

L IIIは細粒～中粒砂を含むにぶい黄色を基調とする砂質土で、基盤層である。所により、にぶい黄褐色や褐色を呈している。すべての遺構は本層上面で検出され、遺構内堆積土に含まれる地山塊や地山粒は、本層を起源とするものである。層厚は30～90cmで、無遺物層である。本層の下部から湧水がある。

L IVは暗緑灰色粘質土である。水分を多く含みグライ化している。井戸跡はこの層を掘り込んで作られている。無遺物層である。(菅野)

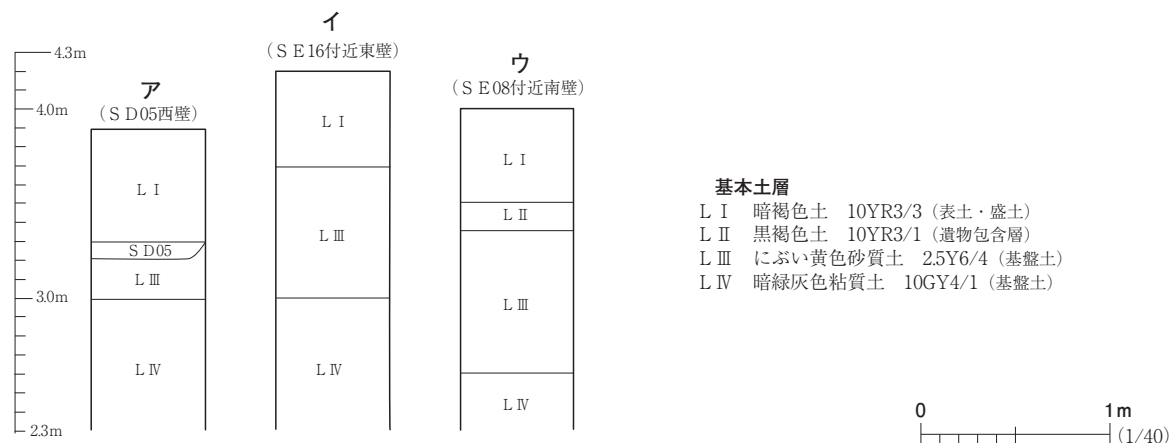


図8 基本土層

第2節 竪穴住居跡

本調査区内において、古墳時代中期の竪穴住居跡を6軒検出した。住居跡ごとの重複はなく、L字状の柵跡と溝跡に区画された内側に存在する。平面形はすべて方形で、その内の5軒は主軸方向が北から西に20°前後傾いている。1号住居跡は一辺が8mの大型の住居跡で、1～3・6号住居跡からは貯蔵穴、1・2・5号住居跡からは支柱穴、1・6号住居跡からは炉跡が検出された。また、住居跡内からは土師器の他に石製模造品が多く出土している。

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図9・10、写真7～10)

本住居跡は調査区中央やや北側のC4・5グリッドに位置し、5・6号溝跡と1号柵跡で構成される方形区画の内部の北東隅に、これらと平行するように作られている。本住居跡とこれらの遺構との間隔は、北側は1号柵跡の北側柱列との間が3.5m、5号溝跡との間が6m、東側は1号柵跡の東側柱列との間が2m、6号溝跡との間は4mである。標高は3.7mで、表土下に堆積するLⅢ上面で確認した。西側5mには2号住居跡、東側には4号建物跡も近接している。18号井戸跡及び多数の小穴と重複し、本住居跡が古い。

本住居跡の残りは悪く、現況では掘り込みが浅く、北東部では壁の立ち上がりが確認できない。遺構全面が削平されているらしく、たまたま削平を免れたと考えられる土師器杯(図13-5・6)は、検出面よりも25cm上から出土している。覆土は自然堆積のℓ1で、焼土と炭化材を含んでいる。地山である灰褐色砂質土を含むℓ9～11は貼床の土である。ℓ6は地山である灰褐色砂質土を含む土で、壁溝の堆積土である。

平面形はやや南北方向が長い方形で、東辺は西辺より短く、南辺はわずかに湾曲する。全体の形状は西側が整っており、東側はやや不整である。中軸線方向はN20°Wで、5・6号溝跡、1号柵跡とほぼ一致し、2・4～6号住居跡とも近い。規模は中軸線部分で南北8.0m、東西7.4mである。検出面から床面までの深さは3～15cmで、壁は外傾して直線的に立ち上がる。床面は緩やかな凹凸があり、全体に締まっているが、硬化部分はない。壁溝は南壁際西半、南東隅北東部、北壁中央から北西隅で途切れているが、壁溝のない部分の多くは床面を掘り下げ過ぎてしまっていることから、本来は全周していた可能性が高い。幅は12～24cm、深さは8～14cmである。掘形底面は北壁際や南西隅などが部分的に深く掘り込まれ、深さは4～27cmである。

支柱穴は4基(P3～6)で、各柱穴は整った方形に配置され、柱間寸法はP3-P4間が4.1m、P5-P6間が4.07m、P3-P5間が4.1m、P4-P6間が4.12mである。各柱穴には柱痕が認められ、北側のP3・4では柱材の根元付近が残存する。柱痕部分はℓ8、掘形埋土はℓ12・13で、堆積状況などから少なくとも床面下の柱については抜き取られていないと考えられる。ま

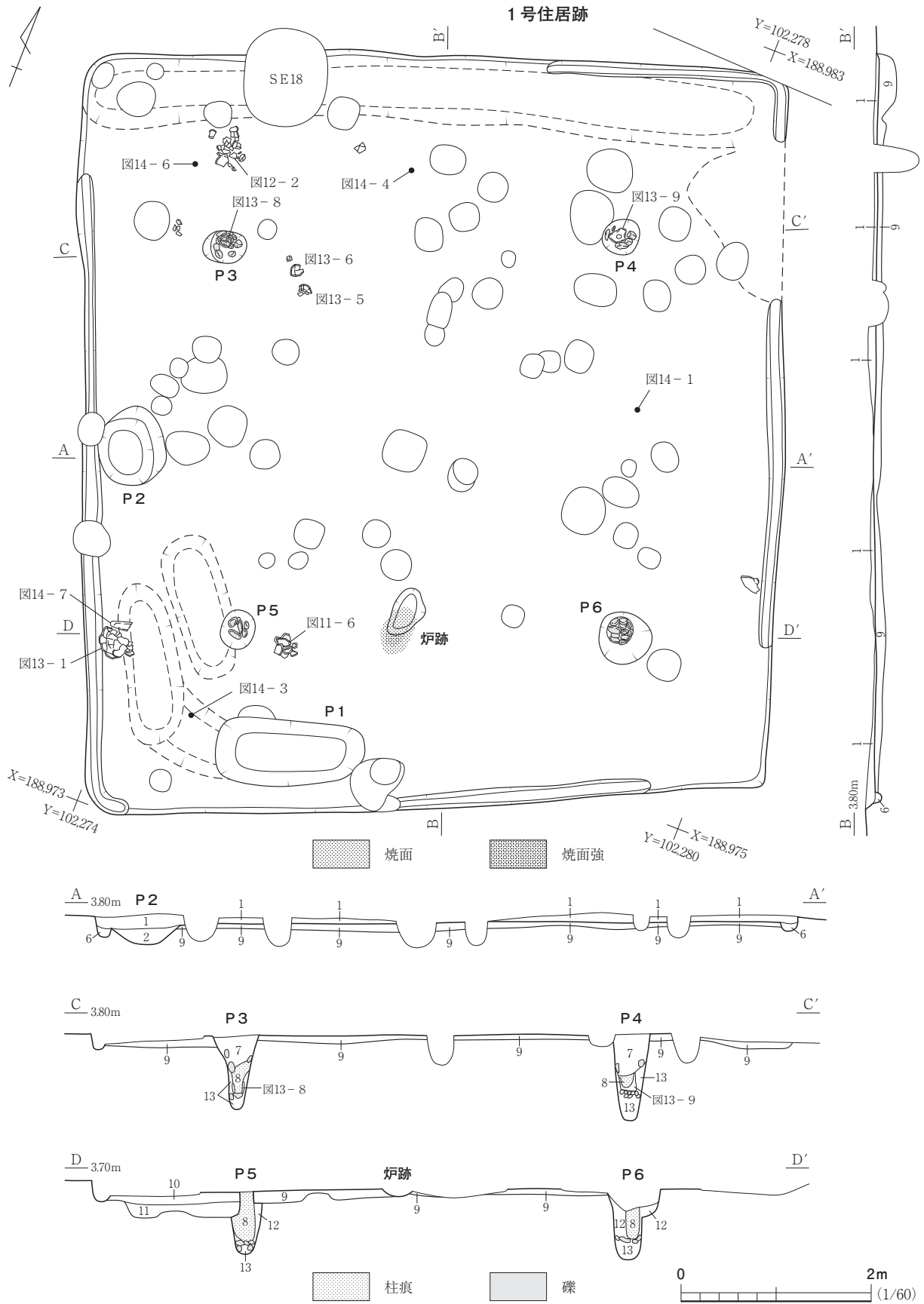


图9 1号住居跡(1)

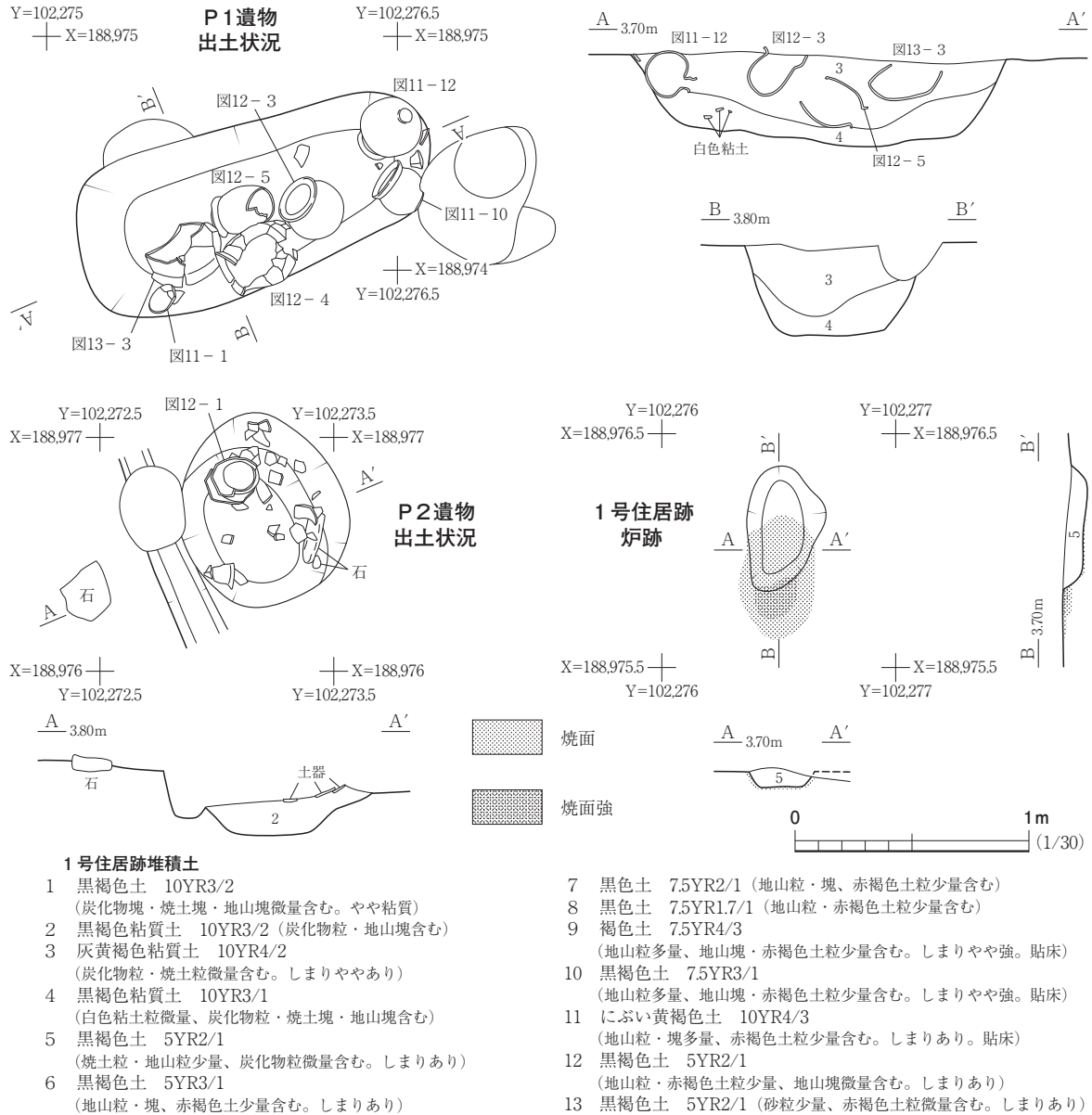


図10 1号住居跡(2)

た、P 5付近では土層観察から、柱を立てた後で、床が貼られていることが確認できた。ℓ 8は緻密な自然堆積土、ℓ 7も自然堆積土で掘形の崩落土を含む。柱痕部分の下部と側面に接して径8～16cmの楕円形ないし棒状を呈する礫が多数埋置きされ、下部の石敷きはP 3・6で1段、P 4・5は上下2段で、P 6では上面が平坦ではなく柱材を包むように湾曲して敷かれている。柱穴は比較的固い厚さ50cmのLⅢを掘り抜き、その下部に堆積するしまりの弱いグライ化したLⅣを20～40cm程掘り込んでいる。底面の礫は柱の沈み込みを防ぐための礎石、壁面の礫は裏込めだろう。底面の石敷き範囲は、直径およそ20cmである。石敷き上面の標高と床面からの深さは、P 3では2.96mと61cm、P 4では2.98mと60cm、P 5では3.04mと52cm、P 6では3.06mと52cmであり、北側の2基が深く、南側の2基が浅い。P 3・4からは円柱状の柱材が出土した。柱の直径は柱材や柱痕から、13～16cmと推定できる。掘形を含めた柱穴の規模は、P 3は径47×36cm、深さ79cm、P 4

は径40×37cm、深さ91cm、P 5は径41×37cm、深さ66cm、P 6は径57×56cm、深さ74cmで、P 4・5は直線的に、P 3・6は段を持って掘り込まれている。

入口ピット(P 2)は西壁際中央にある。平面形は楕円形で西側は壁溝に接しており、北西部の一部は中世とみられる柱穴と重複する。底面は丸味を持ち、壁は直線的に傾斜して立ち上がるが、東側では上半で角度を緩やかに変えて床面に至る。規模は82×72cm、深さ20cmである。覆土は炭化物を含む自然堆積土(ℓ 2)で、底面ないし壁面からやや浮いた状態で壺主体の土師器片が多数出土している。

貯蔵穴(P 1)は南壁際西寄りにある。平面形は隅丸長方形で、中軸線方向は南壁と平行しており、北西部が中世とみられる柱穴と重複する。規模は長軸長1.58m、短軸長72cmで、床面からの深さは40cmである。底面は丸く緩やかな凹凸を持ち、壁は傾斜して直線的に立ち上がる。覆土は炭化物と焼土を含むℓ 3・4で、ℓ 3は自然堆積土、ℓ 4は地山のLⅢを多く含む人為堆積土である。ℓ 3からは完形品を含む遺物が出土しているが、ℓ 4に含まれるものはなかった。

炉跡は楕円形に浅く窪む地床炉で、住居跡内南壁寄り、P 5・6の間でやや西に寄った位置にある。楕円形の掘り込みと赤変した焼面として確認したもので、掘り込みの中軸線方向は住居跡とほぼ同じである。規模は南北長54cm、東西長34cm、深さは床面から10cmで、炭化物や焼土を含むℓ 5が堆積する。底面は平坦で、壁は丸味を持って緩やかに立ち上がる。掘り込み南半から掘り込み外が熱を受け赤変しており、この内、掘り込み南端の一部のみが硬化する。赤変範囲は南北長52cm、東西長34cmの楕円形、硬化範囲は南北長18cm、東西長18cmである。

遺物(図11～14、写真64～66・72・73)

図11～14に示す遺物の他、住居内からは土師器壺・甕の破片が739点、土師器碗や鉢の破片が65点他、852点の土器が出土した。この中には、明らかに古墳時代後期頃の所産と考えられるハケメの見られる甕や丸底で内面黒色処理された杯、無底の甑の破片が27点、古代のロクロを使って作られた甕が2点、陶器が2点含まれている。出土層位は堆積土がごく薄いため、ℓ 1として取り上げた遺物もその大半は床面や床面直上から出土している。図9・10に示す通り、平面的には住居跡西半からの出土量が多く、中でもP 1内からはほぼ完形に近い7点の土器がまとまって出土している。P 2内からも全周する甕の口縁部等が出土した。

図11-1は体部が逆ハの字状に開く浅い土師器杯で、内外面は磨かれている。同図2・3は小型の土師器鉢で、口縁部が2は外反し、3は「く」の字状に内傾している。2の器面は剥落しているが、部分的にミガキ調整されたような光沢が見られ、わずかであるが赤色を呈する部分も確認できた。同図4～6はやや大きな土師器鉢で、4は口縁～底部まで丸みを帯び、5は口縁部が外湾し、6は底部から口縁部まで直線的に外傾して開いている。調整は4が内外面ともミガキ、5は内面がミガキとナデ、6の外面はハケナデ、内面はヘラナデである。同図7は土師器高杯の脚部、同図8は土師器高杯の杯部下端と考えられ、下部には脚との接合の際に芯を受けるためと考えられる窪みが見られる。杯部の調整は内外面ミガキである。同図9は小型の土師器甕、同図10は底部が

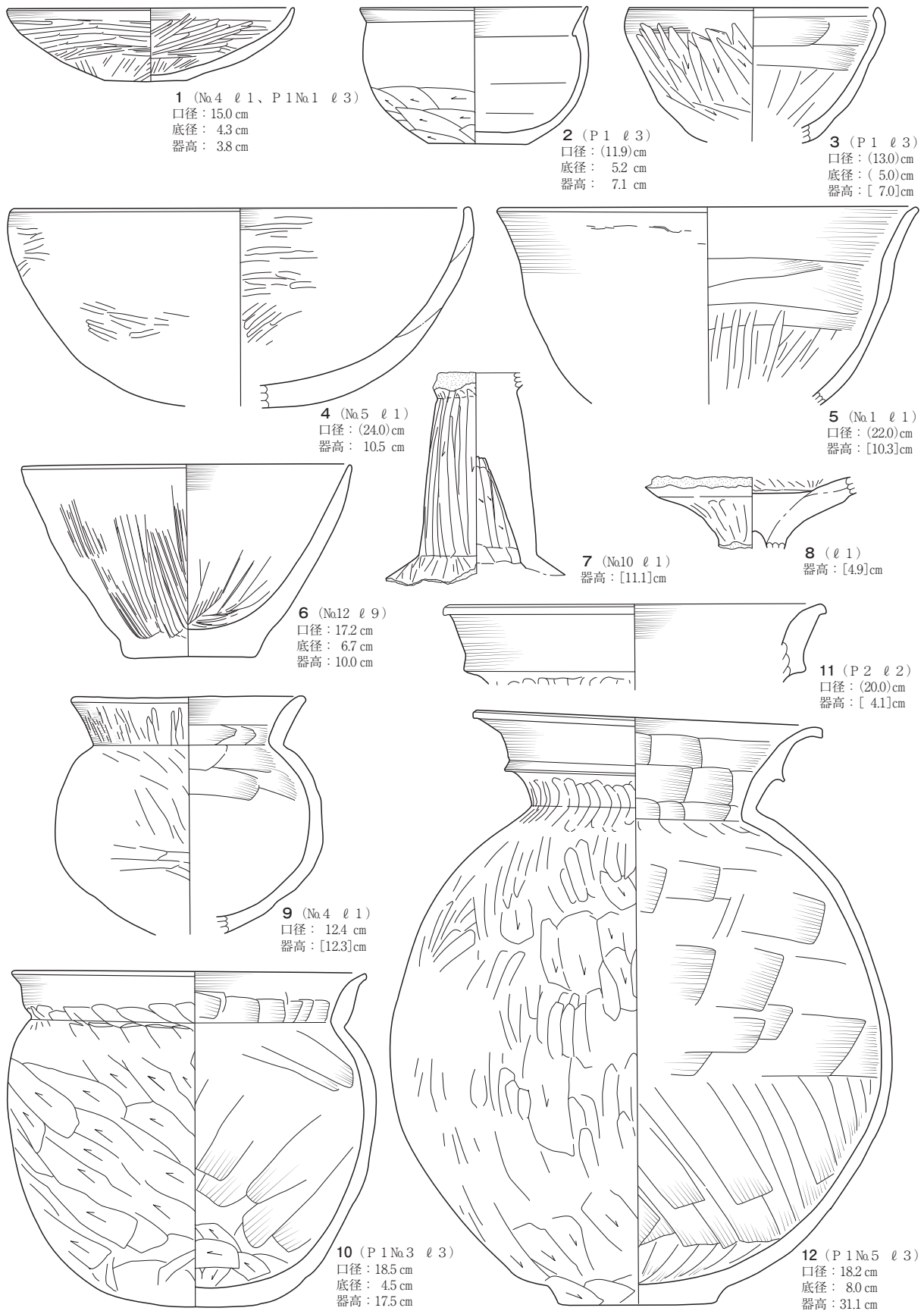


図11 1号住居跡出土遺物(1)

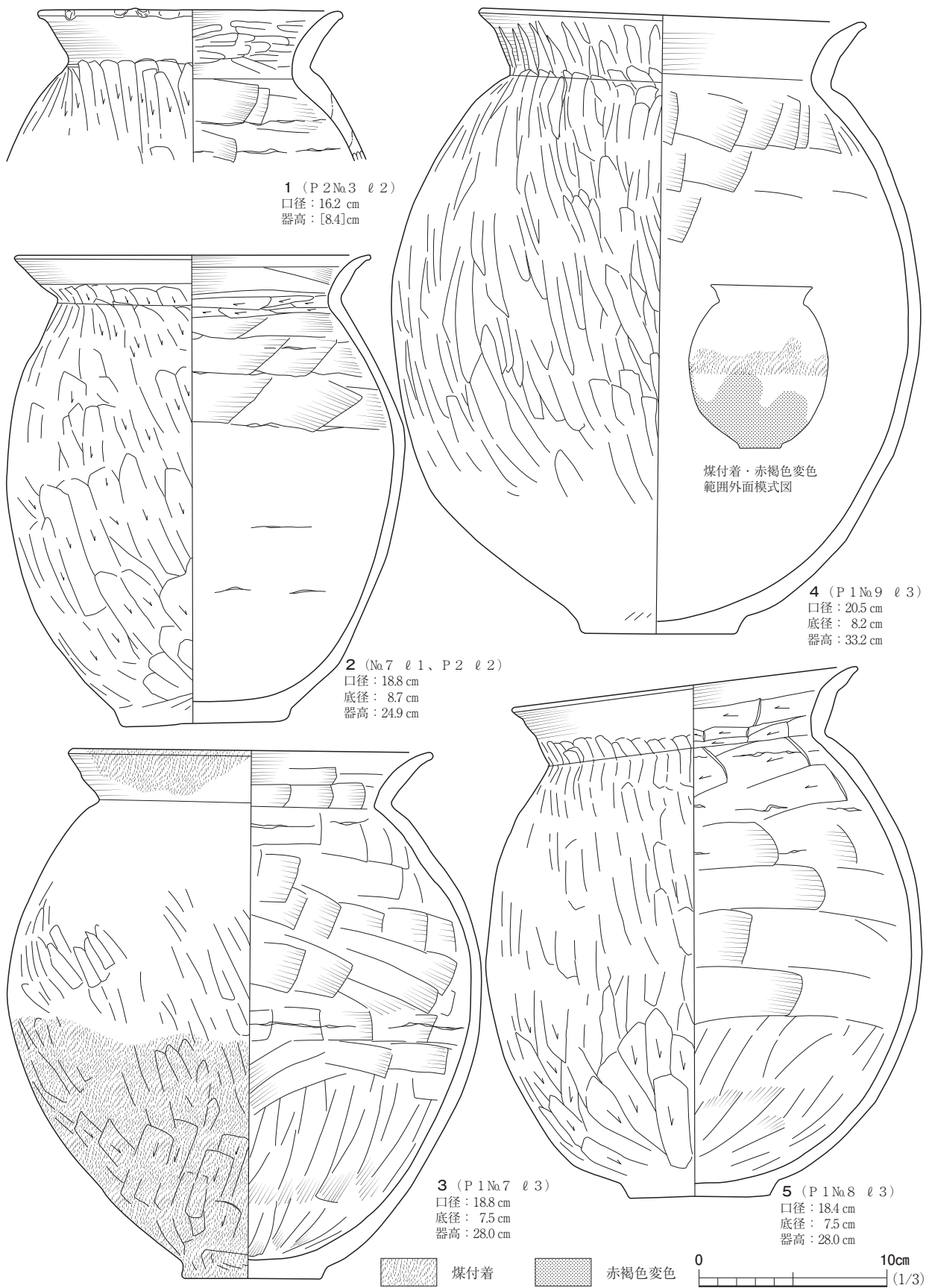


図12 1号住居跡出土遺物(2)

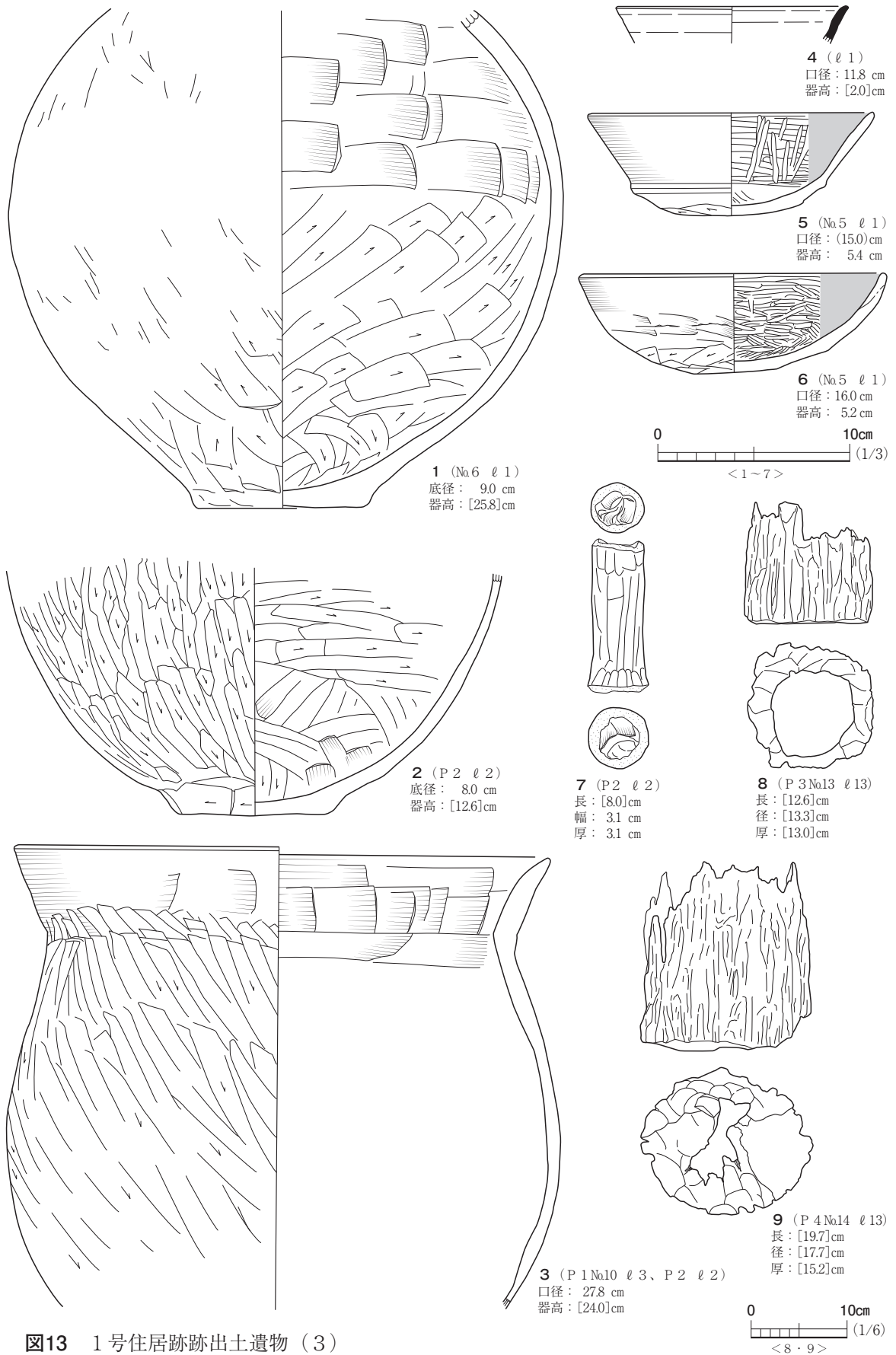


図13 1号住居跡出土遺物 (3)

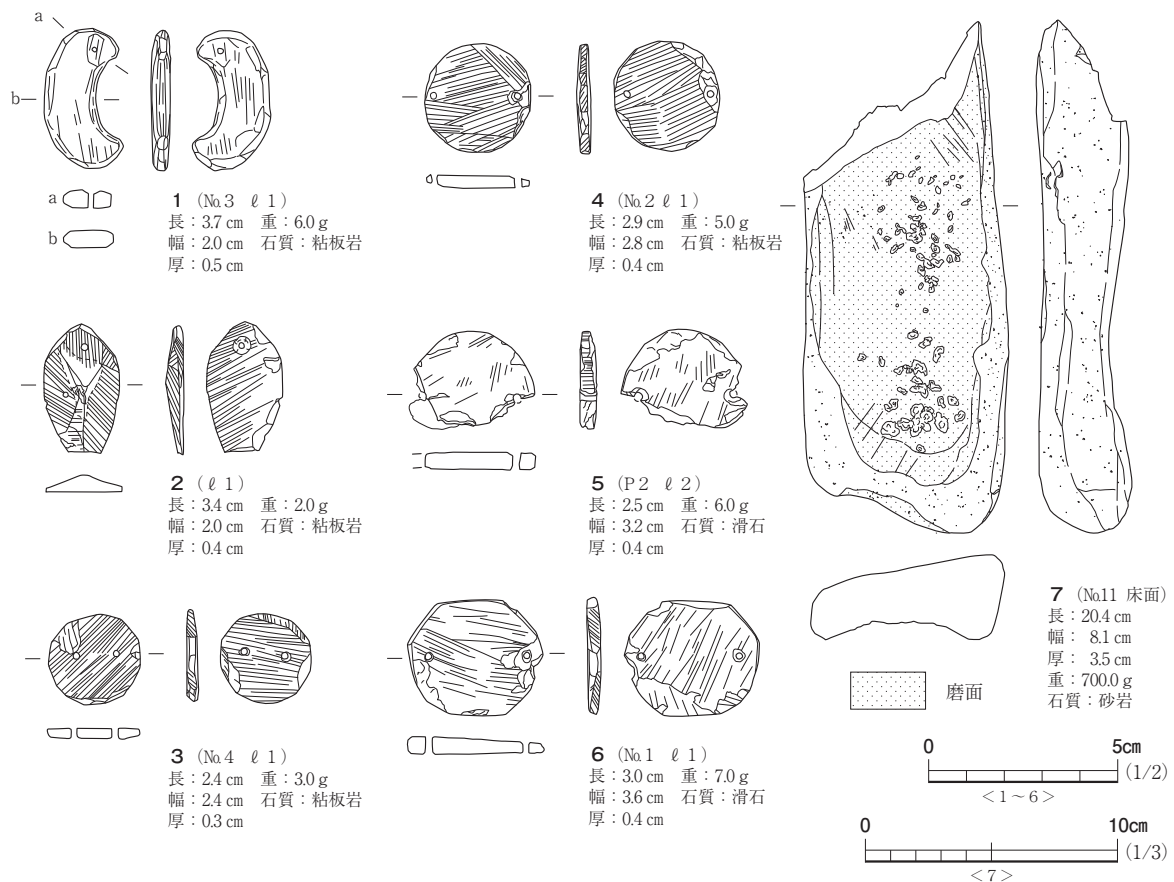


図14 1号住居跡出土遺物(4)

丸底状をなす土師器甕で、体部は角張っている。器面はヘラケズリとナデで調整されている。同図11・12は土師器壺で、複合口縁の名残であろうか口縁部下端に強い段が認められる。12の体部は丸みを帯びる。図13-1・2も体部の丸みが強く、壺と考えられる。1の外面にはミガキ状の光沢が認められる。

図12-1~5、図13-3の土師器甕は体部が楕円形状をなし、口縁部が「く」の字状に外反する。器面は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整を基本とし、図12-2・4・5、図13-3ではミガキ状の光沢が見られる。図12-3の網点は煤の付着を表す。煤は図の表側の体部下半に濃密に付着しているが、図の裏側では器面の荒れが激しく観察できない。図12-4は模式図に示したように、大部下半に煤痕と被熱による変色範囲が全周している。図13-4は須恵器杯の口縁部破片、同図5・6は有段丸底の土師器杯で、内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。

図13-7は円柱状をなす土製品で、上下に別のものが付くらしく、上下端には粘土の接合のためと考えられる剥離痕が認められる。

図13-8はP3の柱材、同図9はP4の柱材である。8は直径約13cm、長さ12.6cm、9は直径約17cm、長さ19.7cmである。いずれも芯持材とみられ、上面と側面その他、中心部分が腐食により失われているため現状は筒状で、底面には手斧によると考えられる切断痕跡が確認できる。

図14-1~6は石製模造品で、1が勾玉形、2が剣形、3~6は有孔円板である。石質は1~

4が粘板岩、5・6は滑石である。粘板岩性の模造品には線条痕が多く見られる。1の器面は丁寧
に磨かれ、2は手ずれによるものであろうか、表面の全面が摩滅し、特に稜線部の磨滅は著しい。
孔の直径は1.5～2mm程で、表面からまっすぐに開けられ、裏面の孔周囲は割れて広がっている。

図14-7は置き砥石と考えられ、使用面はつつるに磨滅している。使用面は上下端が幾分高
く、その間は低くて、この部分には敲打痕状の凸凹が見られる。下端部側面にも円形状に緩く窪ん
だ磨面が認められるが、これがどのような使用によって形作られたのかは不明である。最終的には
火を受けて割れたらしく、裏の割れ面に打点やリングに相当するものは確認できなかった。

まとめ

本住居跡は8×7.4m程の竪穴住居跡で、調査区の中では最も大きい。5・6号溝跡、1号柵跡
で構成される区画施設と軸線を同じくすることから、これと関連するものと考えている。特に、1
号柵跡の中で溝状の掘形を有する部分が、本住居跡北壁及び北東隅と対応するように作られている。
柱穴は深く、底面は基盤層下位に堆積する柔らかなグライ層に達していることから、礫を敷いて柱
の沈み込みを防いでいる様子が見て取れる。炉跡は地床炉であることを確認し、貯蔵穴からは多く
の土師器も出土した。

本住居跡から有段丸底で内面黒色処理された古墳時代後期の土師器杯などが出土しているが、こ
れについては、後世の攪乱等に伴い混入したものと考え、本住居跡の時期は、P 1・2からましま
って出土した土師器から、古墳時代中期の所産と考えている。 (谷 中)

2号住居跡 S I 02

遺 構 (図15・16、写真11～14)

本住居跡は調査区中央西側のB 5・6グリッドに位置し、L III上面で検出した。1号溝跡や現代
の圃場整備時の削平・攪乱、試掘調査時のトレンチにより壊されているが、ほぼその全容を知るこ
とができた。北西隅については、削平面の上面で貼床土の範囲としてわずかに確認された。1号溝
跡、19・38号土坑と重複し、本住居跡が古い。この他、多数検出されている小穴についても、その
大半は中世以降のもので、本住居跡よりも新しいものと考えている。

平面形は整った方形を呈し、東壁の軸線方向はN 22° Wである。規模は一辺6.6m、検出面から
床面までの深さは最も残りが良い東壁際で約20cm、大半は数～10cm程度である。堆積土は4層に
区分した。ℓ 1が遺構廃絶後の自然堆積土、ℓ 2が貼床土、ℓ 3・4は柱穴内堆積土である。

住居内施設は貯蔵穴2基(P 1・2)と柱穴4基(P 3～6)を確認した。P 1は西壁際の中央や
や南に寄った部分に位置する。平面形は不整楕円形状を呈し、規模は長径1.1m、短径90cmである。
断面形は台形状で、床面からの深さは35cmである。堆積土は3層に区分した。堆積状態は一見レ
ンズ状堆積に見え、自然堆積の様相を示している。一方で、ℓ 2上面からは完形土器が横倒れのよ
うな状態で出土している。P 1周辺部からも同じような状態で土器が出土していることを考え合
わせると、住居廃絶と土器の廃棄に時間差を考えることは難しい。ℓ 2・3については、住居廃絶に

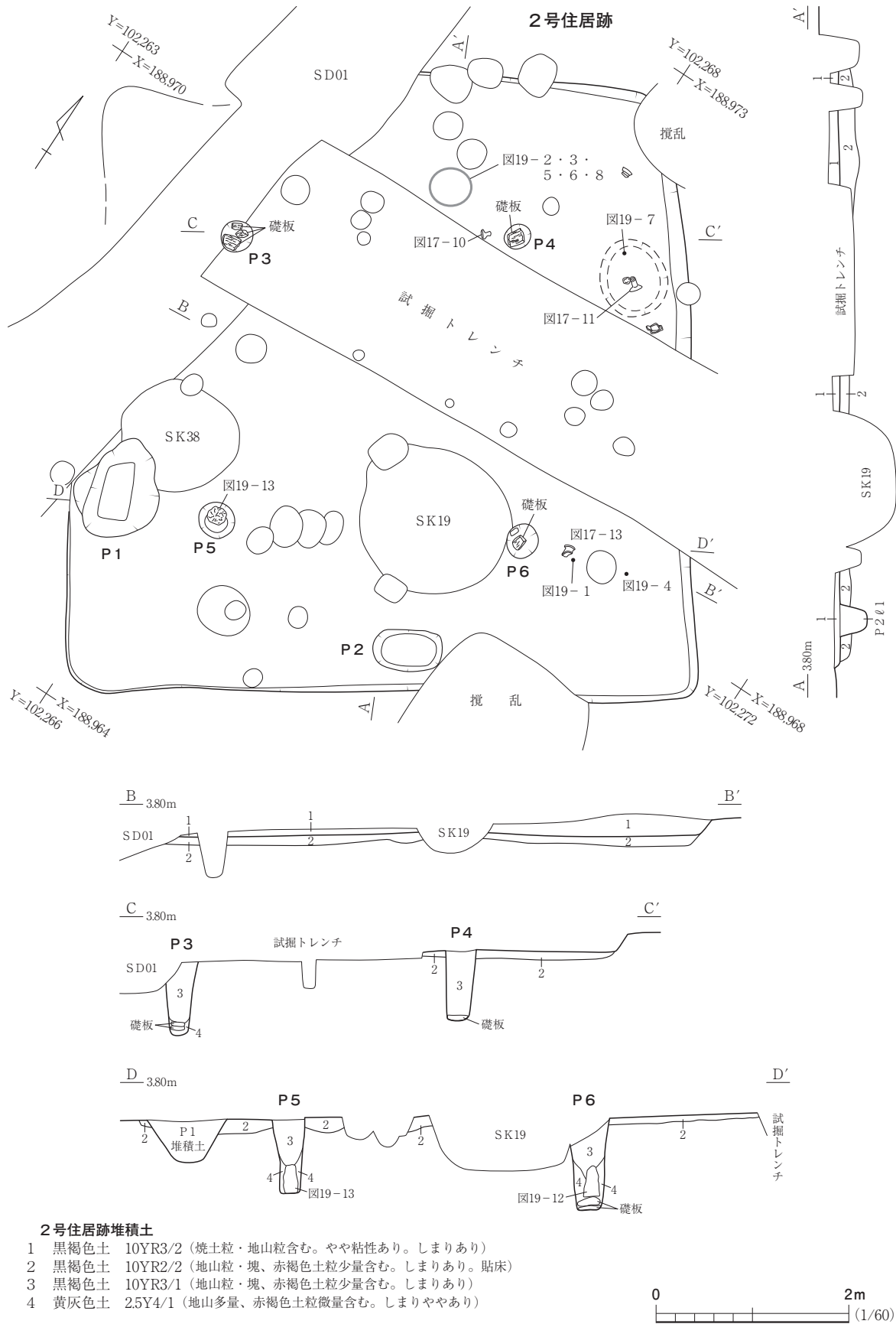


図15 2号住居跡 (1)

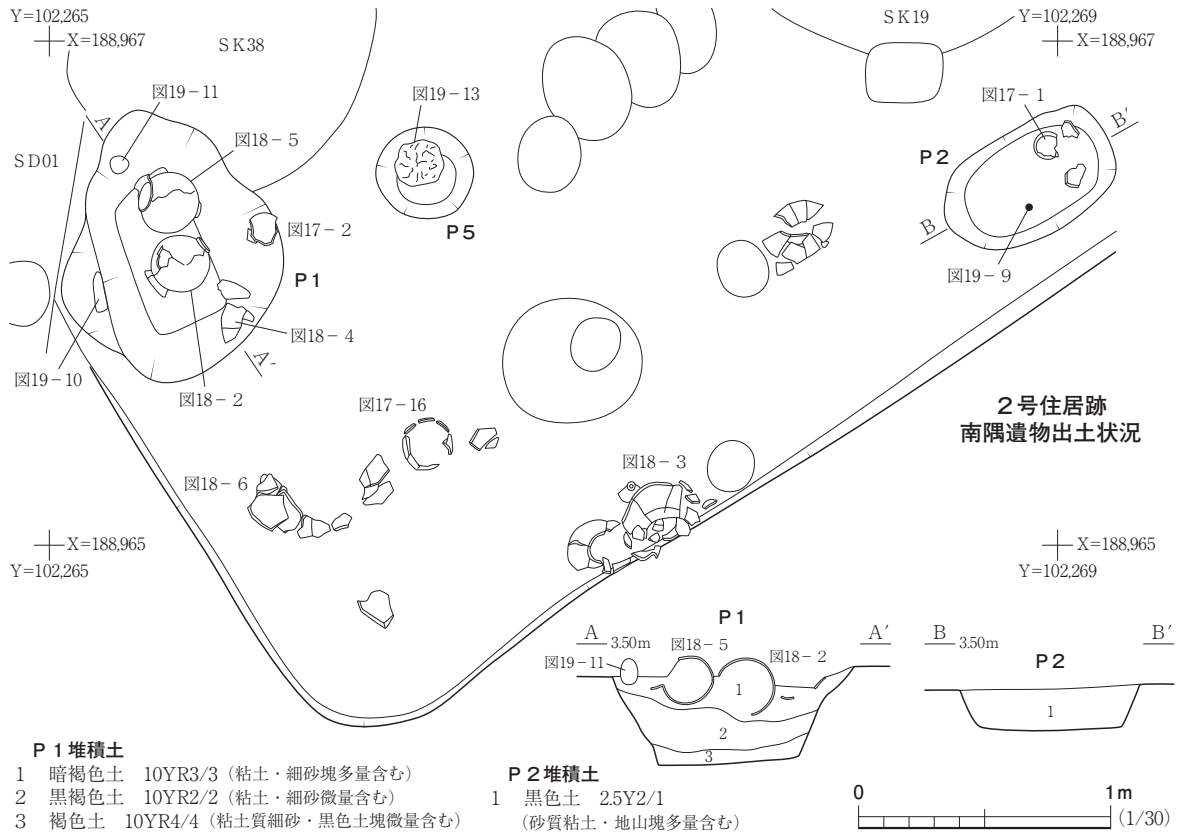


図16 2号住居跡(2)

伴って短時間で堆積した人為堆積土と考えている。P 2は南壁際中央に位置し、平面形は楕円形状、断面形は台形状を呈する。規模は長径75cm、短径45cm、床面からの深さは15cm程である。内部には基盤土塊を多く含む黒色土が均一に堆積していることから、人為堆積と考えている。

住居内からは30数基の小穴を検出したが、その多くは検出面や堆積土の土質から、中世以降の所産と考えている。本住居跡の柱穴は住居の各角を結んだ対角線上に位置し、整った方形に配されたP 3～6である。床面からの深さは75～90cmと他の小穴に比べてきわめて深い。床面から40cm以下にはグライ化した締まりの弱いL IVが堆積しているため、P 5・6では柱材が残り、P 3・4・6の底面には礎板も残っていた。柱の間隔は3～3.1mである。炉跡は確認できなかった。

遺物 (図17～20、写真67・72・74・75)

住居内からは出土した遺物の大半は土師器である。図示した遺物を除いた土師器片の数は約600点で、内訳は、甕片が約500点、杯片が50点、高杯片が15点ある。この中には、古墳時代後期に比定されるハケメ甕の破片が16点、内面黒色処理の杯片が10点含まれている。その他に、石製模造品が8点、石製紡錘車・砥石・敲石が各1点、柱穴内からは柱や礎板等に使われた木端が出土している。土師器は図16に示すように、P 1・2を含む南西隅からまとめて出土している。図19-2・3・5・6・8に示す5点の石製模造品はP 4から北西に80cm程離れたℓ 1内から集中して出土した。ℓ 1は層厚が数cmと薄く、床面の直上からの出土と考えている。

図17-1は土師器碗、同図2・3は土師器杯、同図4・5は土師器鉢である。1は口縁部・体部・

底部を区分することが難しく、体部の外面下半は火を受け変色し、内面でも部分的ではあるが同様の状態が観察できる。2は口縁部が垂直気味に立ち上がり、3・4は口縁部が外傾する。5の口縁部と体部の境には、凹線状の浅い窪みが巡っている。

図17-6・7は脚の小さな高杯をひっくり返したような形態の土師器蓋で、いずれも丁寧にナデ調整され、部分的にミガキ状の光沢も観察できる。

図17-8・9は高杯の杯部、同図10~12は脚部である。杯部は断面逆台形状で、内外面ともにナデやミガキで丁寧に調整されている。10~12の柱状部は丸みを帯び、裾部はハの字状に大きく開く。外面の調整はいずれもヘラミガキ、内面の調整は10がヘラによる縦方向の掻き取り、11は横方向のヘラナデ、12はユビオサエである。11の内面上端には、粘土板を貼り付けている。

図17-13は土師器捏鉢で、内面の調整はヘラナデである。胎土は他の土器と異なり、砂粒が多い。大型高杯の可能性もある。同図15は手捏ね土器である。同図16~18は土師器壺の口縁部で、16・17は複合口縁、18は口縁部下端に強い稜が認められる。

図17-14、図18-1~6は土師器甕である。図17-14、図18-1は小型の甕で、体部の丸みは弱い。図17-14は口縁部と体部の境には丸い棒状工具による凹線が施されている。体部の調整は外面がヘラケズリ、内面は図17-14がヘラミガキ、図18-1がヘラナデである。図18-2~6は体部が丸みを帯び、頸部は「く」の字状に屈曲する。体部外面の調整はヘラケズリ後に部分的なヘラミガキ、内面はヘラナデである。2・5の体部内面上端には、ヘラの端部の痕跡が見られる。

図19-1~8は石製模造品で、1~3は剣形、4~8は有孔円板である。1は中軸線上部に直径2mm弱の貫通孔が開けられている。2では、左右側縁の中央付近に貫通孔が開けられている。その他に表面の中軸線上部と左肩部に各1個、裏面上部に2個の盲孔がある。3は中軸線上部に1個、左側縁部に2個の貫通孔が開けられている。4~7には直径2mm程の貫通孔が2個開けられている。剣形・有孔円板ともに、貫通孔はすべて表面から開けられたと考えられ、貫通孔の断面は円筒状で、裏面では割れ剥れて口径がわずかに広がる。

図19-9は円形の石製紡錘車で、厚さは9mmと薄い。断面形は表面が緩い凸面、裏面は平坦である。器面は丁寧に磨かれているが、表面の縁辺部にはヘラケズリ痕状の痕跡が残っている。石質が比較的軟質であることから、整形時に金属の工具で削っているものと考えられる。

図19-10は砥石で、長方形の礫の中央部(網点の部分)が磨滅している。

図19-11は楕円形状の円礫で、下端部は器面が摩耗して滑らかになっている。その状態から、乳棒のように使われたものと考えている。

図19-12・13、図20-1~9は柱穴から出土した柱材や礎板等に使われた木片である。図19-12・13は柱材で、角材を割り、柱としている。表面に残る手斧痕の末端はほぼ平らで、刃が木に対して浅い角度で入っていた事が窺われ、角材の表面を調整した時の痕跡と考えている。柱下端には斧痕が見られるが、末端には数mmの段差が見られ、木に対して刃先が急角度で入っている事が窺われる。木を切断するためであったと考えている。図20には木端を示した。木肌の特徴・大きさ

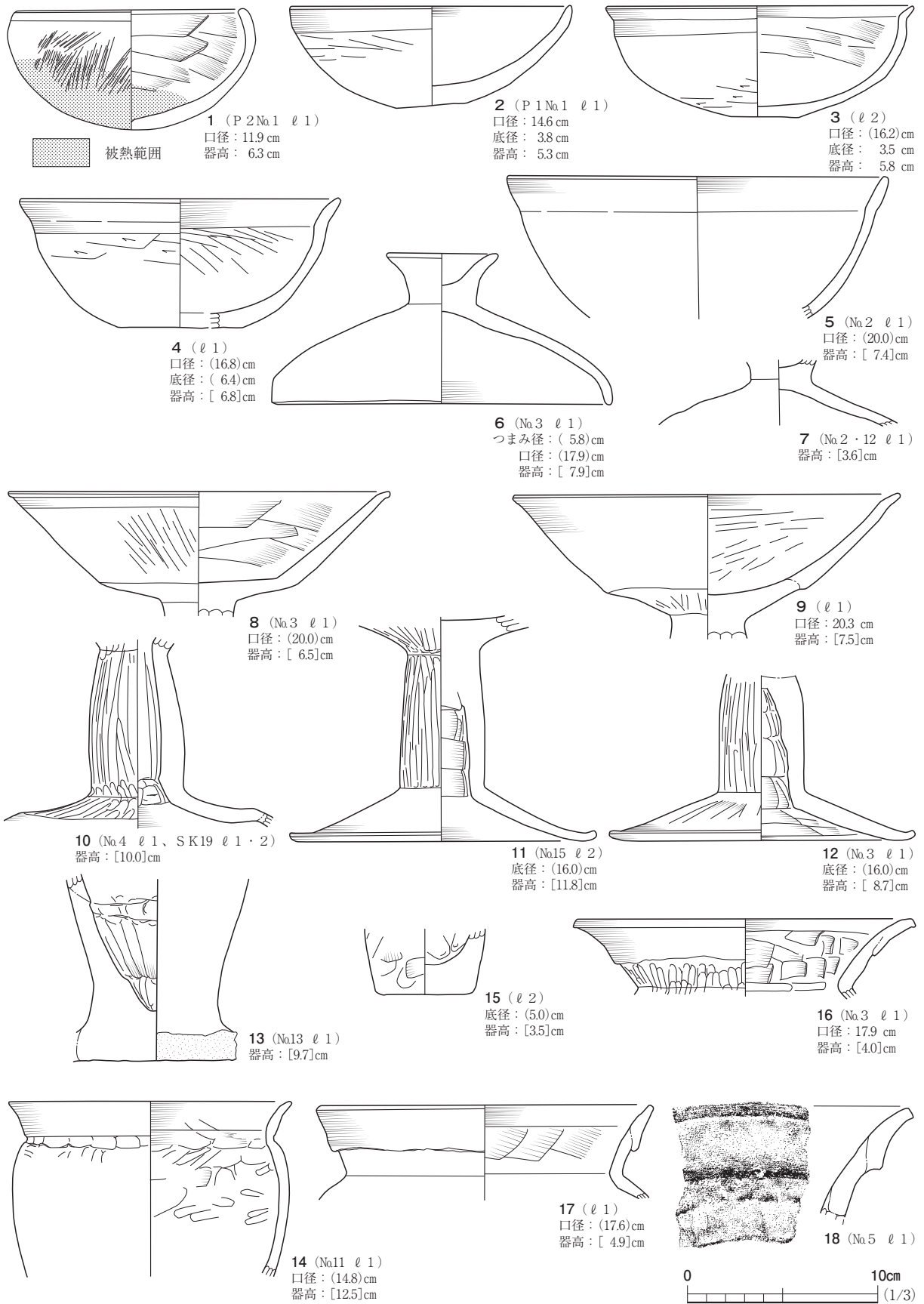


図17 2号住居跡出土遺物(1)

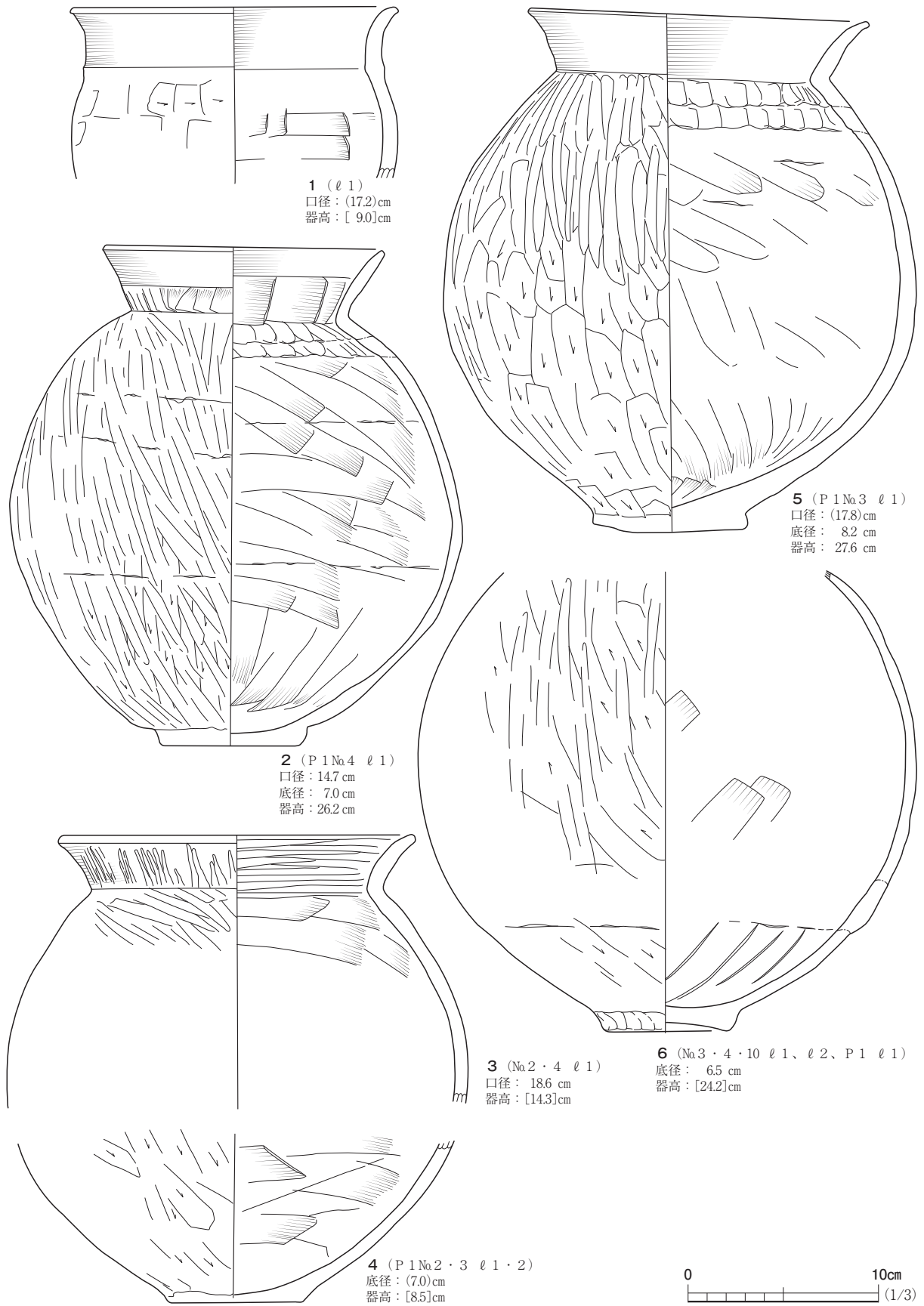


图18 2号住居跡出土遺物 (2)

第1章 調査の成果

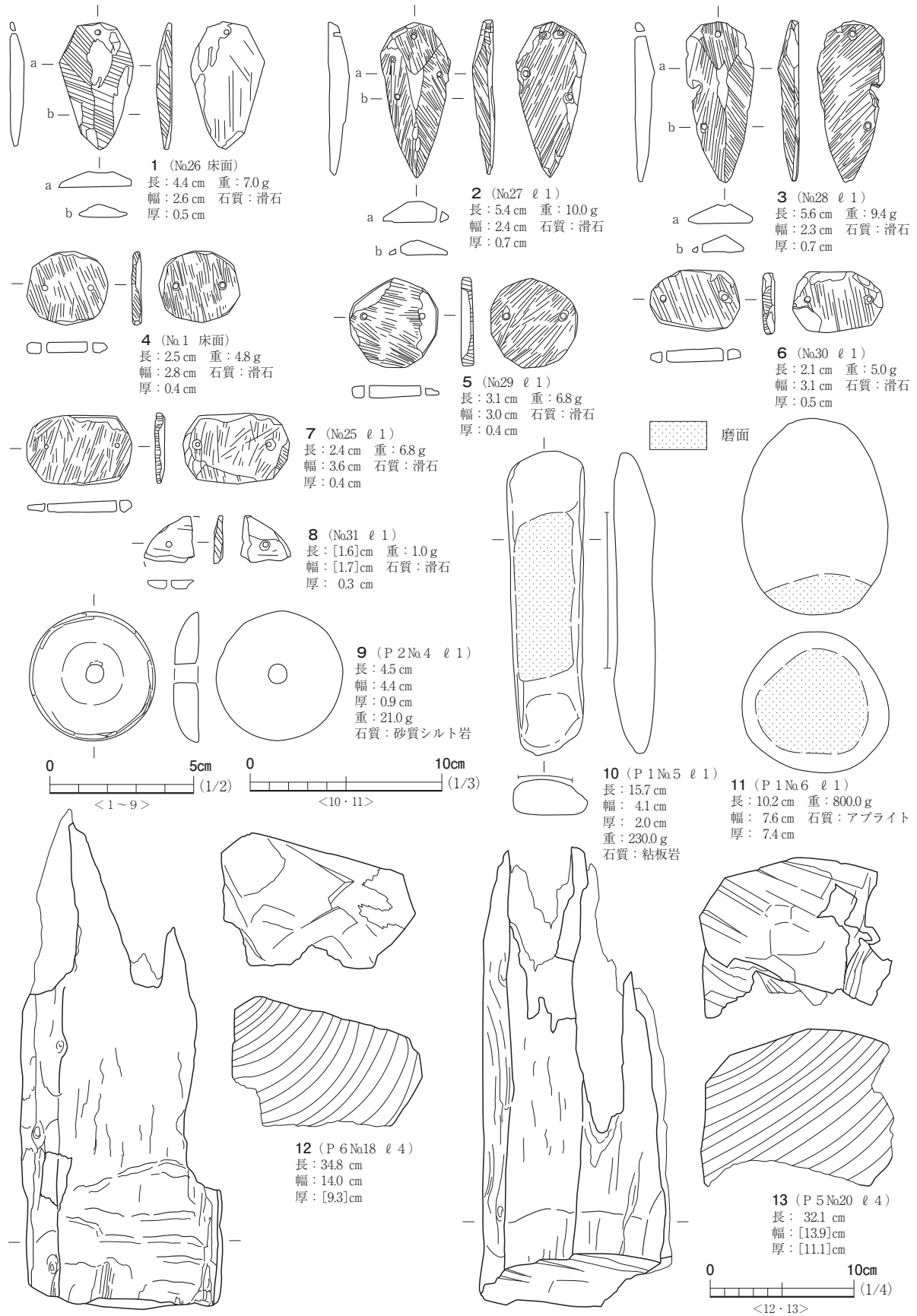


図19 2号住居跡出土遺物(3)

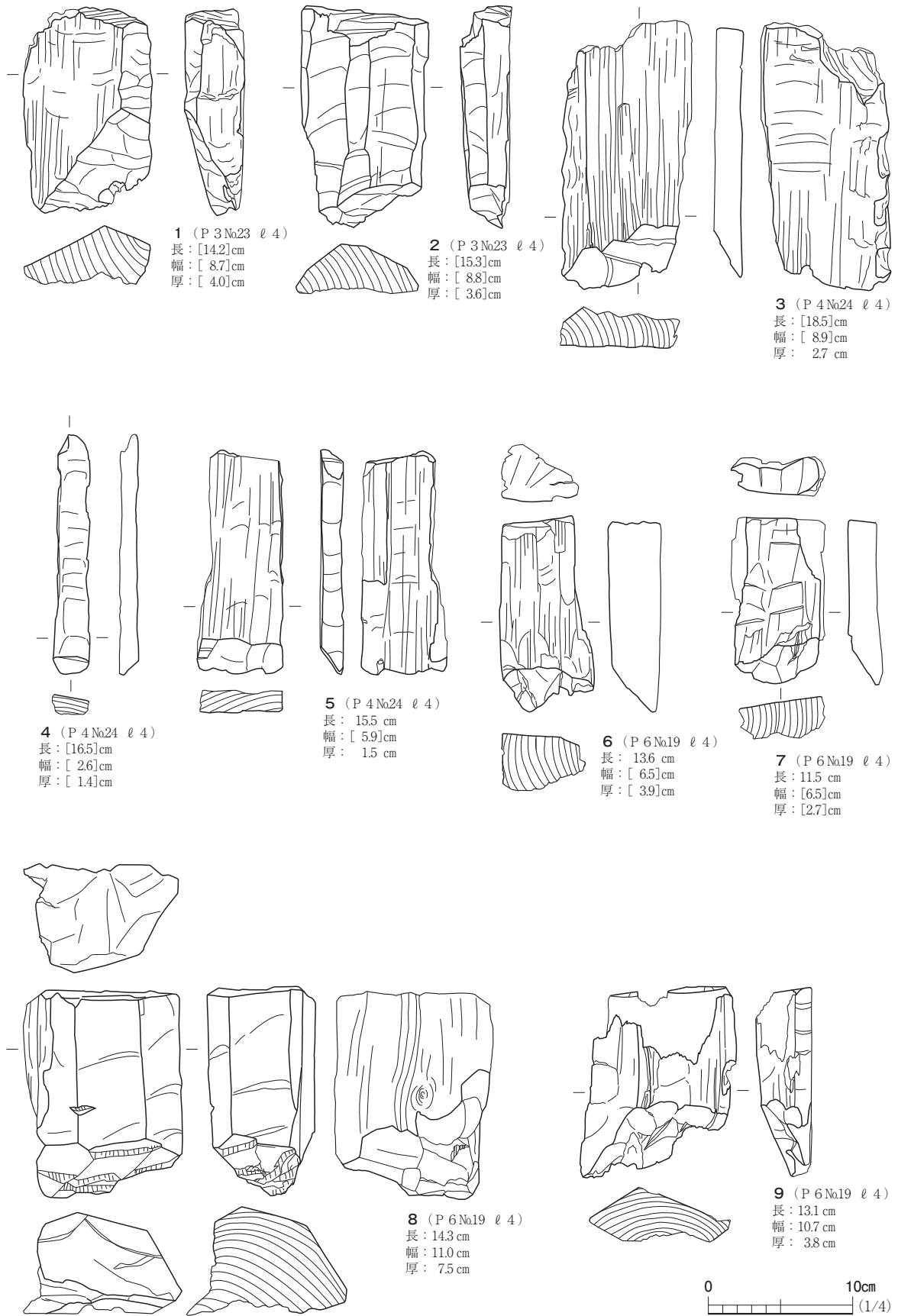


図20 2号住居跡出土遺物(4)

や調整・切断の在り方など、共通するものが多いが、接合することが確認できたのは6・7の2点だけである。柱材と同じく多角形状の材を割り、切断していることが窺われる。8・9の上端は平坦であることから鋸による切断、下端の加工痕の末端には段差が見られることから、この部分は斧で切断されたものと考えられる。7の裏面は割面であるが、部分的に緩い弧を描く幅3.5cm程の手斧の刃先と考えられる痕跡が見られる。6～9では、部分的に焦げていることも確認できた。

まとめ

本住居跡は一辺6.6mの方形の住居跡で、貯蔵穴2基と矩形に配された4基の柱穴が確認された。3基の柱穴の底面からは木片を敷いた礎板も確認された。これは、柱穴が水を多量含む、締まりの弱い砂層を掘り込んで作られているため、柱が沈み込むことや傾くことを防ぐためのものと考えている。出土遺物では、石製模造品が8点出土していることも本住居跡の特徴であろう。真北に対する住居跡西壁の傾きは4・5・6号住居跡に近く、これらと関連する可能性が高い。本住居跡の時期については、出土土器から古墳時代中期の所産と考えている。(松本)

3号住居跡 S I 03

遺構 (図21・22、写真15・16)

本住居跡は調査区南端のB・C8グリッドに位置し、LⅢ上面で検出された。東方2m程に5号住居跡、北東2m程に4号住居跡が近接する。遺存状態は悪く、西～南西が後世の圃場整備の際に壊されており、西壁は失われ、検出面も南西に向かって低くなっている。南西端は1号溝跡に壊され、7・13号井戸跡や中世主体と考えられる多数の小穴とも重複し、いずれの遺構より本住居跡が古い。

平面形は西壁を失っているが、方形を呈するものとみられる。南北の中軸線方向はN10°Eで、他の5軒の竪穴住居跡は中軸線方向が西に傾いているのに対し、本住居跡のみ東に傾いている。規模は中軸線で南北長4.6m、東西長は推定5.1mである。検出面から床面までの深さは3～20cmである。壁は北壁と東壁で良好に確認されたが、南壁の立ち上がりは不明瞭であった。床面は北半分に厚さ2～6cmの平坦な貼床が確認されているが、南半分は起伏が激しく、攪乱により貼床ごと失われたとみられる。また、掘形底面は北壁際と東壁際に沿って幅30～50cm、深さ2～7cm掘り込まれている。

住居跡内堆積土は5層である。ℓ1～3は、炭化材と地山塊を含む遺構内堆積土である。特に床面直上に当たるℓ2からは、南北方向に柱材もしくは板材とみられる炭化材がまとまって出土した。炭化材の出土状況から火災住居と推測される。ℓ4・5は地山塊を多く含み、貼床とみられる。

住居内の施設は南東端にP1を確認した。P1の平面形は不整形円形を呈し、規模は直径58cm、深さ24cmを測る。断面形は半円状をなし、遺物が東側上部から底面にかけて、流れ込んだような状態で出土した。P1内堆積土は3層で、ℓ1・2は住居跡内堆積土ℓ1・2と対応する。ℓ3は薄い炭化物層である。1・2・6号住居跡の状況から、P1は貯蔵穴の可能性が高い。

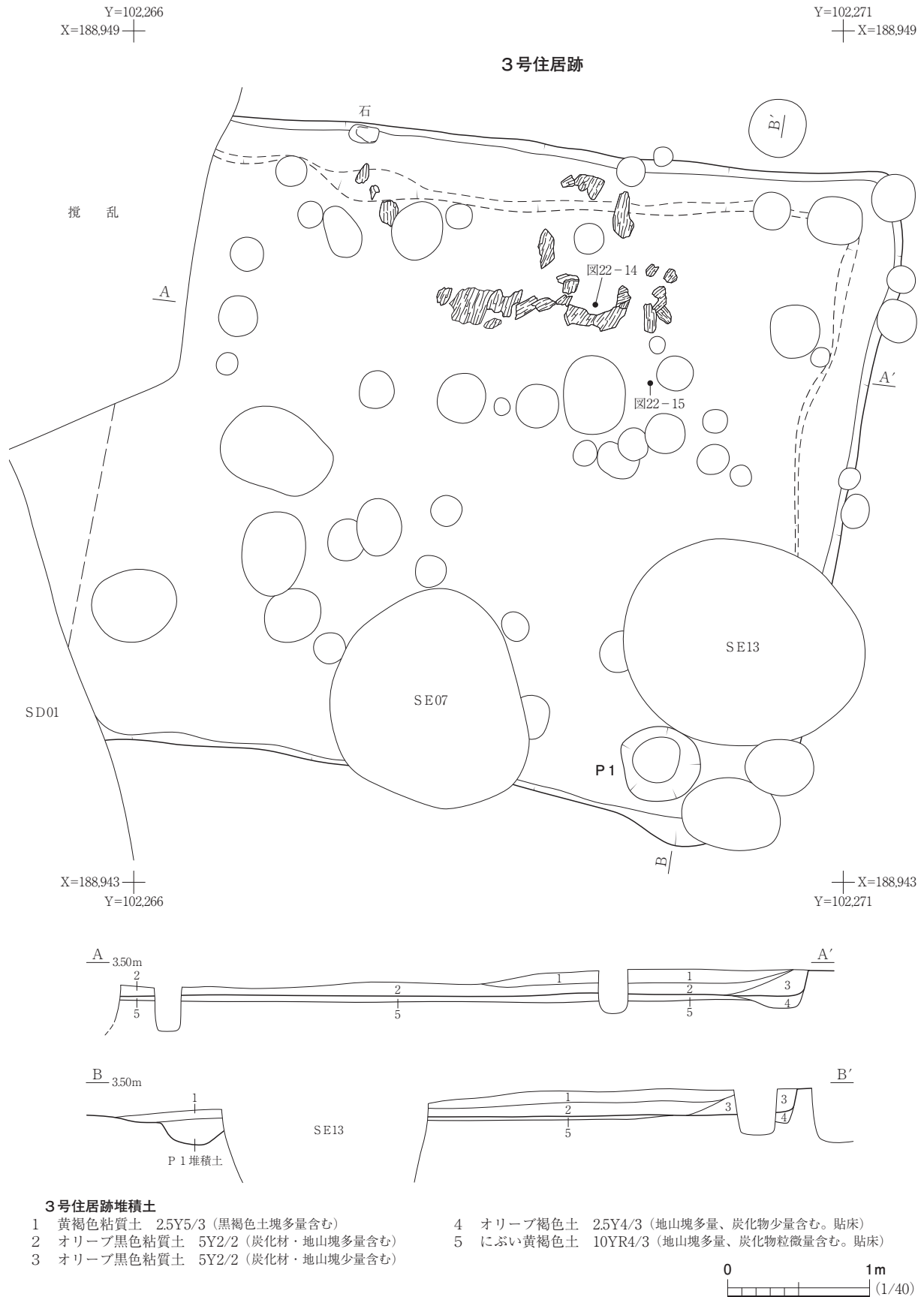


図21 3号住居跡

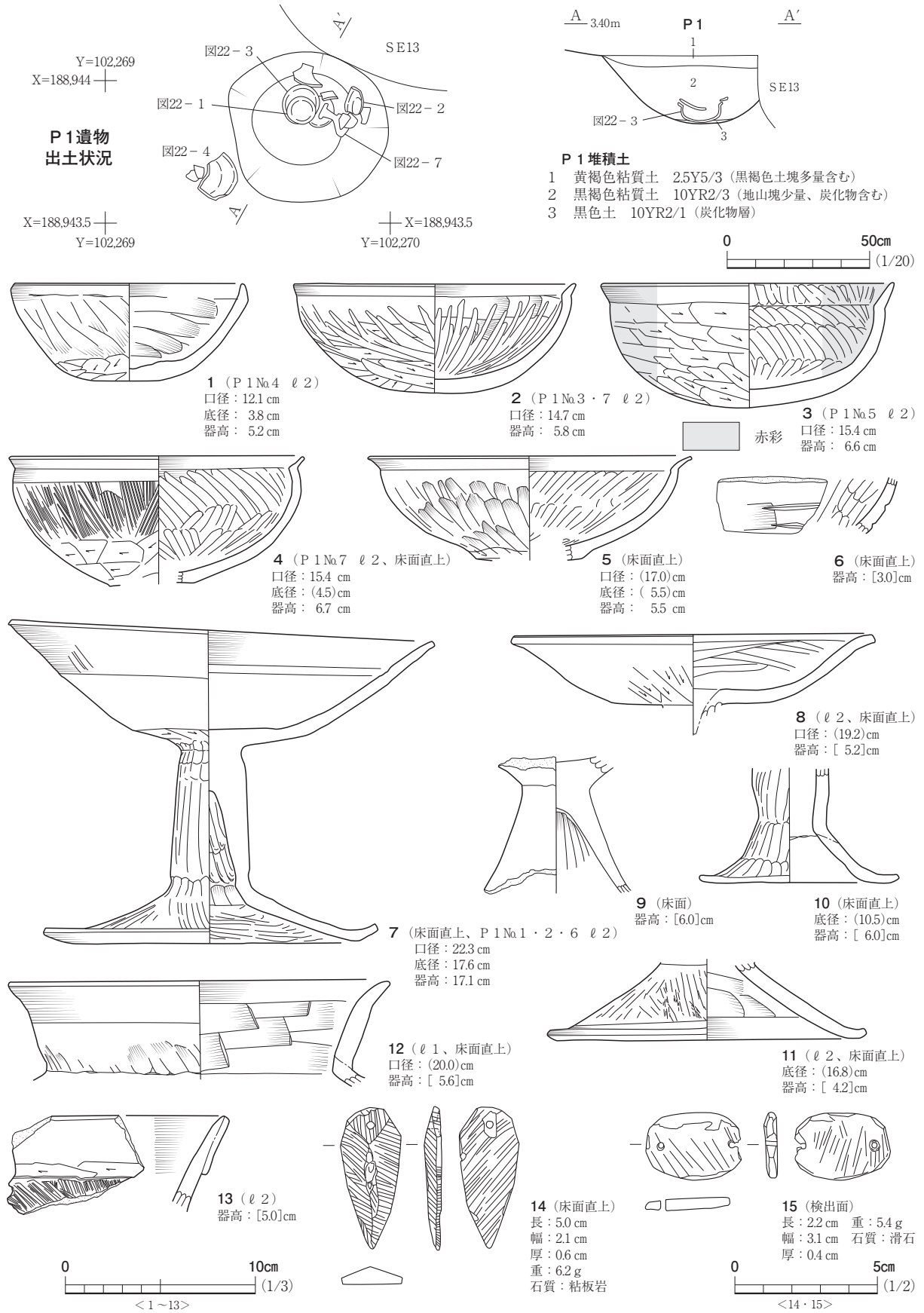


図22 3号住居跡・出土遺物

本住居跡内に炉跡は確認されず、本住居跡に伴う柱穴も特定することはできなかった。

遺物 (図22、写真68・72)

本住居跡からは完形品を含む土師器片が396点、石製品が4点出土した。土師器片は遺構内堆積土の2中から多く出土している。なお、土師器片の中には、内面黒色処理の土師器片が10点含まれたが、いずれも小片で、本住居跡に伴うものではなく、後世の攪乱で混入したものとみられる。

図22-1～6は土師器杯である。1は平底風の杯で、体部は外傾し、口縁部がわずかに直立する。外面の調整は、底部付近ヘラケズリ、体部ナデ、口縁部ヨコナデである。内面の調整は体部に横方向のナデが施され、口縁部はヨコナデである。2～5は内湾する体部と、頸部で屈曲して外傾する短い口縁部をもち、頸部内面に稜線が巡る器形の杯である。2と3は丸底の杯である。2の外面はヘラケズリ後にヘラミガキ、内面はヘラナデ後に放射状のヘラミガキが施され、口縁部は内外面ともにヨコナデ調整である。3の外面は横方向のヘラケズリがされ、内面は密にヘラミガキされている。また、内外面ともに赤彩されている。4と5は平底の杯である。4の外面は体部にハケメ調整され、体部下半はヘラケズリされている。内面は密にヘラミガキ調整され、内外面ともに口縁部はヨコナデである。5の口縁部は強く外反する。外面は縦方向のヘラナデ、内面はヘラミガキが施され、内外面ともに口縁部はヨコナデ調整されている。6は杯の破片で、外面に鋭利な工具で2本の沈線を刻んでいる。詳細な器形は不明だが、外面はヘラナデ、内面はヘラミガキの調整がされている。

図22-7～11は土師器高杯である。7の杯部は、口縁部に向かって直線的に逆「ハ」の字に開く。脚部との接合部付近はヘラケズリで稜線が形成されている。中空の脚部は細く柱状で、裾は「ハ」の字に大きく広がり、先端部がわずかに反る。杯部と脚部の端部は面取りされている。杯部の器面調整は摩滅が進み不明瞭だが、ヨコナデの上にヘラミガキの痕跡がわずかに確認される。杯部内面の中位には、浅い沈線が横に引かれている。脚部の外面はヘラミガキ、内面はナデと幅の広いハケメ調整がされている。8は高杯の杯部で、底部からわずかに内湾し、口縁部でわずかに外反する。外面にはヘラケズリ、内面にはヘラミガキの調整が見られる。9～11は高杯の脚部である。9は脚部全体が直線的にハの字に開く器形である。外面の調整痕は摩滅しているが、内面はナデの痕跡がある。10は逆漏斗状を呈し、先端部がわずかに反る。外面はヘラミガキされているが、内面の調整は不明瞭である。11も逆漏斗状を呈していたとみられ、裾が直線的に「ハ」の字に開く。外面はハケメの後にヘラミガキ、内面はヘラナデの後にヨコナデ調整されている。

図22-12・13は土師器甕の口縁部である。12は頸部で屈曲し、口縁部に向かって外傾する。外面は頸部にナデの痕跡が残り、口縁部付近はヨコナデされている。内面は横方向のヘラナデとヨコナデ調整している。13は複合口縁である。破片のため口径は復元できなかったが、かなり大きくなるとみられるため甕とした。口縁部上半は、内外面ともにヨコナデした後、外面のみヘラケズリで厚みを調整している。口縁部下半は、外面に縦方向のハケメを施している。

図22-14・15は石製模造品である。14は剣形で、頭部中央に直径2mmの貫通孔が1個穿たれている。断面形は三角形に近い五角形を呈する。表面は研磨によりY字の稜線が作られている。裏面

は平らに研磨され、側面も面取りされている。石質は粘板岩である。15は楕円形の有孔円板で、2個の貫通孔が長軸の縁辺に近い位置に開けられている。表裏ともに平らに研磨されており、側面も面取りされている。石質は滑石である。

まとめ

本住居跡は一辺が南北4.6m、東西4.9mのやや小型の竪穴住居跡である。1・2・4～6号住居跡とは異なり、本住居跡のみ中軸線方向が東に傾いている。また、床面直上からは炭化材が出土し、火災住居とみられる。この2点が他の5軒の竪穴住居跡との違いであるが、遺物の年代は他の竪穴住居跡と変わらないため、他5軒と近い時期に営まれたとみられる。本住居跡の所属時期は、古墳時代中期に所属すると考えられる。(菅野)

4号住居跡 S I 04

遺構 (図23、写真17・18)

本住居跡は調査区中央やや南側のC7グリッドに位置し、LⅢ上面で検出された。南西2m程に3号住居跡、南方3m程に5号住居跡が近接する。遺存状態は悪く、本住居跡のほぼ全体が中・近世主体と考えられる小穴によって壊されている。39号土坑、9号井戸跡とも重複しており、いずれよりも本住居跡が古い。南西隅は攪乱により壊されている。

平面形は方形を呈する。南北の中軸線方向はN25°Wで、やや西に傾く。2・5・6号住居跡とほぼ同じ中軸線方向である。規模は中軸線で南北長5.6m、東西長5.8mである。検出面から床面までの深さは4～8cmで、壁の立ち上がりは緩やかである。床面は平坦で、貼床がされている。貼床土除去後の掘形の底面も平坦である。

住居跡内堆積土は2層である。ℓ1は黒褐色土で、自然堆積とみられる。ℓ2は貼床土で、地山塊を多く含み、しまりがある。

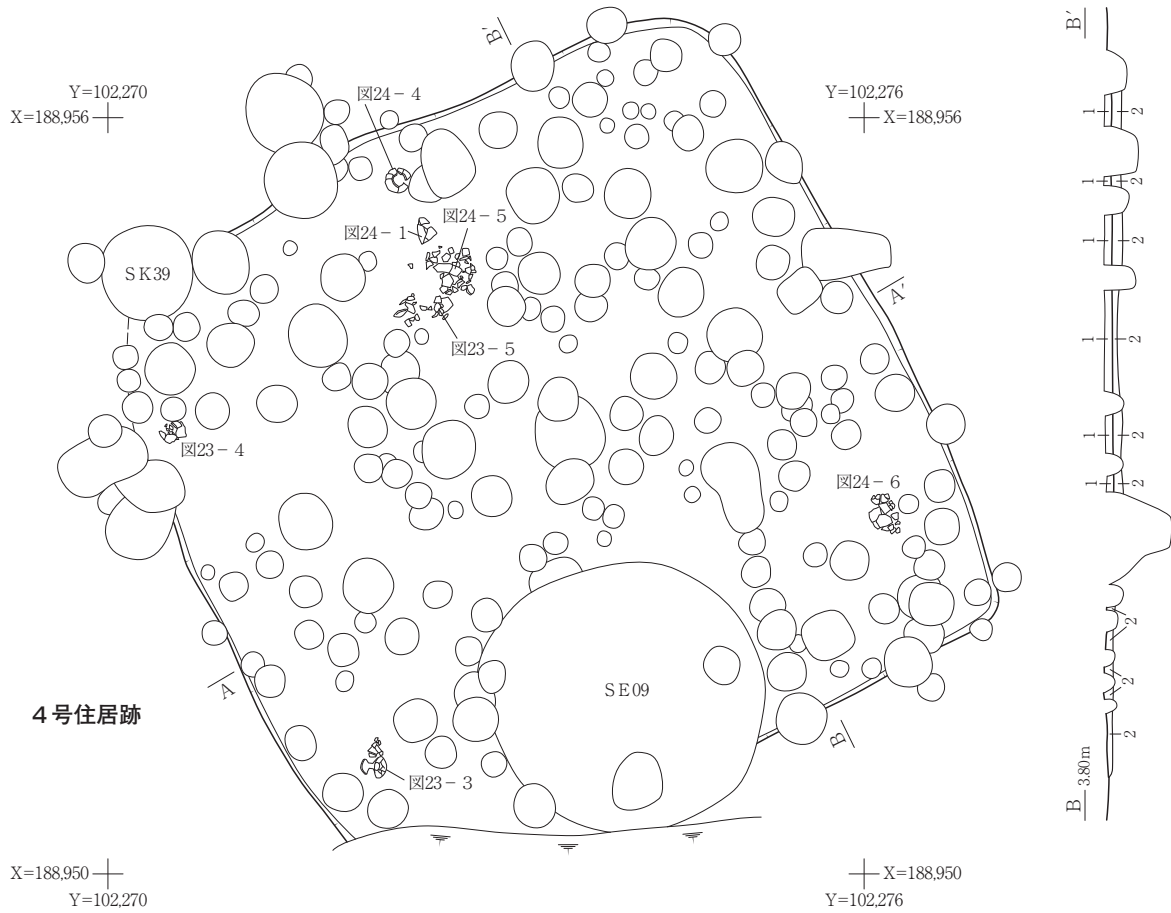
炉跡・貯蔵穴などの住居内施設は確認されなかった。本住居跡に重複する新しい遺構によって失われたとみられる。柱穴についても本住居跡に伴うもの特定には至らなかった。

遺物 (図23・24、写真69・70・93)

本住居跡からは土師器片1,058点、須恵器片1点、陶器片1点、土製品1点が出土した。須恵器片・陶器片・土製品は、後世の攪乱により混入したものとみられる。土師器片の多くはℓ1から出土している。

図23-1・2は土師器杯である。1は平底で、体部がわずかに内湾し、口縁部は垂直気味に立ち上がる。外面は摩滅が激しいが、体部下半にヘラケズリ、口縁部にヨコナデ調整が見られる。内面は体部にミガキの痕跡がわずかに残り、口縁部はヨコナデ調整である。2の体部は内湾し、頸部で屈曲して口縁部が短く外傾する。頸部内面には稜線が巡る。調整は内外面ともに摩滅が激しく、口縁部のヨコナデのみ確認された。

図23-3～5は土師器高杯である。3は本住居跡内の南西隅から横倒しの状態で出土した。杯



4号住居跡堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/2
(炭化物粒・地山粒少量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4
(地山塊多量、鉄分粒含む。貼床)

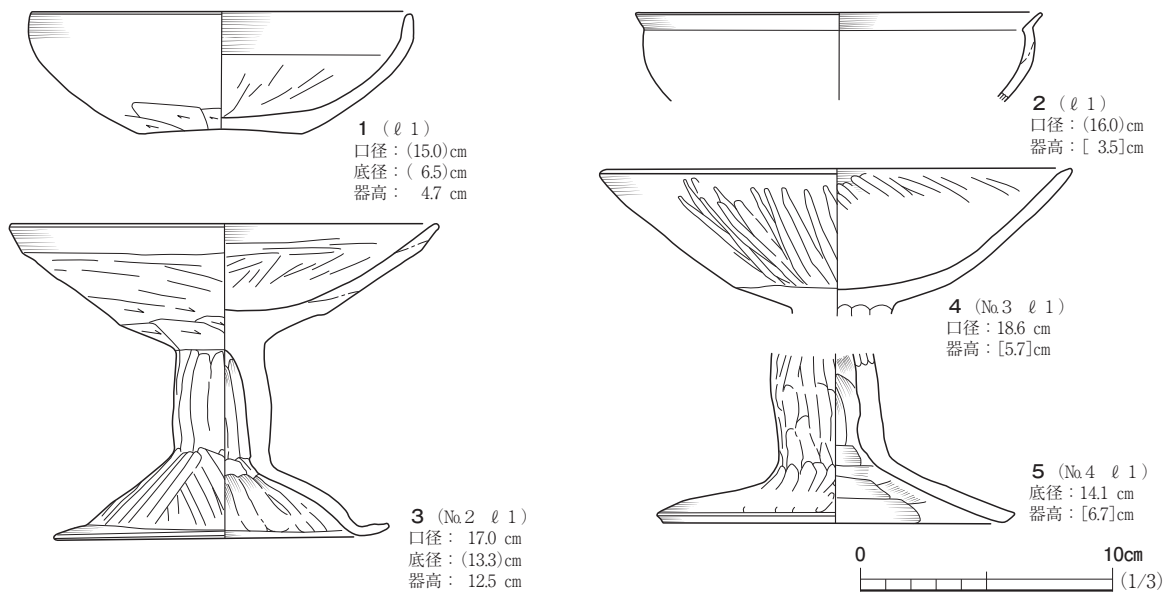
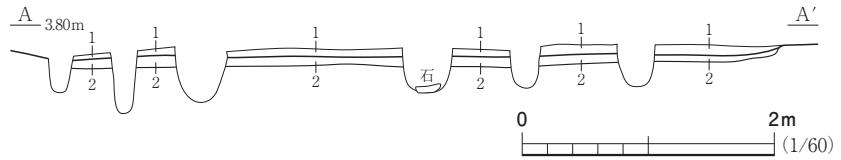


图23 4号住居跡・出土遺物

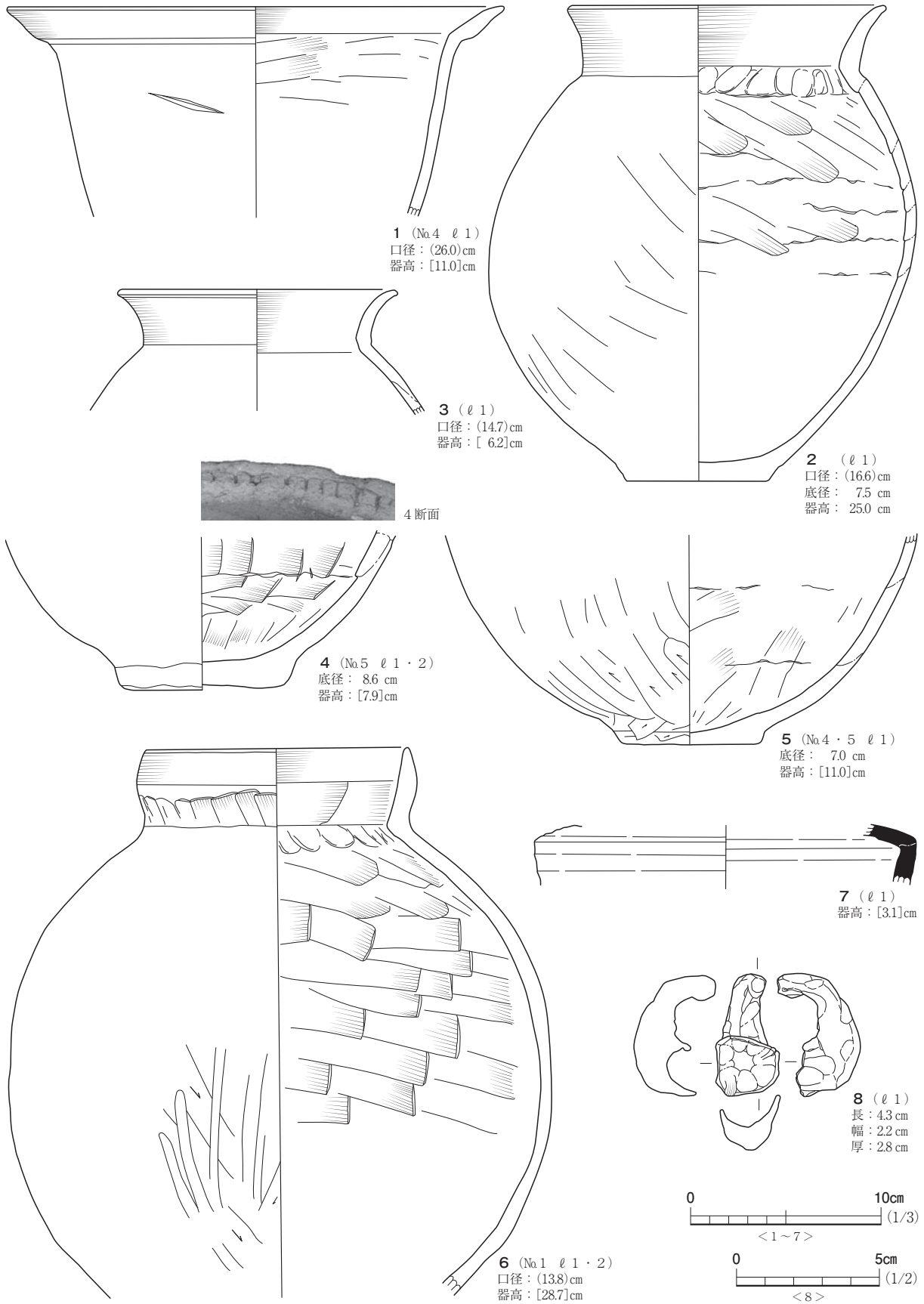


図24 4号住居跡出土遺物

部は大きく「ハ」の字に開き、脚柱部は中空でやや中膨らみであり、脚裾部はわずかに内湾するように開いて先端部が反る。杯部の調整は、外面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラミガキ、脚部との接合付近はヘラケズリ、内面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラミガキである。脚部の調整は、外面がヘラミガキとヨコナデ、内面はナデとヨコナデである。4は高杯の杯部で、本住居跡内の北西隅から出土した。口縁部に向かって直線的に外傾し、内外面ともにヨコナデとヘラミガキ調整が確認された。5は高杯の脚部である。中空の脚柱部は柱状で、直立せずにやや傾斜している。脚裾部は直線的に開く。外面はヘラミガキとヨコナデ、内面はナデ調整である。

図24-1は土師器鉢である。体部は直線的に外傾し、頸部で屈曲して、口縁部はさらに外傾する。口縁部の外面下端には稜が巡っている。外面の調整は口縁部のヨコナデのみが認められ、体部には工具による線刻が1本存在する。内面は口縁部のヨコナデと体部に横方向のナデが確認できる。

図24-2～5は土師器甕である。2の体部は球胴で、頸部で屈曲し口縁部はやや外反する。器形は大きくゆがんでいて、体部の最大径は22cmを測る。外面はヘラケズリ調整だが、ほとんど摩滅している。内面の調整は、体部に粘土積上痕を消すようなナデと、口縁部を接合した時のユビオサエが残る。口縁部は内外面ともにヨコナデである。3は口縁部で、2と同様に球状の体部に外反する口縁部が付く。器面の摩滅が激しく、調整は内外面ともに口縁部のヨコナデのみ確認された。4と5は体部下半から底部で、どちらも球胴と推測され、底面が被熱して赤く変色している。4の外面は被熱で荒れて調整は不明だが、内面には粘土積上痕と、それを抑えるようにヘラナデの痕跡が見られる。また、製作時の粘土を積み上げていく過程で、粘土の接着を強めるために細かい切り込みを入れていることが破断面から観察された(図24-4断面)。5の外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの痕跡がみられた。

図24-6は土師器壺である。本住居跡内の南東隅付近で、横に倒れた状態で出土した。球状の体部に直立気味の口縁部が付く。口縁部外面の中央はやや膨らむように湾曲している。口縁部の調整は、内外面ともにヨコナデだが、外面の下半は縦方向のヘラナデが施される。体部の調整は、外面はヘラケズリ後にヘラミガキした痕跡がわずかに確認され、内面は横方向のヘラナデで、頸部付近にはユビオサエ痕が残る。

図24-7は須恵器長頸瓶の肩部である。ロクロ成形で、肩が張る器形となっている。外面上部には自然釉が掛かっている。図24-8は匙形の土製模造品である。

まとめ

本住居跡は長さが南北長5.6m、東西長5.8mの竪穴住居跡である。南北の中軸線方向の傾きが2・5・6号住居跡とほぼ同じであることから、これらの住居跡と同時期の遺構の可能性がある。遺存状態が悪く、住居内の付属施設については確認されなかったが、他の住居跡と同様に炉跡や貯蔵穴があったものと考えられる。遺物は底面に散在的に存在し、完形のものはないが、図24-1や6のように他の住居跡にはみられない器形の遺物が出土していることが特徴的である。出土遺物からも、本住居跡は古墳時代中期に所属すると考えられる。(菅野)

5号住居跡 S I 05

遺 構 (図25、写真19・20)

本住居跡は調査区中央部の南端、C 8グリッドに位置し、L III上面で検出した。より新しい時期の遺構や現代の圃場整備時の攪乱によって大きく壊され、遺存状態は悪い。検出できたのは、北壁の一部と住居跡南西隅周辺だけである。8号井戸跡及び34号土坑と重複し、本住居跡が古い。この他、多数検出されている小穴についても、その大半は中世以降のもので、本住居跡より新しいものと考えている。

遺存部から、平面形は方形を基調とすると推定され、西壁の軸線方向はN 20° Wである。規模は南北長4.6mである。東西の規模については、北壁の遺存部の長さと同様に東側では、本住居跡の痕跡が確認できなかったことを考え合わせ、5m程と推定している。住居跡内の堆積土は5層に区分した。ℓ 1～3は住居廃絶時の埋め土、ℓ 4は壁溝の堆積土、ℓ 5は貼床土である。

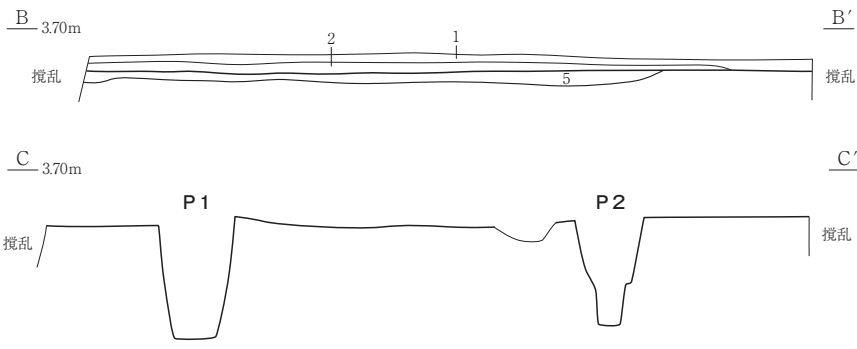
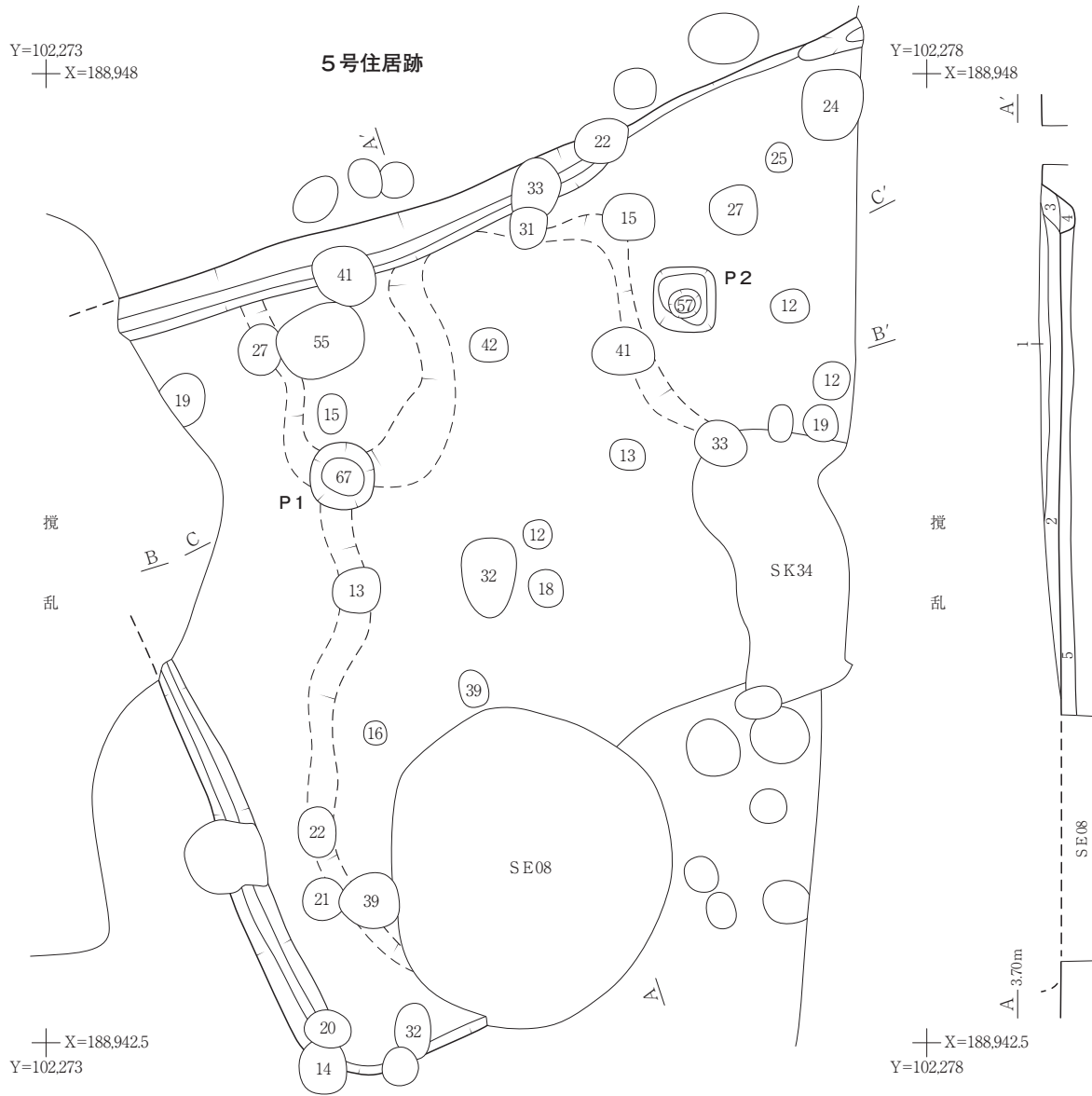
住居施設は壁溝を確認した。壁溝は北・西壁際に認められ、北壁の壁溝は東側で1.2m程途切れている。幅は20～30cmで、床面からの深さは北壁際の途切れ部付近が最も浅く2cm、他は7～12cmである。この他、住居跡内からは40基程の小穴を検出したが、その多くは堆積土ℓ 1・2上面から検出されていることから、その多くは本住居跡に伴わないものと判断した。これらについては、図中に上端線だけを示し、床面からの深さを表記した。これらの中で、P 1内からは、図26-4に示す柱材が出土した。これは角を面取り状に加工した角材で、表面に手斧痕を残すなど、2号住居跡から出土した柱材と共通する特徴が認められる。P 1については、ℓ 1上面から検出しているものの、検出時と掘り上がった時点で形が相違していることから、ℓ 1上面で検出した範囲はP 1とかかわらないものであった可能性がある。柱材の特徴と床面からの深さも他に比べ深いことからP 1を本住居跡に伴う柱穴、また、これとほぼ同じ規模のP 2についても、本住居跡の柱穴と考えておきたい。P 1とP 2を結んだ線は住居跡北壁とほぼ並行し、両柱穴の間隔は2.2mである。貼床は住居西半部に認められ、その範囲を図中に破線で示した。

遺 物 (図26、写真95)

本住居跡からは土師器片38点、石器剥片1点、鉄滓1点、木製品1点が出土した。土師器の中には、ハケメ調整のある甕の破片が2点含まれている。

図26-1はミニチュア土器の高杯脚部と考えられる。丁寧に作られ、外面はヘラケズリで調整されている。図26-2は高杯の脚部である。下半がやや膨らむが、円筒形を呈し、中空である。外面は丁寧なヘラケズリ、内面はヘラによる搔き取りである。

図26-3は椀形滓である。図26-4はP 1から出土した柱材で、角を面取り状に加工した長方形の角材が用いられている。表面中央と裏面には手斧の刃先痕が明瞭に残り、その状態から表面を抉るように刃先を急角度で材に当てたものと考えられる。この両脇の面では、刃先の痕跡がほとんど確認できない。



5号住居跡堆積土

- 1 暗褐色粘質土 10YR3/3 (炭化物・オリーブ褐色砂質粘土塊少量含む)
- 2 オリーブ褐色土 2.5Y4/3 (砂質粘土塊多量、暗褐色土塊少量含む)
- 3 にぶい黄色土 2.5Y6/3 (暗褐色土塊少量含む)
- 4 黒褐色土 2.5Y3/1 (地山塊含む)
- 5 黒褐色土 10YR3/2 (地山塊多量、地山粒・赤褐色土粒少量含む。しまりあり。貼床)

※小穴内の数字は、床面からの深さを示す。

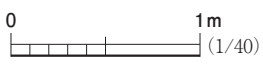


図25 5号住居跡

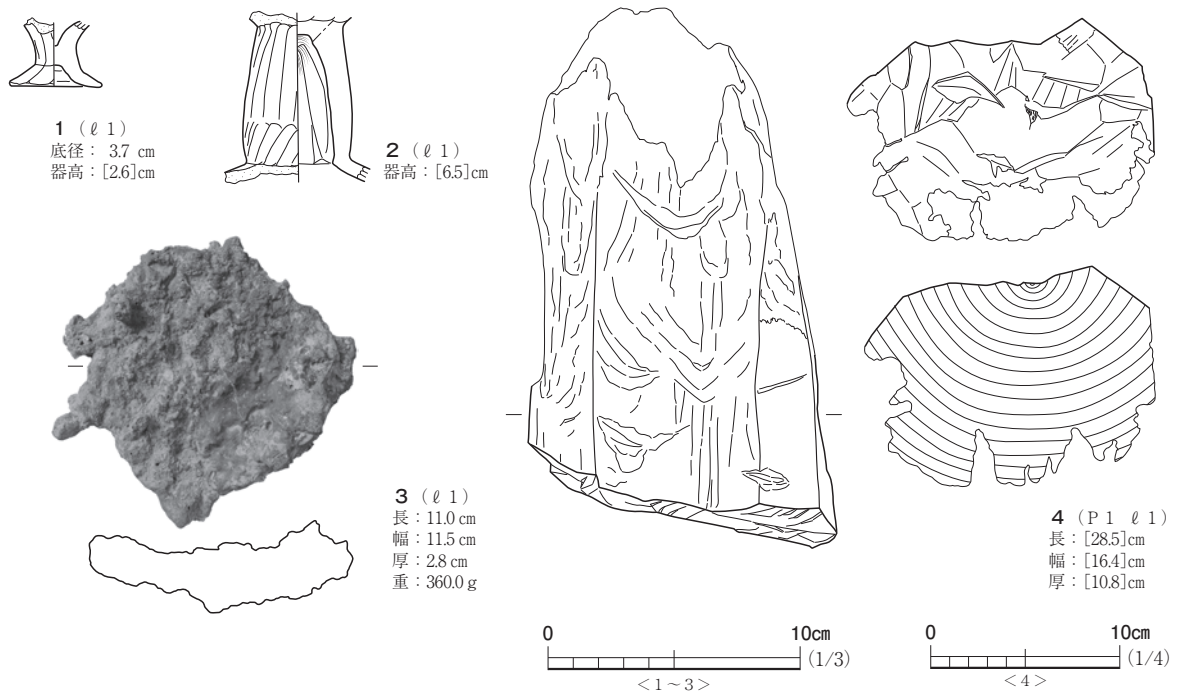


図26 5号住居跡出土遺物

まとめ

本住居跡については、遺存状態が悪いものの、遺存部から南北4.6m、東西5m程の竪穴住居跡と考えている。柱穴については、P1・2を考えている。P1内からは角材を用いた柱材が出土している。炉や貯蔵穴などの施設は確認できなかった。本住居跡の時期については、出土土器から古墳時代中期と考えている。(松 本)

6号住居跡 S I 06

遺 構 (図27、写真21・22)

本住居跡は調査区内中央の西端、B5グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢ上面である。遺構の残りは悪く、遺構の北側は攪乱によって、東側は1号溝跡によって大きく壊されている。また、平面的にも削平されているらしく、検出段階で確認できたのは壁溝と考えられるL字状に広がる黒色土の範囲と、炉跡と考えられる焼土の広がりであった。1号溝跡及び2号建物跡P1と重複し、本住居跡が古い。この他、多数検出されている小穴についても、その大半は中世以降のものと考えている。

遺存状態が悪く全体像は不明であるが、検出できた南・西壁の状態から、平面形は方形を基調とするものと考えている。西壁の軸線方向はN15°Wで、現況で南壁は3.5m、西壁は1.5m程確認した。住居跡内の堆積土として確認できたのは、南壁際に造られた壁溝・貯蔵穴の堆積土だけで、ここにはオリーブ黒色土が堆積していた。貼床の厚さは5cm程で、オリーブ黒色土塊を多量に含むにぶい黄橙色土である。

住居施設は炉跡、貯蔵穴(P1)、壁溝を確認した。

炉跡は住居東側に位置している。床面が焼土化しただけの地床炉で、確認できた焼土の範囲は12×25cmで、東半部は焼土化が著しかった。

P 1は貯蔵穴で、北西隅に作られている。平面形は隅丸方形を基調とし、規模は一辺70cm、床面からの深さは33cmである。堆積土は3層に区分した、ℓ 1・2が自然堆積土、ℓ 3は人為堆積土と考えている。

壁溝は南隅と南西隅に認められ、貯蔵穴(P 1)をL字状に囲んでいる。幅は東半が15cm、西半は幅が広がり、最も広い部分で50cm程、床面からの深さは4cm程である。住居内からは20基を超える小穴を検出したが、いずれも浅く、配置に規則性も認められないことから、支柱穴と考えることは難しい。

遺物 (図27、写真71)

本住居跡から土師器片が95点出土した。ほとんどが接合可能で、図27に示す7点の遺物に復元された。その他は微細な小片で、内黒の土師器片1点とハケメ調整のある破片1点が含まれていた。

図27-1～6の土師器杯は、貯蔵穴の周辺や貯蔵穴内にずり落ちたような状態で出土した。1～6は体部に丸みを有する杯で、2～6の口縁部は短く外反するが、1は口縁部と体部の区分が不明瞭である。器面外面はヘラケズリがミガキのように入っており、同内面はヘラケズリ後にナデやミガキで丁寧に調整されている。2の内面底部付近の表面は薄く剝落し、3・5は火を受け器面が荒れている。2の外面には、種子状の圧痕が見られる。

図27-7は高杯の杯部で、断面形は逆台形状をなし、炉跡の東端から5cm程離れた床面から出土した。出土状態から、杯部だけが正立の状態で置かれ、それが土圧で潰されたものと考えている。

まとめ

本住居跡については遺存状態が悪く、規模を知ることはできなかった。遺存部には柱穴が無いこと、炉跡が極めて小さいことを考え合わせると、比較的小型の住居跡であったものと考えられる。図27-7の高杯の杯部はその出土状態から、住居跡の廃棄に伴い置かれたものであろう。本住居跡の時期については、出土土器から古墳時代中期と考えている。(松 本)

第3節 掘立柱建物跡

調査区内からは掘立柱建物跡を4棟検出した。すべて、南北3間、東西2間の掘立柱建物跡であったと推測され、1・2号建物跡の軸線方向はほぼ真北方向、3・4号建物跡の軸線方向は真北からやや西に傾いている。1・2号建物跡についてはその配置に規則性が認められ、東側柱列で見ると、規模もほぼ同じである。柱穴の掘形の平面形は方形を基調とするものの、長方形や不整形のものも見られ、一定しない。柱穴の掘形の規格性に乏しいのが、本遺跡から検出された掘立柱建物跡の特徴である。また、締まりの弱い軟弱地盤に建てられていることから、柱の沈み込みを防止するためか、柱の下に礎板を敷いているものが多い。

1号建物跡 SB01

遺 構 (図28、写真23～25)

本遺構は調査区南側の西端、A6・7、B6・7グリッドに位置する南北3間、東西2間の掘立柱建物跡である。表土下に堆積するLⅢ上面で検出した。遺存状態は悪いが、現代の圃場整備により削平された建物跡西側からも柱の据形が確認され、攪乱により失われた柱穴1基を除き、その全容を知ることができた。調査当初、各柱穴の平面形が不揃いであったため、掘立柱建物跡と気付かず、それぞれを別々の土坑として調査した。このため、柱痕を平面的に確認することはできなかったが、柱の据形や礎板から柱の位置を推定できるものが多い。東側柱列は、北に7m程離れて作られた2号建物跡の東側柱列の延長線上に位置している。他の遺構との重複関係は、P9は4号溝跡より新しい。

西側柱列の据形の軸線方向はほぼ南北を指し、P5-P8間の長さは約7.2mで、各柱間は北から2.4・2.6・2.2mである。南側柱列のP3-P5間の長さは4.4mで、各柱間は東から2.3・2.1mである。

柱穴の掘形の平面形は方形を基調とし、P1・3・9は長方形、P4は楕円形を呈している。規模は最も大きなP3で長さ1.2m、最も小さなP6で30cmである。深さは現況で10～70cm、底面の標高は最も低いP4が2.6m、最も高いP1が2.9mである。断面形は逆台形状をなし、P1・4・9の底面には長軸の長さが20～30cm程の柱の据形が認められ、P3の底面には礎板が据えられていた。柱穴内には最上層を除き、人為堆積を示す基盤土と黒色土の混土が堆積し、P4のℓ2は堆積状態と土質から柱痕と考えられ、柱を抜いて埋めたことがわかる。

遺 物 (図32、写真76)

本遺構の柱穴から土師器片が散在した状態で158点、P3から礎板が出土した。土師器片の中では甕の破片が136点と最も多く、その内、ハケメを残すものが23点ある。杯は全て非ロクロ成形・内面黒色処理のもので、他の器種も含めてロクロを使って作られたものはなかった。

P3の底面から出土した礎板を図32-6に示す。礎板自体は異なる2枚の板材が並べられていたが、1枚は腐食が著しく図示できなかった。この板は割板状の木片で、全面が腐食面で、大きさは長さ41cm、幅10cm程、厚さ3cm程であった。表面全面が調整面、裏面全面は腐食面である。調整面の状態から、元々は厚さ3cm以上の板であったと考えられる。先端部は手斧により削られ、わずかに緩く窪んでいる。観察できた手斧痕で最も幅が広いものは約5cmである。

ま と め

本遺構は南北を軸線方向とする3×2間の南北棟の掘立柱建物跡である。東側柱列が2号建物跡の東側柱列の延長線上に位置することから、本遺構は2号建物跡と同時に機能していたものと考えている。本遺構は古墳時代後期の土師器片が含まれることから、古墳時代後期以降の所産と考えている。

(松 本)

2号建物跡 SB02

遺 構 (図29、写真26・27)

本遺構は調査区中央の西端、A6、B5・6グリッドに位置し、表土下に堆積するLⅢ上面で検出した。遺存状態は悪く、建物跡西側はすでに削平され、検出できたのは東側柱列の3間分と南側柱列の1間分である。調査当初、各柱穴の平面形が不揃いであったため、掘立柱建物跡と気付かず、それぞれを別々の土坑として調査した。このため、柱痕を平面的に確認することはできなかった。東側柱列は1号建物跡の東側柱列の延長線上に位置している。6号住居跡、23号土坑と重複し、P1が6号住居跡より新しく、P2は23号土坑より古い。

東側柱列はP1～4で構成され、軸線はほぼ南北方向を指す。規模は柱穴の芯々で、P1～P4間が約7.1m、各柱穴の間隔は約2.35mである。南側柱列のP4～P5間は芯々で約2.8mである。柱穴の平面形は一定せず、不整な方形を基調とするものの、P2は円形、P4は長方形を呈している。柱穴の規模は長さ90～145cmで、深さは現況で30～40cmを測り、底面の標高には20cm程の差がある。断面形は台形状や皿状で、P1やP5では底面に段差が認められる。柱穴内には基盤土と黒色土の混土が堆積するものが多い。

遺 物 (図32)

本遺構からは、土師器片297点、須恵器片1点が散在した状態で出土した。土師器の中では、甕片が258点と最も多く、その中でハケメの認められるものは29点である。杯は12点出土し、図32-1の他は非ロクロ成形、内面黒色処理の杯である。出土した土師器にロクロを使って作られたものは認められない。

図32-1は体部が丸く、口縁部が短く外反し、口縁部内面に稜を有する土師器の杯である。全体の50%程が遺存する。器面の調整は、底部が手持ちヘラケズリ、口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部は内外面ともにヘラミガキが加えられている。

図32-2は無底の土師器甌で、全体の40%程が遺存した。口縁部が外反し、体部はわずかに膨らみ、底部が窄まる。器面の調整は、体部では外面がヘラケズリ後にヘラミガキ、内面がヘラケズリ後にヘラミガキであり、口縁部は内外面ともにヨコナデされている。図32-3は須恵器蓋の破片で、外面下半部には短く鋭い稜が巡っている。天井部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

ま と め

本遺構は南北を軸線方向とする南北棟の掘立柱建物跡と推測され、平面形や断面形に統一性がない柱穴で構成されており、堆積土からも柱を抜いて廃絶したとみられる。東側柱列は南に7m程離れた位置に作られた1号建物跡の東側柱列の延長線上に位置することから、この2軒は1セットをなすものと考えている。出土した土師器の中に古墳時代中期の土師器杯が1点含まれているが、他はすべて古墳時代後期のものである。ロクロが使用されたものも見られないことから、本遺構は古墳時代後期以降の所産と考えている。

(松 本)

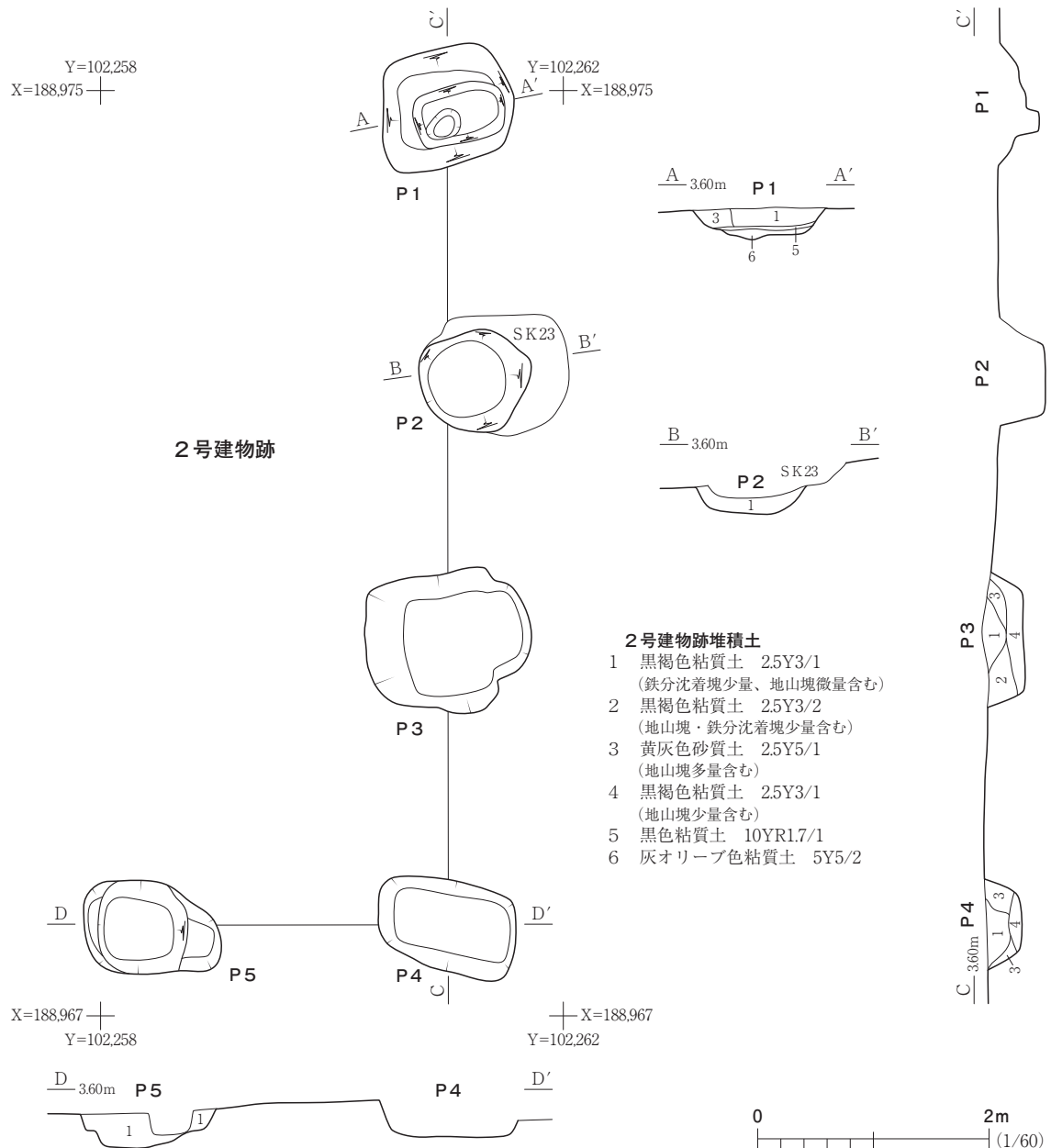


図29 2号建物跡

3号建物跡 S B 03

遺 構 (図30、写真28～30)

本遺構は調査区北西端、B 2・3、C 2・3グリッドに位置する掘立柱建物跡で、P 1～3は表土下に堆積するLⅢ上面、P 4は削平部の底面で検出した。削平のため遺存状態は悪く、確認できたのはL字状に配された4基の柱穴だけである。

東側柱列の軸線方向はN 3°Wで、4号建物跡の軸線方向の傾きとほぼ一致する。規模は現状で東側柱列のP 2 - P 1 - P 4間がそれぞれ2.5・2.4m、南側柱列のP 2 - P 3間は2.5mである。柱穴の平面形はP 1～3が整った長方形を基調とし、規模は最も大きなP 2で長辺1.3m、

短辺85cm、P 4は方形で一辺60cmである。P 4以外の深さは現況で40～70cm、底面の標高は最も低いP 4が2.8m、他は3m程である。断面形は箱状で、P 1～3の底面には礎板が据えられていた。柱穴内堆積土 ℓ 1・2は柱痕である。P 4内に ℓ 2に近い土が堆積していたが、基盤土の小塊を含むことから人為堆積を示すものと考えている。

遺物 (図32・33、写真76)

本遺構からは土師器片34点、木製品5点が出土した。土師器片はいずれも小片で、柱穴内から散在して出土した。甕片は28点で、ハケメが見られるものが4点ある。杯片は4点出土し、1点が古墳時代中期、他は非ロクロ成形・内面黒色処理のものである。図化できるものはなかった。

木製品はすべて板材を再利用した礎板である。

図33-1はP 1の礎板で、表面中央には長さ16cm、幅6cm、深さ1.5cm程の楕円形の窪みが作られ、上下に弱い稜も走っている。側面には左右相対する位置に逆台形の抉りが作られている。この抉り部は調整加工されておらず、凸凹が著しい。上下は斧で切断されている。横断面の形状から、元々は樹皮を剥いで、多面体となった丸太材であったものを割り、板状にしたものを切断し、礎板として再利用したと考えられる。左面中央の窪みが元々の丸太に作られていたものか、礎板にする際に作られたものかの判断はできなかった。

図32-8、図33-3はP 2から出土した礎板で、並んで出土した。図32-8の表面と左側面の一部は手斧による加工面で、残りは腐食面である。手斧痕の幅は最大4.5cmである。左側縁部は図33-1と同じように抉られている。図33-3は表面の一部に手斧による加工面を残す板材で、その他は腐食面である。表面中央には、図33-1と同じ状態の抉りが認められる。裏面にも工具の刃先痕がわずかに見られる。

図32-7、図33-2はP 3から並んで出土した礎板である。図32-7は図33-1と同じ形態・作り方である。表面は割面で刃先痕がわずかに見られるだけで、大半は未加工である。裏面は手斧による加工面で、緩い稜が上下に走り、上部に柱の当たりかと考えられる円形の痕跡が見られる。手斧痕の幅は最大約4.5cmである。両側面には図33-1と同じ状態の抉りが認められる。図33-2は、長形状の板材で上下端は手斧で切断されている。表裏面とも割面で、表面には刃先痕がわずかに残る。右側面は手斧による加工面で、図33-1と同じ状態の抉りが見られる。

これらの礎板について、抉りが見られるなどの特徴があることから接合を試みたが、現状で接合するものはなかった。抉りについては、多くの礎板に確認できることから、元々の丸太材にあったものと考えている。

まとめ

本遺構は軸線方向が南北からやや西に傾く掘立柱建物跡であるが、遺存状態が悪く、全体の規模等については不明である。軸線の傾きから南東に13m程離れて存在する4号建物跡と関連する可能性がある。3基の柱穴底面には礎板が敷かれていた。土師器片は古墳時代後期のものが含まれる。以上のことから、本遺構の所属時期は奈良・平安時代の可能性が高いと考えている。(植松)

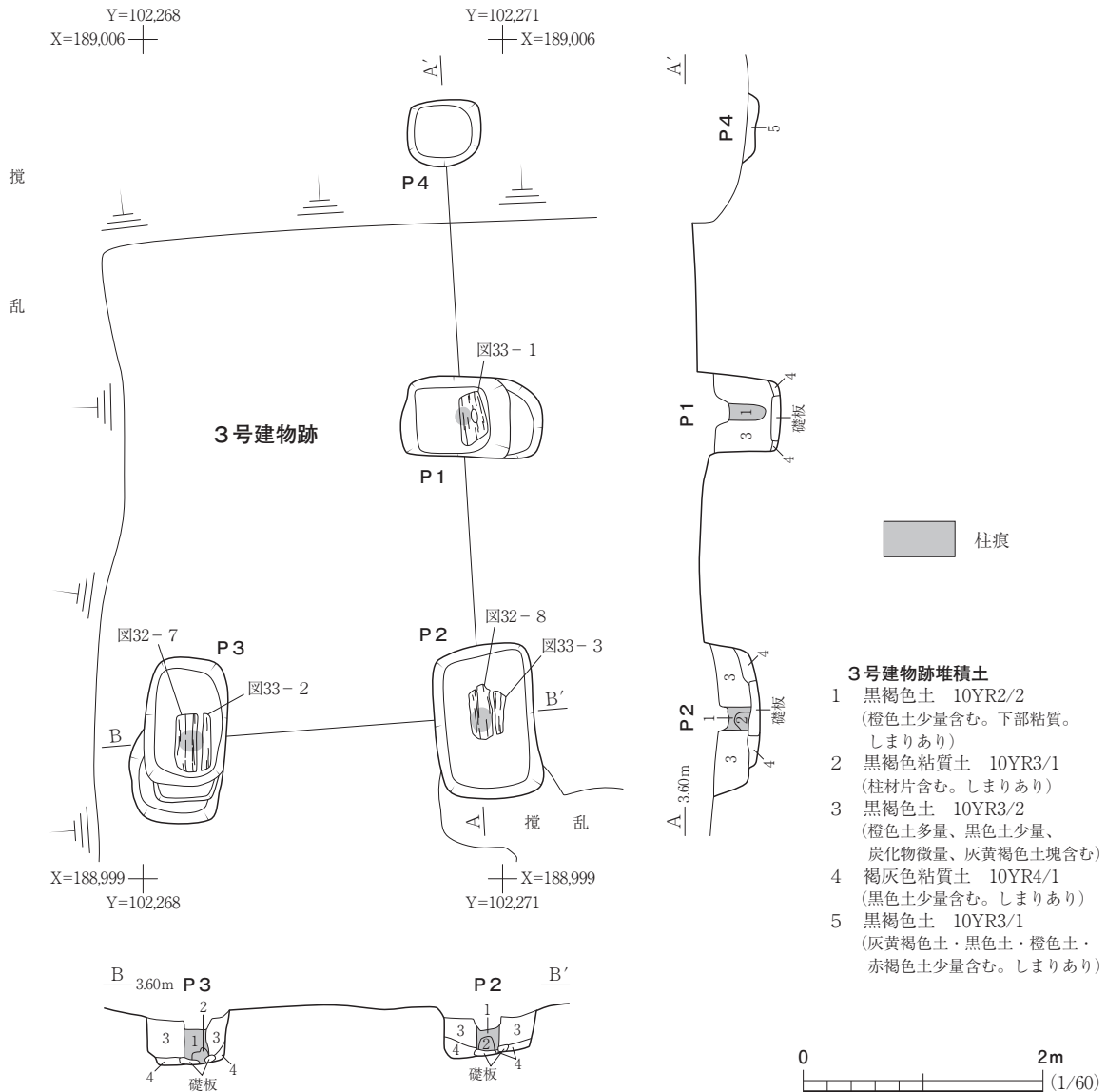


図30 3号建物跡

4号建物跡 S B 04

遺 構 (図31、写真31～33)

本遺構はC 4・5、D 4・5グリッドに位置する南北3間、東西2間の掘立柱建物跡である。検出面は東側柱列が褐色粗砂、西側柱列が灰オリーブ土のLⅢ上面、P 4・10は6号溝跡の底面である。遺存状態は良好で、すべての柱穴を確認することができた。調査当初、柱穴の平面形が不揃いであったため、掘立柱建物跡と気付かず、それぞれを別々の土坑として調査した。重複関係はP 3が6号溝跡より新しく、P 2は54号土坑より古い。

西側柱列の軸線方向はN 4°Wで、北西に13m程離れて作られている3号建物跡とほぼ同じである。規模は、柱穴の芯々間で東側柱列P 1 - P 4間が約8.3mで、各柱の間隔は北から2.6・3.0・2.7mである。西側柱列P 6 - P 9間は8.4mで、各柱間は北から2.8・2.7・2.9m、南側柱列P 4 - P 6

4号建物跡

P 1 堆積土

- 1 灰褐色土 7.5YR4/2 (地山塊・鉄分塊多量含む)
- 2 褐灰色土 7.5YR5/1 (地山塊少量含む)

P 2 堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3 (地山塊少量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/1

P 3 堆積土

- 1 オリーブ黒色砂質土 5Y2/2 (鉄分沈着、SD06堆積土含む)

P 4 堆積土

- 1 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (地山塊含む)
- 2 黒色土 10YR2/1 (炭化物粒微量含む)
- 3 にぶい黄褐色土 10YR5/3 (地山砂・SD06堆積土含む)

P 5 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (炭化物粒・焼土粒少量含む)
- 2 灰黄褐色砂質土 10YR4/2 (炭化物粒・地山砂微量含む)

P 6 堆積土

- 1 黒褐色土 5YR2/2 (地山粒少量含む)
- 2 黒褐色土 7.5YR3/2 (鉄分塊多量、地山粒少量含む)

P 7 堆積土

- 1 黒褐色土 7.5YR2/2 (地山粒少量、鉄分塊微量含む)
- 2 黒褐色土 7.5YR3/2 (地山粒少量、鉄分塊微量含む)
- 3 灰黄褐色土 10YR5/2 (地山粒多量、鉄分塊微量含む)

P 8 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2 (焼土粒・地山粒微量含む)
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2 (焼土粒多量、地山粒少量含む)
- 3 明褐色土 7.5YR5/8 (地山粒多量、焼土粒少量含む)
- 4 にぶい黄褐色土 10YR5/4 (焼土粒・地山粒多量含む)

P 9 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (鉄分塊少量、地山粒・炭化物粒微量含む)
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2 (地山粒多量、鉄分塊少量含む)
- 3 黒色土 10YR2/1 (地山粒・鉄分塊微量含む)
- 4 にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3 (鉄分塊多量、地山粒少量含む)
- 5 褐灰色砂質土 10YR4/1 (地山粒多量、鉄分塊微量含む)
- 6 黒色粘質土 10YR2/1 (地山粒・鉄分塊微量含む)

P 10 堆積土

- 1 黄褐色土 10YR5/6 (地山塊多量含む)
- 2 黒褐色粘質土 10YR3/1 (地山塊少量含む)
- 3 暗オリーブ灰色砂質土 2.5GY4/1
- 4 暗緑灰色砂質土 10GY4/1

間は5.1mで、各柱間は東から2.5・2.6m、北側柱列P 1 - P 9間は5.1mで、各柱間は東から2.4・2.7mである。

西側柱列では柱穴の平面形は方形を基調とし、規模は最も大きなP 8で一辺1.1m、最も小さなP 6は90×80cmである。東側柱列では円形を基調とするものが多い。深さは最も深いP 2が75cm、最も浅いP 5は39cmで、50～60cmの深さのものが多い。底面の標高は最も低いP 2が2.96m、最も高いP 5が3.3mである。P 2については礎板までの深さは50cmである。断面形は逆台形状をなし、P 2・8・10の底面には板状の礎板が据えられていた。P 10の礎板は底面のほぼ全面を覆い、その上に半裁した丸太2本を置いている。P 9の底面に堆積するP 6は礎板が土壌化したもので、柱痕のP 1～3から柱の太さは20cm程と考えられる。

遺 物 (図32～34、写真77)

本遺構からは土師器片203点、ミニチュア土器2点、須恵器片1点、木製品5点が出土した。土師器・須恵器片はすべて小片状態で、散在して出土している。土師器で主体を占めるものは甕で194点、その中に30点のハケメの付いた破片がある。9点の杯はすべて内面黒色処理されたもので、内2点は器面が薄くロクロを使用して作られた可能性がある。

図32-4は手捏ね土器、同図5は壺のミニチュア土器である。いずれもナデ調整が施され、4では指頭痕を残すものの、器面は平滑で、5にはわずかではあるが口縁部の立ち上りが認められる。

礎板には、多面体状の丸太を割った板材が使われている。このため、図33-4、図34-1・3の表面には上下に走る緩い稜が認められる。図33-4はP 2の礎板である。表面と側面は手斧による加工面、裏面は腐食面である。表面中央は柱の当たり痕跡であろうか、僅かではあるが円形に窪んでいる。上端は手斧で、下端は鋸により切断されている。図34-2はP 8の礎板で、表面は割面で一部に手斧痕も見られる。裏面は大半が腐食面であるが一部に割面が残っている。図33-5、図34-1・3はP 10の礎板で、図34-1は長さ70.7cm、幅37.2cm、厚さ10cmを測る。元々は多面体に加工された丸太で、直径は80cm以上と推定される。裏面は腐食面である。上下端は手斧で切断されている。図34-3は1と並んで出土し、1と同じく多面体の丸太を割った板材が使わ

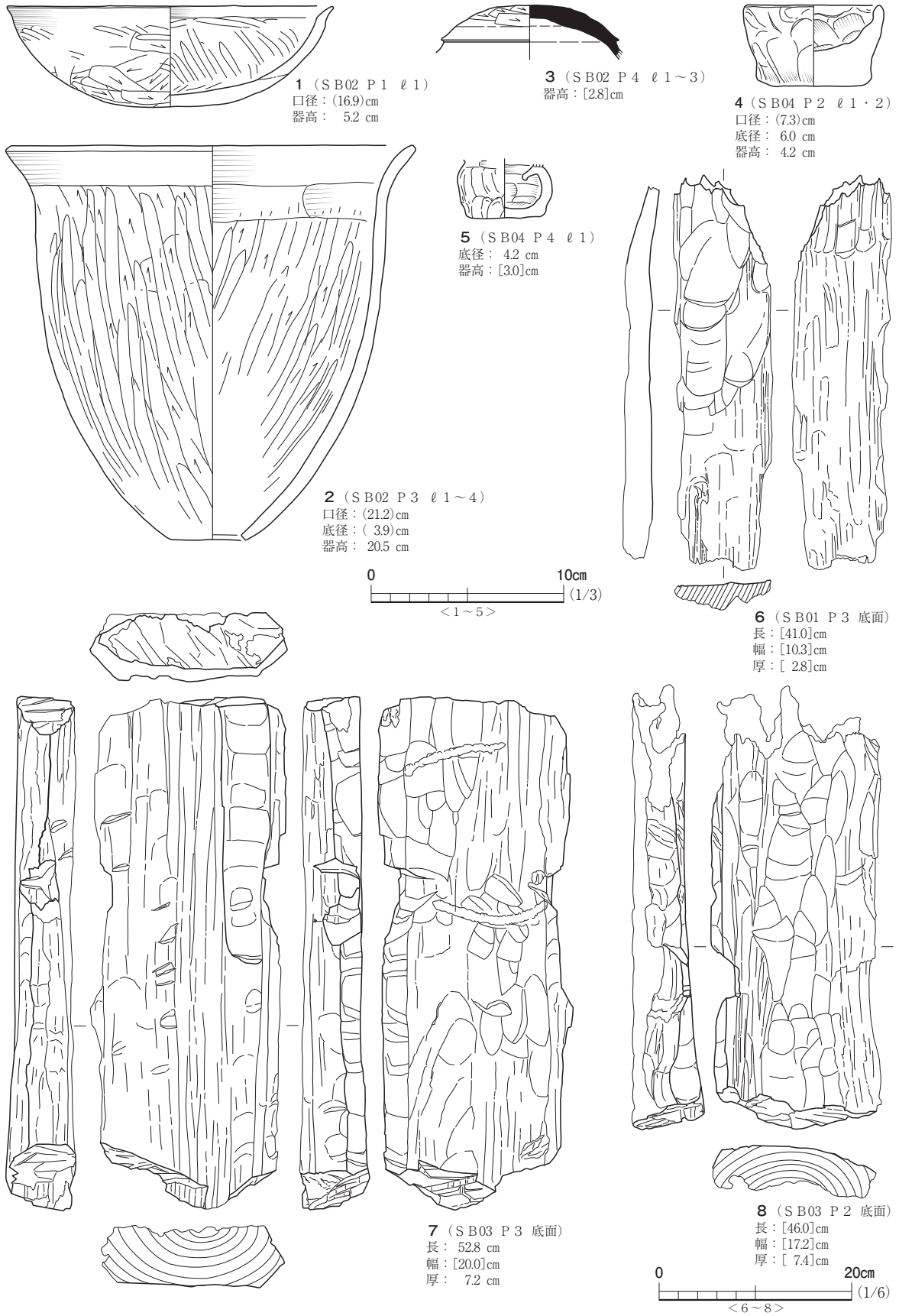


图32 掘立柱建物跡出土遺物 (1)

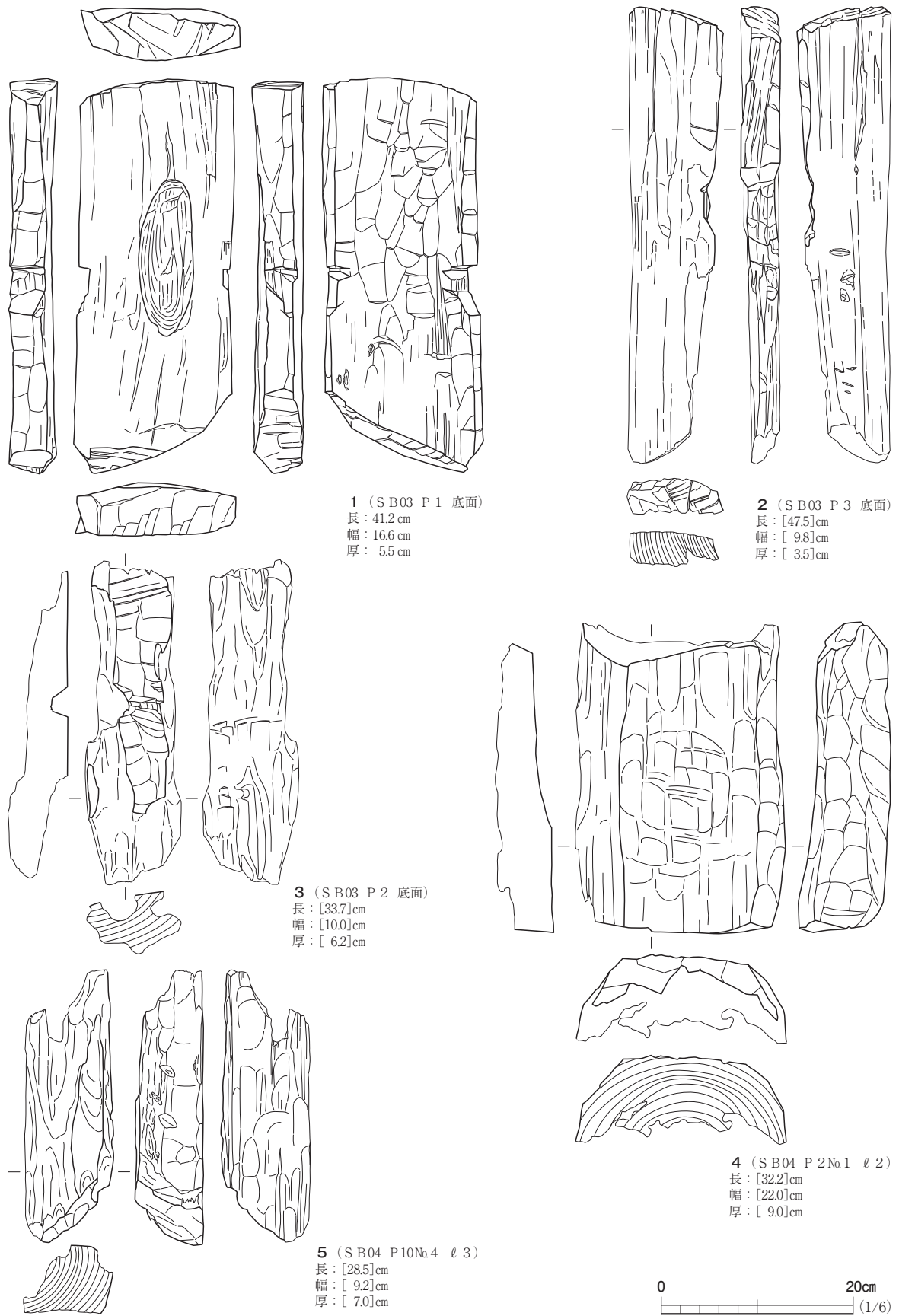


図33 掘立柱建物跡出土遺物 (2)

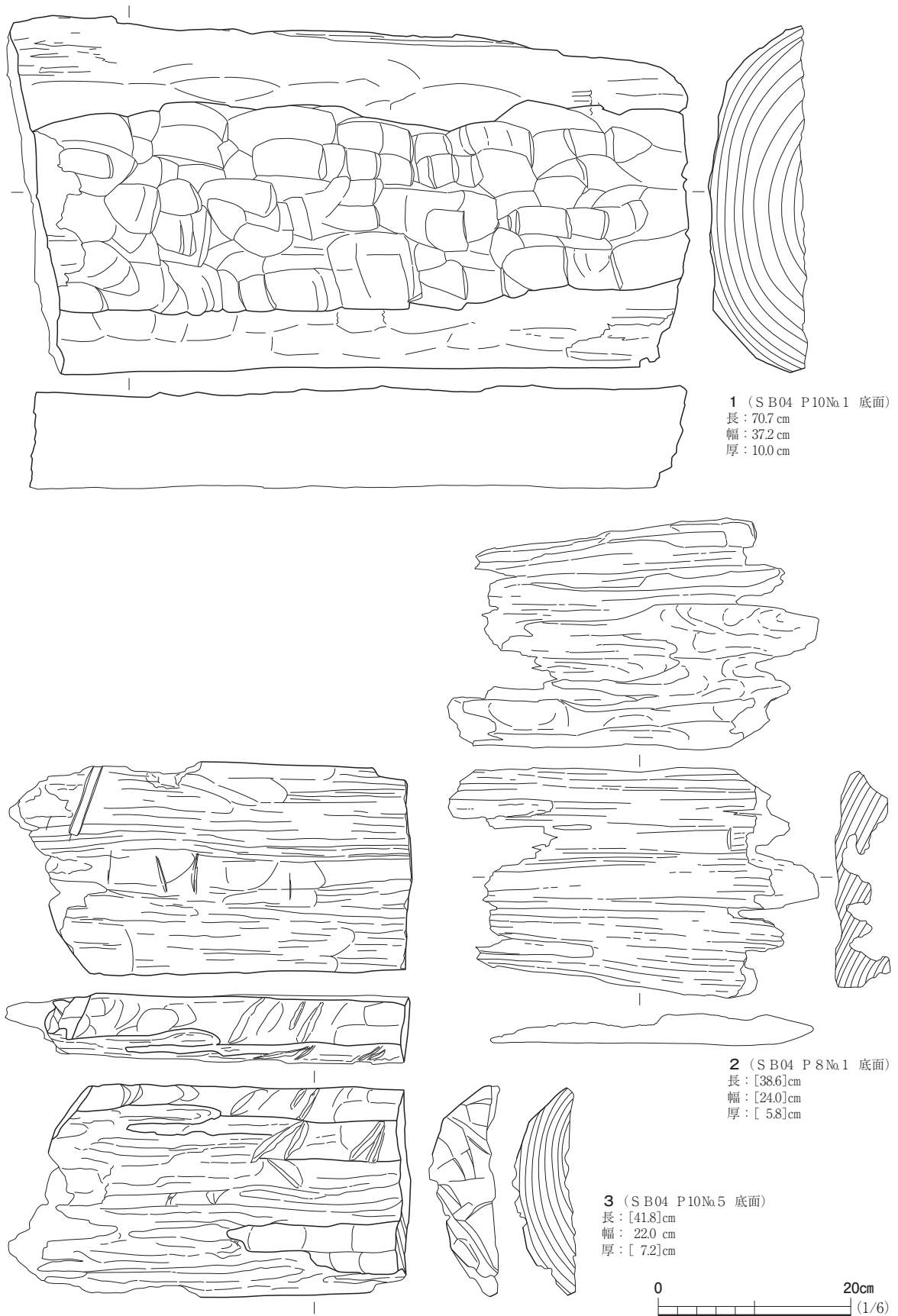


图34 掘立柱建物跡出土遺物 (3)

れている。表面は腐食が進んでいるが、一部に手斧による加工面が認められる。裏面は割面で幅2mmほどの浅い線状の溝や、手斧痕も見られる。裏面上半には、幅1cm、長さ7cmで、断面が緩い凹面状の窪みが見られる。形状から釘や楔の痕跡の可能性はある。図33-5は図34-1の上から出土した。表面と側面の一部には手斧による加工面が残り、裏面は割面である。

まとめ

本遺構は3×2間の南北棟の掘立柱建物跡である。軸線方向は3号建物跡とほぼ同じで、礎板を多く用いるなど共通する特徴も見られ、互いに関連する可能性を考えておきたい。所属時期については、6号溝跡との重複関係と、小破片ではあるが覆土中にロクロを使って作られた可能性がある杯片が含まれることから平安時代と考えられ、1・2号建物跡より若干新しい時期と推測される。

(松 本)

第4節 区画溝跡と柵跡

5号溝跡は東西方向に、6号溝跡は南北方向に走る幅3m程の大規模な溝跡で、D3グリッドでほぼ直角に接続し、調査区内をL字状に区画している。また、これに並行して1号柵跡が作られていた。基本的に、これらの遺構は相互に関連し区画施設を構成していると考えられることから、節を立てて説明する。

5・6・11号溝跡、1号柵跡 SD05・06・11、SA01

遺 構 (図35～37、付図1、写真34～40・58)

当初提示された調査範囲から検出できたのは5号溝跡だけであったが、調査の進展に伴い、遺跡範囲が北・東側にも広がることを確認されたことから、その一部についても調査の対象とされ、この追加調査部分から5号溝跡と直角に交わるほぼ同規模の溝跡が確認され、これを6号溝跡とした。検出時には5号溝跡と6号溝跡で堆積土に若干の違いが見られたことから、時期の異なる溝跡が重複しているものと判断し、別遺構として個別に調査に着手した。

調査の結果、元々5・6号溝跡は古墳時代中期に集落の区画溝として作られた一連の溝跡であったこと、その後は排水溝として利用され、5・6号溝跡とも何度か掘り直されたことが明らかとなった。遺構検出時に認めた両溝跡の堆積土の違いは、最終的に埋まった時期の違いによるものと推測される。

以下では、5・6号溝跡について堆積土を確認した上で新期・古期に区分し、そのあり方を報告する。なお、古期については、1号柵跡が伴うと考えている。

5・6号溝跡堆積土

図37のA-A'・B-B'に6号溝跡、C-C'に5号溝跡の土層断面を示す。D-D'は5号溝跡と6号溝跡が直角に交わる部分の堆積土である。

A-A'・B-B'に示すℓ1～4は整ったレンズ状に堆積し、これが新しい時期の6a号溝跡の堆積土で、ℓ3は火山灰(Hr-FP)を含んでいる。基盤に近い黄褐色系の土ℓ5～12は古い時期の6号溝跡を埋める人為堆積土である。

C-C'のℓ5・6は土質から古い時期の5号溝跡を埋める人為堆積土、ℓ2～4はこれを掘り込んで作られた新しい時期の5a・11号溝跡の堆積土である。ℓ1の堆積状態から、5号溝跡は埋め戻し後も若干窪んでいたことが知られ、その窪みを利用して新たに5a・11号溝跡が掘られたと考えている。ℓ2～4中に火山灰の堆積は見られなかった。

D-D'では、ℓ14～16・19・20が5号溝跡の埋まりきらない窪みに新たに掘られた5a・11号溝跡の堆積土、ℓ2～4が6a号溝跡の堆積土である。土層断面中央部に堆積するℓ4上面からは、断面では確認できないほどの薄い火山灰の広がり認められた。11号溝跡はℓ4を掘り込んでいることから、6a号溝跡よりも新しい時期の溝跡であることが確認できた。この他、ℓ13・17・18・21も6a号溝跡の堆積土を掘り込んでいることから、この部分は6a号溝跡埋没後に何度も掘り返されたものと考えている。ℓ22・23はℓ8に近似し、5a号溝跡より古い。

5a・6a・11号溝跡(SD05a・06a・11)

図36には新期の5a・6a・11号溝跡を示す。上段が全体図、下段は交差部の拡大図である。最も古いものが6a号溝跡、それが埋まった後で5a号溝跡が作られ、最も新しいものは11号溝跡と考えている。いずれも5・6号溝跡と重なる部分では調査の最終段階まで内容がわからなかったため、6a号溝跡については土層断面で、5a号溝跡と11号溝跡は掘り上がった溝跡の底面の窪みとして確認できただけである。

6a号溝跡の推定線を図36に破線で示した。土層断面からは本溝跡が幅1.9m、深さ25～35cm程で、周壁は緩やかに立ち上がっていることが確認できる。軸線方向は6号溝跡とほぼ同じと考えられる。5・6号溝跡接続部から北に11m延びる幅1m程の溝跡も、本溝跡の延長上に位置し、堆積土も類似し、底面の標高もほぼ同じであることから、排水のために新たに付け加えられた溝跡であろう。

5a・11号溝跡は5・6号溝跡接続部付近から分岐・合流しながら東に流れ出している。調査区東側では基盤土のグライ化が著しく、5号溝跡に気付かずに表土剥ぎの時点で削平してしまったが、調査区東側壁面で本溝跡の堆積土を確認できたことから、さらに調査区外まで延びることは明らかである。5a号溝跡の幅は1～1.9m、深さは最も残りの良い接続部東側で40cmである。11号溝跡は幅1.1m、深さはほぼ同じ部分で38cmである。両溝跡とも側壁の立ち上がりは緩やかである。図37E-E'では両溝跡ともレンズ状の堆積が見られることから基本的には自然堆積と考えているが、11号溝跡のℓ4については土質と堆積状態から人為堆積の可能性が高い。5a・11号溝跡は遺跡の立地する自然堤防上の高まりを横断するように、6a号溝跡は同じく尾根部を縦断するように作られたと考えている。

5・6号溝跡(S D 05・06)

5・6号溝跡については、元々古墳時代中期に集落の区画溝として作られたと考えている。6号溝跡は想定される自然堤防の尾根線とほぼ並行し、北北西から南南東に延びている。規模は幅3～4m、平面形は整った長方形をなし、東壁の軸線方向はN25°Wである。側壁の立ち上がりは急で、深さは現況で25～35cmであるが、圃場整備時の削平等を考えると、少なくとも50～60cmの深さがあったと考えている。5号溝跡との接続部から南端までの長さは28.5mで、幅約3mの土橋状の掘り残しを経て、南へ延びるほぼ同じ幅の落ち込みが確認されているが、この部分については、調査の対象から除外された。

5号溝跡は6号溝跡の北端からほぼ直角に折れ、西南西方向に延びる溝跡である。現況で18mを確認したが、その先は圃場整備時の削平により失われている。本溝跡は古墳時代後期に排水溝として何回か掘り直されているため、当初の状態を留めているのは、C4グリッドで確認できた南壁だけである。規模は6号溝跡と同程度と考えている。(松本)

1号柵跡(S A 01)

調査区北東部の平坦面に位置し、古墳時代の遺物包含層であるLⅡを取り除いたLⅢ上面で確認した。5・6号溝跡と共に方形区画を構成する遺構の一部で、5・6号溝跡と並行する。5号溝跡と北辺の間と6号溝跡と東辺の間はいずれも2m程である。また、1号住居跡の北・東壁ともほぼ並行し、1号住居跡の北壁との間は約3～4m、東壁との間隔は約2mである。

北辺はP3～6とそれらをつなぐ溝跡で構成され、柱間寸法はP3-P4間が2.8m、P4-P5間が2.68m、P5-P6間が3.3mであり、東辺に比べ柱間は広い。柱穴の並びは直線ではなく、5号溝跡と並行するように湾曲し、P3-P4の中軸線方向はN69°E、P4-P6間の中軸線方向はN61°Eであり、北辺全体として中軸線方向はN63°Eを指す。現状での長さは9.1mである。溝跡の幅は32～60cm、深さ10～26cmで、断面形は開いたU字状を呈する。底面には緩やかな凹凸があり、 $\ell 1 \cdot 2 \cdot 9$ が堆積する。自然堆積とみられる $\ell 1 \cdot 2$ は柵跡廃絶後の堆積土と考えられ、焼土と炭化物を含み、各柱穴覆土を覆うように堆積する。 $\ell 9$ は溝跡の掘形で、各柱穴はこの層を掘り込んで設置されている。P6の土層は不明だが、他の3基の柱穴はすべて掘形を持ち、柱痕部分を確認できる。掘形の堆積土は $\ell 4 \cdot 5 \cdot 7 \cdot 8$ で、 $\ell 5 \cdot 8$ は地山である灰褐色土塊を多く含む。柱痕は緻密な $\ell 3 \cdot 6$ である。土層から見た柱の径は14～18cmである。P3は楕円形の大きな掘形を持ち、その東寄りに柱が位置する。規模は60×48cm、深さは柱痕部分で62cm、掘形底面で51cmである。P4・5ともに断面形は漏斗状で、上半ほど広く掘り込まれており、P4は一部が攪乱されている。規模はP4が径72cm、深さ67cm、P5が径86cm、深さ68cmである。P6はP4・5と同様の形状とみられ、現状での規模は径50cm、深さ55cmである。底面の標高を比較すると西のものほど深くなっているが、これは西に向かってわずかに傾斜する地形に沿っているためと思われる、4基とも旧地表から同程度掘り込まれたものと考えられる。

東辺は北東隅の柱穴P3の他、14基の柱穴(P1・2・7～18)と溝跡で構成され、溝跡はP3

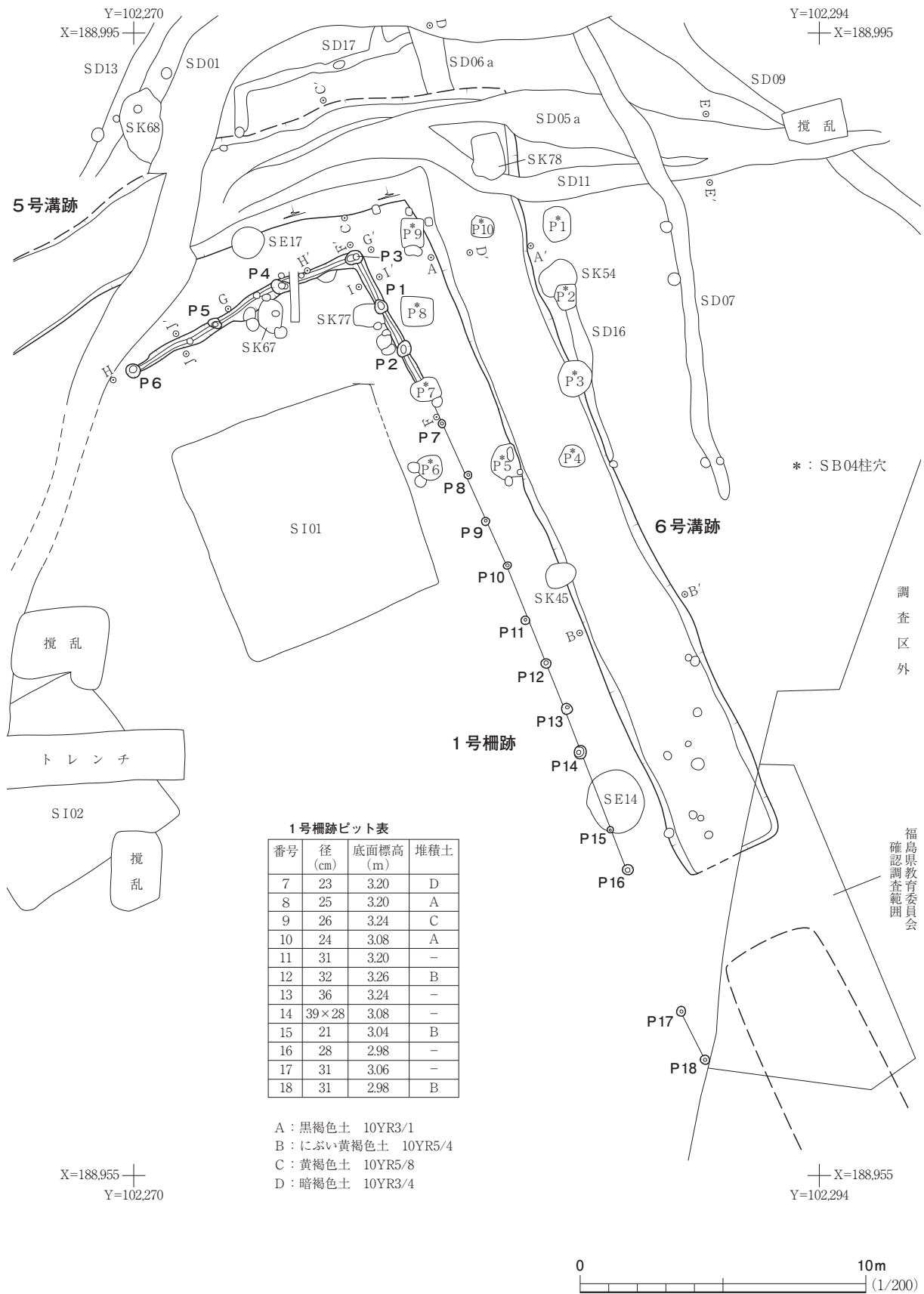


図35 5・6号溝跡、1号柵跡

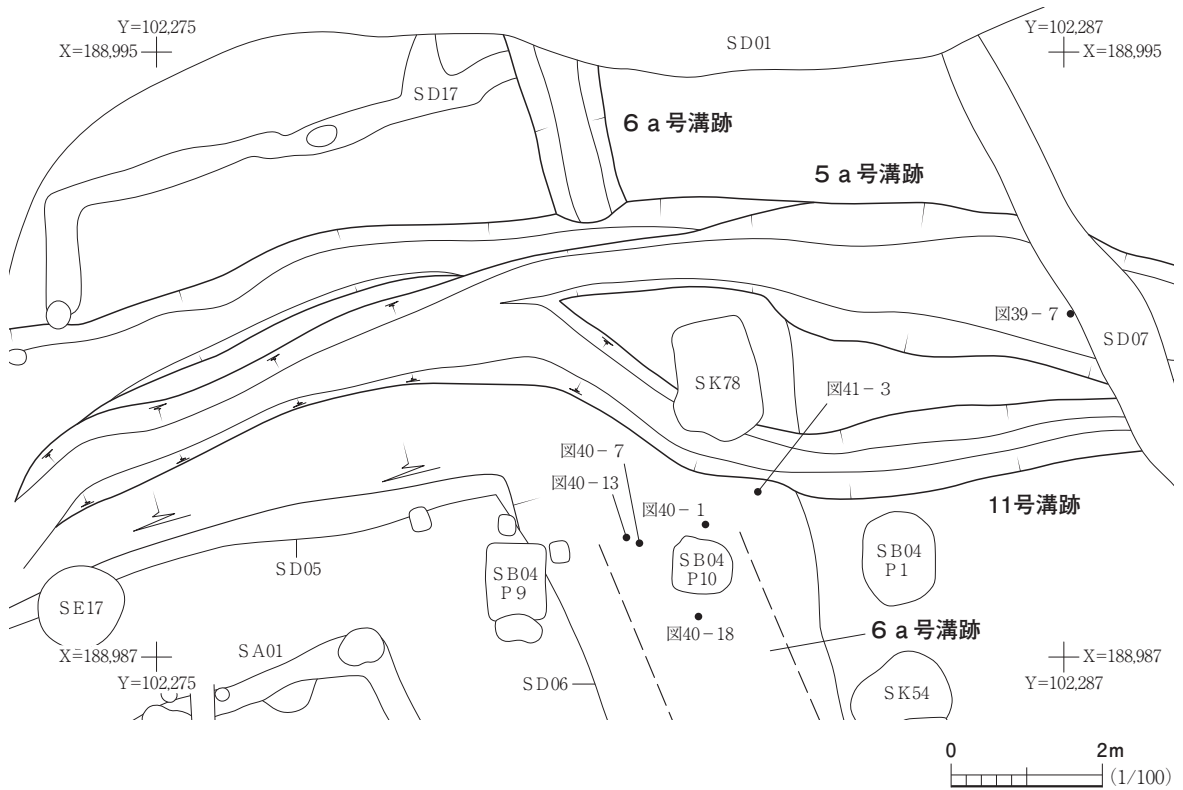


図36 5 a・6 a・11号溝跡

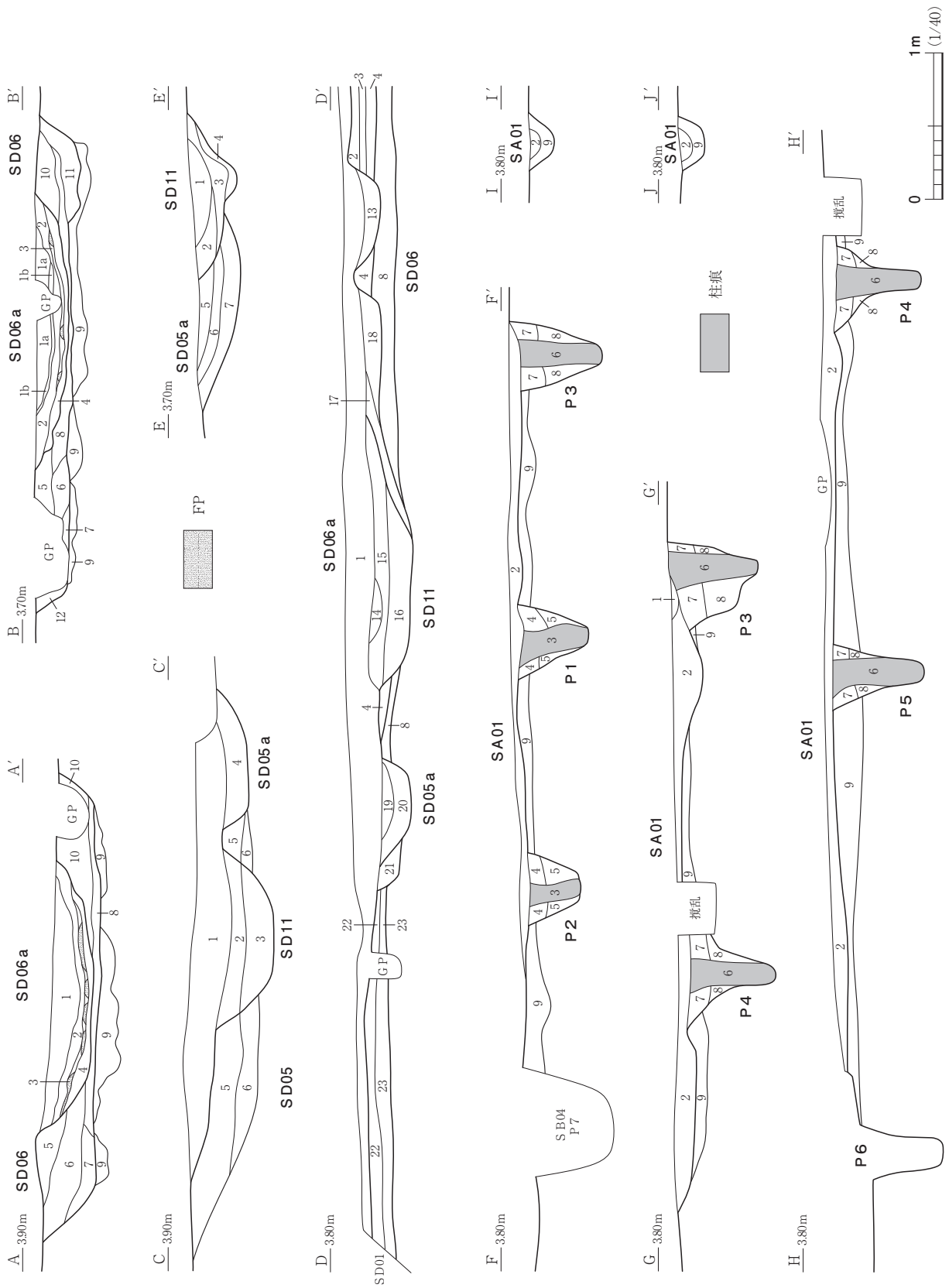


図37 5・6・11号溝跡、1号柵跡

5・6・11号溝跡堆積土 (A-A'・B-B'・D-D')

- 1 暗褐色砂質土 10YR3/3 (鉄分沈着。しまり強)
- 1a 暗褐色砂質土 10YR3/3 (鉄分沈着)
- 1b 黒褐色土 10YR2/2 (地山塊多量含む)
- 2 暗褐色砂質土 10YR3/3 (焼土粒微量、FP含む)
- 3 にぶい黄褐色土 10YR5/3 (FP塊含む。しまり弱)
- 4 黒褐色粘質土 10YR2/2 (地山含む)
- 5 にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3 (黒色土塊微量含む。鉄分沈着。しまり強)
- 6 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (黒色土塊少量含む)
- 7 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (黒色土塊含む。鉄分沈着。しまり強)
- 8 黒褐色粘質土 10YR2/2 (地山土微量含む)
- 9 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (黒色土塊多量含む)
- 10 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (黒色土塊少量含む)
- 11 にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3 (黒色土塊含む。鉄分沈着。しまり強)
- 12 灰黄褐色粘質土 10YR4/2 (黒色土塊多量含む)
- 13 黒色土 2.5Y2/1 (粗砂・FP小塊含む。鉄分沈着)
- 14 黒褐色砂質土 2.5Y3/2 (暗褐色土塊含む。鉄分沈着)
- 15 黒褐色砂質土 2.5Y3/1 (鉄分微量沈着)
- 16 黒褐色砂質土 2.5Y3/1 (鉄分沈着)
- 17 黒色土 10YR1.7/1
- 18 オリーブ褐色土 2.5Y4/4 (粗砂・FP小塊含む。鉄分沈着)
- 19 黒色砂質土 2.5Y2/1 (鉄分沈着)
- 20 黒色土 2.5Y2/1
- 21 黄褐色土 2.5Y5/3 (黒色土塊多量含む)
- 22 黒褐色砂質土 10YR3/1 (粗砂少量含む)
- 23 黒褐色砂質土 10YR2/2 (粗砂少量含む)

5・6・11号溝跡堆積土 (C-C')

- 1 黒褐色土 2.5Y3/1 (小豆大赤色粒子微量含む)
- 2 黒褐色砂質土 2.5Y3/2 (鉄分沈着)
- 3 黒色粘質土 2.5Y2/1
- 4 黒褐色砂質土 2.5Y3/2
- 5 明黄褐色土 2.5Y6/6 (黒色土塊多量含む)
- 6 灰黄褐色土 10YR4/2 (黒色土塊多量含む)

5・11号溝跡堆積土 (E-E')

- 1 にぶい黄褐色土 10YR5/4 (地山砂多量、鉄分粒少量含む)
- 2 灰黄褐色土 10YR4/2 (地山砂少量、鉄分粒微量含む)
- 3 黒褐色土 10YR3/1 (地山砂少量、鉄分粒微量含む)
- 4 灰黄褐色土 10YR6/2 (地山塊多量含む)
- 5 暗褐色土 10YR3/3 (地山砂少量、鉄分粒微量含む)
- 6 黒褐色土 10YR3/2 (地山砂少量、鉄分粒微量含む)
- 7 黒色土 10YR2/1 (地山砂少量、鉄分粒微量含む)

1号柵跡堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1 (炭化物粒・焼土微量含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/2 (炭化物粒・焼土微量含む)
- 3 黒褐色土 10YR3/1 (柱痕)
- 4 暗褐色土 10YR3/3
- 5 灰黄褐色砂質土 10YR4/2 (地山塊多量含む)
- 6 黒褐色土 10YR2/2 (柱痕)
- 7 黒褐色土 10YR3/2
- 8 褐色土 10YR4/4 (地山塊多量含む)
- 9 褐色土 10YR4/4 (鉄分沈着)

からP2の南まで確認した。柱間寸法は、P1-P3間が1.94m、P1-P2間が1.74m、P2-P7間が2.9m、P7-P8間が2.02m、P8-P9間が1.72m、P9-P10間が1.67m、P10-P11間が2.08m、P11-P12間が1.78m、P12-P13間が1.73m、P13-P14間が1.5m、P14-P15間が3.05m、P15-P16間が1.4m、P16-P17間が5.32m、P17-P18間が1.92mである。P2-P7間、P14-P15間、P16-P17の間隔は広いが、P2-P7間、P14-P15間についてはそれぞれ各1基の柱穴があったものと推定される。本遺構より新しい4号建物跡P7や14号井戸跡により柱穴が失われているのだろう。

P16-P17間には柱穴はなく、もともと柵は設けられていなかったと推定される。6号溝跡はちょうどこの位置で一度途切れ、土橋状の掘り残しと対応するため、区画内への通路とも考えられよう。P16以北の柱間寸法を見ると、概ね1.75m程を基準としているようだが、南のものほど間隔が狭い傾向がある。P16-P17間が入口部とすると、目立つ部分だけを狭い間隔で柱を立てたとも考えられる。

柵列跡は直線ではなく、東に膨らむようにわずかに湾曲する。詳しく見ると、P7及びP10を境にわずかに変化しており、これをもとに大きく3区に分けることもできる。中軸線方向はP7以北でN28°W、P7-P10間でN25°W、P10-P18間ではN22°Wで、東辺全体としてはN24°Wを示す。3地区の柱間寸法を見ると、それぞれ北から南に向かうに従って狭くなっていくという特徴が見いだせる。

(谷 中)

遺 物 (図38～41、写真78～80・93・94)

5・6号溝跡からは、図38～41に掲載した他、3,439点の土器が出土した。これらの遺物の大半は、堆積土中から散在して出土している。中には、ほぼ完形の状態で出土した土器もあるが、複数個体の土器が狭い範囲からまとまって出土したものはない。土器片3,439点の内訳を図41下段に示す。古墳時代後期に比定できるハケメの認められる土師器甕の出土量を見ると、5号溝跡では土師

器甕片1,550点中307点で19.8%、6号溝跡では同1,240点中95点で7.7%であり、5号溝跡ではハケメの認められる甕の出土割合が高いことが指摘できる。この傾向は土師器高杯でも認められ、堆積土に見られる火山灰(Hr-FP)の有無を考え合わせると、古墳時代後期では6号溝跡に比べて5号溝跡がより長い期間存続したことが考えられる。

図38・39には5号溝跡から出土した遺物と5・6号溝跡の接続部から出土した遺物、図40・41には6号溝跡から出土した遺物を示した。いずれも底面から5cm以上上から出土した。

図38-1～6、図40-1～6は土師器杯である。図38-1・2と図40-1～5は体部が丸みを帯びる椀に近いもので、口縁部内面には稜が見られる。器面調整は外面をヘラケズリ、内面をヘラミガキで調整するものが多い。図40-4は内外面とも赤彩され、同図2は外面の一部が未調整、内面はあばた状を呈し、図38-1の底部には「×」のヘラ書きが見られる。図38-3～6と図40-6はいわゆる有段丸底の杯である。器面の調整は外面をヘラケズリ・ヨコナデ、内面はヘラミガキ後に黒色処理される。図38-3の内外面には細い沈線が施され、同図6は体部の段がほとんど見られない。図40-6は椀に近い形態で、内面にはモミと考えられる圧痕が認められる。

図38-7～12、図40-7～12は土師器高杯である。図38-7、図40-8は脚が細く長いもので、裾は漏斗状に大きく開き、内部は中空である。器面調整は外面がヘラケズリやヘラナデ、内面はヘラナデとヘラの角による掻き取りである。図40-7は体部が丸味を帯びる杯部で、内面の口端部直下に緩い凹線が巡っている。器面の調整は外面がヘラケズリ、内面はヘラミガキである。図38-8～12、図40-10～12は脚が短いもので、器面の調整は内・外面ともヘラケズリやヘラミガキ、ヘラナデが多く、図38-12ではハケメもある。図40-9は有段の杯部で、皿状に大きく開いている。器面の調整は外面がヘラケズリ・ヘラミガキ、内面はヘラミガキと黒色処理である。脚部でも杯部の残るものの内面調整は、ヘラミガキと黒色処理である。図40-11では脚内部に充填されていた柱状の粘土が外れたらしく、内面に接合痕と思われる凹凸が確認できる。

図38-17～20、図39-1～6、図40-15・21、図41-1は土師器甕・鉢である。図40-15は小型の鉢で内面はヘラミガキされ、底部の外縁にはモミ状の圧痕が見られる。図38-19と図40-21は頸部が「く」の字状に屈曲し、体部が丸みを帯びる甕で、ハケメは見られない。図38-20の内面はヘラミガキされ、内面黒色処理されていることから甕では無い可能性がある。図38-17・18と図39-1～6は外面にハケメの見られる甕で、図38-17を除きいわゆる長胴甕である。図41-1は口縁部が直立し口端部がわずかに外反する長胴甕で、内外面ともヘラナデで調整されている。図38-18は小型の甕で、口縁部と体部の境に、内外面から開けられた貫通孔が1個認められる。体部上端には強い稜が認められる。

図38-16、図41-2は無底の土師器甕で、内面はヘラケズリとヘラミガキが施されている。図38-13は体部が「ハ」の字状に開く土師器蓋で、内面はヘラケズリとナデ調整、外面は無調整である。

図40-13は土師器捏鉢で、内面には3mm程の段差が顕著にみられる。

図38-14、図40-14はいずれも筒形土器である。図40-16は手捏ね土器で、内面はヘラナデ

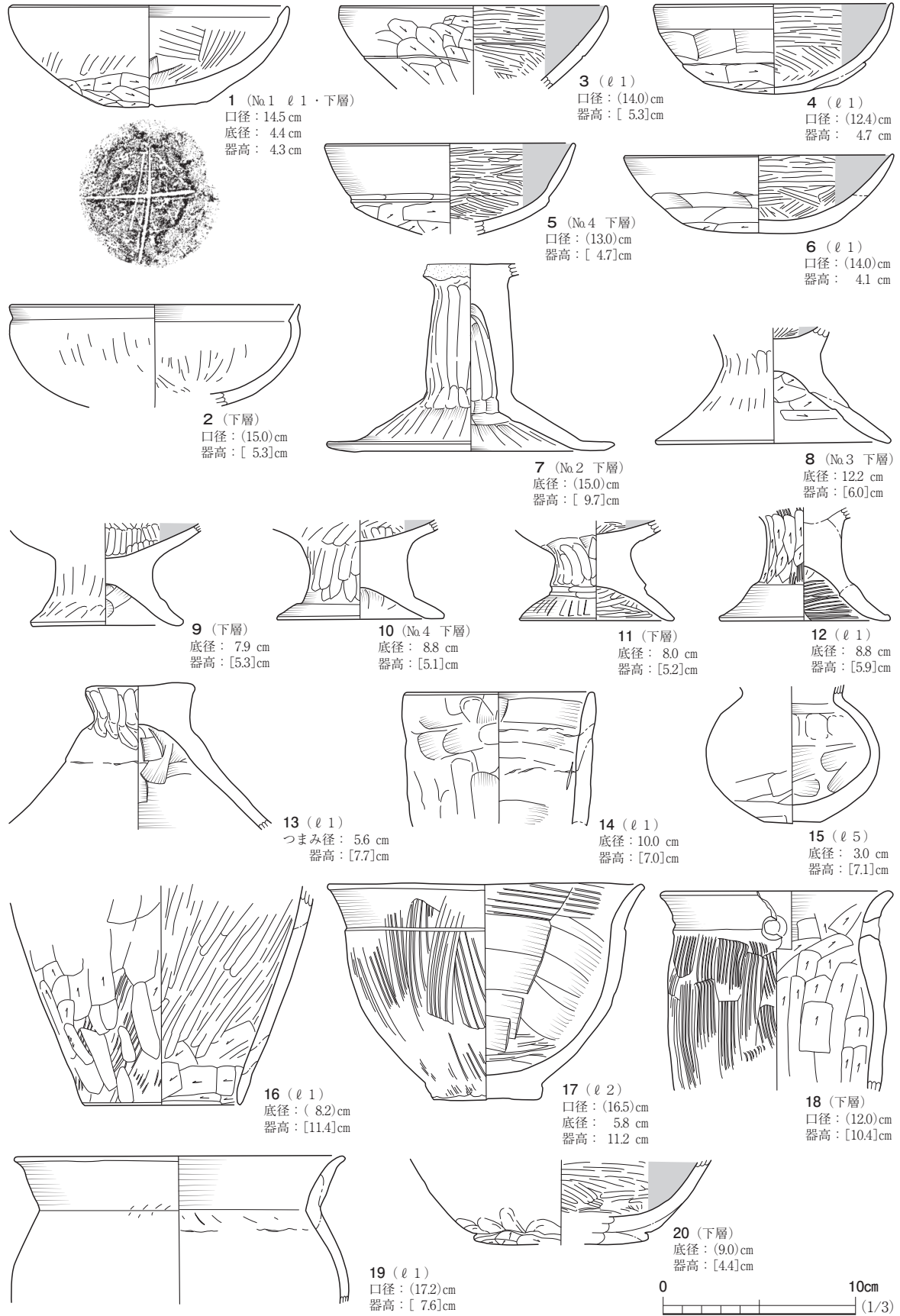


図38 5号溝跡出土遺物 (1)

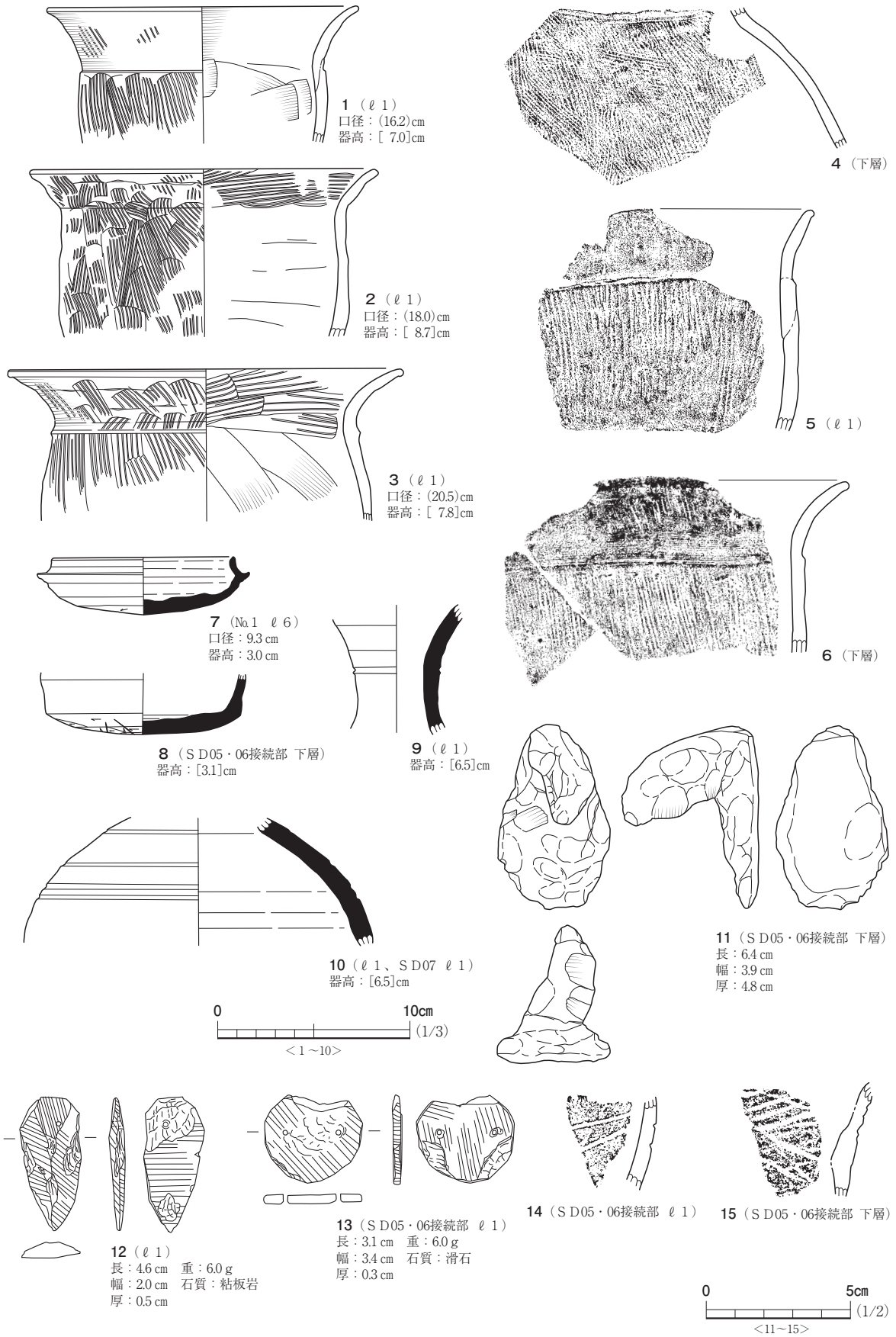


図39 5号溝跡出土遺物(2)

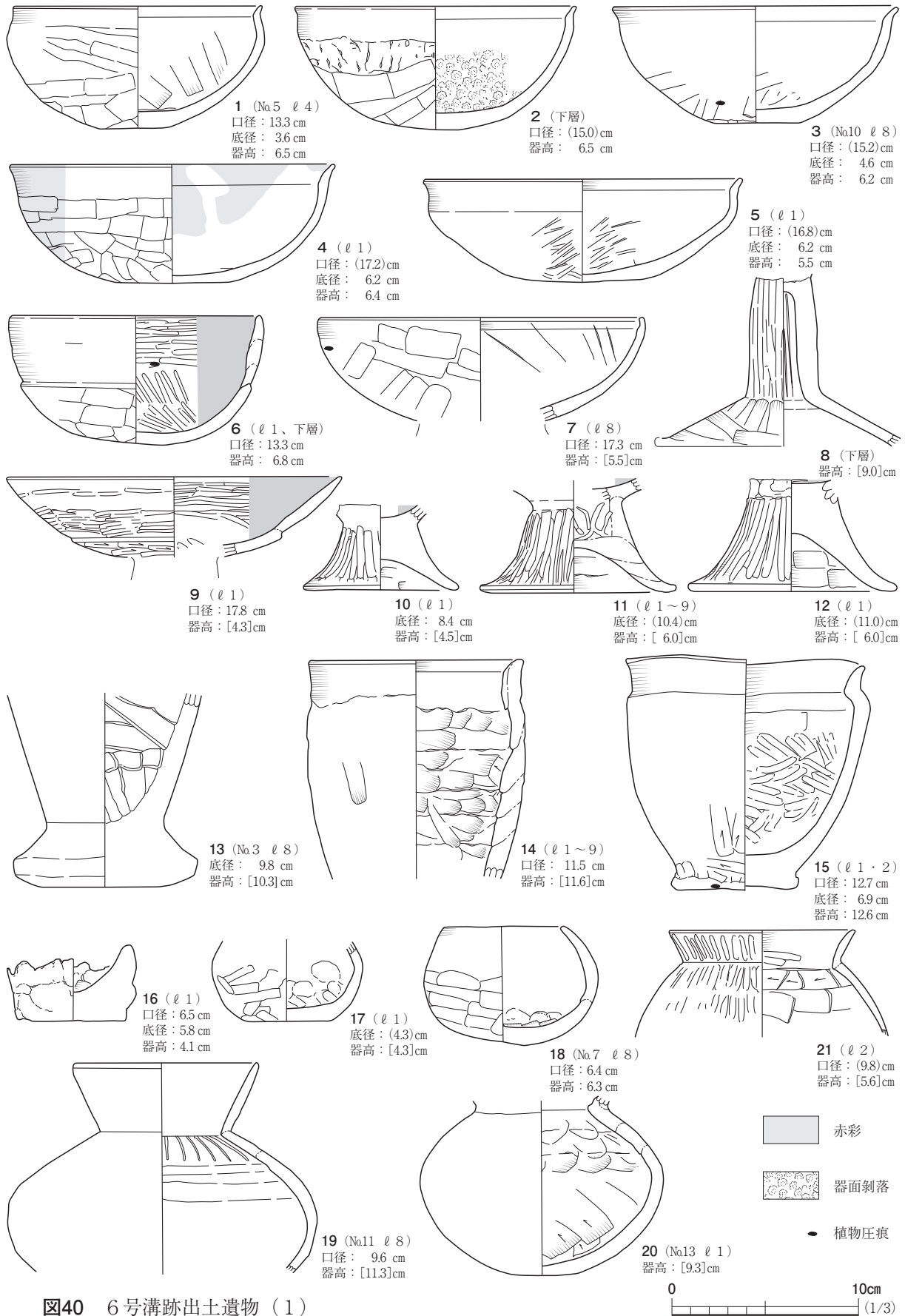
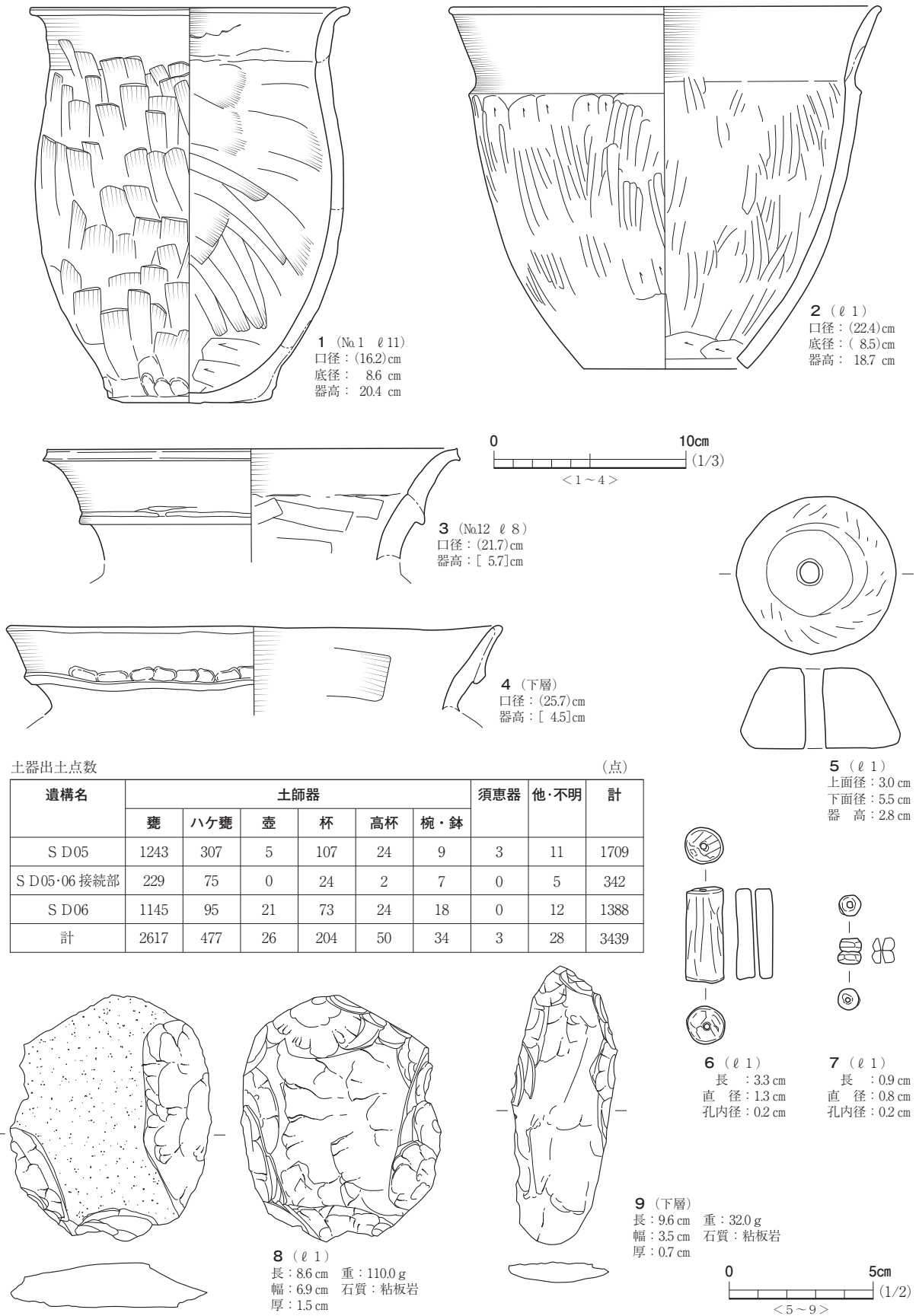


図40 6号溝跡出土遺物(1)



土器出土点数

(点)

遺構名	土師器						須恵器	他・不明	計
	甕	ハケ甕	壺	杯	高杯	椀・鉢			
S D 05	1243	307	5	107	24	9	3	11	1709
S D 05・06 接続部	229	75	0	24	2	7	0	5	342
S D 06	1145	95	21	73	24	18	0	12	1388
計	2617	477	26	204	50	34	3	28	3439

図41 6号溝跡出土遺物(2)

されている。図38-15、図40-17・19・20は小型の土師器丸底壺で、体部は球体状をなす。図40-18は口縁部が付かない鉢状の土器である。図41-3・4は複合口縁の土師器壺の破片である。3の口端部や口縁部下端の稜は、極めてシャープである。

図39-7~10は須恵器で、7・8が杯、9・10が壺である。7には明瞭な蓋受けが見られ、ここから比較的短い口縁部が内傾して立ち上がっている。8は、大きな底部から体部がほぼ直角に立ち上がる浅い杯である。9は壺の頸部で、上下端は広がり、中央に沈線が巡っている。10は体部上半の破片で、浅い沈線が4条巡っている。

図39-12・13は石製模造品である。12は剣形、13は有孔円板で、器面は丁寧に研磨されている。図39-11と図41-5~7は土製品である。図39-11は鋏形の土製模造品で、裏面は平滑であるが、その他の器面は凸凹している。図41-5は紡錘車、6は管玉で、7は2個の小玉が上下に接続している。いずれも、器面外面は丁寧に磨かれ、光沢を帯びている。

図41-8・9は剥片石器で、いずれも円礫状の粘板岩から剥離した、自然面を残す剥片の一部に調整剥離を加えている。図39-14・15は弥生土器である。

まとめ

5・6号溝跡と1号柵跡については、古墳時代中期の集落跡を囲む区画溝跡とその内側を巡る柵跡と考えられる。6号溝跡南端で土橋状の掘り残しが確認され、その南に溝跡が延びていくことが明らかとなった。土橋を東辺の中央と推定すれば、集落跡の規模は一辺60m程の方形区画を復元することが可能である。1号柵跡の中で、P1~6については、各小穴の深さが深く、溝で繋いでいるなど、1号柵跡を構成する他の小穴に比べて丁寧に作られている。軸線方向をほぼ同じくする、1号住居跡の堀として使われた可能性も考えておきたい。土橋の南側へと延びる溝状の落ち込みについては、詳細は不明である。

本遺構の所属時期については、集落跡の区画溝として機能した古期が古墳時代中期、これが排水溝として再利用された新期が古墳時代後期と考えている。 (松 本)

第5節 土 坑

本調査区内からは、59基の土坑が検出・調査された。当初、土坑と考えられる落ち込みを78基確認し、調査を実施した。調査に伴い、掘立柱建物跡の柱穴であることが確認されたものが16基、井戸跡であることが確認されたものが1基、近代以降の所産であることが確認されたものが2基ある。これら19基に付した遺構番号に関しては、作成した記録等に混乱が生じる事を避けるため欠番とした。欠番とした土坑は、22・24~33・46・48・52・53・55・58・65・72号土坑である。

土坑は調査区全体に分布しており、分布に規則性はみられない。平面形は、円形基調のもの、楕円形基調のもの、方形ないしは長方形基調のもの、不整形のものがある。また、47・63・68号土坑からは土器が多く出土しており、特筆される。検出面はすべてLⅢ上面である。

1号土坑 SK 01 (図42、写真41)

本遺構は調査区南側のC7・8グリッドに位置し、19号井戸跡と重複し、本遺構が新しい。調査当初、土坑堆積土と19号井戸跡堆積土を区分できず、底面の南半分は掘り過ぎてしまった。

平面形は円形で、規模は検出面では直径90cmを測る。壁は急斜度で立ち上がり、断面形は逆台形状をなす。底面は平坦で、壁際に幅5cm、深さ4cmの壁溝が巡る。検出面から底面までの深さは30cmである。堆積土は2層に分かれ、ℓ1は人為堆積土か自然堆積土か判別がつかなかったが、ℓ2は壁溝と底面に薄く堆積しており、自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片4点、陶器片2点が出土している。陶器片は大堀相馬焼である。

本遺構の時期は大堀相馬焼の陶器片が出土していることから、近世の所産と推測される。また、遺構の形状から桶状の木製品などが据えられていた可能性があり、過去の調査例から、水溜、肥溜、墓などの用途が考えられる。 (菅野)

2号土坑 SK 02 (図42・50、写真41)

本遺構は調査区南側のC7・8グリッドに位置する。西半分が35号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。

平面形は不整楕円形である。規模は検出面で長径1.46m、短径1.22m、底面で長径1.16m、短径91cmを測り、深さは50cmである。壁は急斜度で立ち上がるが、南東側の壁は傾斜が緩い。断面形は逆台形状で、底面は平坦である。堆積土は3層に分かれ、ℓ1は1号土坑のℓ1と近似している。ℓ2・3は粘質土や黒色土塊を斑状に含み、人為堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片7点、瓦質土器片1点、陶器片1点が出土している。陶器片は大堀相馬焼である。図50-3は瓦質土器の播鉢で、体部は逆八の字状に開き、口縁部は外側に強く折れる。胎土は赤褐色～灰色を呈する。内面には縦・横方向の卸目が施されている。卸目は1単位の幅が1cmで、中に3条の溝を持つ。

本遺構の時期は大堀相馬焼の陶器片が出土していることから、近世と推測される。性格は不明である。 (菅野)

3号土坑 SK 03 (図42・49、写真41)

本遺構は調査区中央のC・D5グリッドに位置する。

平面形は不整楕円形で、規模は検出面で長径1.22m、短径1.11m、底面で長径1.08m、短径92cmを測り、深さは28cmである。周壁はわずかに外傾して立ち上がり、北東～南東側の壁の傾斜は緩い。底面にはわずかに起伏がある。堆積土は2層に分かれ、どちらも自然堆積土の可能性が高い。

遺物は土師器片が16点出土している。土師器片の中には内面黒色処理された杯片もある。図49-10は土師器甕で、体部に若干丸味を有する長胴の甕と考えられる。外面の調整はヘラナデだ

が、工具痕がハケメのように残っている。内面はヘラナデで、その上からナデで部分的に工具痕が消されている。

本遺構の時期は内面黒色処理された土師器杯片もあることから、古墳時代後期と推測される。性格は不明である。(菅野)

4号土坑 SK 04 (図42、写真41)

本遺構は調査区中央のD 6グリッドに位置する。

平面形は円形で、規模は検出面で直径68cm、底面で直径66cmを測り、深さは6cmである。非常に浅いため、壁の立ち上がりは不明であるが、1号土坑と同様、壁際に幅5cm、深さ6cmの壁溝が巡る。底面中央はわずかに皿状にくぼむ。堆積土は2層に分かれ、 $\phi 1$ は全体に堆積し、 $\phi 2$ は壁溝に堆積する。どちらも自然堆積の可能性が高い。遺物は出土していない。

遺構の形状が1号土坑と酷似していることから、水溜、肥溜、墓などの用途が考えられ、時期も近世と推測される。(菅野)

5号土坑 SK 05 (図42、写真41)

本遺構は調査区南端のC・D 8グリッドに位置する。西側で小穴と重複しており、本遺構が古い。平面形は不整の長方形で、東側は西側に比べて幅が広い。規模は検出面で長軸長1.04m、短軸長92cm、底面で長軸長92cm、短軸長70cmを測り、深さは15cmである。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は鍋底状で中央が僅かに窪んでいる。断面形は皿形に近い。堆積土は1層で、地山塊を斑状に含み、人為堆積の可能性が高い。遺物は出土していない。本遺構の時期・性格は不明である。(菅野)

6号土坑 SK 06 (図42・50、写真41・94)

本遺構は調査区南側のB 7グリッドに位置する。北東端は12号井戸跡と重複するが、重複部がわずかであるため新旧は不明である。

平面形は楕円形で、規模は検出面で長径1.03m、短径90cm、底面で長径55cm、短径45cmを測り、深さは22cmである。断面形は鍋底状を呈し、壁と底面の境目は不明瞭である。堆積土は1層で、地山塊の堆積が確認できないことから、自然堆積の可能性が高いと判断している。

遺物は土師器片12点、磁器片2点、石製品1点、鉄滓1点が出土している。図50-5は勾玉で、灰色を呈する軟質の滑石で作られている。全体を研磨していたとみられるが、欠損が多く表面は凹凸が激しい。頭の中央に直径2.5mmの孔が貫通している。

本遺構の時期は磁器片が出土していることから近世と推測され、性格は不明である。(菅野)

7号土坑 SK 07 (図42・50、写真41)

本遺構は調査区南側のB 7グリッドに位置する。重複する遺構はないが、土坑北半は現代の攪乱

により壊されている。遺存部から、平面形は楕円形を基調とするものとみられる。規模は検出面で南北遺存長1.05m、東西長1.44m、底面で南北遺存長72cm、東西長74cmを測り、深さは43cmである。壁は深さ10cmの地点で傾斜が急になる。底面は平坦である。堆積土は1層で、炭化物粒と礫を含む黒褐色土で、自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片6点、石器1点が出土している。図50-6は砥石の破片で、青灰色を呈するシルト岩が使われている。表面・裏面に細い線状の磨痕が残る。表面にはやや太い線刻も縦に入る。土師器片はハケメのある甕片が含まれている。

本遺構の時期はハケメのある土師器甕片が含まれていることから、古墳時代後期と推測される。性格は不明である。(菅野)

8号土坑 SK 08 (図42、写真41)

本遺構は調査区南端のC8グリッドに位置する。北端は19号井戸跡とわずかに重複しており、本遺構が新しい。また、小穴とも重複しており、これについては本遺構が古い。

平面形は不整隅丸方形で、土坑の南西隅が僅かに張り出している。規模は検出面で一辺73cm、底面で一辺60cmを測り、深さは15cmである。壁は外傾し、底面は平坦である。堆積土は2層で、人為堆積の可能性が高い。遺物は出土していない。

本遺構の時期は19号井戸跡より新しいことから、近世と推測される。性格は不明である。

(菅野)

9号土坑 SK 09 (図43、写真42)

本遺構は調査区中央のC6グリッドに位置する。

平面形は整った楕円形で、規模は検出面で長径75cm、短径65cm、底面で長径65cm、短径50cmを測り、深さは16cmである。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は黒色土1層で、人為堆積の可能性が高い。土層中には地山塊が含まれていた。

遺物は出土していない。本遺構の時期・性格は不明である。

(菅野)

10号土坑 SK 10 (図43、写真42)

本遺構は調査区南端のC8グリッドに位置する。遺構の中央から北側で小穴と重複し、本遺構が古い。

平面形は楕円形を呈していたとみられ、規模は検出面で長径95cm、短径75cmを測る。底面の長径は不明だが短径は64cmで、深さは22cmである。壁は緩やかに立ち上がり、底面には緩い起伏がある。堆積土は1層で、地山塊を多く含むオリーブ褐色土で、人為堆積とみられる。

遺物は出土していない。本遺構の時期・性格は不明である。

(菅野)

11号土坑 SK 11 (図43、写真42)

本遺構は調査区南側のB7グリッドに位置する。南東側及び北側で小穴と重複し、本遺構が新しい。平面形は不整な隅丸方形で、重複する小穴の影響であろうか、北壁中央は僅かに北に張り出している。規模は検出面で一辺85cm、底面で一辺72cmを測り、深さは22cmである。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は中央に向かって緩く下降している。堆積土は1層で、自然堆積か人為堆積か判別がつかなかった。

遺物は出土していない。本遺構の時期・性格は不明である。(菅野)

12号土坑 SK 12 (図43、写真42)

本遺構は調査区南側のB7グリッドに位置する。北東端は小穴と重複し、本遺構が古い。また、土坑西側は攪乱によって上部を壊されている。

遺存部から平面形は隅丸長方形であったとみられる。規模は現状で、検出面で長軸長97cm、短軸長75cm、底面は長軸長85cm、短軸長45cmを測り、深さは70cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦で、断面形は台形状を呈する。堆積土は4層で、 $\ell 1$ は黒褐色土、 $\ell 2 \cdot 3$ は地山塊を含むオリブ褐色土、 $\ell 4$ は粘性の強い黄灰色土が堆積している。 $\ell 2 \sim 4$ は人為堆積の可能性が高いが、 $\ell 1$ は不明である。遺物は $\ell 1$ から内面黒色処理された古墳時代後期のものと思われる土師器杯片1点を含む土師器片が13点出土している。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期と推測される。性格は不明である。(菅野)

13号土坑 SK 13 (図43、写真42)

本遺構は調査区南側のB7グリッドに位置する。

平面形は不整形で、全体的にはハート形に近い形状の土坑である。規模は検出面で南北長1.02m、東西長1.07m、底面は南北長90cm、東西長98cmを測り、深さは18cmである。壁は急角度で立ち上がり、底面は平坦である。断面形は整った台形状を呈する。堆積土は2層に区分した。いずれも地山塊が含まれているものの、レンズ状の堆積を示すことから人為堆積とみられる。

遺物は出土していない。本遺構の時期・性格は不明である。(菅野)

14号土坑 SK 14 (図43、写真42)

本遺構は調査区南側のC7グリッドに位置する。北東側で15号土坑、中央で小穴と重複し、本遺構が15号土坑より新しく、小穴より古い。南東側は攪乱により壊されている。

遺存部から平面形は円形と推測され、規模は検出面で推定径77cm、深さは15cmである。壁は緩やかに外傾し、断面形は皿形を呈する。堆積土は1層で、地山塊を含む黒色粘質土である。

遺物は土師器片が11点出土している。内面黒色処理された杯片が含まれている。

本遺構の時期は内面黒色処理された土師器杯片が出土していることから、古墳時代後期頃と推測される。性格は不明である。(菅野)

15号土坑 S K 15 (図43、写真42)

本遺構は調査区南側のC7グリッドに位置する。南西側で14号土坑、中央で小穴と重複しており、本遺構が最も古い。南東側は攪乱によって壊されている。

遺存部から平面形は円形を呈していたとみられ、規模は検出面で推定径約80cm、深さは8cmである。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は1層で、地山塊を含む黒褐色土である。遺物は出土していない。

本遺構の時期は古墳時代後期頃と推測される14号土坑より古いことから、古墳時代後期以前と考えられる。性格は不明である。(菅野)

16号土坑 S K 16 (図43、写真42)

本遺構は調査区中央のC6グリッドに位置する。南西隅と西壁中央付近は小穴と重複しており、本遺構が古い。東側は攪乱によって壊されている。

平面形は隅丸長方形もしくは隅丸方形を呈していたとみられる。現存する部分の規模は、検出面で長軸長1.35m、短軸遺存長73cm、底面で長軸長1.23m、短軸遺存長52cmを測る。深さは23cmである。壁は外傾し、西側は傾斜が緩くなる。底面はわずかに起伏がある。堆積土は4層で、 $\ell 1$ は地山塊を含むオリブ褐色土、 $\ell 2 \cdot 3$ は黒褐色粘質土、 $\ell 4$ は地山土を基調とする暗灰黄色粘質土が堆積しており、自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片が35点出土している。外面にハケメ調整された甕片が含まれる。

本遺構の時期はハケメ調整された土師器甕片が出土していることから、古墳時代後期以降と推測される。性格は不明である。(菅野)

17号土坑 S K 17 (図43、写真42)

本遺構は調査区南端のB8グリッドに位置する。北・東・南西壁際で4基の小穴と重複し、本遺構が古い。

平面形は円形である。規模は検出面で直径約1.45m、底面で直径約1.2mを測り、深さは30cmである。壁は外傾し、底面は平坦である。堆積土は1層で、地山塊を斑状に含むことから、人為堆積とみられる。

遺物は出土していない。本遺構の時期・性格は不明である。(菅野)

18号土坑 S K 18 (図43・50、写真43・95)

本遺構は調査区中央のC6グリッドに位置する。北側と南東側で小穴と重複し、本遺構が北側の

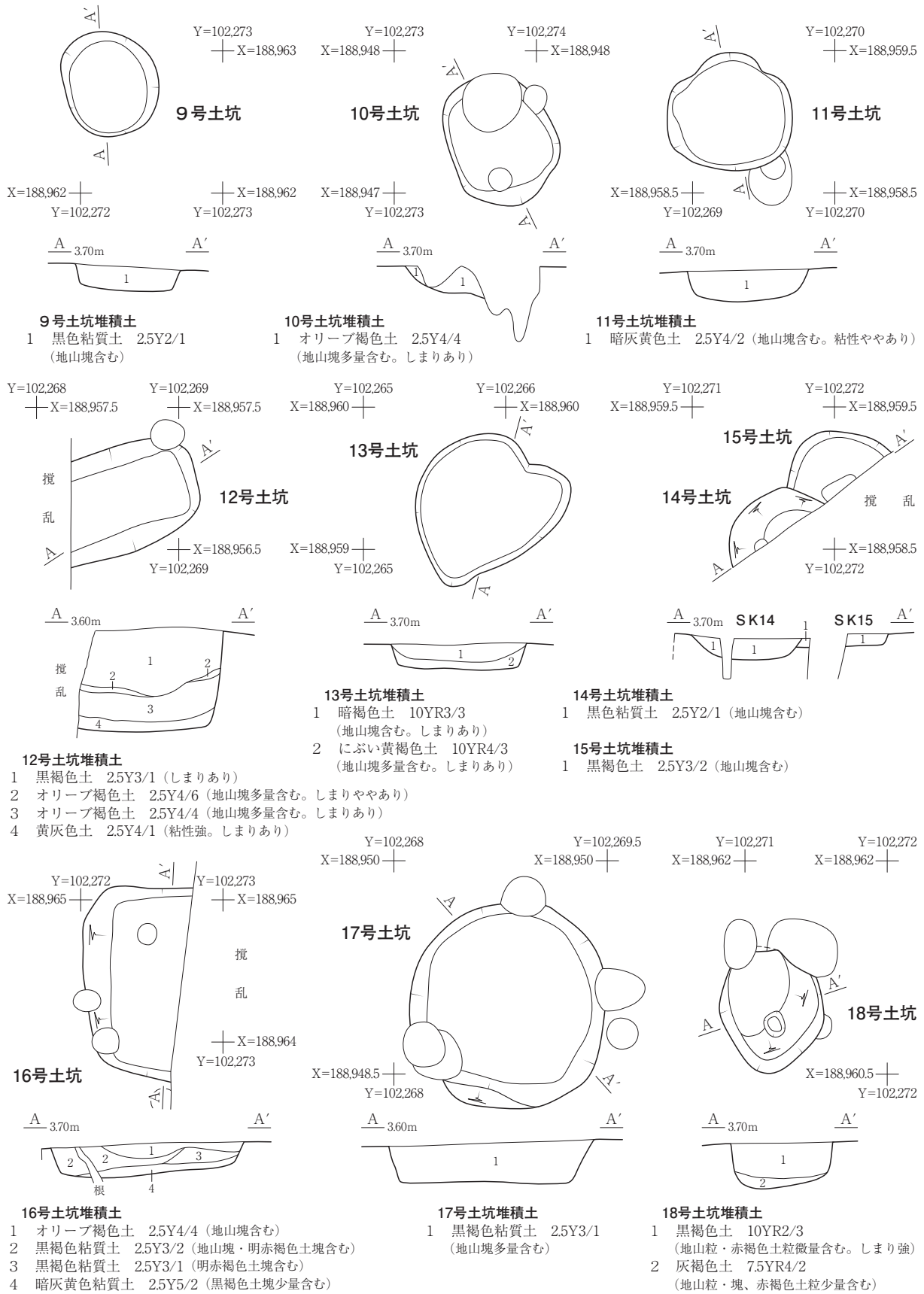


図43 9～18号土坑



小穴よりも古く、北東・南東側の小穴よりも新しい。

平面形は不整楕円形である。規模は、検出面で長径85cm、短径72cm、底面で長径80cm、短径60cmを測り、深さは32cmである。壁は垂直気味に立ち上がり、北側がわずかにオーバーハングする。底面は西側がわずかに窪む。堆積土は2層で、人為堆積か自然堆積か判断がつかなかった。

遺物は土師器片が16点と銭貨が1点出土している。図50-8は渡来銭の「洪武通寶」で、1368年に铸造されたものである。

本遺構の時期は渡来銭の「洪武通寶」が出土していることから、中世以降と推測される。性格は不明である。 (菅野)

19号土坑 S K 19 (図44、写真43)

本遺構は調査区中央のB6グリッドに位置する。2号住居跡と重複し、本遺構が新しい。また、北西端に重複している小穴よりは本遺構の方が古い。

平面形は不整形である。規模は検出面で直径1.56m、底面で直径約1mを測り、深さは60cmである。壁の立ち上がりは急で、北・西・南壁の下部(深さ45cm以下)は傾斜が緩やかになる。底面はやや起伏がある。堆積土は2層で、地山塊を斑状に含むことから、人為堆積とみられる。

遺物は土師器片28点、陶器片3点出土した。陶器片は大堀相馬焼である。

本遺構の時期は大堀相馬焼の陶器片が出土していることから、近世以降であると推測される。性格は不明である。 (菅野)

20号土坑 S K 20 (図44、写真43)

本遺構は調査区中央のC5グリッドに位置する。南西端で小穴と重複しており、本遺構が古い。

平面形は隅丸長方形を基調とするが、西側が乱れた形となっている。規模は検出面で南北長98cm、東西長1.02m、底面で南北長88cm、東西長95cmを測り、深さは18cmである。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は南西側に向かって傾斜する。堆積土は2層で、自然堆積とみられる。

遺物は土師器片12点出土した。古墳時代後期のものと思われる土師器杯片を1点含む。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期であると推測され、性格は不明である。 (菅野)

21号土坑 S K 21 (図44・50、写真43・95)

本遺構は調査区中央のC6グリッドに位置する。

平面形は楕円形である。規模は検出面で長径68cm、短径45cm、底面で長径63cm、短径40cmを測り、深さは15cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。堆積土は1層で、地山塊を斑状に含み、人為堆積とみられる。

遺物は銭貨が6点出土している。図50-9・10は遺構中央付近で底面より6cm程上位から出土した。出土時は銭貨6枚が縦に重なっていたが、取り上げ後に4枚と2枚に分割した。それぞれ鍔

で固着している。9の最上部の銭貨は「熙寧元寶」(1068年初鑄)で、10の最上部の銭貨は「永樂通寶」(1411年初鑄)である。

本遺構の時期は銭貨が出土していることから、中世以降と推測される。銭貨が六文銭であることを考えると、本遺構は墓塚であった可能性が高い。(菅野)

23号土坑 SK 23 (図44、写真27・43)

本遺構は調査区中央のB5グリッドに位置する。2号建物跡のP2の真上に作られている。

平面形は不整隅丸長方形である。規模は検出面で長軸長1.22m、短軸長1.03m、底面は長軸長92cm、短軸長23cmを測り、深さは23cmである。壁は傾斜が緩やかで、わずかに内湾する。底面は2号建物跡P2と重複している部分が一部低くなる。堆積土は2層で、 $\ell 1$ は黒褐色粘質土で、 $\ell 2$ は2号建物跡P2との重複部にのみ、薄く堆積し、いずれも自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片が56点出土した。外面にハケメのある甕片や内面黒色処理された杯片などの古墳時代後期に属する遺物が多い。

本遺構の時期は2号建物跡P2と重複していることを踏まえると、古墳時代後期以降と推測される。性格は不明である。(菅野)

34号土坑 SK 34 (図44・50、写真43)

本遺構は調査区南端のC8グリッドに位置する。5号住居跡の堆積土上面で検出された。北端と南西隅は小穴と重複しており、本遺構が古い。東側半分は攪乱によって壊されている。

平面形は不整形で、西側は蛇行し、北側と南側は東側に向かってわずかに内湾する形となる。現存部分の規模は検出面で南北長1.5m、東西長70cm、深さは42cmである。壁は南北で垂直気味に立ち上がるが、西壁の立ち上がりは無く、底面は西端から東に向かって傾斜している。堆積土は2層で、混入物は少なく、自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片7点とかわらけ片2点が出土している。図50-2はロクロ成形のかわらけで、底面には回転糸切り痕が残る。器厚は4~5.5mmと厚めで、体部は外傾して立ち上がり、口縁部が垂直に引き出されている。内外面の口縁部に煤の付着があることから、燈明皿として使用されたと推測される。

本遺構の時期は出土遺物から近世と推測される。性格は不明である。(菅野)

35号土坑 SK 35 (図42、写真44)

本遺構は調査区南側のC7・8グリッドに位置する。東側で2号土坑、西側で19号井戸跡と重複し、本遺構はいずれの遺構よりも古い。

平面形は円形もしくは楕円形であったとみられる。残存部分の規模は検出面で南北長1.57m、東西遺存長1.25m、底面で南北長1.22m、東西遺存長1.03mを測り、深さは40cmである。壁は垂直気

味に立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は2層で、どちらも地山塊を斑状に多く含むことから、人為堆積とみられる。遺物は出土していない。

本遺構の時期は近世と推測される遺構との重複関係から、近世以前と推測される。性格は不明である。 (菅野)

36号土坑 SK 36 (図44、写真44)

本遺構は調査区中央のC5・6グリッドに位置する。南西端で2号住居跡とわずかに重複し、本遺構が新しい。

平面形は楕円形である。規模は検出面で長径1.62m、短径1.25m、底面で長径1.4m、短径1.13mを測り、深さは25cmである。壁は外傾し、底面はやや起伏がある。堆積土は3層で、 $\ell 1$ と $\ell 2$ は地山塊を含み、人為堆積の可能性が高い。 $\ell 3$ は鉄分の沈着により硬化した灰黄褐色土である。遺物は出土していない。

本遺構の時期は2号住居跡との重複関係から古墳時代後期以降とみられる。詳しい性格は不明である。 (菅野)

37号土坑 SK 37 (図44、写真44)

本遺構は調査区中央のC5グリッドに位置する。北西端で小穴と重複し、本遺構が古い。

平面形は隅丸長方形である。規模は検出面で長軸長1.6m、短軸長1.28m、底面で長軸長1.45m、短軸長1.04mを測り、深さは44cmである。壁はやや外傾し、底面は中央が少し低くなる。堆積土は1層で、自然堆積の可能性が高い。遺物は出土していない。

本遺構の時期・性格は不明である。 (菅野)

38号土坑 SK 38 (図44、写真44)

本遺構は調査区中央のB6グリッドに位置する。2号住居跡P1及び1号溝跡と重複し、2号住居跡P1より本遺構が新しく、1号溝跡よりも古い。

平面形は不整形である。規模は検出面で直径1.27m、底面で直径1.06mを測り、深さは25cmである。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は中央がやや高くなり、硬化している。堆積土は1層で、地山塊を斑状に含み、人為堆積とみられる。遺物は出土していない。

本遺構の時期は重複関係から古墳時代後期以降とみられる。性格は不明である。 (菅野)

39号土坑 SK 39 (図45、写真44)

本遺構は調査区南側のC7グリッドに位置する。4号住居跡及び小穴と重複し、本遺構が4号住居跡より新しく、小穴より古い。

平面形は不整形である。規模は検出面で直径75cm、底面で直径52cmを測り、深さは43cmである。

壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西側の下半部付近は段が付くことから、一度掘り直されている可能性がある。底面は平坦である。堆積土は3層で、黒褐色～黒色土を呈し、自然堆積の可能性が高い。遺物は出土していない。

本遺構の時期・性格は不明である。 (菅野)

40号土坑 SK 40 (図45、写真44)

本遺構は調査区中央のC 6グリッドに位置する。北側で小穴と重複し、本遺構が古い。南東側は攪乱に削平されている。

平面形は不整隅丸長方形を呈していたとみられる。規模は検出面で長軸遺存長95cm、短軸長90cm、底面で長軸遺存長87cm、短軸長62cmを測り、深さは20cmである。壁は外傾するが、北側では緩傾斜になっている。底面は平坦である。堆積土は1層で、人為堆積か自然堆積か判断はつかなかった。遺物は出土していない。

本遺構の時期・性格は不明である。 (菅野)

41号土坑 SK 41 (図45、写真44)

本遺構は調査区中央のC 6グリッドに位置する。6基の小穴が重複し、本遺構が古い。北西側は攪乱に削平されている。

平面形は楕円形を呈していたとみられる。現存部分の規模は、検出面で長径95cm、短径80cm、底面で長径85cm、短径74cmを測り、深さは23cmである。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は1層で、人為堆積か自然堆積か判断はつかなかった。遺物は出土していない。

本遺構の時期・性格は不明である。 (菅野)

42号土坑 SK 42 (図45、写真44)

本遺構は調査区東側のD 6グリッドに位置する。西側は小穴に壊されている。

平面形は、楕円形を呈していたとみられる。現存部分の規模は、検出面で南北長90cm、東西長55cmで、深さは16cmを測り、断面形は皿形を呈する。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

本遺構の時期・性格は不明である。 (菅野)

43号土坑 SK 43 (図45、写真45)

本遺構は調査区東側のD 5グリッドに位置する。北西端は小穴と重複し、本遺構が古い。

平面形は楕円形である。規模は検出面で長径1.15m、短径96cm、底面で長径68cm、短径62cmを測り、深さは15cmである。壁は緩やかに傾斜し、断面形は皿形を呈する。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

本遺構の時期や性格は不明だが、隣接する42号土坑と規模や堆積土が酷似していることから、同時期に機能した可能性がある。(菅野)

44号土坑 SK 44 (図45、写真45)

本遺構は調査区東側のD 6グリッドに位置する。北西側や南西側は小穴と重複し、本遺構が古い。なお、南側は底面を深く掘り過ぎている。

平面形は楕円形である。規模は検出面で長径1.46 m、短径1.3 m、底面で直径1.1 mを測り、深さは25cmである。壁は外傾し、底面は西へ緩く傾斜するものの、平坦で、壁際に幅約26cm、深さ約10cmの溝が巡っている。堆積土は2層で、ℓ 1は遺構廃絶後の流入土、ℓ 2は地山塊を多量に含み、掘形底面上に8～11cmの厚さで貼られた土である。遺物は出土していない。

本遺構の時期は不明だが、底面の形状から桶状の物が置かれていた可能性がある。(菅野)

45号土坑 SK 45 (図45・49・50、写真45・81・93)

本遺構は調査区東側のD 5グリッドに位置する。東半は6号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

平面形は楕円形である。規模は検出面で長径1.1 m、短径85cm、底面で長径98cm、短径68cmを測り、深さは15cmである。壁は外傾し、底面は平坦である。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。

遺物は土師器片23点、土製品1点が出土している。図49-4はほぼ完形の土師器杯である。丸底で体部は内湾し、口縁部はわずかに外反する。外面の調整は、底部から体部にかけてはヘラケズリで、口縁部はヨコナデである。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。図50-4は土製の紡錘車である。断面形は台形を呈し、直径7 mmの孔が中央に穿たれている。表面はミガキカナデで仕上げられている。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期と考えられる。性格は不明である。(菅野)

47号土坑 SK 47 (図45・49、写真45・81)

本遺構は調査区東側のD 6グリッドに位置する。北西側は小穴と重複し、本遺構が古い。

平面形は隅丸長方形である。規模は検出面で長軸長1.08 m、短軸長87cm、底面で長軸長1.22 m、短軸長89cmを測り、深さは60cmである。壁は内傾し、ややオーバーハングする。底面は平坦である。堆積土は5層で、ℓ 1～3はレンズ状堆積をなし、自然堆積とみられる。ℓ 5は粘質土で、上面から土師器甕が1個体潰れた状態で出土した。土師器甕の上には薄い板状の木片が乗っていたが、腐食が激しく取り上げることはできなかった。

遺物は図49-7の土師器甕の他に土師器の小片が10点出土した。図49-7は体部が球形で、頸部で屈曲して口縁部が外傾する。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、体部がハケメである。ハケメは体部全体だけでなく口縁部下位にまで施されており、体部上位は何度も重ねて調整している。内面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデ調整である。胎土は緻密で白～灰色を呈する。外面の体部

第1章 調査の成果

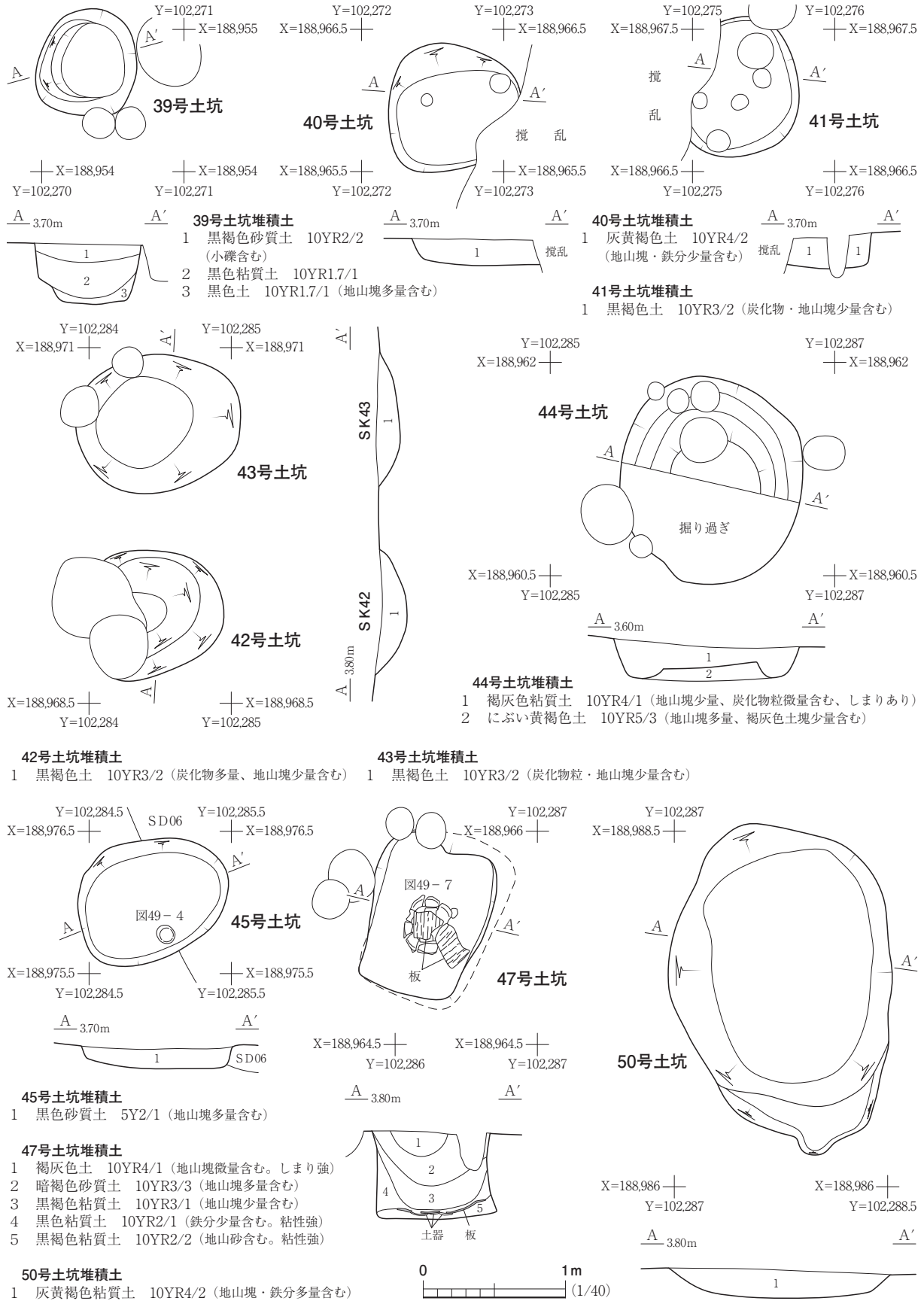


図45 39~45・47・50号土坑

中位と頸部、口縁部には煤が付着し、内面の底部付近も黒く変色していることから、煮炊きに使用されたと推測される。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代前期と推測される。本遺構は底面に土師器甕を置き、穴の上に薄い板状の木片で蓋をしていたものが、自然に埋まってしまったものと考えられる。本遺構の周囲には住居跡はなく、遺物の時期も他遺構より古いため、目的や性格は不明である。（菅野）

49号土坑 SK 49（図46・49、写真45・81）

本遺構は調査区北東側のE 4グリッドに位置する。東側は51号土坑、北側は小穴と重複し、本遺構はこれらの遺構の中で最も新しい。

平面形は不整形円形である。規模は検出面で直径1.23m、底面で直径83cm、深さ18cmを測る。壁は緩やかに外傾し、特に、南東側は傾斜が緩くなる。底面は起伏があり、断面は皿形を呈する。堆積土は1層で地山塊と鉄分を斑状に多く含むことから、人為堆積とみられる。

遺物は土師器片22点が出土している。図49-3は手捏ね土器で、平坦な底部から体部が直線的に外傾して立ち上がる。胎土は白く、ユビオサエの痕跡が残る。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期以降と推測される。性格は不明である。（菅野）

50号土坑 SK 50（図45、写真45）

本遺構は調査区北東側のD 4グリッドに位置する。

平面形は不整形楕円形である。規模は、検出面で長径2.33m、短径1.57m、底面で長径1.62m、短径1.15mを測り、深さは20cmである。壁は外傾し、北～西側は傾斜が緩くなり、南側では浅く段になって広がる。底面は平坦である。堆積土は1層で、灰黄褐色を呈し、地山塊と鉄分を斑状に含んでいることから、人為堆積とみられる。

遺物は土師器片110点、須恵器片1点が出土している。いずれも小片で図化できなかったが、内面黒色処理の土師器杯片やハケメのある土師器甕片が出土している。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期以降と考えられる。性格は不明である。（菅野）

51号土坑 SK 51（図46、写真45）

本遺構は調査区北東側のE 4グリッドに位置する。西側は49号土坑、北側は小穴と重複し、本遺構が49号土坑より古く、小穴より新しい。

平面形は楕円形である。現存部分の規模は、検出面で長径1.02m、短径83cm、底面で長径82cm、短径58cmを測り、深さは25cmである。壁は外傾し、西側は傾斜が急になる。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で、地山塊を斑状に含むことから、人為堆積とみられる。

遺物は土師器片が22点出土し、内面黒色処理された杯片を含む。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期とみられる。性格は不明である。（菅野）

54号土坑 S K 54 (図46、写真32・45)

本遺構は調査区北東側のD 4グリッドに位置する。南東側は4号建物跡P 2と重複し、本遺構が新しい。

平面形は不整長方形である。規模は検出面で長軸長1.35m、短軸長1.1m、底面で長軸長1.1m、短軸長84cmを測り、深さは28cmである。壁は外傾し、底面は南側に向かってやや傾斜する。堆積土は1層で、人為堆積か自然堆積かは判断がつかなかった。

遺物は古墳時代中期～後期の土師器片が35点出土した。

本遺構の時期は重複関係から古墳時代後期以降のものと推測される。性格は不明である。(菅野)

56号土坑 S K 56 (図46、写真46)

本遺構は調査区北東側のE 4グリッドに位置する。小穴が中央で重複し、本遺構が古い。

平面形は不整形円形である。規模は検出面で直径70cm、底面で直径62cmを測り、深さは23cmである。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。

遺物は土師器片が46点出土している。ハケメのある甕片や内面黒色処理の杯片が含まれる。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期と推測される。性格は不明である。(菅野)

57号土坑 S K 57 (図46・49・50、写真46)

本遺構は調査区東側のE 5グリッドに位置する。重複する遺構はなく、62号土坑が隣接する。なお、南西側の底面を掘り過ぎている。

平面形は不整楕円形である。現存する部分の規模は、検出面で長径1.24m、短径1.13m、底面で長径70cmを測る。壁は外傾し、底面は中央が低く窪む。断面は皿形に近い。堆積土は2層で、炭化物を多く含むが、堆積状況から自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片2点と、鉄製品1点が出土した。図49-5は土師器高杯の脚部である。杯部との接合部分から脚部は「ハ」の字に外反する。杯部の内面は黒色処理されている。脚部は中空で、外面を縦方向のヘラケズリ、内面をユビオサエとヘラナデで調整している。図50-7は鉄釘で、上端部は直角に曲がっている。

本遺構の時期は出土遺物から中世以降と推測される。性格は不明である。(菅野)

59号土坑 S K 59 (図46、写真46)

本遺構は調査区東側のD 7グリッドに位置する。南西端と南東端、北東端で小穴と重複し、本遺構が古い。なお、東側は掘り過ぎている。

平面形は不整楕円形を呈していたとみられる。現存部分の規模は、検出面で南北長99cm、底面で南北長47cmを測り、深さは20cmである。壁は緩やかに傾斜し、底面は平坦である。堆積土は2

層で、どちらも自然堆積の可能性が高い。遺物は出土していない。

本遺構の時期・性格は不明である。

(菅野)

60号土坑 S K 60 (図46、写真46)

本遺構は調査区東側のD 6グリッドに位置する。上面は攪乱により削平され、本遺構より新しい小穴も多数重複している。なお、南東側を掘り過ぎている。

平面形は不整楕円形を呈していたとみられる。現存部分の規模は、検出面で南北長60cm、東西長64cm、底面で南北長48cm、東西長52cmを測り、深さは26cmである。壁は垂直気味に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層で、自然堆積の可能性が高い。遺物は出土していない。

本遺構の時期・性格は不明である。

(菅野)

61号土坑 S K 61 (図46、写真46)

本遺構は調査区東側のD 7グリッドに位置する。北側に小穴が多数重複し、本遺構が古い。

平面形は不整楕円形である。規模は検出面で長径1.09m、短径85cm、底面で長径80cm、短径74cmを測り、深さは80cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は2層で、人為堆積か自然堆積かの判断はつかなかった。

遺物は土師器片が55点出土しており、内面黒色処理された杯片を含む。

本遺構の時期は内面黒色処理の土師器杯片が出土したことから、古墳時代後期以降と推測される。遺構の形状から柱穴の可能性も考えたが、柱痕は確認されず、性格は不明である。

(菅野)

62号土坑 S K 62 (図46、写真46)

本遺構は調査区東側のE 5グリッドに位置する。中央で小穴が重複し、本遺構が古い。

平面形は不整円形である。規模は検出面で直径1.02m、底面で直径82cmを測り、深さは32cmである。壁は外傾し、底面は平坦である。堆積土は4層で、いずれも黒褐色～黒色を呈し、自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片が23点出土しており、内面黒色処理された杯片を含む。

本遺構の時期は内面黒色処理の土師器杯片が出土したことから、古墳時代後期以降と推測される。性格は不明である。

(菅野)

63号土坑 S K 63 (図47・49、写真46)

本遺構は調査区北側のC 3グリッドに位置する。北西側は13号溝跡と重複し、本遺構が新しい。北側に64号土坑が近接する。

平面形は不整円形である。規模は検出面で直径98cm、底面で直径78cmを測り、深さは20cmである。壁は外傾し、底面は南東側がやや高くなる。堆積土は2層で、 $\ell 2$ 上面に遺物を多く含むことから、

第1章 調査の成果

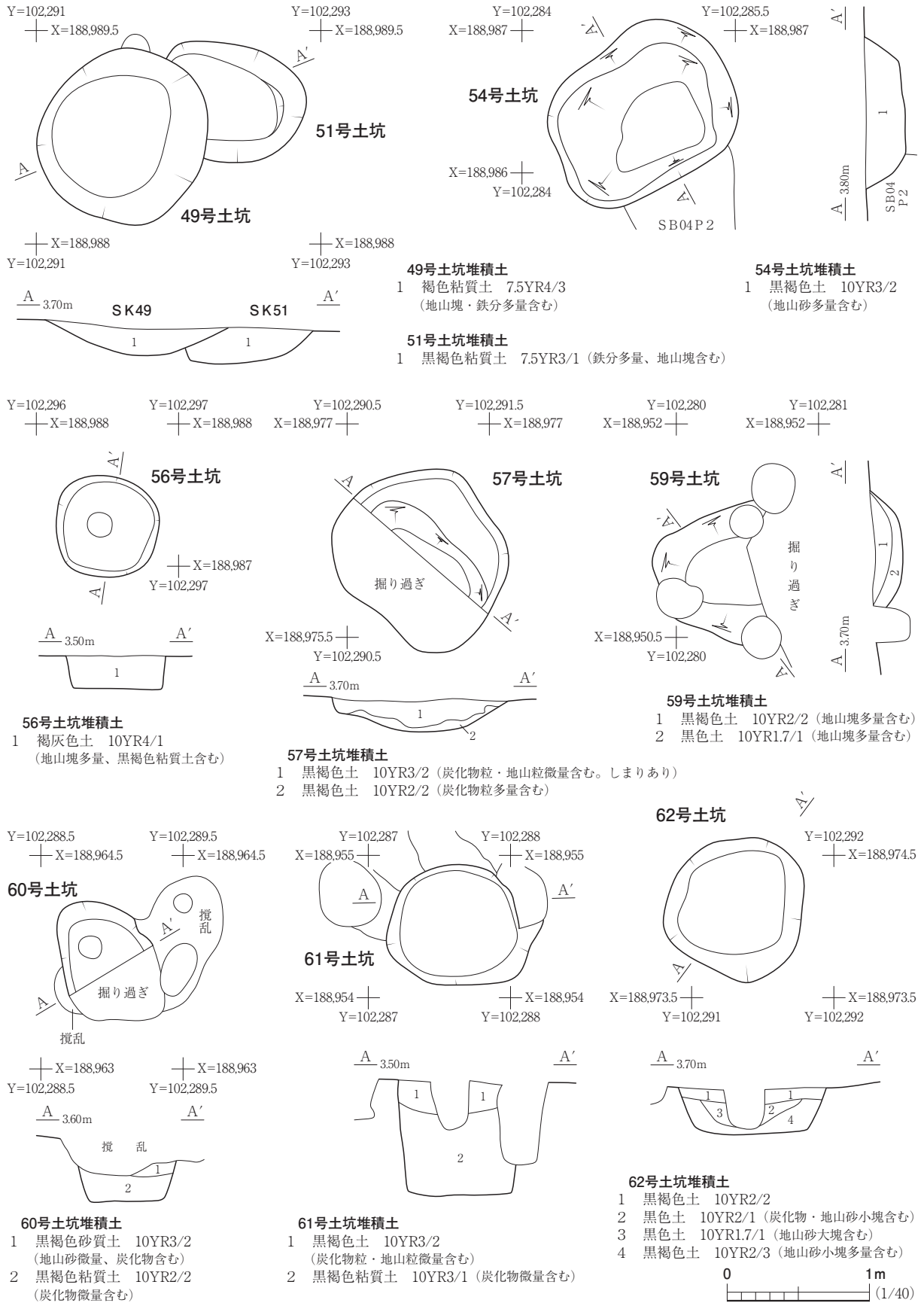


図46 49・51・54・56・57・59～62号土坑

ℓ 1 と ℓ 2 は時間差があるものの、どちらも自然堆積と考えている。

遺物は土師器片が24点出土している。

図49-1は土師器杯である。丸底で、体部はわずかに内湾し、口縁部は短く外反する。内面の口縁部下端に稜をわずかに形成する。器面は磨滅が進んでいるが、外面は体部下半から底部はヘラケズリ、口縁部はヨコナデの痕跡が確認された。内面は口縁部のヨコナデのみ確認された。図49-6は土師器壺で、体部下半が欠損した状態で出土した。体部上半は内湾し、頸部で屈曲して、口縁部が外反している。口縁部の中位には粘土紐を貼り付けた断面三角形の突帯が巡っている。外面の調整は、体部は滑らかで不明だが、口縁部の突帯より上はヨコナデによる調整がされている。体部内面は粘土紐積上痕が残り、その上からヘラナデで調整している。頸部はユビオサエ、口縁部はヨコナデである。図49-8は土師器甕である。口縁部は失われ、体部下方も粘土紐接合痕から欠損している。体部はやや縦長の球胴を呈する。胎土は赤い。外面は磨滅が激しく調整は確認できなかったが、内面は斜め上方向にナデられている。

本遺構の時期は出土遺物より古墳時代中期と推測される。破損した土器を廃棄した土坑と推測される。 (菅野)

64号土坑 SK 64 (図47、写真47)

本遺構は調査区北側のC3グリッドに位置する。15号溝跡と重複し、本遺構が新しい。北側に13号溝跡と63号土坑が近接する。

平面形は隅丸方形を基調とするが、底面は北側がすぼまる不整楕円形状を呈する。規模は検出面で長軸長88cm、短軸長76cm、底面で長軸長64cm、短軸長50cmを測り、深さは25cmである。壁は外傾し、底面は平坦である。堆積土は2層で、ℓ 1は焼土塊を含み、ℓ 2は地山塊を多量に含む。堆積状態はℓ 1・2ともに塊状の土を含むことから、人為堆積と判断した。

遺物は土師器小片が2点出土している。

本遺構の時期・性格は不明である。 (菅野)

66号土坑 SK 66 (図47、写真47)

本遺構は調査区東側のE5グリッドに位置する。東側は16号井戸跡に壊されている。

平面形は円形もしくは楕円形を呈していたとみられる。現存部分の規模は、検出面で南北長82cm、東西長50cm、底面で南北長52cm、東西長25cmを測る。壁は外傾し、底面は平坦である。堆積土は1層で、地山塊を斑状に含むことから、人為堆積とみられる。遺物は出土していない。

本遺構の時期は他遺構との重複関係から近世以前と推測される。性格は不明である。 (菅野)

67号土坑 SK 67 (図47、写真47)

本遺構は調査区中央のC4グリッドに位置する。北側で1号柵跡と重複し、本遺構が新しい。北

端と南端には本遺構より新しい小穴が重複している。

平面形は隅丸長方形である。規模は検出面で長軸長1.2m、短軸長85cm、底面で長軸長1.03m、短軸長78cmを測る。壁は外傾し、底面は南側にやや低くなる。堆積土は2層で、 $\ell 1$ は黒褐色を呈し、 $\ell 2$ は地山塊を多量含むにぶい黄褐色土である。 $\ell 1$ は自然堆積、 $\ell 2$ は人為堆積とみられる。

遺物は土師器片が22点、須恵器片が1点出土し、内面黒色処理された土師器杯片を含む。

本遺構の時期は内面黒色処理の土師器杯片が出土していることから、古墳時代後期と推測される。性格は不明である。 (菅野)

68号土坑 SK 68 (図47・49・50、写真47・81)

本遺構は調査区北側のB・C3グリッドに位置する。東側は1号溝跡、北西側は13号溝跡と重複し、本遺構が1号溝跡より古く、13号溝跡より新しい。

平面形は不整楕円形と推測される。現存部分の規模は、検出面で長径2.66m、短径1.45m、底面で長径2.36m、短径1.31mを測り、深さは20cmである。壁は外傾し、底面は東側が低く傾斜する。堆積土は4層で、 $\ell 1$ は土器を多量に含み、自然堆積とみられる。 $\ell 2・3$ は黒褐色を呈し、 $\ell 4$ は地山塊を多量含む灰黄褐色土で底面に部分的に堆積する。 $\ell 2～4$ は自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片が206点出土している。その内、形状を復元できたものを図化した。

図49-9は土師器甕である。底部を欠損しているが、長胴甕で、体部下半はやや内湾し、体部上半は垂直気味に立ち上がる。頸部で屈曲し、口縁部は強く外傾する。体部の調整は外面が縦方向のヘラケズリで、内面は上部でヘラナデである。口縁部は内外面ともヨコナデである。体部の内外面には粘土紐の接合痕や凹凸が残る。図50-1は土師器甗である。無底式で、体部下端は細く内湾するように引き出されている。体部はわずかに内湾しつつ、体部中位からは垂直気味に立ち上がり、口縁部は強く外反する。外面は摩滅しているが、体部に縦方向のヘラケズリ、口縁部にヨコナデが確認された。内面は体部がヘラナデ、口縁部がヨコナデである。

本遺構の時期は出土遺物から古墳時代後期と推測される。土器を廃棄した土坑であるとみられるが、詳細な性格は不明である。 (菅野)

69号土坑 SK 69 (図47、写真47)

本遺構は調査区中央のC4グリッドに位置する。1号柵跡と1号住居跡の間に位置する。後述する70・71・73～77号土坑も全てこの地区に密集して存在する。

平面形は円形である。規模は検出面で直径65cm、底面で直径55cmを測り、深さは15cmである。壁は垂直気味に立ち上がり、底面はやや北側に傾斜する。堆積土は1層で黒褐色を呈し、自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片が29点出土し、内面黒色処理された土師器杯片が含まれる。

本遺構は内面黒色処理の土師器杯片が出土していることから、古墳時代後期に所属するとみられ

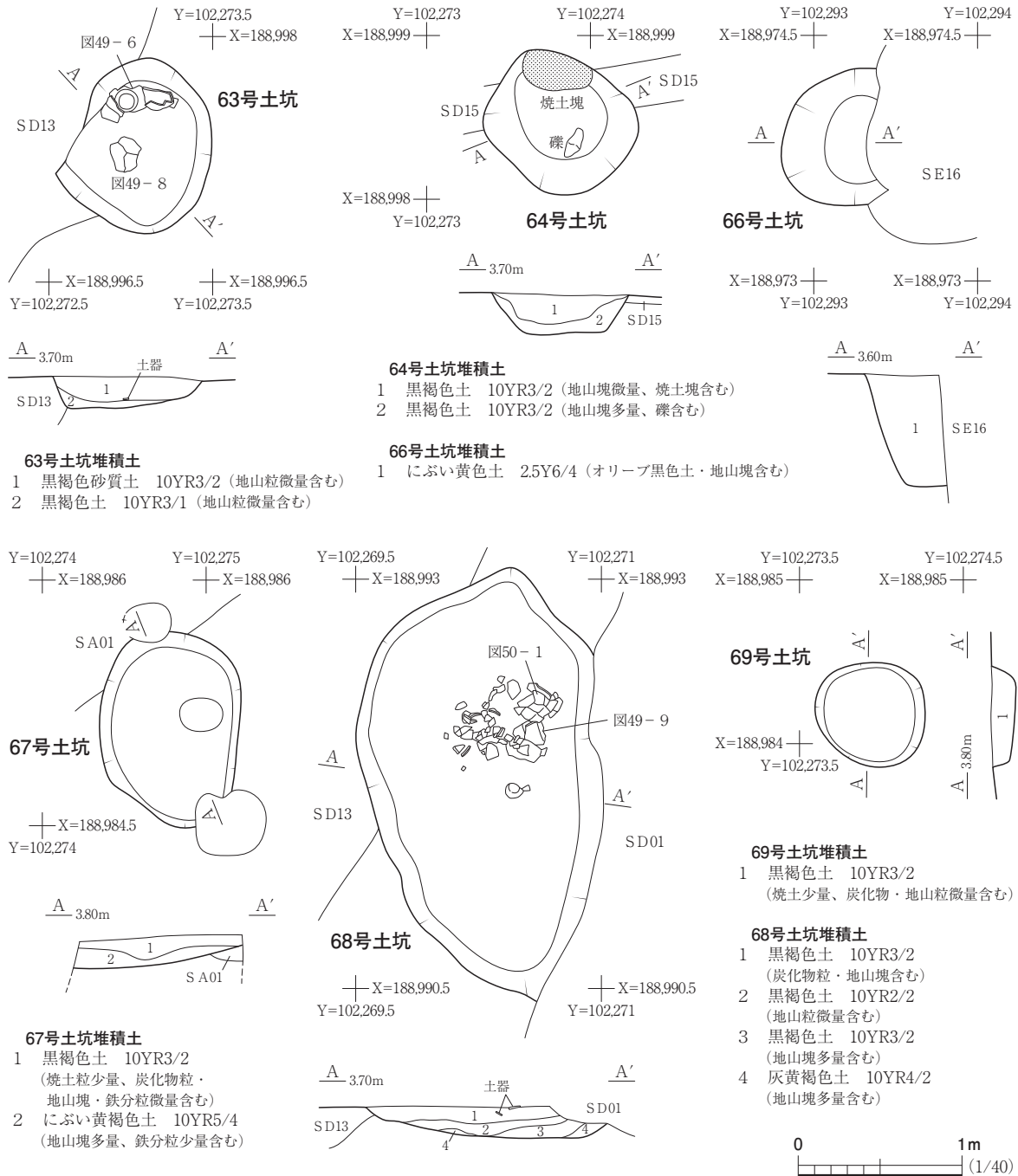


図47 63・64・66～69号土坑

る。性格は不明である。

(菅野)

70号土坑 SK 70 (図48、写真47)

本遺構は調査区中央のC 4グリッドに位置する。西端で71号土坑と重複し、本遺構が新しい。

平面形は楕円形である。規模は検出面で長径90cm、短径68cm、底面で長径50cm、短径44cmを測り、深さは22cmである。壁は外傾し、底面は西側へ傾斜している。堆積土は1層で黒褐色を呈し、自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片が21点出土し、内面黒色処理された杯片が含まれる。

本遺構は内面黒色処理の土師器杯片が出土していることから、古墳時代後期に所属するとみられる。性格は不明である。(菅野)

71号土坑 SK 71 (図48、写真48)

本遺構は調査区中央のC4グリッドに位置する。南東端で70号土坑と重複し、本遺構が古い。

平面形は楕円形である。規模は検出面で長径63cm、短径61cm、底面で長径54cm、短径52cmを測り、深さは22cmである。壁は外傾し、底面は中央が低くなる。堆積土は1層で黒褐色を呈し、自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片が8点出土し、ハケメのある甕片が含まれる。

本遺構はハケメ調整の土師器甕片が出土していることから、古墳時代後期に所属するとみられる。性格は不明である。(菅野)

73号土坑 SK 73 (図48、写真48)

本遺構は調査区中央のC4グリッドに位置する。西側は攪乱で壊されている。

平面形は隅丸方形を基調とし、南壁がいくぶん外に張り出している。規模は検出面で南北長98cm、東西遺存長66cm、底面で南北長75cm、東西遺存長62cmを測り、深さは18cmである。壁は直立し、底面は平坦である。堆積土は2層でどちらも黒褐色を呈し、自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片が53点出土し、内面黒色処理された杯片が含まれる。

本遺構は内面黒色処理の土師器杯片が出土していることから、古墳時代後期に所属するとみられる。性格は不明である。(菅野)

74号土坑 SK 74 (図48、写真48)

本遺構は調査区中央のC4グリッドに位置する。北東端で小穴と重複し、本遺構が古い。

平面形は隅丸方形である。規模は検出面で長軸長63cm、短軸長56cm、底面で長軸長56cm、短軸長44cmを測り、深さは10cmである。壁は外傾し、底面は平坦である。堆積土は1層で、地山粒を多量含むにぶい黄褐色土である。人為堆積か自然堆積か不明である。遺物は出土していない。

本遺構の時期・性格は不明である。(菅野)

75号土坑 SK 75 (図48、写真48)

本遺構は調査区中央のC4グリッドに位置する。

平面形は検出面では隅丸方形、底面では楕円形である。規模は検出面で長軸長72cm、短軸長68cm、底面で長径58cm、短径48cmを測り、深さは15cmである。壁はほぼ直立し、底面は平坦である。堆積土は1層で暗褐色を呈し、自然堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片が6点出土し、ハケメのある甕片が含まれる。

本遺構はハケメ調整された土師器甕片が出土していることから、古墳時代後期に所属するとみられる。性格は不明である。(菅野)

76号土坑 S K 76 (図48、写真48)

本遺構は調査区中央のC4グリッドに位置する。

平面形は不整形である。規模は検出面で直径64cm、底面で直径50cmを測り、深さは14cmである。壁は外傾し、底面は南西側へ傾斜する。堆積土は1層で黒褐色を呈し、人為堆積か自然堆積か不明である。

遺物は土師器片が8点出土し、ハケメのある甕片が含まれる。

本遺構はハケメ調整された土師器甕片が出土していることから、古墳時代後期に所属するとみら

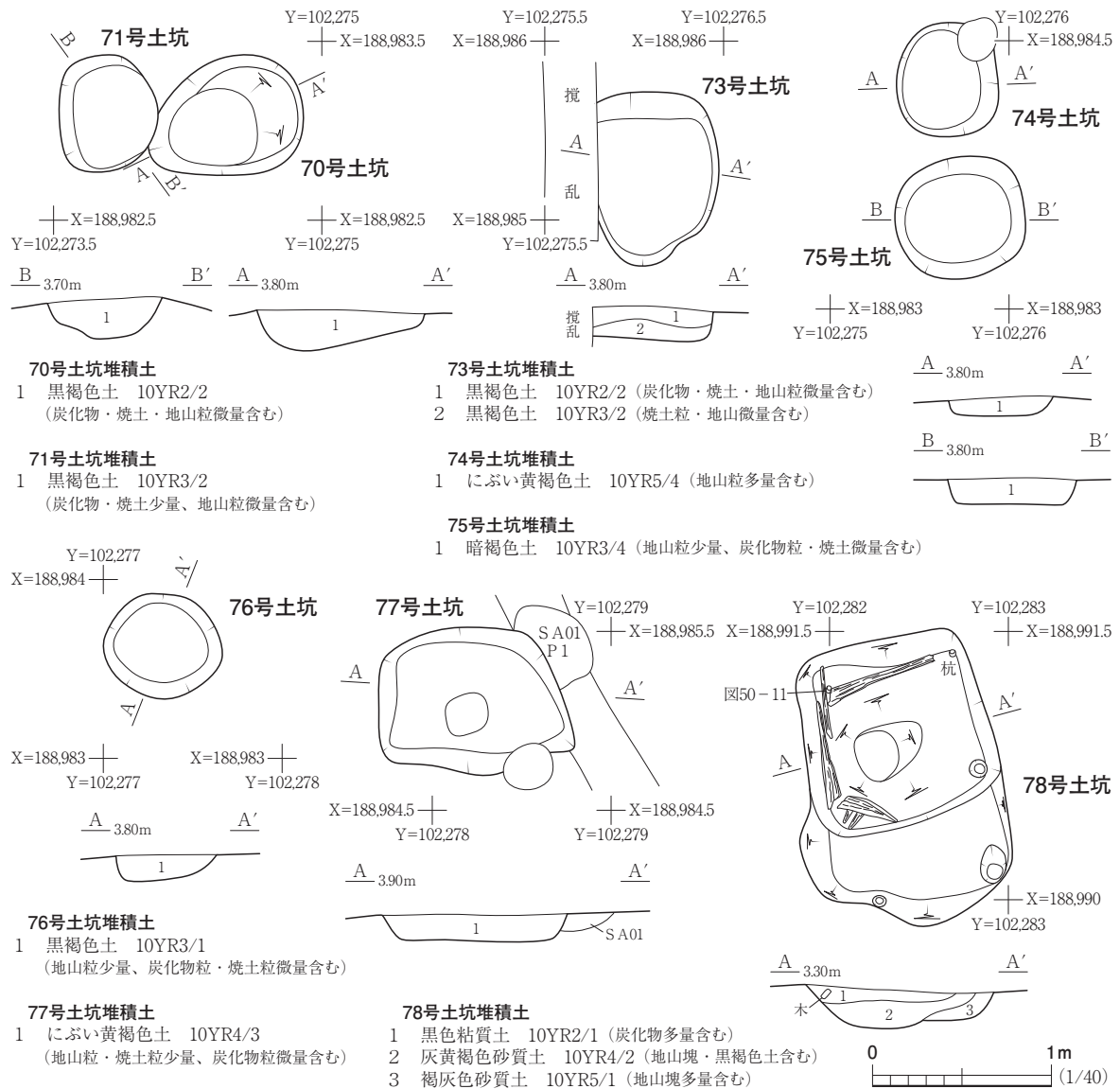


図48 70・71・73～78号土坑

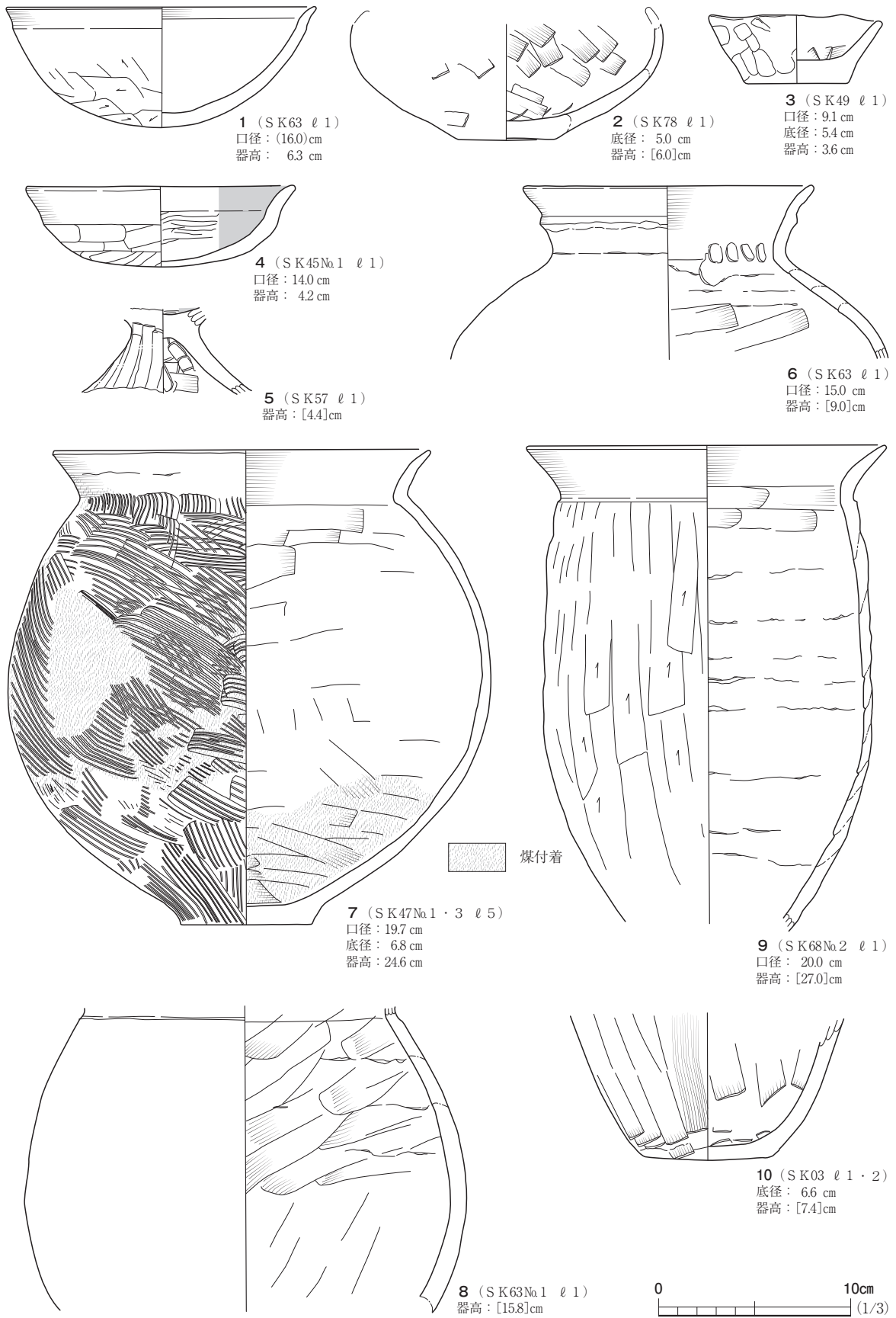


図49 土坑出土遺物 (1)

れる。性格は不明である。

(菅野)

77号土坑 SK 77 (図48、写真48)

本遺構は調査区中央のC4グリッドに位置する。東側は1号柵跡、中央と南東端は小穴と重複し、本遺構は1号柵跡より新しく、小穴より古い。

平面形は不整隅丸長方形である。規模は検出面で長軸長1.1m、短軸長82cm、底面で長軸長94cm、短軸長60cmを測り、深さは15cmである。壁は外傾し、底面は平坦である。堆積土は1層で、にぶい黄褐色土を呈し、人為堆積か自然堆積か不明である。遺物は土師器片が3点出土しているが、いずれも小片である。本遺構の時期・性格は不明である。

(菅野)

78号土坑 SK 78 (図48～50、写真48・81)

本遺構は調査区北東側のD3グリッドに位置する。5・6・11号溝跡と重複しており、堆積土

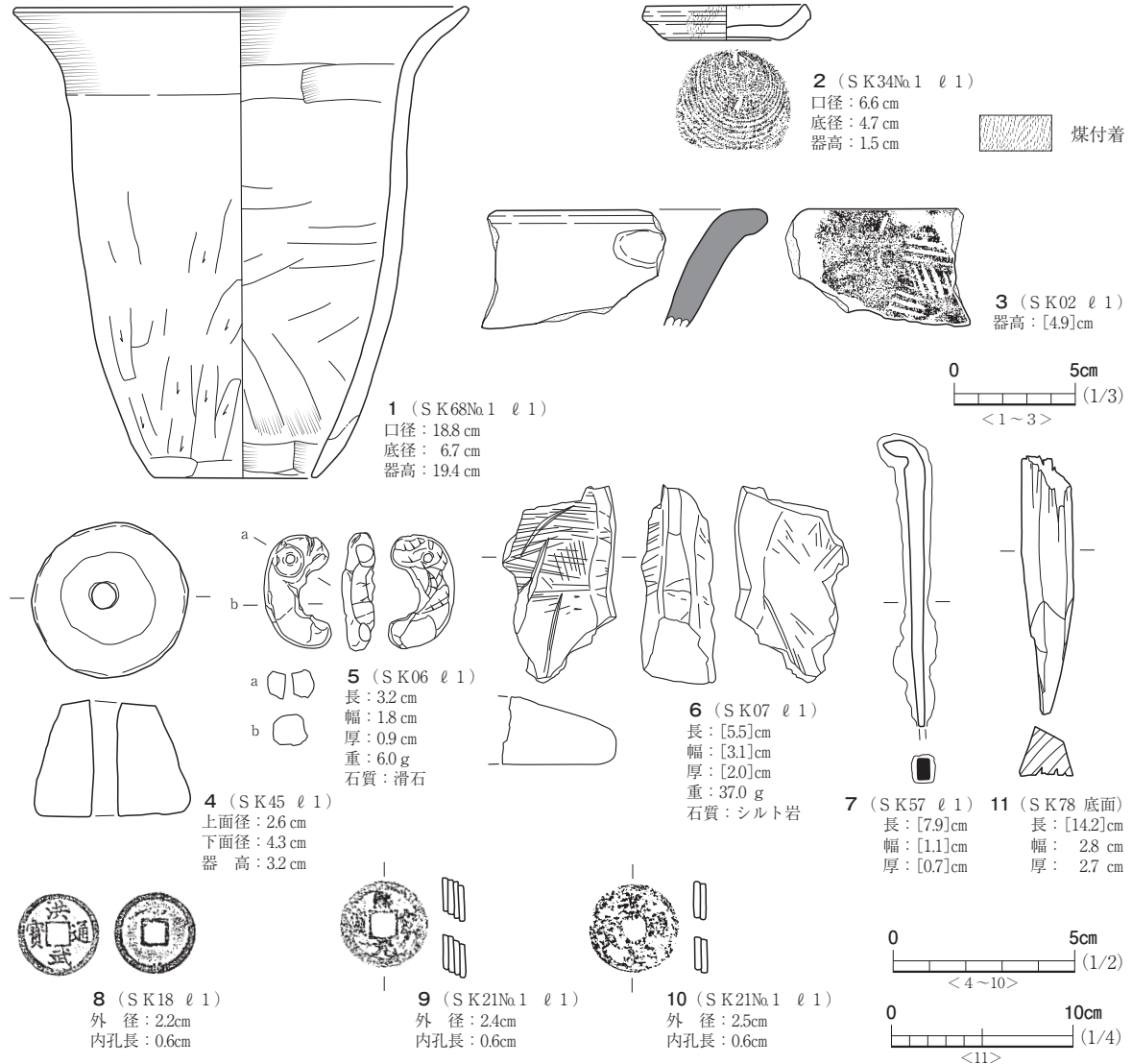


図50 土坑出土遺物 (2)

が酷似していたため、これらを調査後に底面から本遺構が確認された。本遺構が最も新しい。

平面形は不整隅丸長方形である。規模は検出面で長軸長1.63m、短軸長1.19m、底面で長軸長1.3m、短軸長98cmを測り、深さは22cmである。壁は緩やかに外傾斜する。底面は北側と南側で高低差があり、南側の底面は平坦で、南東隅と南西隅には穴が開いている。北側の底面は中央やや西寄りが低くなる。また、南東隅を除く三隅に直径3cm程の木杭が打たれ、北壁と西壁、南西隅には厚さ7mm程の板が4枚確認された。板は腐食が激しい。南東隅に杭は確認されなかったが、杭が刺してあったとみられる穴が開いている。堆積土は3層で、 $\ell 1$ は炭化物を多量含む黒色粘質土、 $\ell 2$ は地山塊を含む灰黄褐色砂質土、 $\ell 3$ は地山塊を多量含む褐灰色砂質土が堆積し、人為堆積か自然堆積か不明である。

遺物は土師器片が2点と桃の種子が2点出土している。

図49-2は平底の土師器杯で、体部は外反気味に立ち上がった後、体部中位から口縁部にかけて強く内湾する。胎土は赤く、摩滅が激しい。外面の調整はヘラナデの当たり痕がわずかにみられる。内面はヘラナデ調整である。図50-11は底面北側の北西隅に刺さっていた木杭で、先端が鈍により尖らせてある。

本遺構の時期は重複関係から古墳時代後期以降と推測される。性格は不明であるが、長辺に3カ所、短辺に2カ所の杭を打ち、土坑の壁を板で囲った形跡があることから、水溜や肥溜の可能性もある。(菅野)

第6節 井戸跡

調査区内から井戸跡を19基確認した。10号井戸跡を除き、全て素掘りの井戸跡である。形状は筒形のものと同漏斗状のものに大別され、前者は調査区中央に、後者は調査区南側に多く分布する。なお、調査に際しては工事の掘削深度までが調査対象とされたため、これより深くなる部分については、調査を断念したことから、1～6・8・11～19号井戸跡の底面は未確認で、調査において掘り下げた部分までの深さとその地点における平面形をそれぞれの挿図に破線で示した。

1号井戸跡 SE 01 (図51・65、写真49)

本遺構は調査区南西側のB7グリッドに位置する。1号溝跡の東側に重複し、本遺構が新しい。堆積土が1号溝跡と酷似していたために確認が遅れ、1号溝跡の $\ell 2$ 上面で検出した。

平面形は円形で、断面形は漏斗形である。規模は検出面で直径約1.5m、周壁の傾斜が変わる深さ約60cmの部分で直径約80cmである。これより下の断面形は筒形で、標高1.8m以下から湧水する。堆積土は記録を取る前に除去してしまったため不明である。

本遺構の機能時期は1号溝跡 $\ell 2$ 堆積時期よりは新しいが、詳細は不明である。(菅野)

2号井戸跡 S E 02 (図51、写真49)

本遺構は調査区南端のB 8グリッドに位置する。3・7・13号井戸跡と隣接し、調査区内で井戸跡が集中する区域に存在する。LⅢ上面で検出した。

平面形は円形で、断面形は漏斗形である。規模は検出面で直径約1.5m、周壁にわずかな段が付く深さ約1.3mの部分で直径約60cmである。これより下は筒形で、標高2.1m以下から湧水する。堆積土は6層に区分した。ℓ1～4はオリーブ黒色と黒色を呈し、地山塊が含まれている。ℓ5には地山塊とオリーブ黒色土塊が含まれている。ℓ6は締まりが弱く、水分を多く含みグライ化が著しい。堆積状態については、ℓ1～5が人為堆積、ℓ6は人為堆積か自然堆積か不明である。

遺物は土師器片が16点、須恵器片が1点、在地産の中世陶器片が1点出土した。

本遺構の時期は、直接本遺構に伴う遺物が出土しておらず、不明である。(菅野)

3号井戸跡 S E 03 (図51・63、写真49・82)

本遺構は調査区南端のB・C 8グリッドに位置する。2・7・13号井戸跡と隣接している。LⅢ上面で検出した。

平面形は不整形円形で、断面形は漏斗形に近い。規模は検出面で直径約1.4m、周壁には段が認められ、深さ約90cmの部分で直径約40cmである。これより下の断面形は筒形で、標高2.1m以下から湧水する。堆積土は6層に分かれる。ℓ1～4は黒色を基調とする粘質土で、ℓ1には人頭大程の礫を多く含む。ℓ5・6はグライ化しており、ℓ6は植物遺体をわずかに含む。ℓ1～5には地山塊が含まれていることから人為堆積、ℓ6の堆積状態は判断がつかなかった。

遺物は土師器片が4点、瓦質土器片が1点、肥前産と考えられる陶器片が1点、粘土塊が2点出土した。図63-8はℓ1から出土した瓦質土器の播鉢片で、体部は直線的に外傾し、口縁部は丸くわずかに肥厚する。外面の器面はあばた状に爆ぜ、煤も付着していることから、相当熱を受けているものとみられる。内面には幅3.2cmの工具で間隔を空け卸目が刻まれている。卸目の1単位は5条の溝で構成され、溝の幅は3～5mm、深さは2mm程で、広く深い。卸目の下半は使用により摩滅している。出土遺物の年代は、播鉢が中世、陶器片は近世と推測される。

本遺構は出土遺物から近世には埋められたものと考えている。(菅野)

4号井戸跡 S E 04 (図51、写真49)

本遺構は調査区中央のC 6グリッドに位置する。2号住居跡、40号土坑と隣接する。LⅢ上面で検出した。

平面形は円形で、断面形はわずかに上部が開く漏斗形である。規模は検出面で長径約1.1m、周壁の傾斜が変わる深さ約1mの部分で直径約50cmである。標高2.7m以下から湧水する。堆積土は5層に分かれ、ℓ2・3には地山塊が含まれ、ℓ4は地山に近似していることから人為堆積と考え

第1章 調査の成果

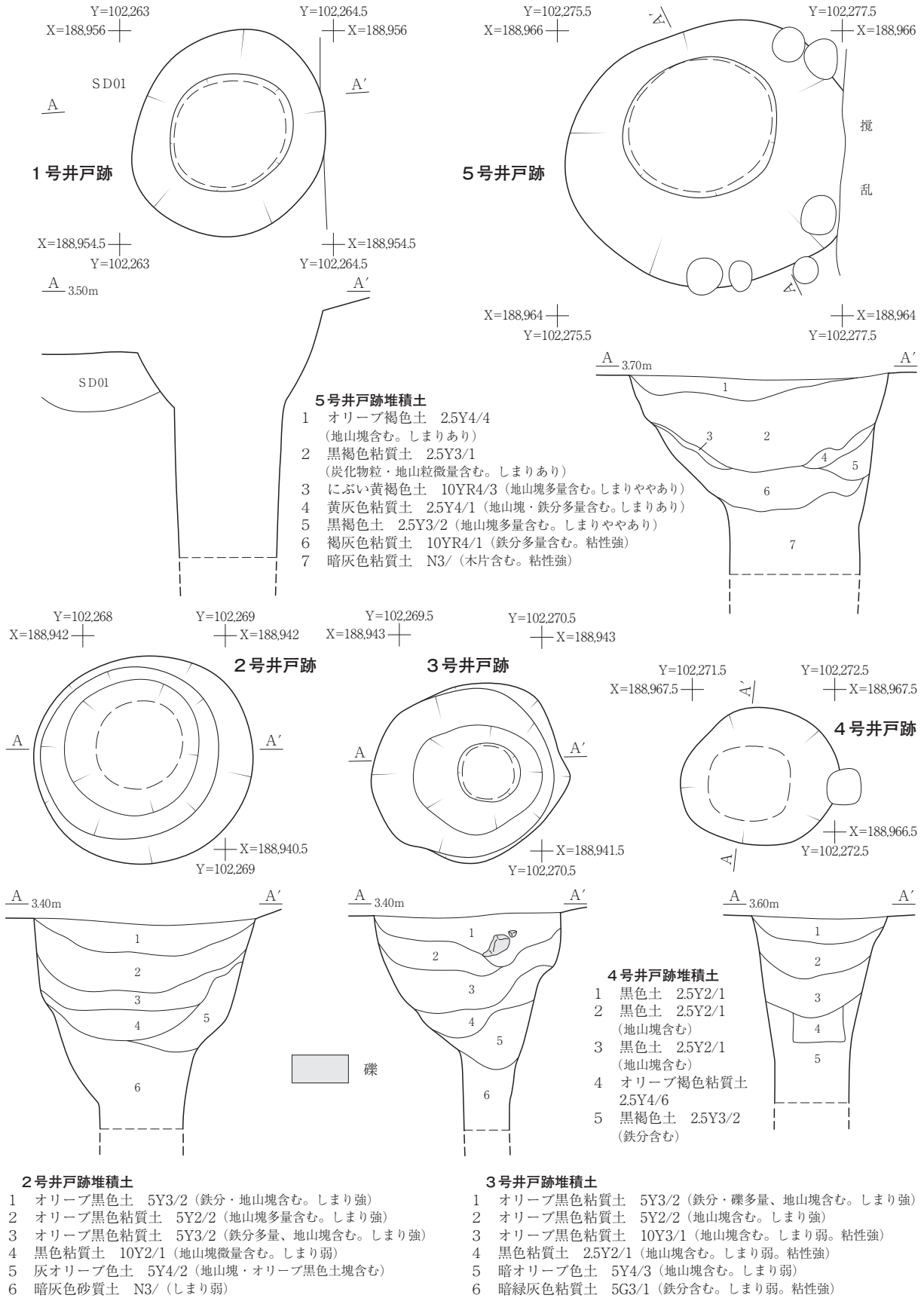


図51 1～5号井戸跡

ている。ℓ5はグライ化し、層中に赤錆状の赤斑が見られる。

遺物は土師器片9点、須恵器片1点、近世の染付の磁器片1点、石器1点が出土した。

本遺構は出土遺物から近世には埋められたものと考えている。(菅野)

5号井戸跡 SE 05 (図51・63、写真50・94)

本遺構は調査区中央のC6グリッドに位置する。小穴と重複し、本遺構が古い。東端を攪乱に壊されている。LⅢ上面で検出した。

平面形は円形で、断面形は上部が大きく開く漏斗形である。規模は検出面で直径約2m、周壁の傾斜が変わる深さ約90cmの部分で直径約1mである。これより下の断面形は筒形で、標高2.4m以下から湧水する。堆積土は7層に区分され、ℓ1・2・5は地山塊や地山粒を含む。ℓ3・4は地山に起因する土である。ℓ6・7はグライ化し、ℓ7には木片が斑状に含まれている。堆積状況については、ℓ1～6は土質や混入物から人為堆積と考えているが、7については不明である。

遺物は土師器片48点、須恵器片2点、かわらけ片1点、近世の陶器片2点、石製模造品1点、鉄製品1点が出土した。図63-1はかわらけである。ロクロで成形され、底面はヘラケズリで調整されている。体部はわずかに内湾して立ち上がる。同図10は石製模造品の勾玉形の未成品とみられる。薄い剥片を素材とし、半弧状に形を整えている。孔はなく、研磨もされていないことから、未成品と推測した。同図11は鉄鍋の片口部分である。口唇部に向かって厚く作られている。

本遺構は出土遺物から近世には埋められたものと考えている。(菅野)

6号井戸跡 SE 06 (図52・63、写真49・83)

本遺構は調査区中央のD6グリッドに位置する。小穴と重複し、本遺構が古い。LⅢ上面で検出した。

平面形は円形で、断面形は筒形である。周壁には小さな段が見られる。規模は検出面で直径約1.2m、深さ約80cmの段の部分で直径約90cmである。標高2.7m以下から湧水する。堆積土は5層に区分した。ℓ1は堆積土上面からℓ2・3を切るように堆積していることから、別の穴の堆積土の可能性もある。ℓ2・3には地山塊が含まれ、ℓ5には木片が含まれている。ℓ4・5はグライ化している。堆積状態については、ℓ2～4は土質や混入物から人為堆積、ℓ5は判断できなかった。

遺物はℓ5から木製品5点が出土している。その内、形状がわかる2点を図化した。

図63-12は曲物の底板で、直径15.8cm、厚さ1.8cmである。表面には鋸で板状に切り出した痕跡が残り、側面との角を面取りしている。裏面は腐食が進んでいるが、手斧による加工痕が認められる。同図13は板状木製品である。残存部で長さ28.2cm、幅21.4cm、厚さ3.3cmを測る。両面に板状に切り出した時の鋸痕が残る。さらに、その上には刃物による浅い線状痕がみられることから、組板として使用されたと推測する。

木製品以外に出土遺物がなく、本遺構の時期は不明である。(菅野)

7号井戸跡 S E 07 (図52、写真50)

本遺構は調査区南端のB8グリッドに位置する。3号住居跡の堆積土上面で検出した。また、重複する小穴よりも本遺構が古い。2・3・13号井戸跡と隣接している。

平面形は不整形で、断面形は周壁に段が付く筒形である。規模は検出面で直径約1.5m、深さ75cmの段の部分で直径約85cm、深さ1.9mである。底面は鍋底状をなす。堆積土は4層に区分した。ℓ1は地山塊を含み、ℓ2は中央で「コ」の字状に落ち込む。ℓ3・4は地山に起因する土である。堆積状態については、土質と混入物から全て人為堆積と判断した。

本遺構は底面が湧水層まで達していないものの、形態が6号井戸跡と類似することから、掘りかけの井戸跡と推測する。遺物は出土しておらず、本遺構の時期は不明である。(菅野)

8号井戸跡 S E 08 (図52、写真50)

本遺構は調査区南端のC8グリッドに位置する。5号住居跡堆積土上面で検出した。

平面形は円形で、断面形は上部がわずかに開く筒形である。規模は検出面で直径約1.6m、深さ90cm程の周壁の傾斜の変換部で直径1.03mである。標高1.2m以下から湧水する。堆積土は5層に区分した。ℓ1～4は地山に起因する土で、ℓ1～3は灰色を基調とする粘質土もしくは砂質土、ℓ4はにぶい黄橙色土である。ℓ3と4の層離面は特異で、ほぼ垂直である。ℓ5は灰色の土である。堆積状態については、ℓ1～4が人為堆積、ℓ5は人為堆積か自然堆積か不明である。

遺構の重複関係から古墳時代中期より新しいことが確認できたが、遺物は出土しておらず、本遺構の詳細な時期は不明である。(菅野)

9号井戸跡 S E 09 (図52・63、写真50)

本遺構は調査区南側のC7グリッドに位置する。4号住居跡の堆積土上面で検出した。小穴とも重複し、本遺構より新しいものと古いものがある。

平面形は円形で、断面形は擂鉢形を呈する。規模は検出面で直径約2.2m、底面では直径76cm、深さ1.2mである。堆積土は3層に区分され、ℓ1・2はオリーブ黒色を呈し、地山塊を含む。ℓ3はグライ化し、貝殻が混入している。すべて人為堆積とみられ、貝殻は埋めた際に混入したと推測される。

遺物は土師器片が12点出土している。図63-5は丸底の土師器杯で、体部は内湾しながら大きく開き、口縁部は短く直立する。内外面ともに口縁部をヨコナデ調整している。他の土師器片も同時期のもので、重複する4号住居跡に関連するものであろう。

本遺構については井戸跡としたが、掘り込みが湧水層に達していないことから、基本的には土坑とするのが妥当であると考えている。本遺構に直接伴う遺物が出土しておらず、時期は不明である。(菅野)

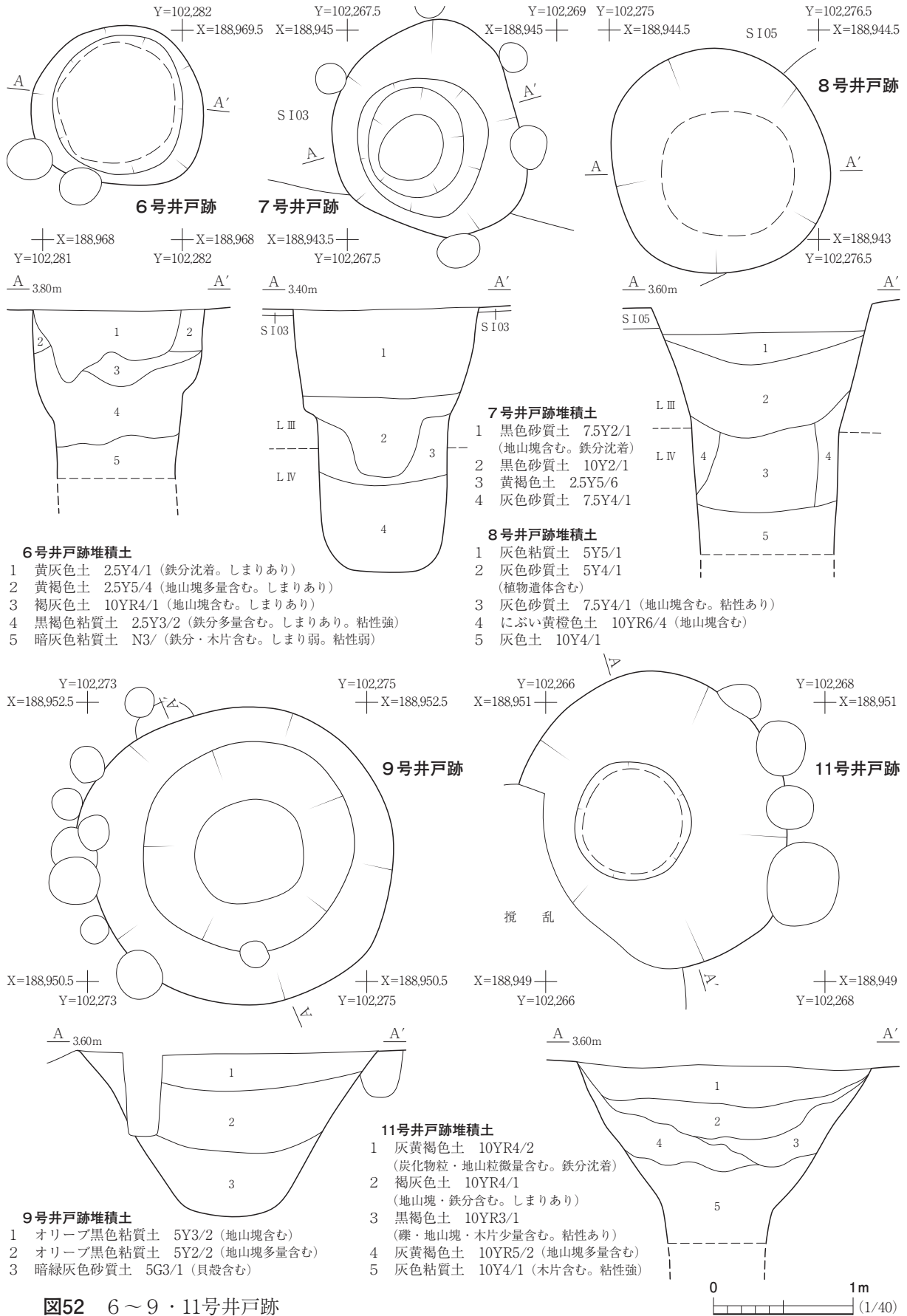


図52 6～9・11号井戸跡

10号井戸跡 S E 10

遺 構 (図53・54、写真51～53)

本遺構は、調査区南東側のD7グリッドに位置する。小穴と重複し、本遺構が古い。調査当初は一辺1.8m程の方形状に広がる暗褐色土の範囲として検出したが、調査の進展に伴い、直径70cm程の円筒形状の井戸枠とこれを据えるための根太、3区分されそれぞれ役割を違える大型の掘形とこれを埋めている土や礫、土留めのための施設等で構成される井戸跡であることが明らかとなった。本遺構の説明にあたっては、場の性格を考慮し、図53上段右に示すようにA・B・C区に区分する。また、A区とB区を区切る土留め施設を「南側土留め」、A・B区とC区を区切る土留め施設を「東側土留め」と呼称し、井戸が作られて行く過程に沿って記述する。

図53上段左に掘形の平面図を示す。平面形はA・B区とした西側が隅丸長方形、この東側にC区とした隅丸方形の掘形が取り付く形状となっている。西側の掘形は「南側土留め」によりA・B区に区分したが、掘形が掘られた時点では一連のものであったことが確認できる。掘形の規模は、A・B区掘形が南北長2.2m、東西長2mで、深さ1.7m、C区掘形が南北長1.7m、東西長1.3mで、深さ1.2mである。A・B区掘形の底面はほぼ平坦で、C区掘形の底面は西に向かって下がっている。A・B区の底面は軟弱な砂質土(LIV)で、検出面から90cm以上掘り下げた、標高2.6m以下になると水が湧き出す。

同図中段には井戸枠設置時の姿を示した。A・B区掘形底面には、半裁した丸太材の断面を下にして根太が4本敷き並べられ、その北端に井戸枠を置いている。東側土留めは井戸枠や根太などの大型の部材が設置された後に作られたと考えられ、大型の板材や丸太材が多数使用されている。同図中段右に示す立面図からは、まず杭を打ち、その東側(C区側)に板材を置き、C区側の土の土留めとしていることが確認できる。隙間には小ぶりの板材が詰められている。土留め上部には先端が宝珠状に加工された丸太材を横に置き、北端には角柱状の材が立てられている。東側土留めの規模は南北長1.8m、板材の下端から宝珠状に加工された丸太材上端までの高さは60cmである。東側土留めは若干A・B区側に倒れ込んでいることから、A・B区が空いている段階である程度まで埋め戻されたことを考えている。

同図下段左は南側土留めが設置され、A・B区に区分された時の姿である。同図下段右には南側土留めの立面図を示す。この段階で、B・C区は土留めの上端くらいまで埋め戻されていたものと考えている。南側土留めは先端を尖らせただけの細い杭を隙間なく打ち込んで作られている。杭の材料には枝が多用され、直径は2～4cm程のものが多く、表皮を残すものが大半を占める。杭を補強するための横木は認められなかった。南側土留めも若干A区側に倒れ込んでいることから、A区に先行して、ある程度まで埋め戻されたことを考えている。南側土留め西端では、井戸枠と土留めの間隙間を埋めるように直方体の材が設置されていた。南側土留めの規模は東西長1.2m、高さ60～95cmである。

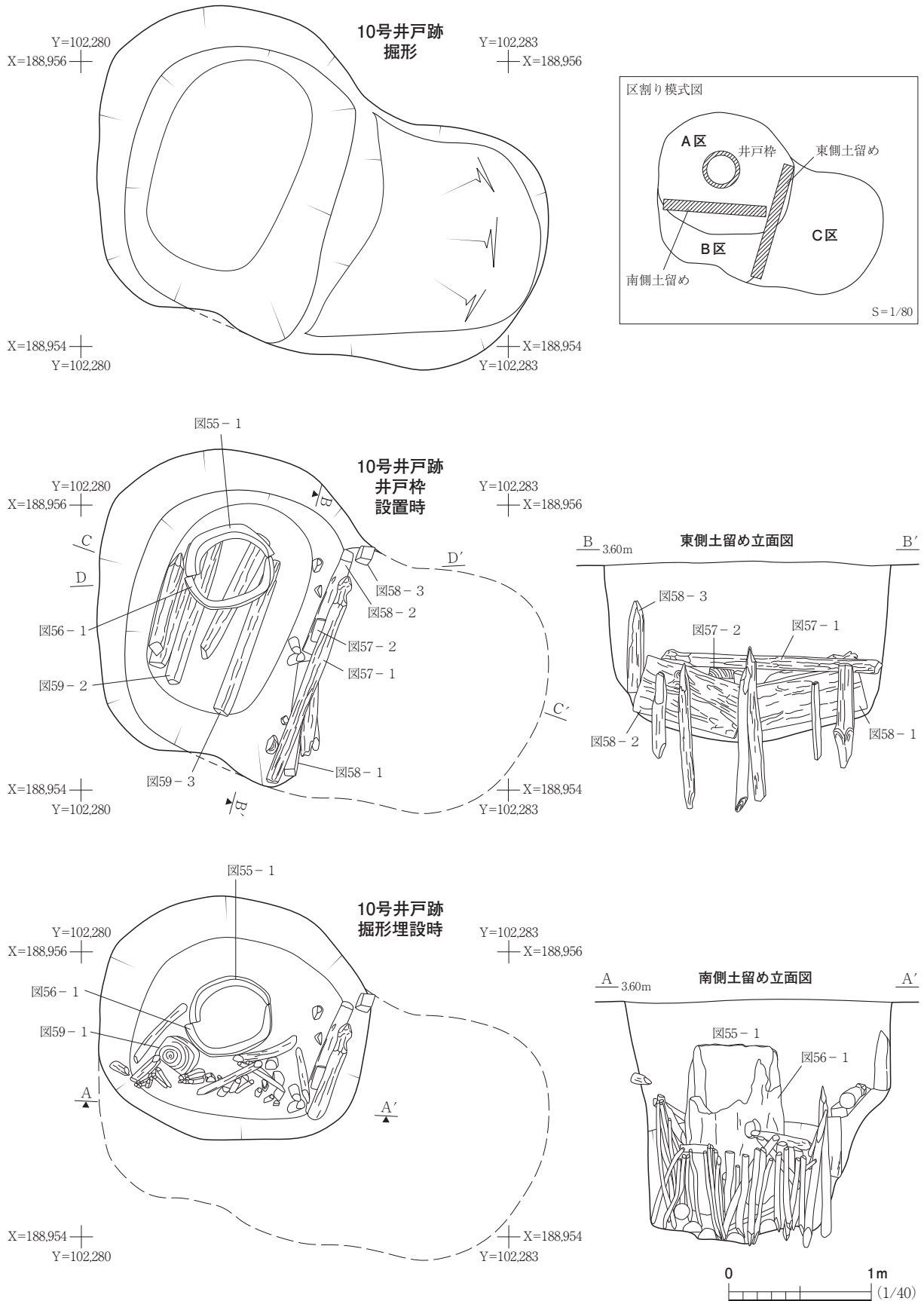


図53 10号井戸跡

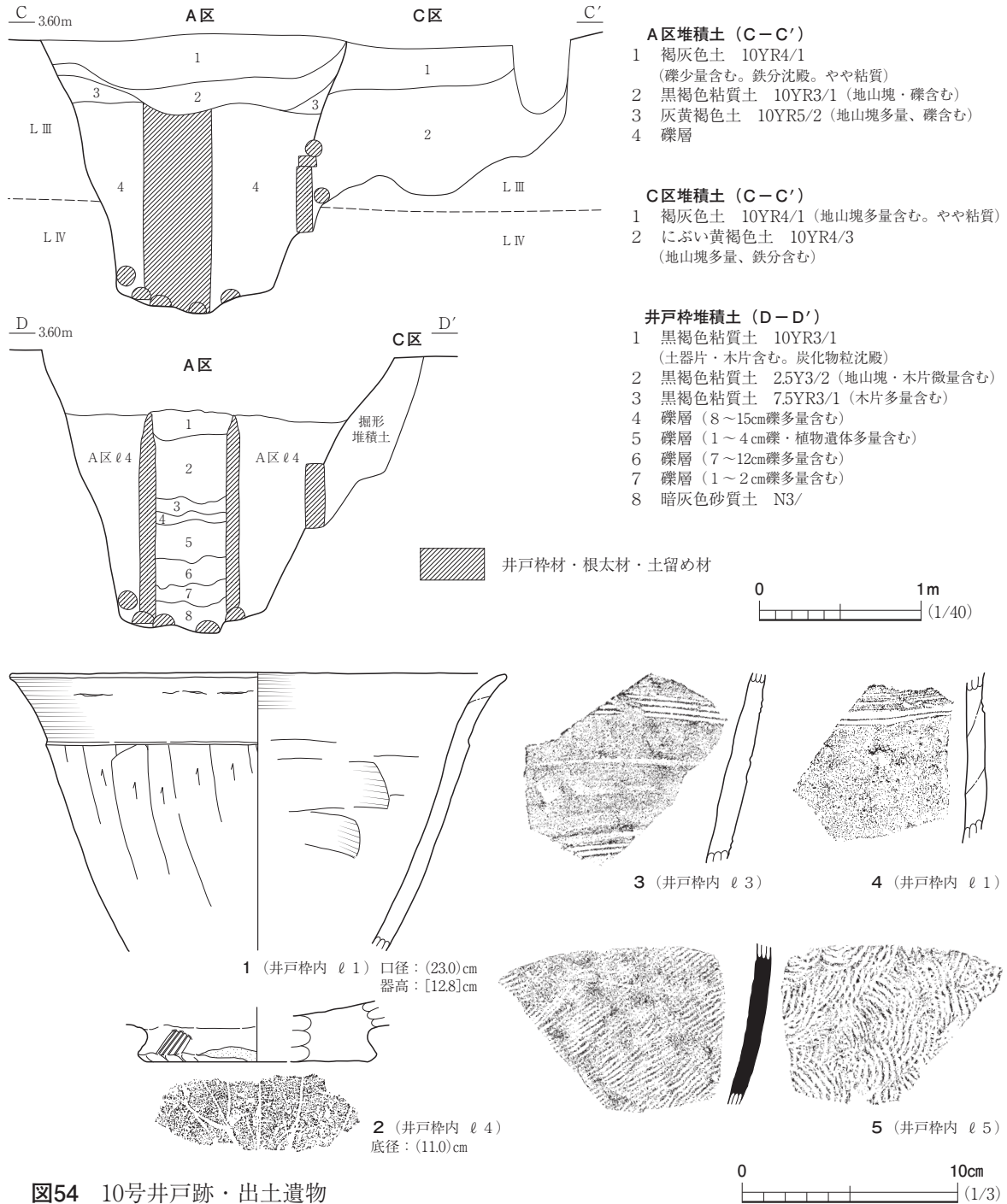


図54 10号井戸跡・出土遺物

A区中央に設置された井戸枠は、直径70cm程の大木の半割材を削り貫き、これを筒状に組み合わせたものである。組み合わせる段階で、縄や楔などを使い2つを固定した形跡は観察できなかった。同図下段左の平面図に示す通り、接合部分は若干東西方向にずれていた。井戸枠は横断面と縦断面の形状から丸木舟を転用している可能性が高い。

図54のC-C'にはA・C区の堆積土を示す。A区の堆積土は4層に区分した。ℓ 1~3は地山塊や礫を含み、廃棄時の人為堆積土とみられる。ℓ 4は径2~13cmの円礫が隙間なく詰め込まれていた。これらの円礫は井戸枠を固定し、井戸枠に開けられた穴から入る水をろ過するために入れ

られたものと考えている。井戸枠はℓ4より上は腐食しており、ℓ1・2中にも痕跡はなかった。C区の堆積土は2層で、どちらも地山塊を多量に含み人為堆積である。B区については土層断面図を作成していないが、地山塊を非常に多く含む土が堆積していた。

同図のD-D'は井戸枠内の堆積土である。ℓ1～3は黒褐色粘質土で、廃棄時の人為堆積土とみられる。ℓ4～7は礫層で、礫の大きさはℓ4が径8～15cm、ℓ5が径1～4cm、ℓ6が径7～12cm、ℓ7は径1～2cmと、大礫と小礫が互層をなしている。このことから、ℓ4上面が井戸使用時の底面で、ℓ4～7の礫層は下から湧き出る水をろ過するためのものと推測した。調査時には周囲を掘り下げてから井戸枠内部を調査したため、ℓ4上面まで水が溜まるかどうかは確認できなかった。また、礫はすべて円礫で、遺跡近辺では確認できず、真野川から持ち込まれたものと考えている。ℓ8は均質な暗灰色砂質土で、LIVが周囲から流入したものと推測される。 (菅野)

遺物 (図54～60、写真82・84～89)

遺物は土師器杯片5点、土師器甕片19点、須恵器甕片1点、木製品57点が出土している。土師器片・須恵器片は井戸枠内とC区堆積土から出土し、特徴的な5点を図54に示した。その他は古墳時代後期以前の土師器片である。木製品は井戸枠と土留め材・根太材から加工痕が明瞭なものを図55～60に18点図化した。

図54-1～5は井戸枠内堆積土から出土した土師器片と須恵器片である。1はℓ1から出土した土師器甕である。底部が欠損しているため、甕の可能性もある。体部から口縁部にかけて外傾し、口縁部がわずかに外反する。外面の調整は体部がヘラケズリ、口縁部がヨコナデで、頸部にわずかに稜線を形成する。内面の調整は横方向のヘラナデとヨコナデである。2はℓ4の礫層から出土した土師器甕の底部である。底面には木葉痕が残り、体部の立ち上がりにハケメがわずかに観察される。3と4は土師器甕の体部と思われる破片である。3はロクロ成形で、体部に櫛歯状工具による圏線が上下2段巡っている。このような圏線は古瀬戸の瓶子の体部によくみられるが、本遺物には施釉されず、胎土は灰色を呈して軟質で、陶器には見えない。4は上部にヨコナデの形跡があり、甕の口縁部と体部の境の破片と推測する。胎土は3と似て灰色を呈する。5は須恵器甕の体部で、外面にタタキメ、内面に同心円状の当具痕が明瞭に残る。

図55-1は井戸枠の北側半分である。全体の形は半円筒形で、上部は腐食し、外面の下部は内湾する。横断面形は平底風の半円形で、下部へ行くほど底面が幅広くなる。外寸は長さ1.26m、幅64.4cm、高さ28.4cmで、厚さは3～12cmである。内寸は幅48～50cm、深さ17.5～19cmを測る。側端部は両側とも水平に加工され、逆三角形もしくは逆台形の切り込みが、右側端に3カ所、左側端に4カ所作られている。切り込みは幅11～21cm、深さ2～4.5cmで、間隔は3～20cmである。左右で切り込みの位置は一番下のもの以外一致しない。側端の厚みは左右で最大5cmの差がある。底部には3カ所に穴が内面から開けられている。穴は中軸線上に2個、左側に1個である。穴の大きさは長軸長5.5～6.5cmである。切り込みと穴の位置を模式図に示した。遺物全面に手斧による加工痕がはっきりと見え、使用痕や摩滅は見当たらない。加工してすぐ井戸跡に設置したものとみられる。

手斧痕の幅は、3～7cmである。

図56-1は井戸枠の南側半分である。取り上げの際に5つに分解してしまい、分解したものを復元して図示し、写真は分割の状態に掲載している。全体の形は半円筒形だが、上部は腐食し、外面のみ下部にかけてゆるやかに内湾している。横断面形は平底風の浅い半円形を呈し、図55-1よりも幅広である。外寸は長さ1.17m、幅67.5cm、高さ31.2cmで、厚さは3～7cmである。内寸は幅53～55cm、深さ21～22cmを測る。側端部は両側とも水平に加工され、切り込みが両側端に2カ所ずつ、左右でおおよそ対応するように作られている。切り込みの規模や形は図55-1とほぼ同じだが、間隔は8.5～11cmである。底部には2カ所に穴が開けられており、中央の穴は長軸長11cmで内外面から開けられ、底部右下の穴は長軸長4cmで外側から開けられている。切り込みと穴の位置を模式図に示した。遺物全面に手斧による加工痕が明瞭に残り、使用痕や摩滅は見当たらない。樹種はモミである。

図57-1～4は東側土留めに使用された木製品である。1は長さ1.54m、直径9.5cmを測る丸太材である。一部腐食しているが、全体的に加工痕は明瞭である。全体が手斧により面取りされ、上部は宝珠形に加工しているが、その裏側は直径の半分を削りとするような形状になっている。その10cm下には、腐食が激しいが、深さ2.5cmの不整形の穴が開いている。2と3は長さ・幅・厚さともにほぼ同じ寸法の小板材である。同一板材から切り出されたとみられる。どちらも全面に手斧痕が残り、2の表面には鋸による切り込みの溝がある。4も全面に手斧痕が残る板材で、側面から裏面にかけて穴が1個貫通している。穴の用途は不明である。図化していない1面には、鋸で切り出した痕跡がある。

図58-1～4も東側土留めに使用された木製品である。1は長さ79.4cm、幅32.6cm、厚さ11cmを測る大型の板材である。表面と裏面、左側面は手斧痕が残り、右側面は割面である。表面の中軸線上には一辺3cmの方形の穴が3個並んで開けられている。穴と穴の間隔は25cmである。また、表面の右側4分の1は炭化している。上端には深さ4cm、厚さ4cmほどの段が作られている。下端は鋸で切られたとみられる。樹種はカエデである。2は長さ81.6cm、幅41cm、厚さ11cmの大型の板材である。表面は全面が炭化しており、表面の中軸線上中央に1と同様の一辺3cmの方形の穴の痕跡が1個確認された。裏面と右側面には手斧痕が残り、左側面は割面である。上端の左端には幅13cm、深さ5cm、厚さ3.5cmの突出部がある。樹種はモミである。1と2は規模、上面の突出部、表面の炭化、方形の穴など共通点が多く、同一の建築物に使用されていたものを転用した可能性がある。3は角材で、上部は腐食して元の長さは不明だが、3側面が手斧で加工されているのに対し、1側面は割面であることから、板材から切り出された可能性が高い。下端は鋸で切られたとみられる。樹種はモミである。4は丸太材である。腐食が激しく元の長さは不明である。中央に直径5～7cmの穴が開けられ、穴は内部で直角に折れ、側面に貫通しL字形になっている。

図59-1は南側土留めと井戸枠の間から出土した柱材で、長さ50.4cm、幅27.4cm、厚さ19cmを測る。井戸枠の固定のために入れたとみられる。木の丸みに沿って面取りしているが、表裏面は平坦

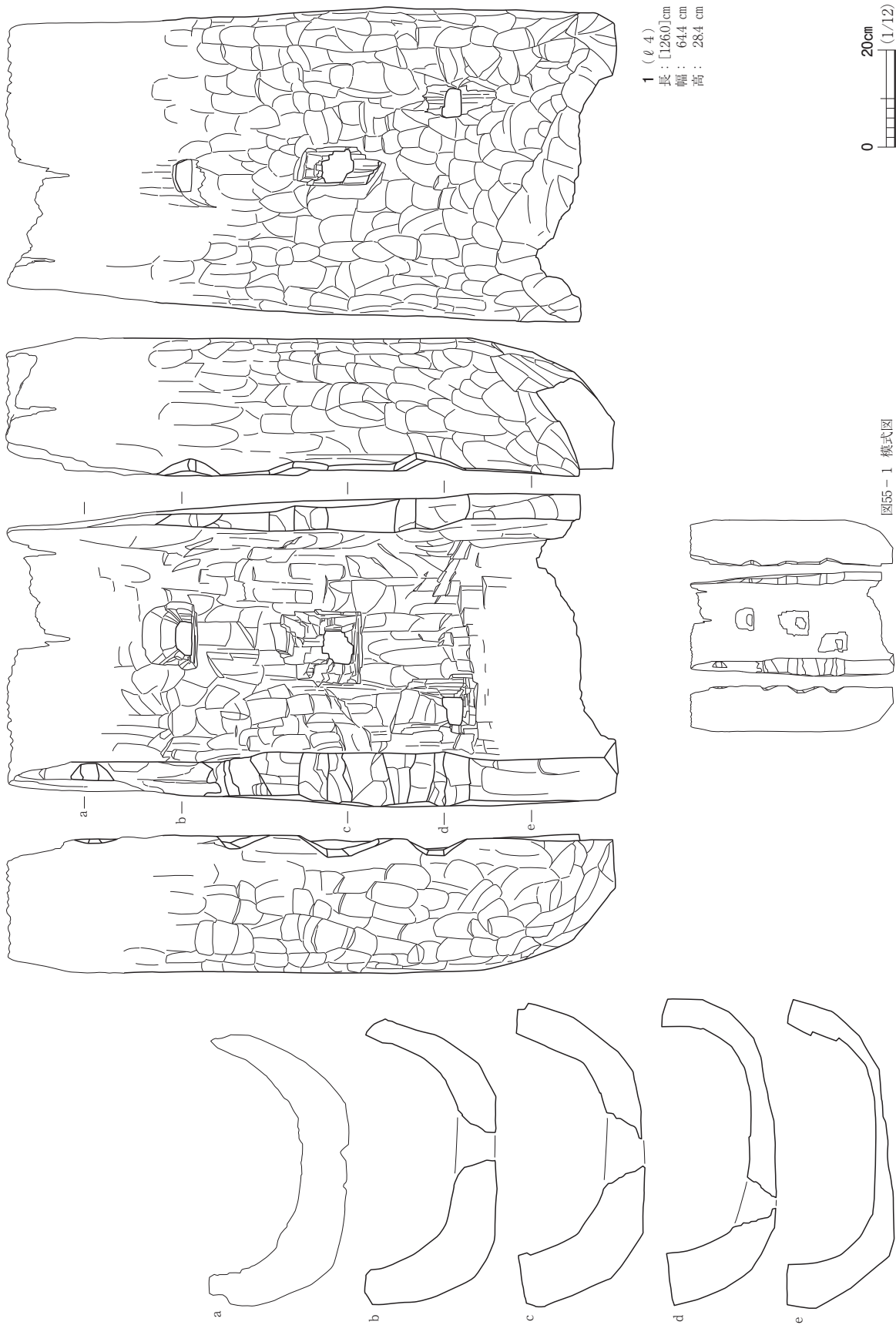


図55 10号井戸跡出土遺物 (1)

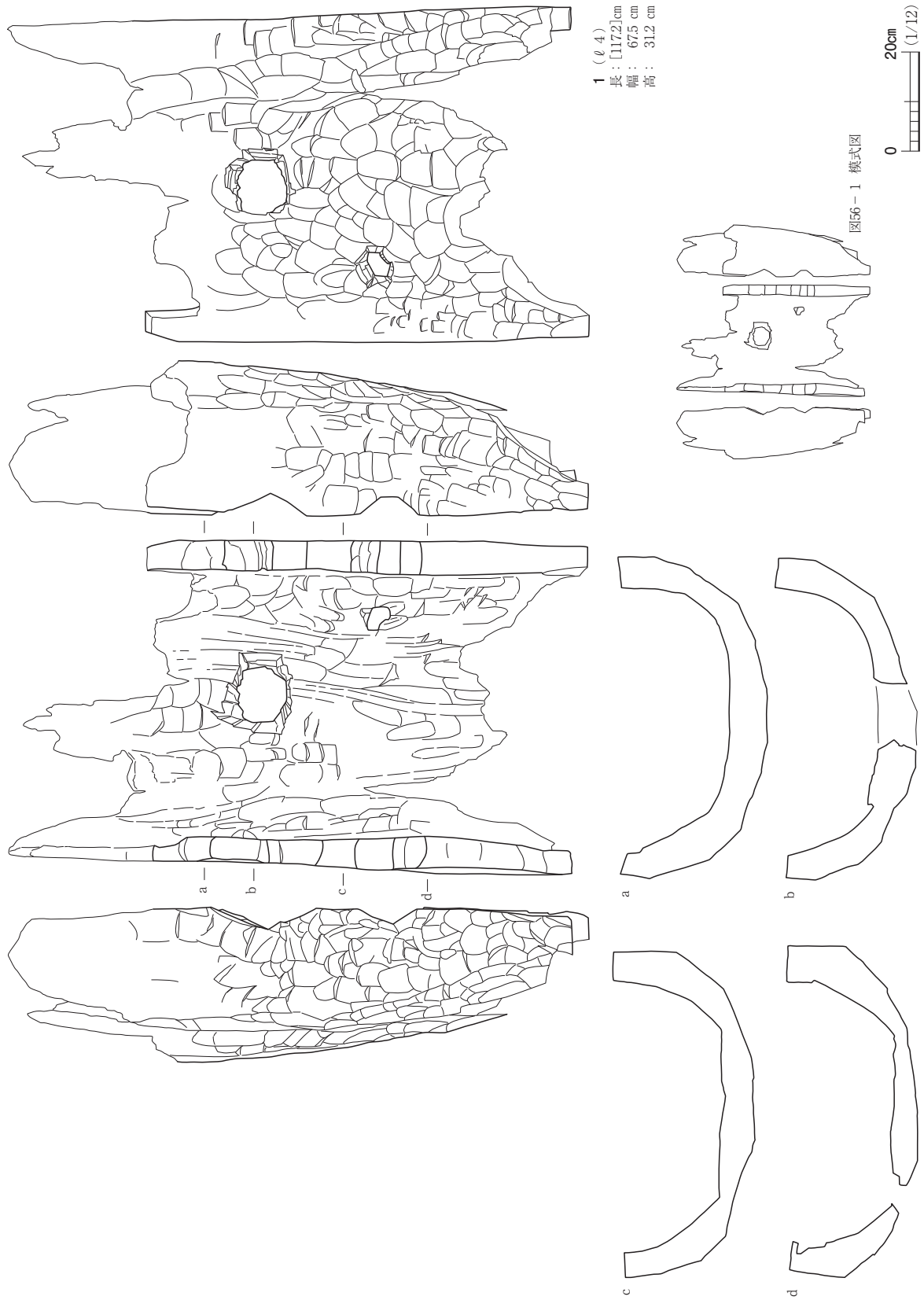


図56 10号井戸跡出土遺物 (2)

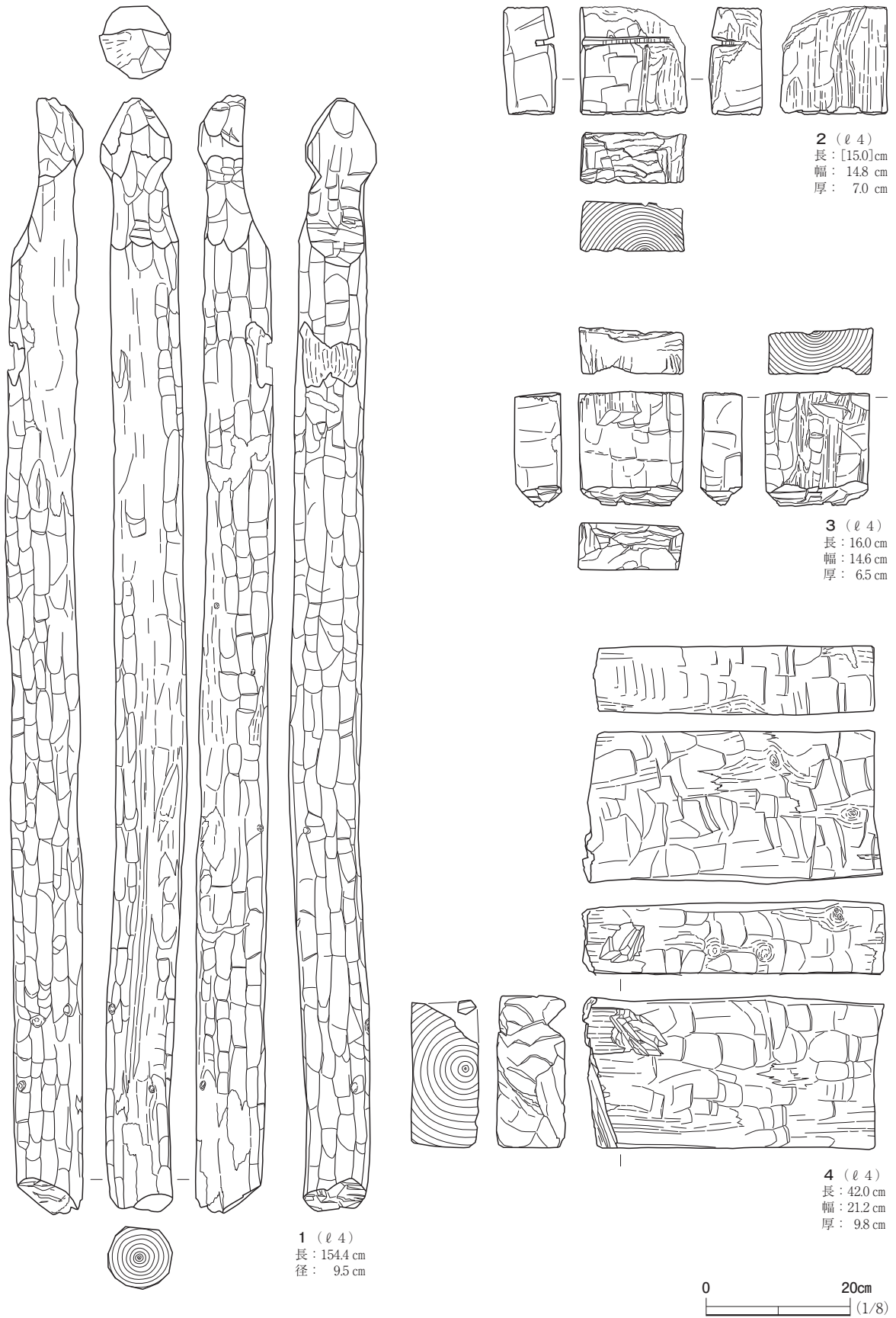


图57 10号井戸跡出土遺物 (3)

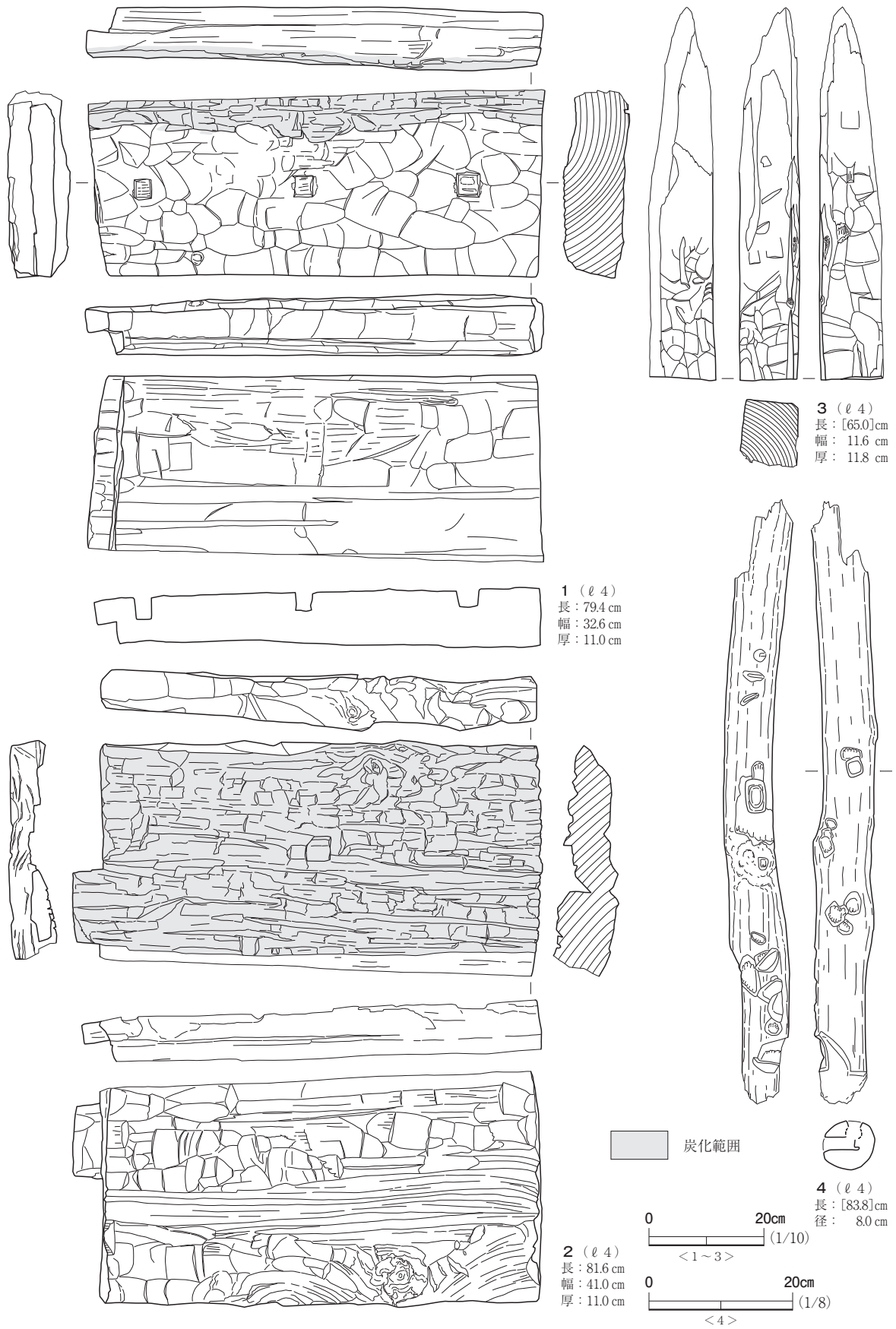


図58 10号井戸跡出土遺物 (4)

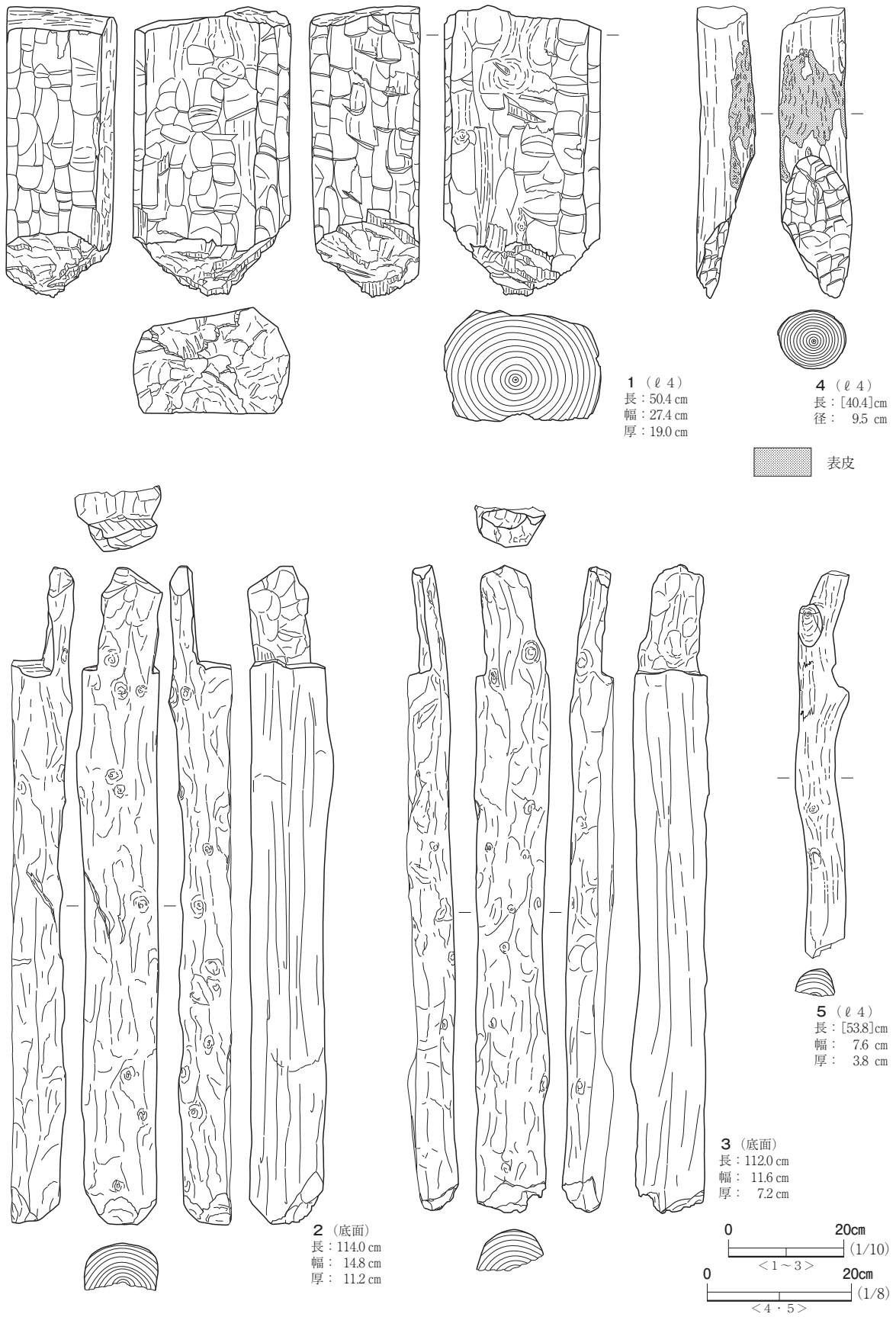


図59 10号井戸跡出土遺物 (5)

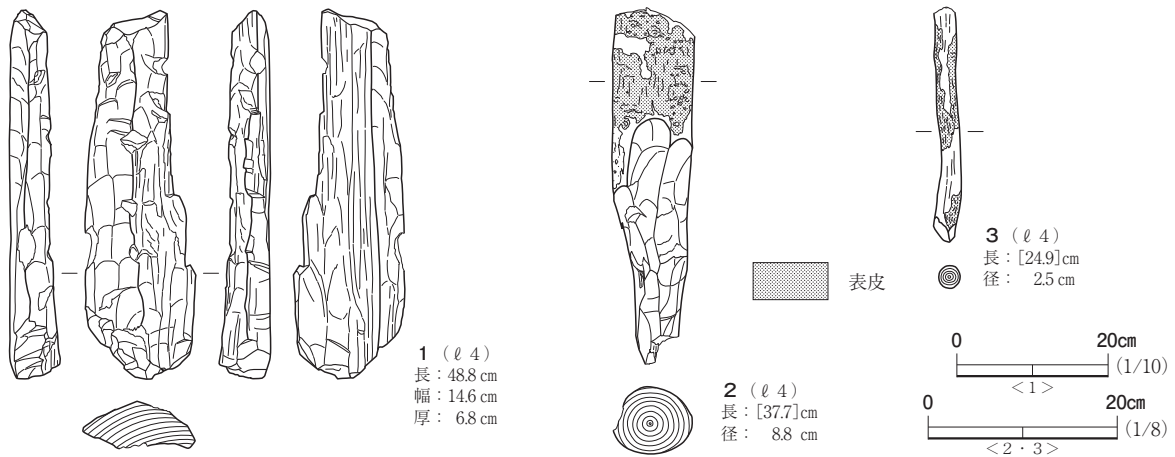


図60 10号井戸跡出土遺物（6）

に加工され、下端は4方向から削ってやや尖らせている。全面に手斧痕が明瞭に残る。

図59-2・3は根太材である。両者は断面で接合し、直径約15cmの丸太材に復元される。どちらも上端がL字形に加工してあり、接合すると横から見て「コ」の字形になる。建築部材の転用材と推測される。全体的に摩滅と腐食が激しく、加工痕ははっきりとしない。樹種はクリである。

図59-4・5、図60-1～3は杭材で、さまざまな太さの枝等の先端を鉋で尖らせて杭にしている。図60-1は多角形の別部材から切り出されたものとみられる。

まとめ

本遺構は調査区最大の井戸跡である。半割りして削り貫いた丸太材を組み合わせ、井戸枠として使用していた。この巨大な井戸枠を設置するために、A・B区とした大きな掘形が掘られ、底面には自重で井戸枠が沈下しないよう、長い丸太材を半裁し、断面を下にした根太が敷かれていた。C区は井戸枠など大きな資材を降ろすための作業場、B区は長い根太を敷くための作業空間で、最終的にはそれぞれ土留め施設を設けた上で、埋め戻されている。A区には井戸枠が設置され、その内外は多量の円礫で埋められていた。また、井戸枠は横断面と縦断面の形状から丸木舟を転用した可能性がある。放射性炭素による年代測定を井戸枠と根太材で実施したところ、7世紀末～9世紀中葉の年代観が示された。本遺跡でこの時期に比定できる遺構は、掘立柱建物跡と5a・6a・11号溝跡である。

(菅野)

11号井戸跡 SE 11 (図52、写真54)

本遺構は調査区南側のB7・8グリッドに位置し、北側に6m程離れて、ほぼ同規模の12号井戸が造られている。東側で小穴と重複し、本遺構が古い。検出面はLⅢ上面である。

平面形は円形を基調とし、断面形は上部が大きく開く漏斗形である。規模は検出面で直径約2.1m、深さ約1mに見られる周壁の傾斜の変換部で直径約70cmである。これより下の断面形は筒形で、標高2.1m以下から湧水する。堆積土は5層に区分した。ℓ1下位は鉄分が沈着し、ℓ2～4は地山塊を含み、ℓ3には木片も含まれる。ℓ5はグライ化し、木片が多く混入していた。堆積

状態についてはℓ2～4が混入物から人為堆積、ℓ5については判断できなかった。

遺物は出土しておらず、本遺構の時期は不明である。(菅野)

12号井戸跡 S E 12 (図61、写真54)

本遺構は調査区南西側のB7グリッドに位置する。本遺構上部の浅い窪みが6号土坑と重複するが、重複部がわずかであるため新旧は不明である。検出面は浅い窪みの底面である。

平面形は不整形の落ち込みが軸線を違えて2基結合したような形態で、断面形は段が付く漏斗形に近い。規模は浅い窪みの底面で、東西遺存長約1.3m、南北長約1.9m、深さ90cmの段の部分で直径約45cmである。これより下の断面形は筒形で、標高2.4m以下から湧水する。堆積土は4層に区分した。ℓ1・2は地山塊、ℓ4は木片を含んでいる。ℓ3は基盤土に近い灰色粘質土である。堆積状態は混入物と土質から、ℓ1～3は人為堆積、ℓ4については判断できなかった。

遺物が出土しておらず、本遺構の時期は不明である。(菅野)

13号井戸跡 S E 13 (図61、写真54)

本遺構は調査区南端のB・C8グリッドに位置する。3号住居跡の堆積土上面で検出した。また、重複する小穴より本遺構が古い。2・3・7号井戸跡と隣接している。

平面形は不整形で、断面形は上部が大きく開く漏斗形である。規模は検出面で直径約1.7m、深さ1.2mの段の部分で直径約60cmである。これより下の断面形は筒形で、標高2m以下から湧水する。堆積土は7層に分かれ、ℓ1～4は地山塊や地山砂を含む。ℓ5はグライ化した黒褐色粘質土、ℓ6・7は地山に起因する土である。堆積状態については、ℓ1～4・6・7は人為堆積土、ℓ5は判断できなかった。ℓ1～4とℓ6・7の堆積には時間差がある。

遺物は土師器片が1点、陶器片が3点出土している。

陶器片に近世の大堀相馬焼が含まれることから、近世には埋められたものと推測する。(菅野)

14号井戸跡 S E 14 (図61・64、写真54・83)

本遺構は調査区東側のD6グリッドに位置する。小穴と重複し、本遺構が古い。南端は1号柵跡のP15と重複し、本遺構が新しい。LⅢ上面で検出した。

平面形は円形を基調とし、断面形は周壁に段が見られる漏斗形である。規模は検出面で直径約2.2m、深さ約1m下の段の部分で直径は約80cmである。これより下の断面形は筒形で、標高2.3m以下から湧水する。堆積土は6層に分かれる。ℓ1～4は地山塊を含む土、ℓ5は黒褐色粘質土である。ℓ6の最上部からは拳大～人頭大の礫が多量に出土し、木片も多量に混入していた。堆積状態についてはℓ1～4が人為堆積、ℓ6も礫の堆積状態から人為堆積と判断した。井戸の廃棄に際して、埋められたものと考えられる。

遺物はℓ6から木製品が2点出土している。図64-1は長さ78.6cm、幅11.2cm、厚さ4.2cmの板

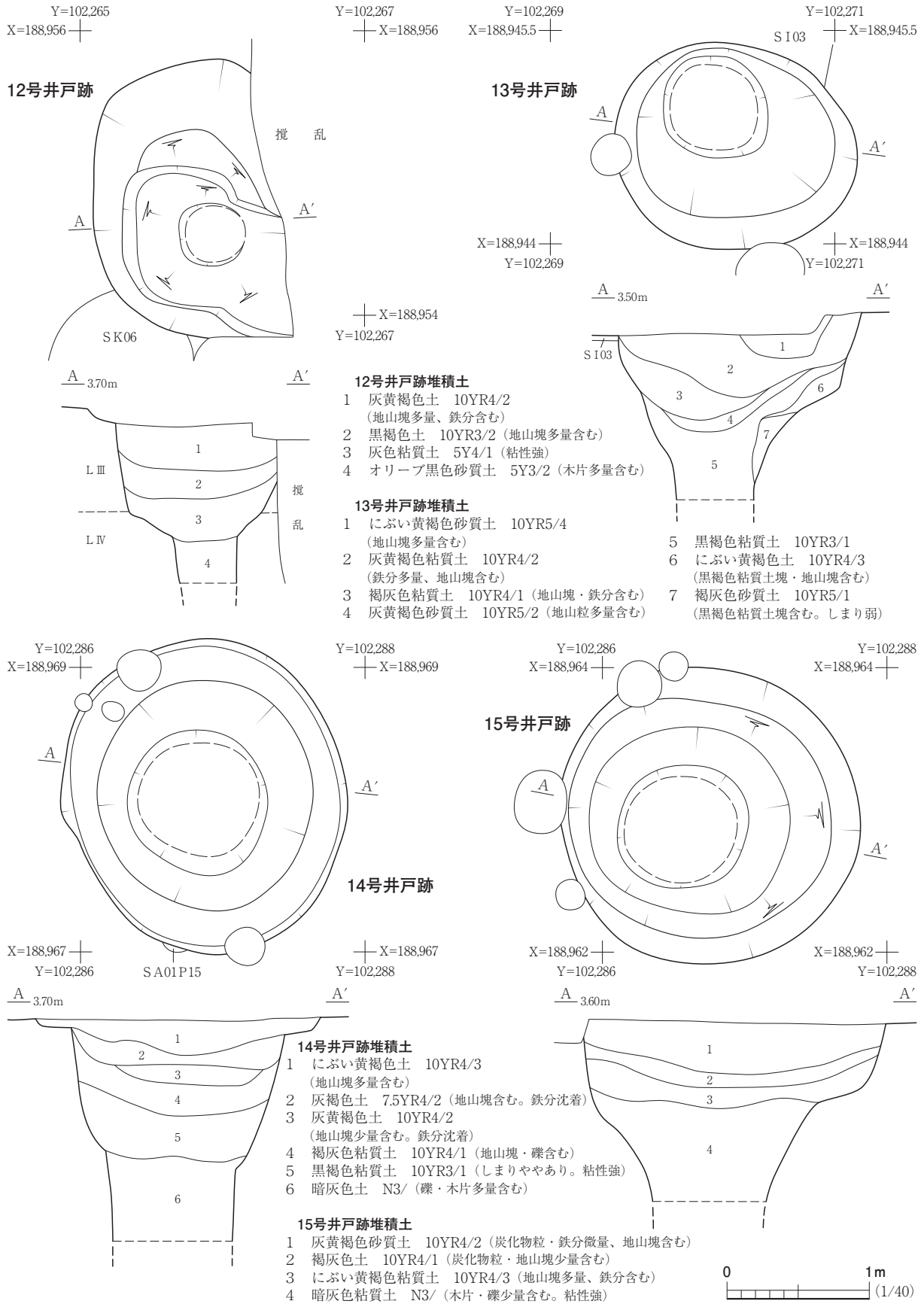


図61 12~15号井戸跡

状木製品で、両端部がL字形に加工されている。表面は腐食が進み丸みを帯びているが手斧痕がわずかに観察できる。建築部材あるいは建具等の部品と考える。同図2は表皮が残存する割材を利用した木杭で、下端は加工により尖っている。

木製品以外の遺物はなく、本遺構の時期は不明である。 (菅野)

15号井戸跡 S E 15 (図61・63、写真55)

本遺構は調査区東側のD6グリッドに位置する。小穴と重複し、本遺構が古い。LⅢ上面で検出した。

平面形は円形で、断面形は上部が平らに掘り込まれ、以下は漏斗形である。規模は検出面で直径約2.1m、深さ約50cmで段がつき、これより下は急傾斜で落ち込み、深さ約1.3mで周壁の傾斜が変化し、この部分で直径約80cmである。これより下の断面形は筒形で、標高2.2m以下から湧水する。堆積土は4層に分かれ、ℓ1～3は地山塊を含み、ℓ4は木片と礫を少量含むグライ化土である。堆積状態については、ℓ1～3は人為堆積土、ℓ4は判断がつかなかった。

遺物はℓ4から土錘(図63-9)が出土している。形状は紡錘形で、中央に直径1.3cmの孔が開けられている。胎土は灰色を呈し、同図8に示す播鉢に近似する。

本遺構の時期は直接遺構に伴う遺物が確認できないため不明である。 (菅野)

16号井戸跡 S E 16 (図62・63、写真55・82)

本遺構は調査区東端のE5グリッドに位置する。西側上面は66号土坑と重複しており、本遺構が新しい。LⅢ上面で検出した。

平面形は円形で、断面形は上部がやや開く筒形である。規模は検出面で直径約1.4m、深さ約60cmに見られる周壁の傾斜の変換部で直径約90cmを測る。それより下の断面形は筒形で、標高2.3m以下から湧水する。堆積土は4層に分かれ、ℓ1～3はオリーブ黒色～黒色土で、ℓ2・3には地山塊が多く含まれている。ℓ3・4の層理面からは拳大～人頭大の礫が多量に出土した。ℓ4は青灰色を呈しグライ化している。堆積状態については、ℓ2・3が人為堆積、ℓ4についても礫の出土状況から人為堆積と推測する。使わなくなった井戸を埋め戻したものと考えている。

遺物はℓ1から土師器片4点と、かわらけ片1点、瓦質土器片1点出土した。図63-2はロクロ成形のかわらけで、底部は薄く、体部は直線的に開く。底面には回転糸切り痕が残っている。同図6は瓦質土器の香炉である。小片につき1脚しか残っていないが、もとは3脚の香炉だったとみられる。ロクロ成形で、底面にわずかながら回転糸切り痕を残す。香炉とかわらけのセットでの出土は、18号井戸跡でも確認され、井戸の廃棄に伴い使用された可能性を考えている。

本遺構の時期は出土遺物から中世末から近世初頭と推測される。 (菅野)

17号井戸跡 S E 17 (図62・64、写真55・83)

本遺構は調査区北側のC 4グリッドに位置する。北西側は5号溝跡と重複し、本遺構が新しい。L III上面で検出した。

平面形は円形で、断面形は上部が開く筒形である。規模は検出面で直径約1.2m、深さ約45cmに見られる周壁の傾斜の変換部で直径約75cmである。これより下の断面形は筒形で、標高2.6m以下から湧水する。堆積土は5層に分かれ、 $\ell 1 \sim 3$ は地山に近い土である。 $\ell 4 \cdot 5$ の層理面からは礫が出土した。堆積状態については、 $\ell 1 \sim 3$ は人為堆積、 $\ell 4 \cdot 5$ も礫の出土状態から人為堆積と考えている。

遺物は土師器片3点、陶器片4点、木製品1点が出土している。図64-3は $\ell 1 \sim 4$ から出土した木製品で、断面形は整った方形である。両端部を手斧で斜めに削っている。用途は不明だが、

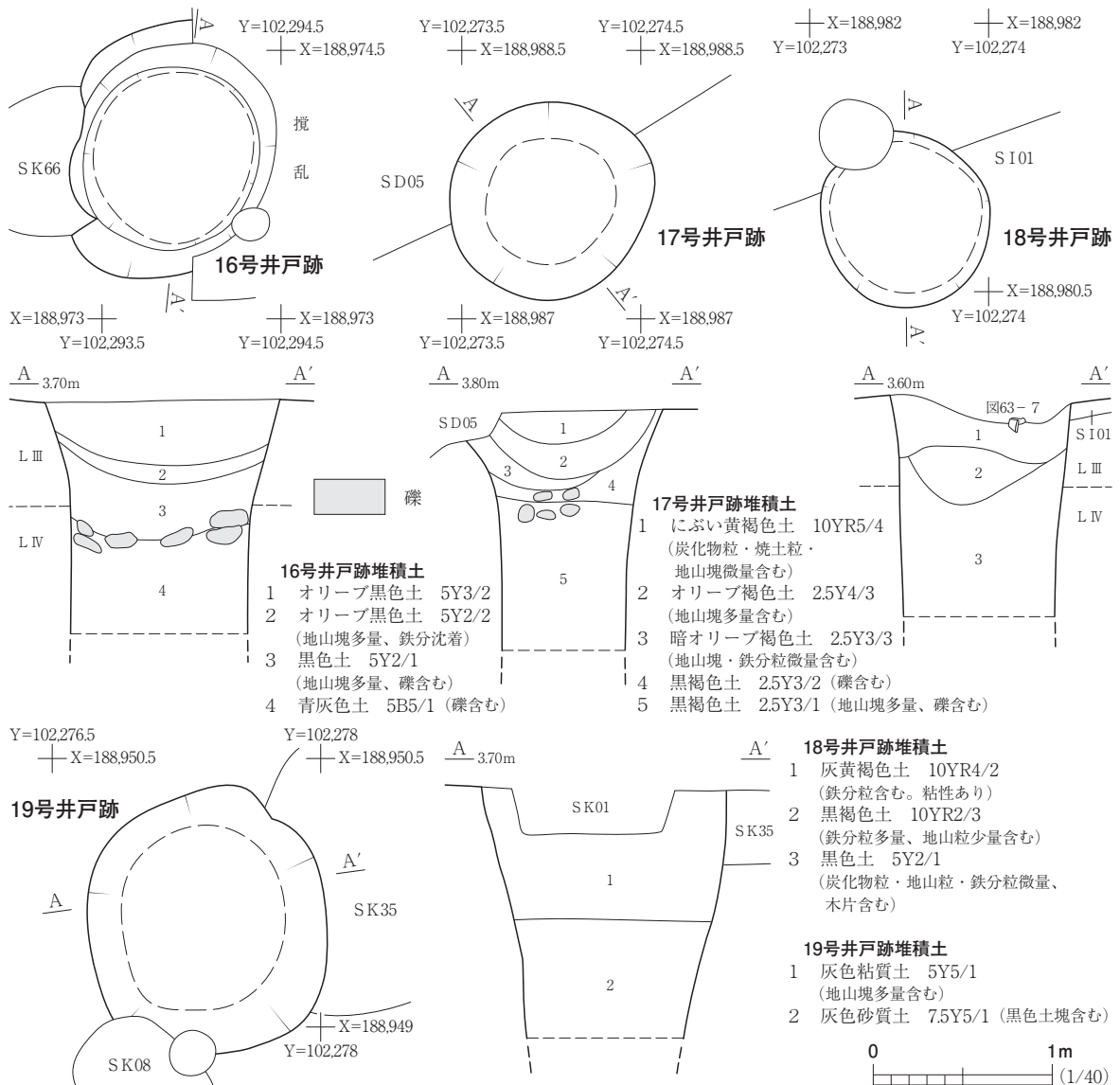


図62 16~19号井戸跡

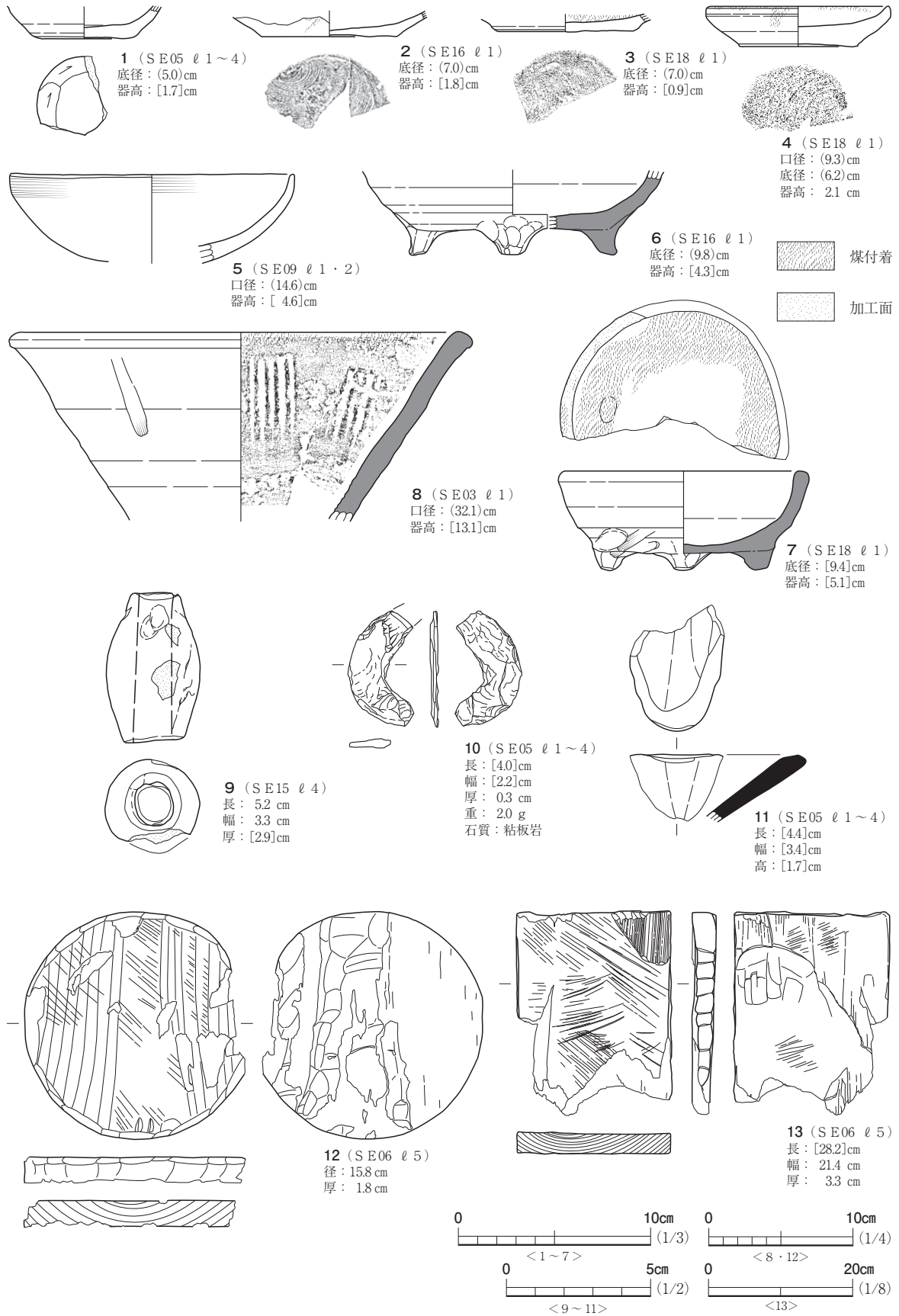


図63 井戸跡出土遺物 (1)

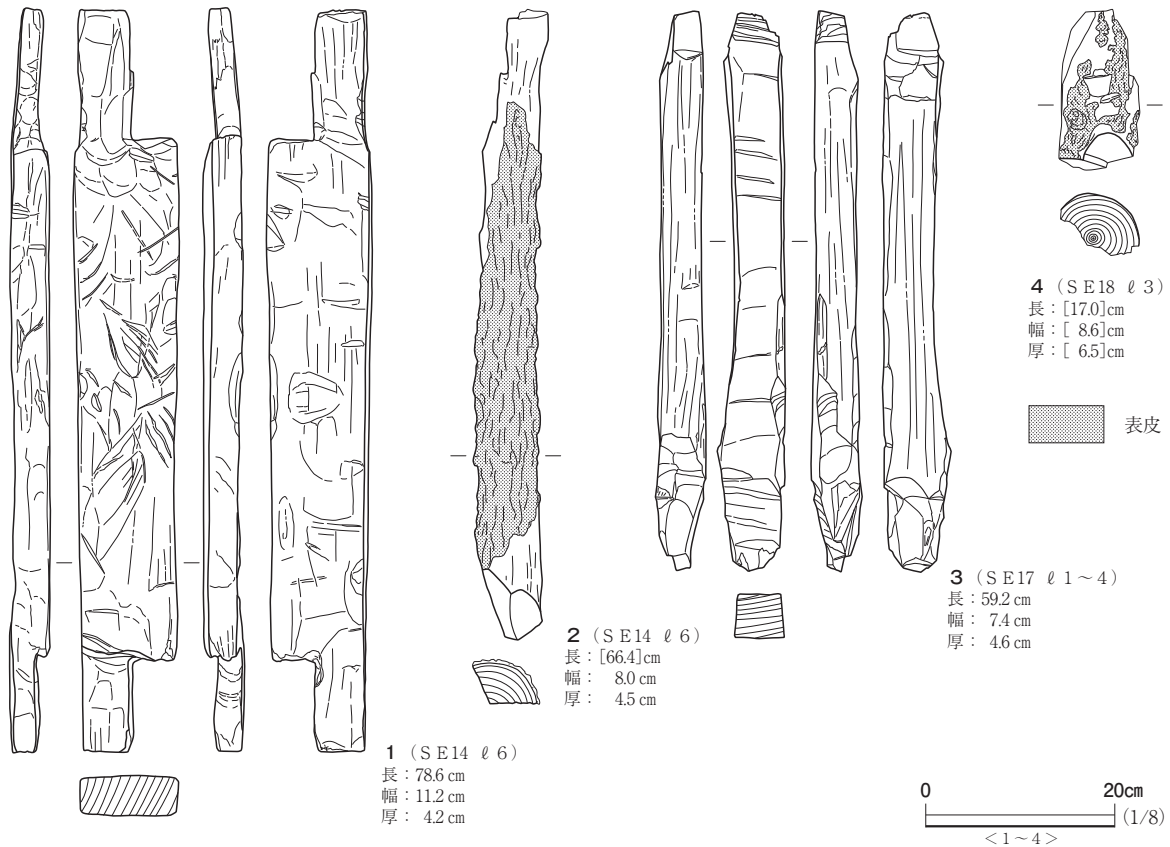


図64 井戸跡出土遺物（2）

建具等の一部の可能性はある。大堀相馬焼の破片が出土していることから、本遺構は近世には埋められたと推測する。(菅野)

18号井戸跡 SE 18 (図62～64、写真55・82・83)

本遺構は調査区北側のC4グリッドに位置し、1号住居跡の堆積土上面で検出した。小穴とも重複しており、本遺構が新しい。

平面形は円形で、断面形は筒形である。検出面での規模は直径約1mで、標高2.6m以下から湧水する。堆積土は3層に分かれる。ℓ1は地山に近似する灰黄褐色土、ℓ2は鉄分粒を多く含む黒褐色土、ℓ3は黒色土で木片が含まれている。ℓ1は土質から人為堆積とみられるが、ℓ2・3は人為堆積か自然堆積か判断がつかなかった。

遺物は土師器片3点、かわらけ片2点、瓦質土器片1点、木製品1点が出土している。図63-3・4はロクロ成形のかわらけで、底面に回転糸切り痕が残る。4は厚みがあり、体部は外傾して開き、口縁部は短く直立する。内面はわずかに内湾する。3・4とも油煙による煤が付着しており、燈明皿として使われたと考えている。同図7は瓦質土器の香炉で、体部下半から底部にかけて約半分ほどが残っている。現況で2脚しか残っていないが、元々は3脚の香炉である。ロクロ成形で、体部は内湾しながら、急角度で立ち上がっている。体部中央でほぼ水平割れてしまったものを再利用しているらしく、破面の一部は丸く加工されている。図64-4は丸太材の一部で、先端部を斧で削っ

ている。

本遺構は出土遺物から中世末から近世初頭頃には埋められたと考える。(菅野)

19号井戸跡 S E 19 (図62、写真54)

本遺構は調査区南側のC 7・8グリッドに位置する。1号土坑の真下から検出され、8・35号土坑と重複している。1・8号土坑より古く、35号土坑より新しい。南端の小穴とも重複しており、本遺構が古い。

平面形は円形を基調とし、断面形は筒形である。検出面での規模は直径約1.5mで、標高2m以下から湧水する。堆積土は2層に分かれ、 $\ell 1$ は地山塊を多く含み、 $\ell 2$ は黒色土塊を含んでいる。堆積状態は塊状の土を含むことから、 $\ell 1 \cdot 2$ ともに人為堆積とみられる。遺物は出土していないが、重複する1号土坑が近世に属することから、近世以前のものとして推測される。(菅野)

第7節 溝 跡

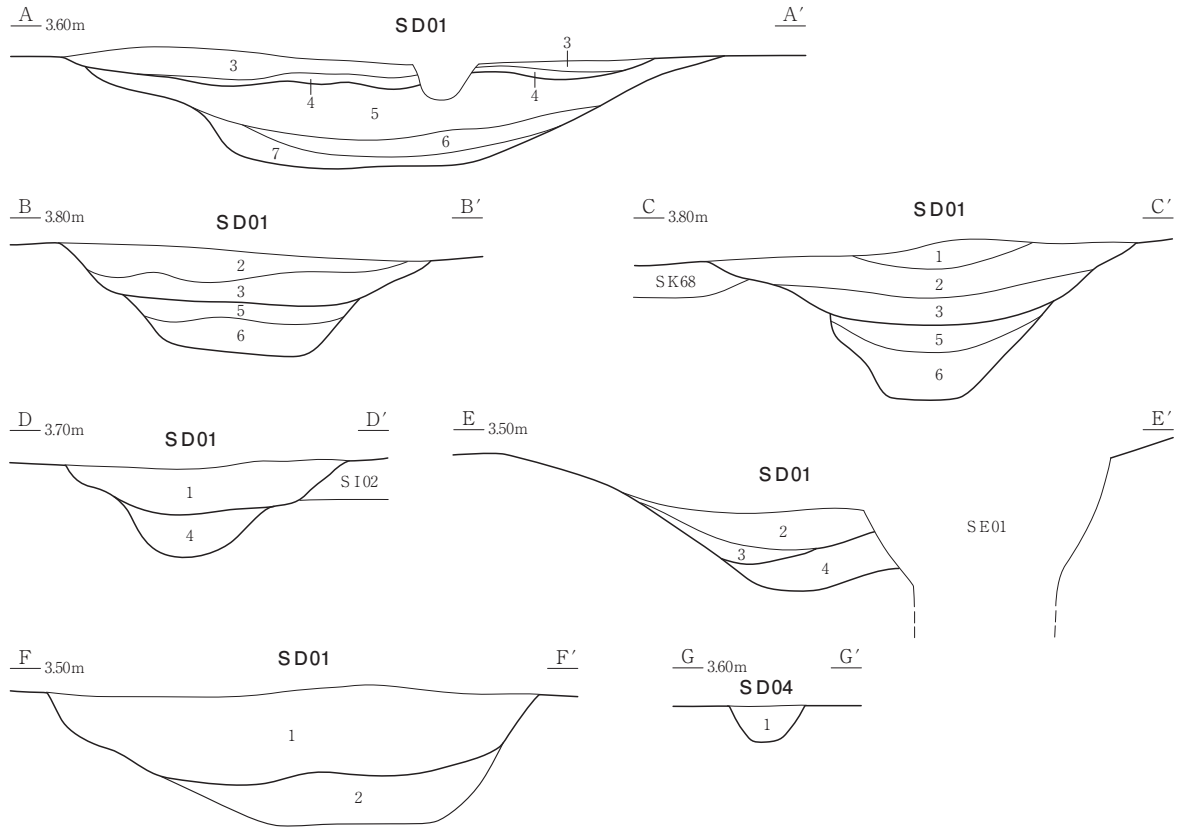
今回の調査では、溝跡が15条確認された。溝跡は調査区北側に集中し、すべてLⅢ上面で検出されている。当初、溝跡として17号溝跡まで登録していたが、調査が進むにつれて、2・3号溝跡は後世の攪乱であることが確認されたことから欠番とした。この内、5・6・11号溝跡については、第4節に記した。なお、溝跡は広範囲に及ぶことから、平面図は付図1の遺構配置図を用いて説明する。

1号溝跡 S D 01 (図65～67、付図1、写真56・57・90・94)

本遺構はB 4～8、C 3・4、D 3、E 2・3グリッドに位置する。2・3・6号住居跡、38・68号土坑、1号井戸跡、5～7・9・14・17号溝跡と重複し、本遺構が新しい。1号井戸跡は本遺構に堆積する最上層より古く、これ以下の堆積層より新しい。

本遺構は調査区内で最も長い溝跡である。調査区北東端に発し、C～E 3グリッドでクランク状に折れ、C 3グリッドからほぼ南に向かってやや西側に膨らむ緩い弧を描きながら、調査区南端B 8グリッドまで延びている。北東端と南端はさらに調査区外へ続いている。

全長は88mを測り、上端における幅は1～3.3mで、南側と北側は幅広く、中間が狭くなる。断面形は基本的に逆台形であるが、一様ではなく、地点により異なる。周壁下半では概ね断面が逆台形を留めているが、周壁上半では緩く立ち上がる地点や周壁の途中に段を持つ地点が多く見られ、これらは本遺構の機能時における周壁上半の崩落もあるが、遺構内堆積土の観察から、本遺構の埋没過程において上半部が拡張されたものと判断した。つまり、本遺構の時期は新旧2時期存在したと考えられ、先述の上端における幅は概ね新期の溝跡のものであり、古期の溝跡の上端幅は新期の溝跡により削平されて不明である。それに対し、底面は古期のものしか確認しておらず、新規の底



1号溝跡堆積土 (A-A'~C-C')

- 1 暗褐色土 10YR3/4 (礫多量、地山砂・鉄分粒微量含む)
- 2 褐色土 10YR4/4 (炭化物粒・地山砂・鉄分粒微量含む)
- 3 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (地山砂・鉄分粒少量含む)
- 4 赤褐色土 5YR4/8 (地山砂・鉄分粒多量含む)
- 5 灰色土 5Y4/1 (地山砂・鉄分粒・白色地山砂少量含む)
- 6 オリーブ黒色土 5GY2/1 (地山砂・鉄分粒微量含む)
- 7 暗オリーブ灰色土 5GY3/1 (地山砂少量、鉄分粒微量含む)

4号溝跡堆積土 (G-G')

- 1 黒褐色土 2.5Y3/1

1号溝跡堆積土 (D-D'・E-E')

- 1 暗褐色土 10YR3/3 (礫多量、焼土粒含む。粘性ややあり)
- 2 褐灰色土 10YR4/1 (鉄分多量含む。粘性ややあり)
- 3 灰黄褐色土 10YR4/2 (地山塊多量、地山砂・暗褐色土含む)
- 4 黒褐色粘質土 10YR3/1 (鉄分含む)

1号溝跡堆積土 (F-F')

- 1 黒褐色土 2.5YR3/1 (鉄分粒・礫含む。粘性ややあり)
- 2 黄灰色土 2.5Y4/1 (鉄分粒含む。粘性ややあり)

図65 1・4号溝跡



面の状況は不明である。古期の底面はほぼ平坦で、標高は2.46~3.08mを測り、中間のB4・C3グリッド付近を最高点に、北側と南側に傾斜する。北端よりも南端の方が標高は低い。底面の幅は北東部では1m前後、それより西方及び南西方向では20~80cmを測り、中央部で一番狭い。深さは36~86cmで、北西部の屈曲部で最深である。

遺構内堆積土は北側のA-A'~C-C'では7層に分かれる。l1は礫と遺物を多量含み、人為堆積とみられる。l2とl3は混入物が少なく、自然堆積とみられる。l4は北東端部にのみ存在し、鉄分が凝集している。l5は灰色を呈し、白色砂粒を含む。l6はオリーブ黒色を呈する。l7は北東端部にのみ堆積する。l5~7はグライ化し、遺物はほとんど含まれない。l1~4は新期の溝跡の堆積土、l5~7は古期の溝跡の堆積土である。中央部から南側にかけてのD-D'・E-E'では4層に分かれる。l1は礫と遺物を多量に含む。l2・3はE-E'付近に堆積し、l2は鉄分を多く含み、やや粘質である。l3は地山塊を多く含む。l4は水分を多く含み、ややグラ

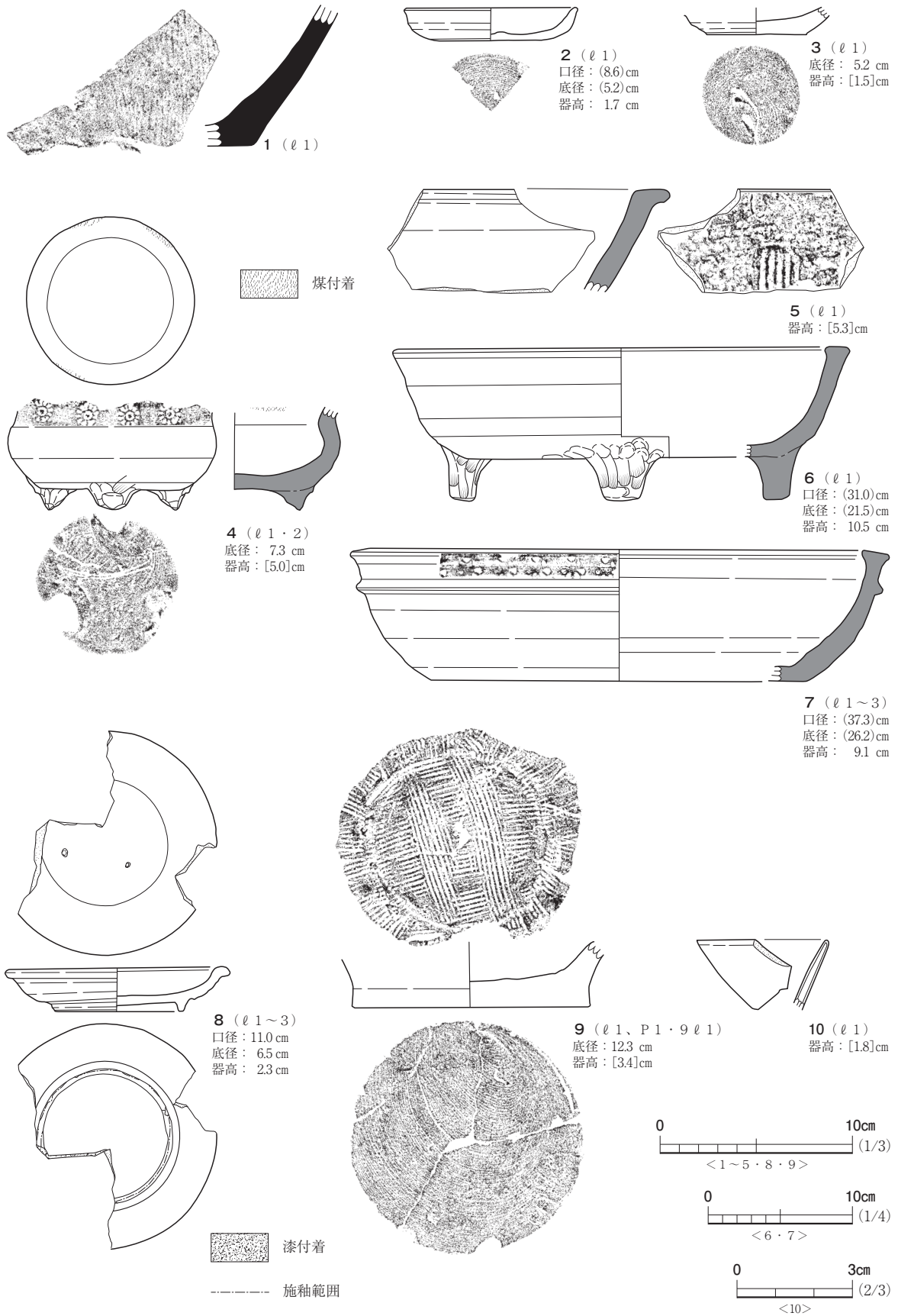


图66 1号沟迹出土遗物 (1)

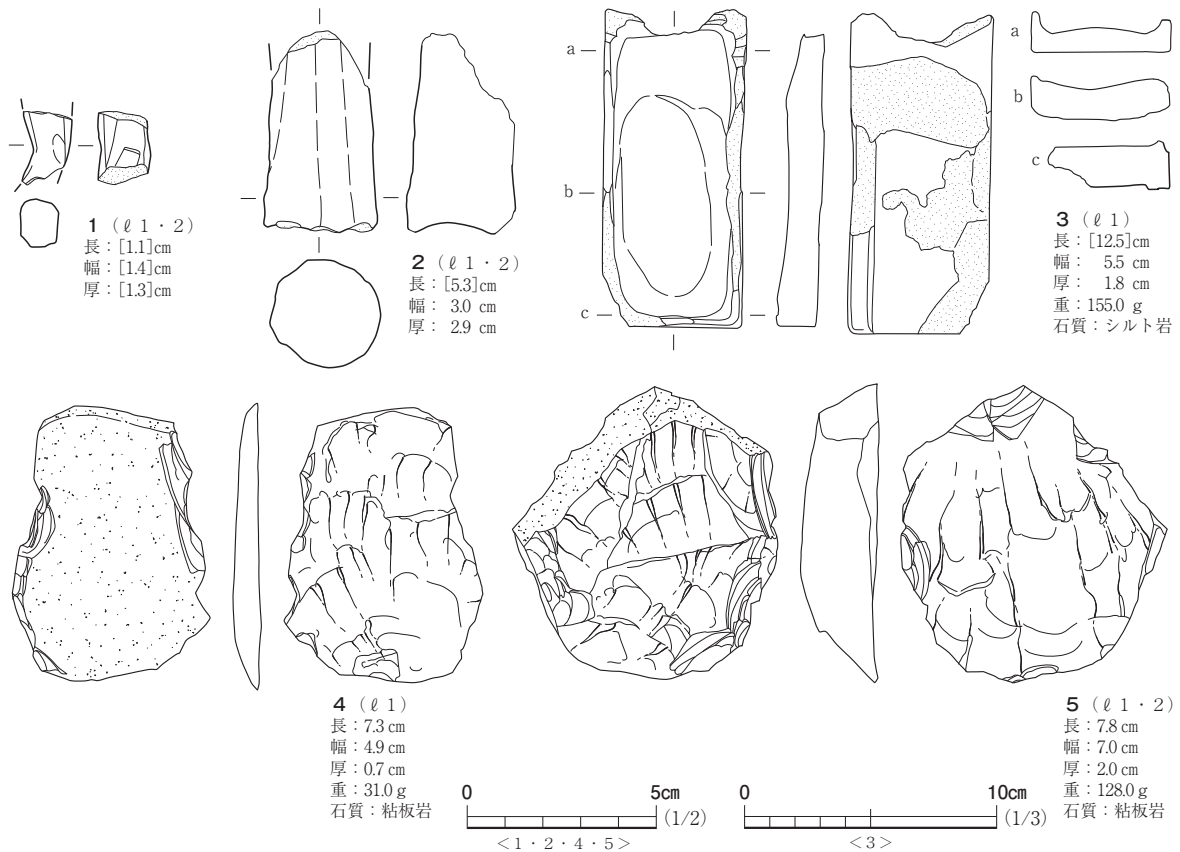


図67 1号溝跡出土遺物(2)

イ化している。ℓ 1～3は新期の溝跡の堆積土、ℓ 4は古期の溝跡の堆積土である。南端付近のF-F'では2層に分かれ、ℓ 1は礫と遺物を多く含み、ℓ 2はややグライ化している。ℓ 1は新期の溝跡の堆積土、ℓ 2は古期の溝跡の堆積土である。このように、新期の溝跡は最終的に最上部に陶器や礫が大量に投入されて、完全に埋められたものと推察される。

遺物は土師器片520点、須恵器片14点、かわらけ片4点、瓦質土器片14点、陶器片103点、土製品3点、粘土塊3点、石製品2点、金属片4点、桃21点を含む種子25点が出土している。陶器片はℓ 1から101点、ℓ 1～3から2点が出土し、古期の溝跡の堆積土から出土したものは無い。平面的にはB5グリッドからはほぼ完形に復元できる皿や播鉢を含めて30点、B8グリッドからは大破片に復元できる茶碗を中心に34点、C・D3グリッドから9点の破片が出土している。これらの陶器についてはすべて近世後期以降のものであるため、図示していない。桃の種子は古期の溝跡の堆積土であるE-E'付近のℓ 4から出土した。

図66-1は須恵器甕の底部付近で、平底で、体部外面にはタタキメが認められる。図66-2・3はロクロ成形のかわらけ片で、底面には回転糸切り痕を残す。2は体部が急に立ち上がり、口縁端部でわずかに外傾している。見込みは凸状となる。3は底部付近の破片である。

図66-4～7は瓦質土器である。色調は黒色または暗褐色を基調とし、内外面にはミガキを施している。器形的な特徴や胎土に海綿骨針を含むことから、すべて在地産と推定される。4は底部に足が3個付く円形の袴腰形の香炉である。体部は丸みを持ち、体部上位は短く外反し、口縁部を

欠損している。底面には回転糸切り痕を残す。脚部は粘土粒をユビオサエにより貼り付けて成形している。体部上位には直径1.2cmで12弁の花弁文が、1.3cm程の間隔を空けて押捺される。体部上位には煤の付着が認められる。5は播鉢である。体部は急傾斜で立ち上がり、口端部は平坦で、外へ大きく張り出す。卸目は2.1cm幅で、1単位に5条の工具で縦位に施文している。外面は熱を受け剥離している。6・7は火鉢である。6は直線的な体部が急角度で立ち上がり、底部には足が3個付く。口端部は平坦で、内外にやや張り出す。脚はオサエとナデによって接合している。7は内湾する体部が急角度で立ち上がるもので、口端部はT字状に内外に張り出す。口縁部と体部を1条の突帯で区画し、口縁部には直径1.7cm、6弁の菊花紋が0.7～0.8cmの間隔で押捺される。菊花紋は斜め方向から押されているため浅く不明瞭である。脚部の痕跡は確認できない。

図66-8は志野焼の丸皿である。内外面ともに長石釉が施されているが、高台豊付の一部は無釉となる。内底面には粒状の胎土目の痕が確認できる。口縁部は玉縁状で、外側へ向かって張り出している。断面の一部には漆継ぎの痕跡が認められる。図66-9は福島市飯坂町に所在する岸窯系陶器の播鉢である。底部の切り離しは回転糸切りである。卸目は1.7cm幅の工具で、密に施文しており、1単位に8条の卸目となる。図66-10は中国龍泉窯系の青磁碗の破片である。内外面ともに無文で、口縁部は直口となる。

図67-1・2は土製品である。1は「く」の字に屈曲し、断面形は隅丸長方形を呈するもので、上下を欠いている。2は直径3cmの円筒形の土製品で、上部は欠損し、底面の縁辺部も欠損している。いずれも、欠損のため元の形を知ることはできない。

図67-3は長方形の硯である。表面には墨液を溜める海と墨を磨る陸があり、陸の中央は使用により窪んでいる。裏面は欠損が激しいが、左下の長辺に沿って幅1cm、高さ2mmの脚が残っている。図67-4・5は粘板岩の剥片を用いた石器で、4の側縁上部にはわずかな抉りが作り出されている。5は厚い剥片が用い、急角度の刃部を作り出している。

本遺構の時期は出土遺物から中世～近代と推測される。堆積土と断面形から一度掘り直されており、長期にわたって使用されたとみられる。ℓ1からは多量の近世陶器が出土し、明治期の丈量図には本遺構が描かれていないことから、近代の初めには完全に埋められていたと判断している。古期の溝については、機能時期を知る手がかりを得ることはできなかった。本遺構は井戸跡や小穴と関連する区画溝もしくは排水溝として機能したと考えられる。 (菅野)

4号溝跡 S D 04 (図65、付図1、写真59)

本遺構は調査区西側のA・B6グリッドに位置する。西側は1号建物跡P9、小穴と重複し、本遺構が古い。

本遺構は北東から南西へやや湾曲して伸びる溝跡である。両端は攪乱で壊されている。規模は長さ約2.2m、幅約40cm、深さ約20cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、底面に高低差はない。遺構内堆積土は1層で、自然堆積か人為堆積か判別できなかった。

遺物は土師器片が5点出土しているが、いずれも小片のため時期は不明である。重複する1号建物跡が古墳時代後期以降と推定されることから、本遺構は古墳時代後期あるいはそれ以前のものとして推測する。性格は不明である。(菅野)

7号溝跡 S D 07 (図68、付図1、写真58・59)

本遺構は調査区北東側のD2～4、E4・5グリッドに位置する。1・5a・11号溝跡と重複し、1号溝跡より古く、5a・11号溝跡より新しい。

本遺構は北から南へわずかに蛇行しながら伸びる溝跡で、南端と北端は途絶えている。断面形は逆台形を呈する。規模は長さ約24m、幅45～90cm、深さ9～28cmを測る。北側は浅く、幅が広いが、南側に行くほど幅が狭く、深くなる。底面の標高は3.22～3.54mで、北側が高く、5a号溝跡と1号溝跡に挟まれた部分が最も低い。全体的に北側より南側は15cm程低くなっている。遺構内堆積土は2層で、 ℓ 1・2ともに地山塊を斑状に含み、人為堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片51点、須恵器片5点が出土している。図68-1は須恵器甕の体部で、外面にはタタキメ、内面には同心円状の当具痕が認められる。また、本遺構からは5a号溝跡出土のものと同一体とみられる長頸瓶の体部片も出土しており、この須恵器甕も5a号溝跡から混入したものとみられる。本遺構の時期は古墳時代後期の5a・11号溝跡より新しいことから古墳時代後期以降と推測される。性格は不明である。(菅野)

8号溝跡 S D 08 (図68、付図1、写真58・59)

本遺構は調査区北東側のE3・4グリッドに位置する。北端が5a号溝跡と重複しているが、新旧関係は不明である。また、複数の小穴と51号土坑が重複しており、本遺構が古い。

本遺構は北から南へわずかに蛇行しながら伸びている溝跡である。南端は現代の攪乱により削平されている。規模は長さ約9.3m、幅45～95cm、深さ16～20cmを測る。断面形は皿形を呈する。底面は起伏があり、標高は3.37～3.43mで、北側と南側において標高差はない。遺構内堆積土は1層で、地山塊と遺物を多く含み、人為堆積の可能性が高い。

遺物は土師器片が168点出土している。本遺跡の溝跡の中では、1・5・6・11号溝跡に次いで遺物が多く、遺構内全域から出土している。いずれも小片のため、図化できるものはなかった。

本遺構の時期は内面黒色処理された土師器杯片やハケメのある土師器甕片が多く含まれていることから、古墳時代後期と考えられる。遺物の多さから、本遺構の周囲には同時期の住居跡が存在した可能性もあるが、今回の調査では見つからなかった。性格は不明である。(菅野)

9号溝跡 S D 09 (図68、付図1、写真58・59)

本遺構は調査区北東側、D2・3、E3・4グリッドに位置する。1・5a・10号溝跡と重複し、1・10号溝跡より古い。5a号溝跡との重複関係は不明である。

本遺構は北から東へ湾曲しながら伸びる溝跡である。北端は現代の攪乱で削平され、東端は調査区外へと続く。規模は長さ24.5m、幅45～107cm、深さ8～44cmを測る。断面形は逆台形を呈し、北側にいくほど上端幅が広がるが、底面は狭く深くなる。底面の標高は3.15～3.28mで、1号溝跡付近が一番低く、全体的にみると、東側に比べ北側が8cm程低くなっている。遺構内堆積土は2層で、 $\ell 1$ は自然堆積の黒褐色土とみられる。 $\ell 2$ は白色砂粒と黒褐色土が互層をなして堆積しており、水が流れていたことを示している。この白色砂粒を土壌分析したところ、6世紀に降下した火山灰、榛名二ツ岳伊香保テフラの二次堆積という分析結果が出た(付章第3節参照)。

遺物は出土していないが、火山灰が堆積していることから、本遺構の時期は古墳時代後期であると推測される。同時期の火山灰が堆積している6a号溝跡と同時に存在し、やや並行する水路として機能した可能性が高い。(菅野)

10号溝跡 S D 10 (図68、付図1、写真61)

本遺構は調査区北側のC・D2グリッドに位置する。6a・9・13号溝跡と重複し、本遺構がいずれの遺構よりも新しい。

本遺構は西から東へ直線的に伸びる溝跡で、両端は消失している。規模は長さ17.3m、幅45～95cm、深さ10～14cmを測る。断面形は皿形を呈する。底面の標高は3.36～3.47mで、わずかに西側が低くなっている。遺構内堆積土は1層で、自然堆積か人為堆積か判別がつかなかった。

遺物は、東端から土師器片3点と赤焼土器片6点がまとまって出土した。

図68-2は赤焼土器の杯である。器高が高めで、体部下半は内湾気味に立ち上がり、体部上半は口縁部へ直線的に外傾する。無調整で、胎土は緻密である。図68-3はロクロ成形の土師器甕である。体部下半が内湾気味に立ち上がり、底面には回転糸切り痕が認められる。

本遺構の時期は出土遺物から平安時代と推測される。東西を意識して掘られていることが注目されるが、性格は不明である。(菅野)

12号溝跡 S D 12 (図68、付図1、写真60)

本遺構は調査区北側のB3グリッドに位置する。15号溝跡、小穴と重複し、本遺構は15号溝跡より新しく、小穴より古い。

本遺構は北から南西へ直線的に伸びる溝跡である。北端は消失し、南端は現代の攪乱で削平されている。規模は長さ5.8m、幅60～75cm、深さ13～21cmを測る。断面形は皿形を呈しているが、R-R'の部分のみ底面が穴のように低くなっている。底面の標高は3.25～3.4mで、南側がやや低くなる。遺構内堆積土は1層で、地山塊を斑状に含むことから人為堆積とみられる。

遺物は土師器の小片が7点出土したが、小片のため図示しなかった。

本遺構は古墳時代中期以前と推測される15号溝跡より新しいが、正確な時期は不明で、性格も不明である。(菅野)

13号溝跡 S D 13 (図68、付図1、写真46・60)

本遺構は調査区北側のC 2・3、B 3・4グリッドに位置する。63・68号土坑、5・10・15号溝跡、小穴と重複している。63・68号土坑、10号溝跡、小穴より古く、15号溝跡より新しい。5号溝跡との重複関係は不明である。

本遺構は北から南西へ直線的に伸びる溝跡である。北端は現代の攪乱で削平され、南西端は5号溝跡と重複し、消失している。規模は長さ18.3m、幅50～75cm、深さ23～31cmを測る。底面の標高は3.35～3.27mで、傾斜はなくほぼ平坦である。遺構内堆積土は2層で、 ℓ 1は地山塊を斑状に含み、人為堆積とみられるが、 ℓ 2は底面に薄く堆積する粘質土で、自然堆積の可能性はある。

遺物は68号土坑と重複する周辺から内面黒色処理された土師器杯片等が出土しているが、他の地点からは出土していない。本遺構の時期は63号土坑との関係から、古墳時代中期と考えている。(菅野)

14号溝跡 S D 14 (図68、付図1、写真61)

本遺構は調査区北側のC 2・3グリッドに位置する。1・6 a・15号溝跡、小穴と重複し、1号溝跡と小穴より古く、15号溝跡より新しい。6 a号溝跡との重複関係は不明である。

本遺構は南北方向と東西方向に伸びる溝が直角に交わり、北側に張り出しをもつ形状を呈している。南側は1号溝跡によって壊され、東側は攪乱に壊されている。長さは東西溝で2.3m、南北溝で3.3m、幅は東西溝で60cm、張出も含めると1.4m、南北溝で50cmを測り、深さは4～10cmを測る。断面形は皿形である。底面の標高は3.54～3.59mで、わずかに南端が低くなる。遺構内堆積土は2層で、どちらも地山塊を多く含み人為堆積とみられる。

遺物は土師器片が10点出土したが、小片のため図示はしなかった。

本遺構は古墳時代中期以前と推測される15号溝跡より新しいが、正確な時期は不明である。張り出しの役割や性格は不明である。(菅野)

15号溝跡 S D 15 (図68、付図1、写真61)

本遺構は調査区北側のB 3・C 3グリッドに位置する。64号土坑、12～14号溝跡、小穴と重複し、いずれの遺構よりも本遺構の方が古い。

本遺構は東から西へわずかに蛇行しながら伸びる溝跡である。西端は12号溝跡、東端は14号溝跡と重複し、消失している。規模は長さ6.5m、幅30cm、深さ5～8cmを測る。断面形は皿形である。底面の標高は3.47～3.57mを測り、わずかに西側へ傾斜する。遺構内堆積土は1層で、非常に薄く、人為堆積か自然堆積かの判別が付かなかった。

遺物は土師器片が5点出土したが、小片のため図示しなかった。

本遺構は13号溝跡より古いことから、古墳時代中期以前とみられるが、正確な時期は不明で、性格も不明である。(菅野)

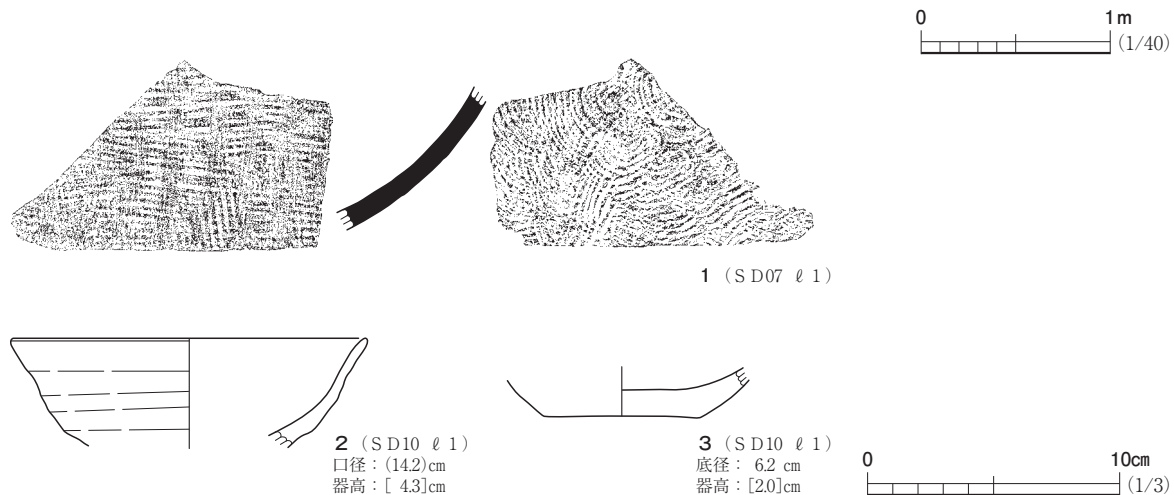
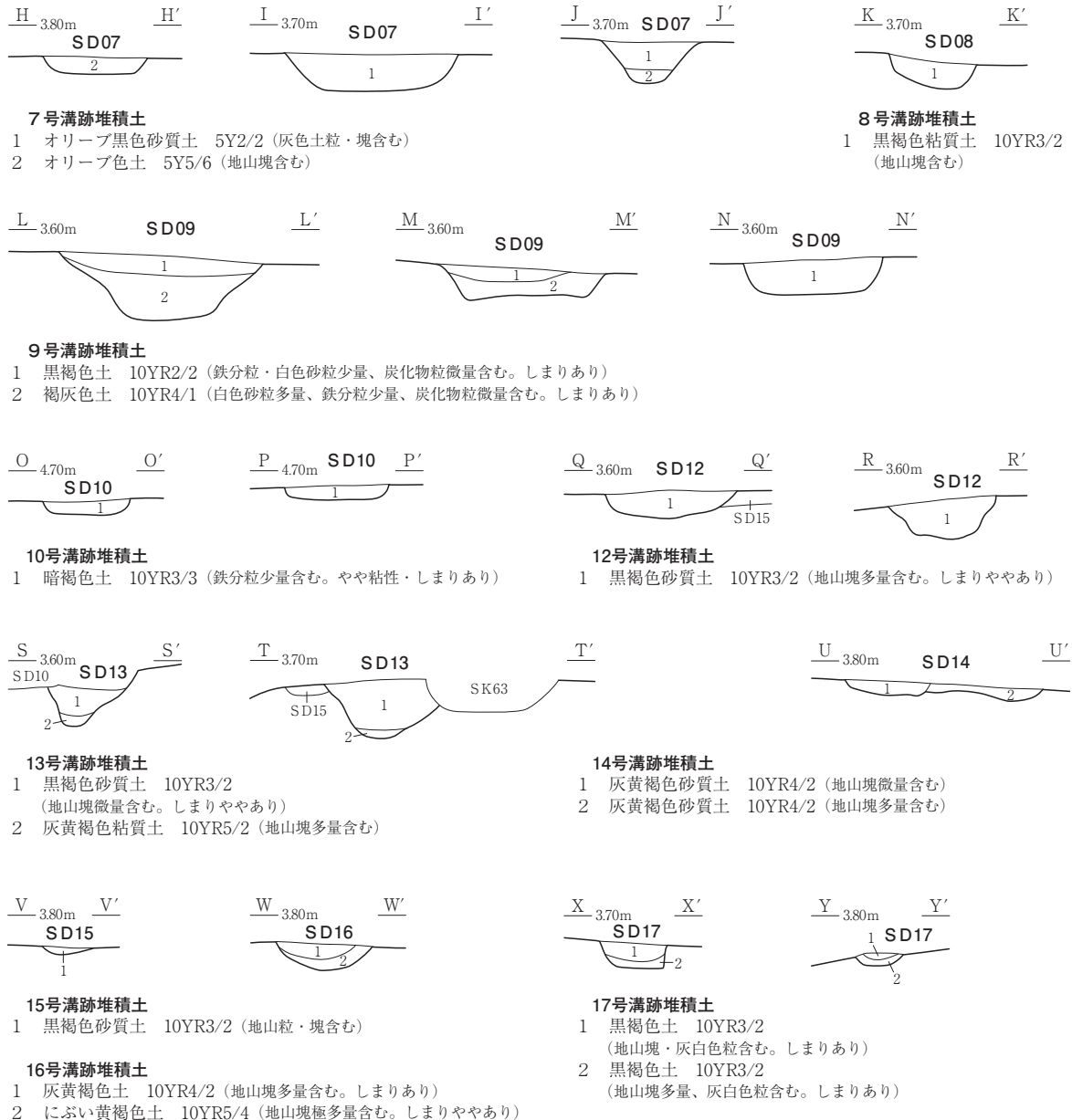


図68 7～10・12～17号溝跡、出土遺物

16号溝跡 S D 16 (図68、付図1、写真62)

本遺構は調査区東側のD4グリッドに位置する。4号建物跡、6号溝跡と重複し、4号建物跡より古く、6号溝跡との新旧関係は不明である。

本遺構は北から南へわずかに蛇行しながら伸びる溝跡である。北端は4号建物跡のP2、南端は6号溝跡と重複し、消失している。規模は長さ5.4m、幅40～60cm、深さ20～25cmを測る。断面形は皿形である。底面の標高は3.48～3.53mで、わずかに南側に傾斜する。遺構内堆積土は2層で、どちらも地山塊を多く含み、人為堆積とみられる。

遺物は出土していないが、本遺構は平安時代と推測される4号建物跡より古いことから、時期は古墳時代とみられる。(菅野)

17号溝跡 S D 17 (図68、付図1、写真62)

本遺構は調査区北側のC3グリッドに位置する。1・6a号溝跡、小穴と重複し、いずれの遺構よりも本遺構の方が古い。

本遺構は東西方向と南北方向の溝が直角気味に交わり、さらに東端付近では北側に伸びる溝も交わっている。北端は1号溝跡、東端は6号溝跡と重複し、消失している。規模は長さ8.2m、幅35～45cm、深さ5～19cmを測る。断面形は、箱形あるいは皿形を呈する。底面の標高は東端で3.38～3.5mで、わずかに北側が低くなる。遺構内堆積土は2層で、どちらも自然堆積とみられる。

遺物は土師器片が10点出土しているが、小片のため図示しなかった。

重複する6a号溝跡は古墳時代後期のものと推測されていることから、本遺構の時期は古墳時代後期以前とみられる。性格は不明である。(菅野)

第8節 小穴群

遺構 (付図1、写真63)

前節までに記述した遺構の他に、小穴が合計2,127基検出された。小穴は掘立柱建物跡や柵跡、柱列跡を構成する柱穴であると考えられる。調査では、検出状況における平面図を作成し、次に、検出状況における堆積土の特徴を記号化して記入した。小穴内の堆積土の区分については、黒褐色土の埋土をA、褐色土の埋土をB、ややグライ化した黒褐色土をC、鉄分を含みグライ化している暗灰色土をD、地山塊を含む黒褐色土をE、地山塊を多く含む黒褐色土をFとした。その後、小穴の配列状態の確認を行ったが、小穴の数が膨大かつ密集していることから、柱列と思われるものは確認できても、建物跡の輪郭を図上で線引きすることができないことから、各小穴の南側半分を基本に掘り下げることにして、堆積土と深さの確認をした。しかし、この作業を経ても建物跡の輪郭を確認することができなかった。

小穴番号はグリッドごとに付し、「D5P1」のように呼称した。小穴はそれぞれ規模と堆積土、遺物の有無を記録した。付図1の遺構配置図には煩雑さを緩和するため、各小穴の下端を省略して示した。また、遺物が出土した小穴については、グリッドごとの小穴番号を記入した。礎石がある小穴、柱材が出土した小穴、柱痕が残る小穴は網点で示した。

検出面は遺構堆積土上面とⅢ上面である。小穴は調査区中央から南側に集中し、1号溝跡より西側と5号溝跡より北側では散在的になる。東側と南側は調査区外へと広がっていると推測される。特に、C6・7グリッドとD6・7グリッドに密集し、重複が激しい。これらのグリッド内の小穴は、東西方向あるいは南北方向に重複していることから、同じ場所で掘立柱建物跡が何度も建て替えられていたとみられる。建物跡の輪郭をたどることはできなかったが、小穴の重複関係から最大で8回の建て替えが行われたとみられる。

検出面での平面形は円形を呈するものがほとんどで、隅丸方形に近いものも少数含まれる。規模は検出面で直径10～60cm、深さ5～70cmを測る。深さ40cm以上の深いものは全体の2割程度で、ほとんどが浅い小穴である。検出面での規模と深さは、おおよそ比例する。

堆積土の分類をみると、Aが16%、Bが4%、Cが32%、Dが6%、Eが24%、Fが17%、その他が10%となる。地山塊を多く含み人為堆積とみられるE・Fは、合わせると41%となり、埋めている小穴も多いことが窺える。堆積土の分類による分布の偏りや時期差は確認できなかった。

底面に礎石を伴う小穴を37基確認した。B7・8グリッド、C6～8グリッド、D5～7グリッドに散在的に分布し、規模は直径20～50cm、深さ16～56cmで、深さ20cm前後の浅いものが多い。礎石は表裏が平坦な自然石を底面に1個設置するものがほとんどで、細長い自然石を利用したもの、小石を詰めたものも少数確認された。礎石を伴う小穴による掘立柱建物跡の柱穴の組み合わせを検討したが、直線に並ぶものはあるが、それに対応するものを見つけないことができなかった。

底面に柱材が認められた小穴は、9基確認された。C6・7グリッド、D6・7グリッドで見つかり、規模は直径20～55cm、深さ25～40cmで、柱材は直径10～19cmを測る。出土した柱材を図69に2点掲載した。

土層断面で柱痕が認められた小穴は24基である。C6～8グリッド、D7・8グリッドに散在し、規模は直径30～60cm、深さ27～65cmで、他の小穴に比べやや深いものが多い。

遺 物 (図69、写真91・93～95)

遺物は700点出土している。内訳は、土師器片661点、須恵器片12点、陶磁器片11点、土製品5点、石器1点、石製品4点、鉄製品4点、木製品2点である。

図69-1は土師器杯である。丸底で、体部は直線気味に立ち上がる。外面は口縁部と体部の差がなく、ヨコナデ調整されている。底部はヘラケズリである。内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。図69-2は土師器甕である。丸底で、体部下半がやや膨らみ、上半は口縁部に向かって緩く窄まる。口唇付近がわずかに反っている。体部外面には粘土紐積上痕が残り、それを消すように縦方向にナデ調整している。内面はヘラナデが密に入り、外面より丁寧に調整している。内外面

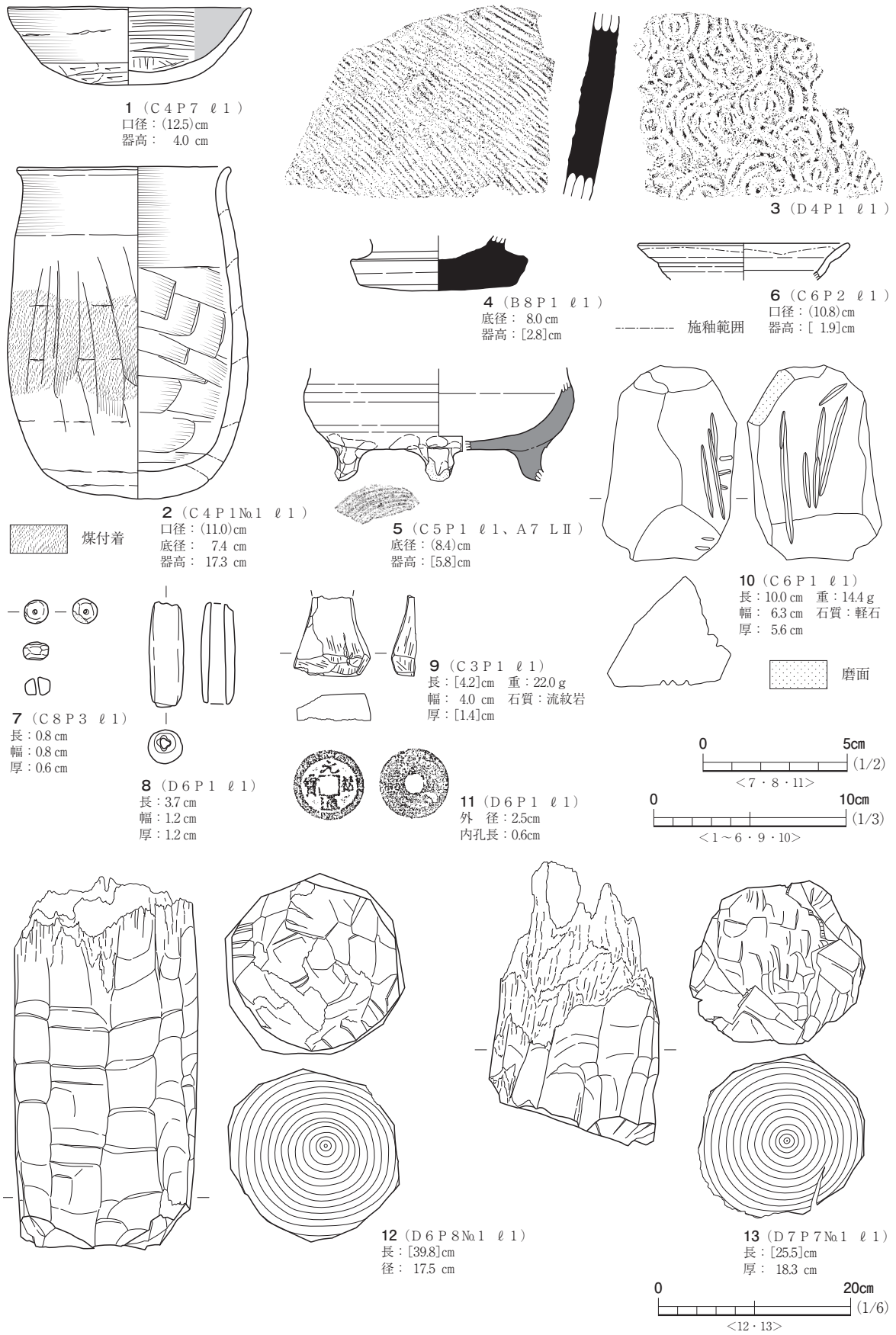


図69 小穴群出土遺物

の口縁部はヨコナデされている。また、体部に煤が付着し、底部は被熱により赤く変色している。

図69-3は須恵器大型甕の体部片である。外面には平行タタキメ、内面には同心円状の当具痕が認められる。厚さは16mmを測る。図69-4は須恵器捏鉢の底部付近である。ロクロ成形で、体部は灰色を呈する。底部は丸底で、体部より張り出している。

図69-5は瓦質土器の袴腰の香炉である。体部は内湾し、底部に脚が付く。脚は3脚であったと推測される。ロクロ成形で、平底の底面に回転糸切り痕が認められる。

図69-6は陶器の皿片である。口縁部と体部の境に段が付き、外傾している。胎土は灰黄色で、口縁部に茶色の釉薬がかかっている。愛知県瀬戸窯の古瀬戸後期Ⅳ期に当たるとみられる。

図69-7は土製丸玉である。直径は8mmで、中心に1.5mmの孔が空いている。角はなく、全体に丸味を帯びている。表面は黒色を呈している。図69-8は土錘である。やや中膨らみで、中心に4mmの隅丸方形の孔が空いている。表面は灰色である。

図69-9は砥石の破片である。裏面と上部を欠損し、元の形状は不明だが、表面と両側面は磨り減って湾曲している。図69-10は軽石製の用途不明の石器である。表面と裏面に幅3mmの線状の擦痕が残る。上部に磨面がある。図69-11は銭貨で、「元祐通寶」(初鑄1086年)である。

図69-12は長さ39.8cm、直径17.5cmを測る柱材である。底面は平坦に近く、側面は面取りされ、断面形は多角形になっている。側面及び底面には手斧痕が明瞭に残る。図69-13は長さ25.5cm、直径18.3cmを測る柱材で、上部は腐食が進んでいる。底面は斜めに削られ垂直に立てることができない。側面は12と同様に面取りされ、断面形は多角形である。12と13は加工痕が近似しているが、関連性は不明である。

まとめ

小穴は密集し、重複も激しいことから、建物跡を特定することは困難であった。中・近世の遺構である井戸跡の周囲に存在する小穴は、井戸跡の覆屋の柱穴の可能性が高い。他の遺跡の調査例からも、これらの小穴群は中・近世のものが主体である可能性が高い。しかし、小穴の中には奈良・平安時代に所属する10号井戸跡出土木製品と類似した柱材が出土しているものもあり、奈良・平安時代まで遡る小穴も含まれると推測される。(菅野)

第9節 遺構外出土遺物

今回の調査では、遺構外から7,323点の遺物が出土した。内訳は、土師器片が7,065点と最も多く、須恵器片40点、かわらけ片5点、瓦質土器片20点、陶磁器片136点、土製品7点、石製品14点、剥片3点、鉄製品4点、銅製品6点、鉄滓11点、粘土塊4点、礫8点である。これらの遺構外出土遺物の内、遺存状態の良いものや特徴的なもの64点を図化し掲載した。

土師器 (図70、写真92)

図70-1～4は土師器杯である。1は体部が内湾し、口縁部は短く外反する器形で、頸部内面

に稜線が巡っている。体部は外面の下半はヘラケズリされ、内面はヘラナデされている。口縁部は両面ともヨコナデされているが、外面ではヨコナデを施す前にユビオサエしている。2は内湾する体部に長い口縁部が付く器形で、口縁部は垂直気味であるが、緩く外反している。口縁部は両面ともにヨコナデされ、体部内面にはヘラミガキの痕跡がわずかに認められる。3は口縁部付近の破片で、口縁部は垂直気味に立ち上がり、口唇部でわずかに外傾している。両面ともにヨコナデされ、赤彩が施されている。4は平底の底部で、底面はヘラケズリされ、先の丸い工具で十字の線刻が施されている。

図70-5~9は手捏ね土器の杯である。いずれも平底で、体部は直線的に外傾しているが、9は体部上半で内湾し、口縁部が直立している。口縁部は平縁のものと不規則な波状になるものがあり、全て薄く仕上げられているものと、断面が厚く仕上げられている部分を持つものもある。また、体部にはユビナデやユビオサエの痕跡が認められるものが多いが、5の内面にはヘラミガキが施され、9の内面にはヘラナデが施されており、5・6・9では内面が黒色処理されている。なお、5の底面には格子状の圧痕がある。

図70-10は土師器高杯の脚部である。脚部の器高は低く、脚裾部が緩やかに「八」の字状に広がっている。外面は摩滅が著しいが、ヘラミガキ痕がわずかに残り、内面はヘラナデされている。

図70-11は土師器高台付杯の底部である。高台は断面三角形で、やや外側に踏ん張るように立ち上がっている。全体的に器面の剝離が著しいが、両面ともヘラミガキ後に黒色処理されている。

図70-12は手捏ね土器の無頸壺である。算盤玉形を呈する器形で、体部中央に最大径を持つ。外面は丁寧にナデで仕上げられ、内面には粘土積上痕が明瞭に残り、ユビオサエで調整している。

図70-13は筒形土器である。体部が垂直気味に立ち上がるが、体部上半では緩く内湾し、口縁部は短く外反している。体部外面はヘラケズリ後に滑らかに仕上げられているのに対し、内面は粘土積上痕が残り、ユビオサエとユビナデの痕跡が顕著である。口縁部は両面ともヨコナデである。

図70-14~16は土師器甕である。14は口縁部から肩部にかけての破片で、体部は内湾し、口縁部は外傾している。口縁部の中央には低い高まりが巡り、口唇部は垂直に面取りされ、やや突出するように作られている。体部は外面がヘラケズリされ、内面はヘラナデされており、口縁部は両面ともヨコナデされている。15は口縁部付近の破片で、体部から口縁部まで垂直に立ち上がり、口唇部付近でわずかに外反している。外面は全面をハケメ調整した後に口縁部がヨコナデされ、内面は頸部をハケメ調整した後に口縁部がヨコナデされている。16は底部から体部下半で、体部は内湾して立ち上がっている。体部外面は縦方向のハケメ調整後に、体部下端も含めて部分的にヘラケズリされ、内面はヘラナデされている。内外面ともに粘土紐の積上痕が残るが、粘土積上部分には、接着力を強めるために横方向のハケメを入れていることが部分的な剝離面から観察された。

図70-17・18は多孔の土師器甕の底部である。17は底部の破片で、直径2.5mmの孔の他、3個の孔が確認された。18は底部に内側から直径4mmの孔が7個開けられている。体部は内湾気味に立ち上がり、外面はハケメ調整の後にヘラケズリされ、内面はヘラナデされている。

須恵器 (図70・71)

図70-19は須恵器蓋である。天井部はやや丸味があり、体部中位で屈曲して、口縁部に向かって「八」の字状に広がっている。口縁部内面にはかえりが付いている。天井部外面は回転ヘラケズリされている。

図70-20は須恵器杯である。底部から体部中位まで内湾し、体部上半は口縁部に向かって直線的に外傾している。体部下端から底部は回転ヘラケズリされている。

図70-21は須恵器高杯の杯部である。体部が大きく広がり、底面の外縁に中空の脚が付くものと推測される。外面には自然釉がかかっている。

図70-22は須恵器瓶の高台部と推測される。高台は直線的に内傾して立ち上がり、下端の内端は断面三角形に内側に引き出されている。

図70-23は、須恵器高杯の杯部の体部下半～底部ないしは甕の口縁部の下部と推測される。内湾気味の体部の下端に細くて低い稜が2条巡り、体部には櫛歯状工具による縦方向の文様が描かれている。

図70-24・25、図71-1は須恵器甕片である。24は肩部で、外面には縦方向の平行タタキメが認められるが、頸部際はナデ調整している。25は大型甕の頸部で、直線的に外傾している。外面上部に櫛歯状工具による波状文が認められる。器厚は2cmを超える部分がある。図71-1は体部で、外面には横方向と斜め方向の平行タタキメ、内面には同心円状の当具痕が認められる。

かわらけ (図71)

図71-2～4はロクロ成形のかわらけである。いずれも底部の切り離しは回転糸切りで、内外面ともに無調整である。2は体部が直線的に外傾する中皿で、3・4は体部が内湾気味に立ち上がる小皿である。3は4に比べて厚手であり、4は口縁部が薄く仕上げられている。

瓦質土器 (図71、写真92)

瓦質土器は色調が黒色を基調としている。胎土に海面骨針を含むことから、いずれも在地産と推定される。

図71-5・6は香炉である。5は袴腰香炉で、薄手で体部下半は丸みを持ち、脚が3個付くと推定される。体部上半は直立し、口唇部は水平で外端は外側に張り出している。体部上半には縦長の雷文が隙間無く押捺されて巡り、それぞれ隣り合う雷文の間の上部には半円状の菊花文が押捺されている。なお、体部下半の器面は火熱により爆ぜており、底部の破断面には回転糸切りの切り離し痕が確認できる。6は厚手で体部は内湾し、口縁部は方頭状である。両面とも横方向にヘラミガキされている。

図71-7～9は火鉢もしくは風炉である。7は口縁部の小片で、口唇部は平坦となり、内端は内側に張り出している。口縁部には直径1.8cmの推定12弁の菊花文が連続して押捺され、内面はヘラミガキされている。なお、外面は部分的に被熱により爆ぜている。8は口縁部の小片で、口唇部は平坦となり、両端はそれぞれ内外にわずかに張り出している。外面は横方向にヘラミガキされて

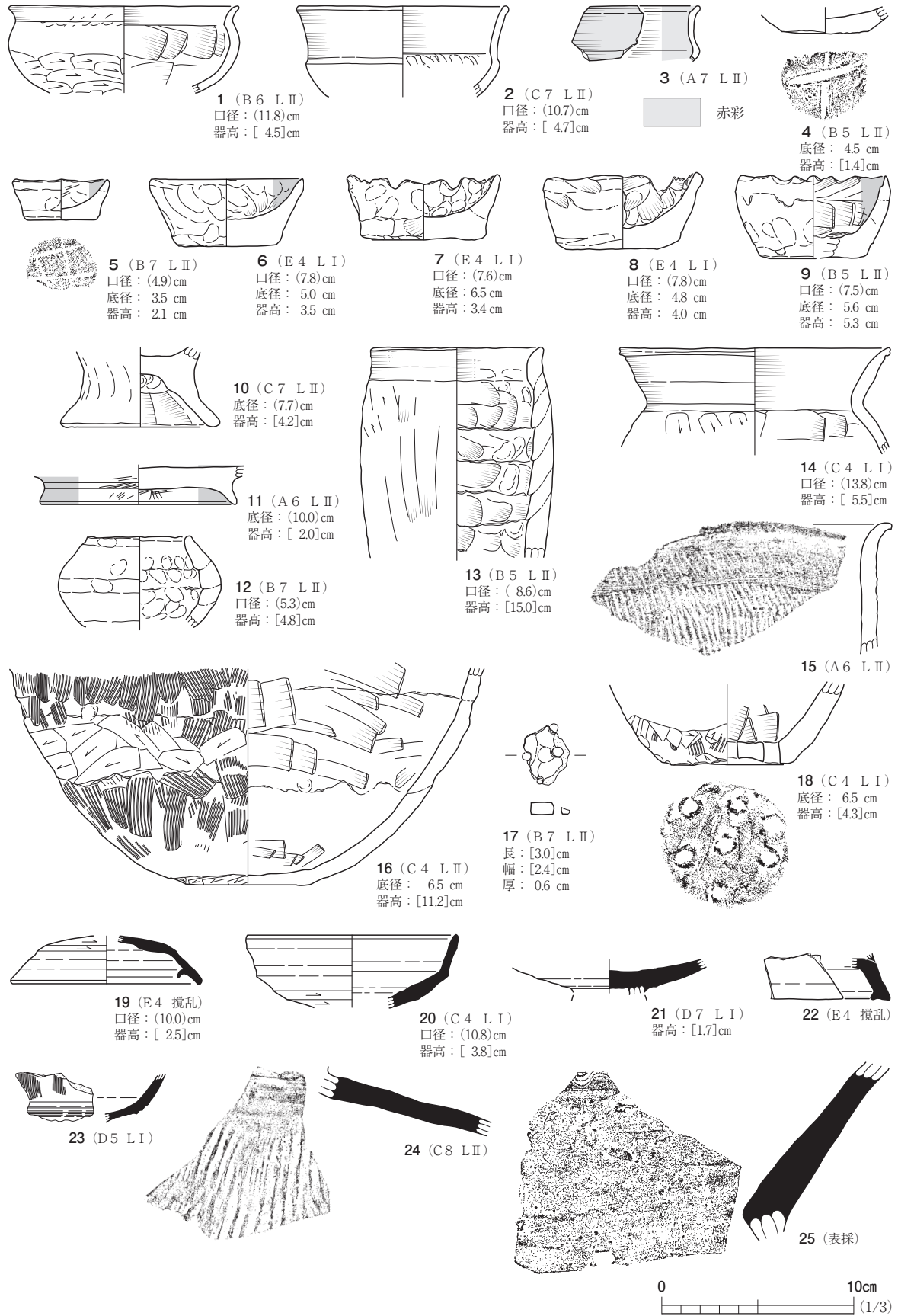


図70 遺構外出土遺物 (1)

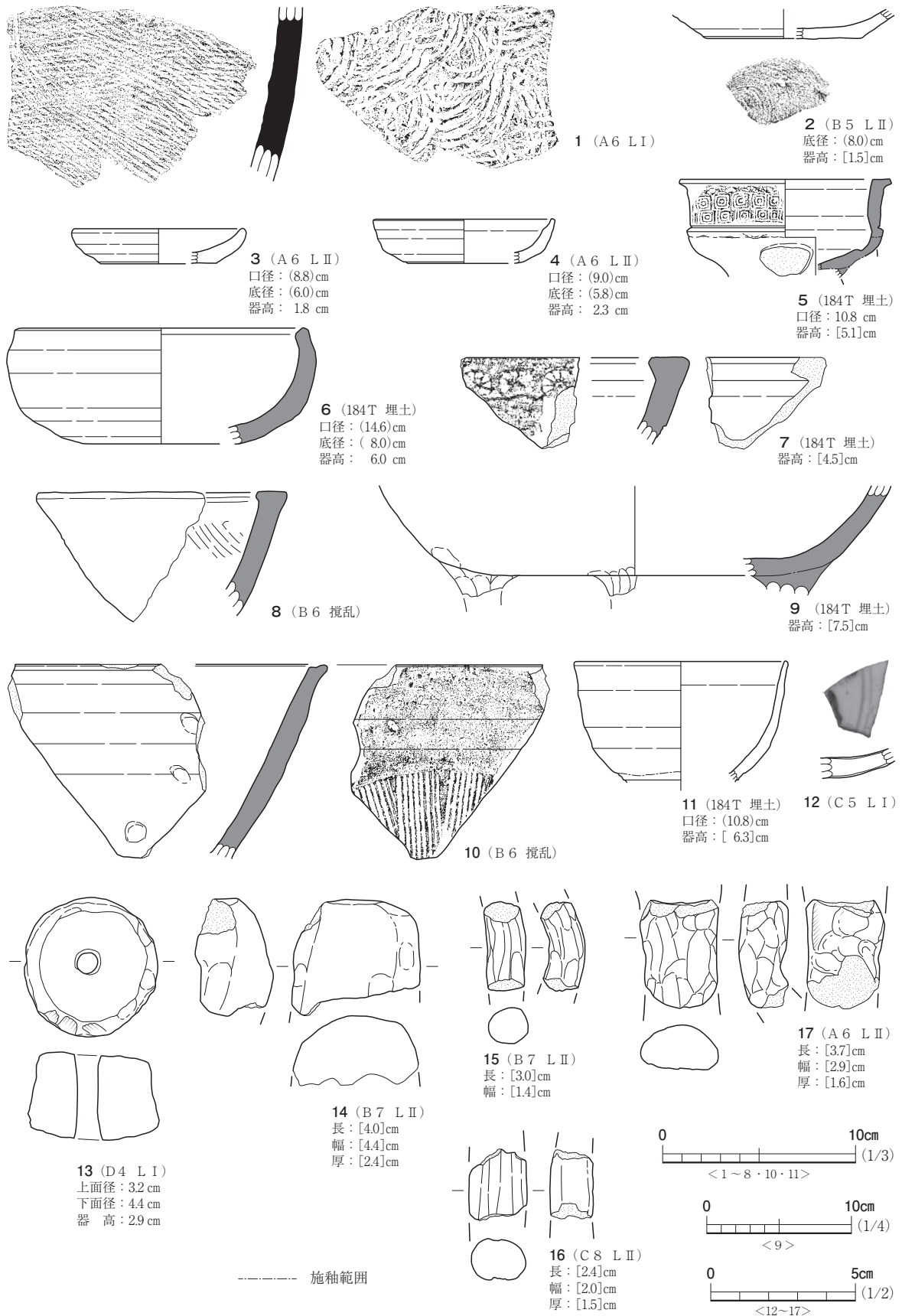


图71 遺構外出土遺物 (2)

いる。9は体部下半の資料である。底部付近は丸みを持ち、脚が3個付くと推測される。両面とも横方向にヘラミガキされている。

図71-10は播鉢である。体部は外傾しながら立ち上がり、口唇部外端は外側へ張り出している。卸目は口唇部より6cm程下から底面側に放射状に施文されている。卸目は幅が2.3cmで1単位に8条の溝を持つ。

陶磁器 (図71)

図71-11は瀬戸・美濃大窯の陶器丸椀である。体部下半で内湾して立ち上がった後、上半は直立気味に立ち上がっている。体部下端付近まで暗褐色の釉薬が掛かっているが、被熱を受けたと推測され、器面はくすんだ色調である。

図71-12は中国産の磁器皿片である。染付皿C群(小野 1982)と推測され、見込みには2本の平行する圏線と模様の一部が認められる。

土製品 (図71、写真93)

図71-13は土製の紡錘車である。断面は台形で、底面はやや丸みを帯びている。中央の芯棒孔の直径は7mmである。器面はユビナデで滑らかに仕上げている。

図71-14~17は破片のため、用途が不明な土製品である。14は円柱状の土製品の破片で、断面形が弧を描き、上面には平らな部分が残っている。15は断面円形の環状ないしは弧状をなす土製品の破片である。色調は黒色を呈している。16は断面が楕円形の棒状の土製品の破片で、両面の中央には縦方向に浅く細い沈線が認められる。17は断面が半円形の板状の土製品の破片である。

石製品・剥片・礫 (図72、写真94)

図72-1~5は滑石製の石製模造品である。1は剣形で、表面にY字状の稜線を持ち、中央は平坦になっている。裏面は平坦で、側面も面取りされて、横断面は六角形を呈している。頭は台形を呈し、中心に直径2mmの孔が表面から穿たれている。2は勾玉形で、表裏は平坦に加工され、側面は面取りされている。中心よりやや上に孔が1個穿たれている。3~5は有孔円板である。両面とも平坦で、側面は面取りされている。3は破片で孔が1個しか残存していないが、双孔であったと推測される。4・5は中軸線上に左右対称に孔が穿たれている。

図72-6は軟質の滑石製の白玉である。直径1.2cm、厚さ9mmを測り、中心に直径2.5mmの孔が穿たれている。上下面は平坦に研磨され、側面は縦方向に研磨して丸く仕上げている。

図72-7は粘板岩製の細い板状の石製品の破片である。断面形は平坦な楕円形を呈し、研磨痕がわずかに残っている。両端は欠損し、本来の形状は不明である。

図72-8は鉄石英の剥片である。表面には剥離痕があるが、裏面は一側縁に自然面が残存し、その他は被熱により爆ぜている。

図72-9~15は砥石である。9は上部のみが残存し、表面と一側面に磨面が残っている。裏面は被熱により爆ぜている。10は四周を欠損し、表面と裏面に磨面を持っている。11は上部を欠損し、表面にのみ磨面が残っている。磨面は湾曲している。12は表裏面・両側面・下面の5面が磨面で、

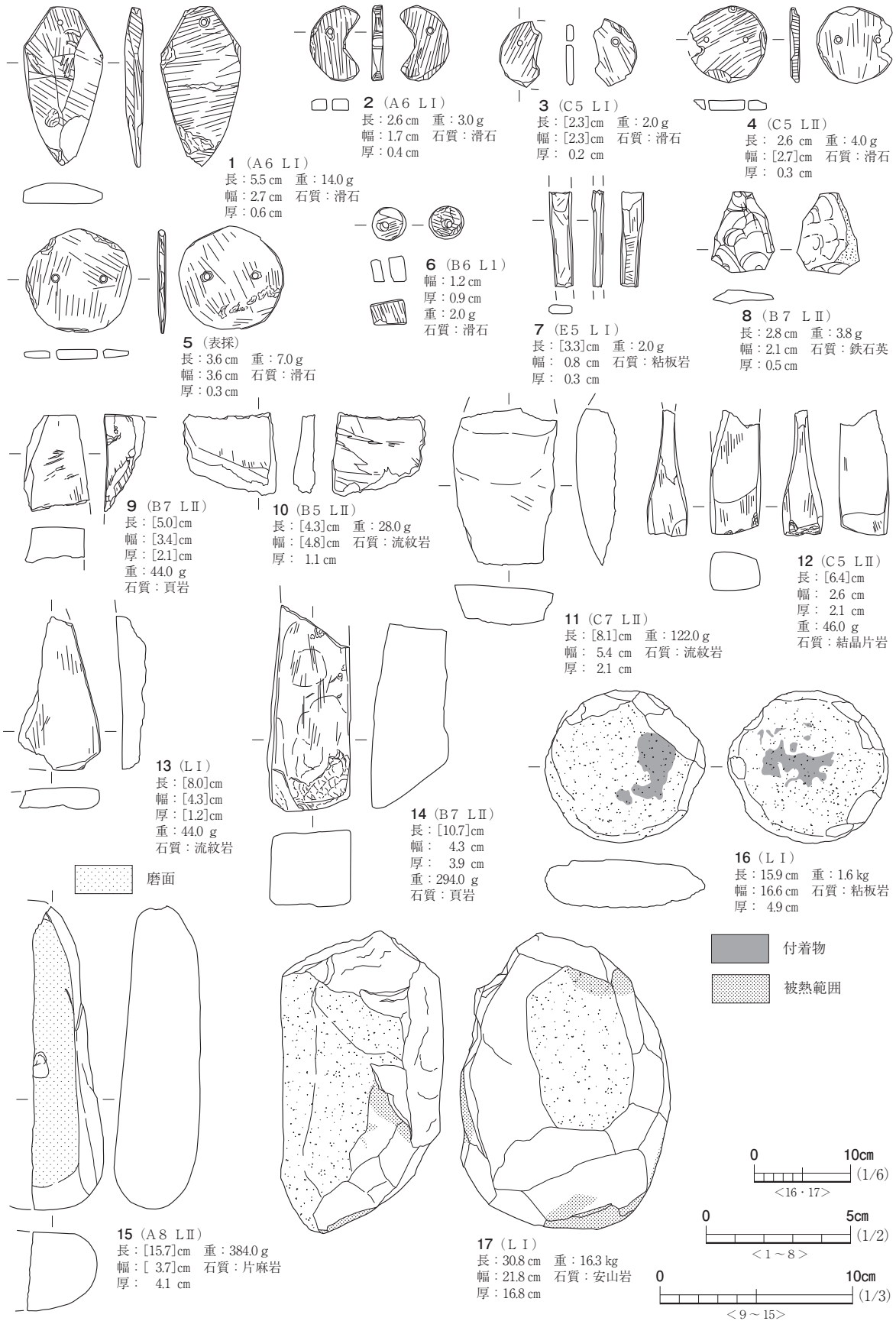


図72 遺構外出土遺物 (3)

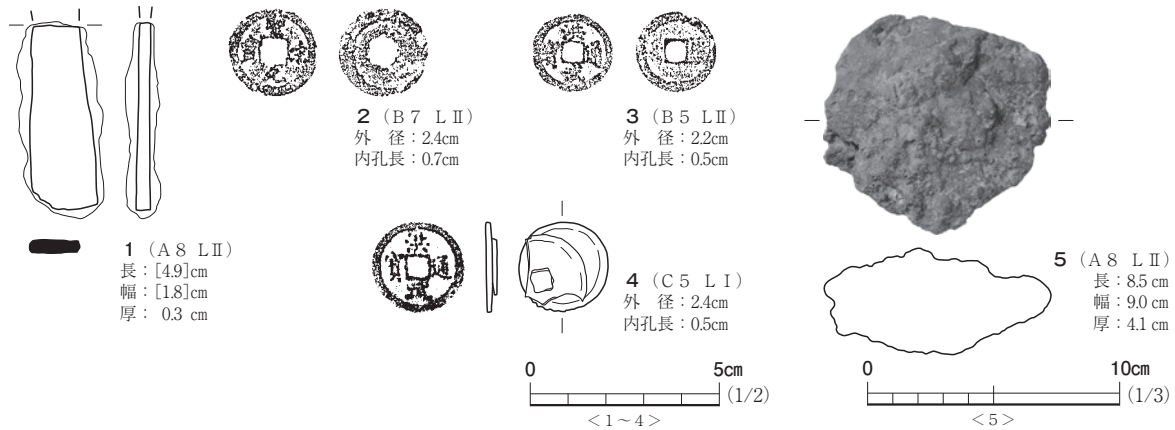


図73 遺構外出土遺物（4）

上部は欠損している。表面と裏面は、上部に向かって内湾するように磨り減っている。13は表面に磨面があり、裏面は自然面で、上部と左半分は欠損している。14は角柱状の礫の表面にのみ磨面がある。15は扁平な礫の表面に磨面が認められる。左半分が欠損しているが、本来は楕円形の礫と推測される。以上の砥石の内、9・12・14は仕上げ砥、10・11・13は中砥、15は荒砥である。

図72-16は円盤状の扁平な礫で、縁辺には部分的に剥離が認められる。また、両面には黒い付着物が部分的に認められる。遺構外から出土したことから断定はできないが、建物跡の柱穴の底面に設置された礎石の可能性もある。

図72-17は鍛冶炉跡の金床石あるいは住居跡の炉縁石と推測される。長さ約31cm、幅約22cm、厚さ約17cmを測る。表面中央部と裏面は平坦な自然面で、表面の肩部と側面の大部分は表面が剥落している。また、表面や側面には被熱により赤色に変化している部分が認められる。表面の肩部や側面の剥落は、被熱による可能性が考えられ、鍛冶炉跡の金床石と推測すると、叩打による作用も考えられる。

鉄 製 品 (図73)

図73-1は用途不明の板状鉄製品である。遺存長4.9cm、遺存幅1.8cm、厚み0.3cmで、上部と左下端が欠損している。平面形は下部がやや幅広く撥形に近くっており、厚みは均等である。全体が錆びで覆われている。

銅 製 品 (図73、写真95)

図73-2～4は銭貨である。2は北宋銭で、行書体の「聖宋元寶」(初鑄1101年)である。3・4は明銭で、「洪武通寶」(初鑄1368年)である。3は遺跡内から出土した他の銭貨が厚さ1.3mmであるのに対して、厚さ2.3mmを測り、裏面の右には縦に「一銭」の文字がある。4は2枚の銭貨が鑄で結合しており、下方の銭貨の銭文は不明である。

鉄 滓 (図73、写真95)

図73-5は重量感のある椀形滓である。平面形は下方が三角形状を呈するが、上方は隅丸方形状を呈しており、この三角形状に張り出す部分は羽口の位置を示している可能性がある。表面は鉄滓の凹凸があるが、全体的には平坦であり、裏面は緩く湾曲している。(菅野)

第2章 総括

桶師屋遺跡では、弥生時代、古墳時代前期、古墳時代中期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世の遺構と遺物が確認された。ここでは、前章において記述してきた事実報告を基に、古墳時代中期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中・近世の遺物及び遺構についてまとめてみることにする。

第1節 遺物について

古墳時代中期の土師器

今回の調査において、6軒の竪穴住居跡と5・6号溝跡から古墳時代中期の土師器が大量に出土した。器種は杯・高杯・蓋・鉢・甕・壺で、甕は大・中・小の3形態、壺は大・小の2形態がある。甗や器台は出土していない。各遺構から出土した土師器の組成は以下のとおりである。

- ・ 1号住居跡：杯・高杯・鉢・小型鉢・大型甕・中型甕・小型甕・大型壺。
- ・ 2号住居跡：杯・高杯・鉢・蓋・大型甕・小型甕・大型壺。
- ・ 3号住居跡：杯・高杯・大型甕。
- ・ 4号住居跡：杯・高杯・鉢・大型甕・大型壺。
- ・ 5号住居跡：高杯。
- ・ 6号住居跡：杯・高杯。
- ・ 5号溝跡：杯・高杯・中型甕・小型壺。
- ・ 6号溝跡：杯・高杯・大型壺・小型壺。

住居跡ごとの器種の比率を見てみると、大型の1・2号住居跡では甕・壺の占める割合が高く、小型の3・6号住居跡では杯の占める割合が高くなっている。

上記遺構の各器種の特徴を見てみると、杯は平底のものと丸底のものがあり、口縁部が外傾して内面に稜が巡るものと外傾しないものがある。杯が出土していない5号住居跡を除く各住居跡では両者の口縁部形態が認められるが、底部は平底のものが主体的で、2・3号住居跡及び6号溝跡では丸底のものもある。高杯は杯部が直線的ないしは内湾気味に外傾して立ち上がり、脚部は長脚中空で、上部が筒状で裾が広がるものである。各遺構から出土した高杯に大きな形態差は認められない。大型壺は口縁部中央に突帯が巡る複合口縁や折返し口縁のもので、小型壺は直口縁となるものである。なお、4号住居跡からは口縁部が直立する大型壺が出土している。

以上の土師器は氏家編年(氏家 1957)の南小泉式、柳沼編年(柳沼 1989)の南小泉式中段階、宮城県亘理町宮前遺跡第ⅡB群土器(宮城県教育委員会 1983)に相当するものと考えられ、年代は5世紀中葉頃である。

古墳時代中期の石製模造品

今回の調査において、石製模造品が24点出土している。種類別に見ると、勾玉形3点、剣形7点、

有孔円板14点で、有孔円板が最も多い。石製模造品は3分の2が1～3号住居跡内から出土しており、床面もしくは床面よりわずかに上から散在的に出土している。

石製模造品を観察すると、表裏の研磨、側面の面取り、孔の大きさがほぼ共通性している。石材は地元で産出する滑石や粘板岩で、器種ごとに石材が使い分けられているのではなく、同一石材から勾玉・剣形・有孔円板を作り出している。いずれも丁寧に成形・研磨されており、未成品が1点出土したものの、調査区内からは生産痕跡は確認されなかった。

勾玉形は剣形、有孔円板に対して数が少ない。剣形は表面にY字形の稜線が形成され、頭部の中央に孔が1個開けられるものを基調とするが、孔が複数個開けられたものが2号住居跡から2点出土しており、非常に珍しい例といえる。有孔円板はすべて双孔で、側面近くに孔が開けられることが多い。平面形は円形ないしは楕円形を呈する。

福島県内の古墳時代を中心とした祭祀について、高松俊雄は祭祀の段階を第1期～第4期に分け、その中で石製模造品の祭祀を第2期と第3期に分類している(高松 1995)。第2期は石製模造品出現期で、5世紀中葉に相当し、古墳や住居跡外からの出土が主となる。第3期は石製模造品の盛期で、5世紀後半～6世紀前半に相当し、集落跡の住居跡内からも出土するようになる。さらに、南小泉式期の土師器とともに出土し、有孔円板・剣形が遺物の9割以上を占めるとされている。

本遺跡の石製模造品は上記分類の第3期に相当するとみられるが、出土土師器が5世紀中葉であることから、集落内の住居跡に伴う例としては、早い段階と推測される。

古墳時代後期から平安時代の遺物

古墳時代後期の遺物は5・6号溝跡から多く出土し、他に竪穴住居跡の覆土に混入したり、遺構外から出土している。その主体を成すのは土師器で、須恵器も少量認められる。

土師器杯及び高杯の杯部は有段丸底で、内面黒色処理されている。杯の口縁部は外傾もしくは内湾気味に立ち上がり、土師器高杯の脚部は短く、緩やかに広がるものと、脚裾部のみ広がるものがある。土師器甕は長胴甕と推測され、外面体部にハケメを施す。土師器甕は無底のものが多いが、多孔のものも遺構外から出土している。土師器杯及び高杯の形態から、氏家編年(氏家 1957)の栗圀式土器、柳沼編年(柳沼 1989)の栗圀式新段階に相当するものと考えられる。

須恵器の杯・蓋には新地町善光寺窯跡や南相馬市鳥打沢A遺跡1号須恵窯出土の杯・蓋と似た形状のものがあり、頸部に沈線が巡る長頸瓶はいわき市朝日長者遺跡63号住居跡出土のフラスコ形長頸瓶の頸部に似ている。以上のように、大凡7世紀代の年代が推測される。

奈良・平安時代の土器は非常に少ないが、10号溝跡からロクロ成形の土師器甕と赤焼土器杯、遺構外から両面黒色処理された土師器高台付杯、4号住居跡から須恵器長頸瓶が出土している。遺構外出土の両面黒色処理の土師器高台付杯と似た形状のものは、南相馬市大船迫A遺跡36号住居跡からも出土しており、8世紀前半の年代が与えられている。また、4号住居跡出土の須恵器長頸瓶は肩が角張り、8世紀前半のものと推測される。

中・近世の遺物

中・近世の遺物はかわらけ・瓦質土器・陶磁器・銭貨が出土している。

かわらけは点数は少ないが、すべてロクロ成形で、厚手の小皿と薄手で杯形の皿があり、燈明皿への転用もみられる。時期は12世紀から16世紀前葉までと幅が広い。

瓦質土器は香炉6点、播鉢4点、火鉢5点が出土している。香炉は3脚のものがほとんどで、体部上側にスタンプ文を施すものが2点含まれている。播鉢は卸目が間隔を空けて施されているものが古手で、卸目の密なものが新しいとみられる。火鉢は脚付きのものと、そうでないものがあり、口縁部にスタンプ文が施されているものが2点含まれている。水澤幸一の分類案(水澤 1999)によると、これらの瓦質土器は16世紀に相当し、香炉や播鉢は城館跡や屋敷跡、町跡、寺院跡で出土する例が多く、本遺跡のような集落跡から多数出土したことは注目される。

陶磁器は在地産の大堀相馬焼が多く、17世紀後半～19世紀のものとみている。

銭貨は近世に最も普及した「寛永通寶」が出土せず、11～15世紀の渡来銭が出土している。

木製品

調査区内は湧水点が高く、木製品が多く出土した。放射性炭素年代測定と樹種同定の結果も踏まえて検討する。

1・2・5号住居跡から出土した木製品は、住居の柱材とその礎板である。分析の結果、1号住居跡の柱材の年代は4世紀後半～5世紀前半で、樹種は1・2号住居跡の柱材がコナラ、2号住居跡の礎板がクリであった。2・5号住居跡の柱材は角柱であった可能性が高く、2号住居跡の礎板は多角形の材を割って薄い板状にした転用材と推測される。

1・3・4号建物跡から出土した木製品は全て礎板で、いずれも加工痕が明瞭に残っている。年代測定の結果、3号建物跡の礎板の年代は6世紀中葉～7世紀前葉、4号建物跡の礎板の年代は7世紀後葉～9世紀中葉であり、樹種は3号建物跡がイチイ科またはイヌガヤ科と針葉樹、4号建物跡がクリであった。3号建物跡の礎板はすべて転用材とみられ、同一木製品から切り出した可能性が高い。4号建物跡の礎板は長辺が70cmを超える大型のものである。

10号井戸跡については次節で検討するが、他の井戸跡から出土した木製品は、曲物の底板や組板など生活用品が多い。

(菅野)

第2節 遺構について

遺構の変遷 (図74)

古墳時代中期

古墳時代中期の遺構は1～6号住居跡、1号柵跡、5・6号溝跡(古期)である。

5・6号溝跡はそれぞれ幅3m程の大規模な溝跡で、本来はL字形を成す一連のものである。これに並行して、その内側に1号柵跡が存在し、さらに、その内側に1～6号住居跡が存在している。6号溝跡と1号柵跡は6号溝跡の南端部で一旦終息するが、少しの間隔を置いて、さらに南方へ延びていると推測されることから、6号溝跡が途切れた部分は土橋と推測される。

竪穴住居跡は作り替えや重複がなく、これらの住居跡内からは、南小泉式期の土師器や石製模造品が出土している。2・4～6号住居跡は軸線方向が1号柵跡及び5・6号溝跡の主軸方向とほぼ並行し、北西から南東へ並んでいる。また、1号住居跡もこれらの住居跡と近い軸線方向であり、これらはほぼ同時期に存在していたものと推測される。なお、3号住居跡は軸線方向が他の住居跡と異なり、東へ傾いており、火災住居と考えられること、4・5号住居跡と近接していることから、他の住居跡とは、同じ南小泉式期でも若干時間差があると推測される。他の特徴を見てみると、それぞれの住居跡にはカマドがなく、1・6号住居跡では住居内の西～南壁に近い所に炉跡があり、1～3・6号住居跡では西壁から南壁沿いに1基もしくは2基の貯蔵穴を持つ。なお、2号住居跡の柱穴の礎板は転用材であることから、それに先行する住居跡が存在したと推測する。

これらのことから、古墳時代中期に区画溝跡と柵跡に囲まれた集落跡が形成されたものと推測され、区画溝跡と柵跡に囲まれた景観から、居館跡の可能性もある。土橋を東辺の中央と推定すれば、方形区画の溝跡に囲まれた居館跡の規模は一辺60m程と復元することが可能である。なお、本遺跡から北西へ約2kmに所在する反町遺跡では、L字形に伸びる溝跡と並行する柵跡が検出され、溝跡からは古墳時代中期の土師器が大量に出土している。本遺跡と同じ頃に、同規模の集落跡が、真野川北岸の自然堤防上に形成されていた可能性が考えられる。

なお、5号住居跡内からは椀形滓も出土しており、遺構内で鍛冶が行われた可能性もある。

古墳時代後期

古墳時代後期には、調査区内に居住施設は見つからなかったが、溝跡と土坑が存在する。

溝跡は北東側から北部にかけて作られ、重複が激しく、最多で4時期の変遷が認められる。調査区北東側で6a・9号溝跡→5a号溝跡→11号溝跡→7・8号溝跡と変遷している。6a・9号溝跡の堆積土下部より榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)が確認され、5a・6a・8号溝跡からは栗圀式期の遺物が大量に出土していることから、これらの溝跡は、榛名二ツ岳伊香保テフラ降下前(6世紀中葉頃)から7世紀後半にかけて存在したと推測される。なお、北側の12・14・17号溝跡の同時性や前後関係は不明である。

当期の土坑は26基で、北部では密集して存在する箇所もあるが、中央から南部にかけては散在的である。各土坑の性格については不明であるが、調査区内に居住施設が検出されなかったことから、非日常的な性格の遺構と考えられる。

なお、遺物の多さから、調査区の北東隣接地に当期の集落跡が存在したものと推測される。

奈良・平安時代

奈良・平安時代には1～4号建物跡と10号井戸跡、10号溝跡がある。

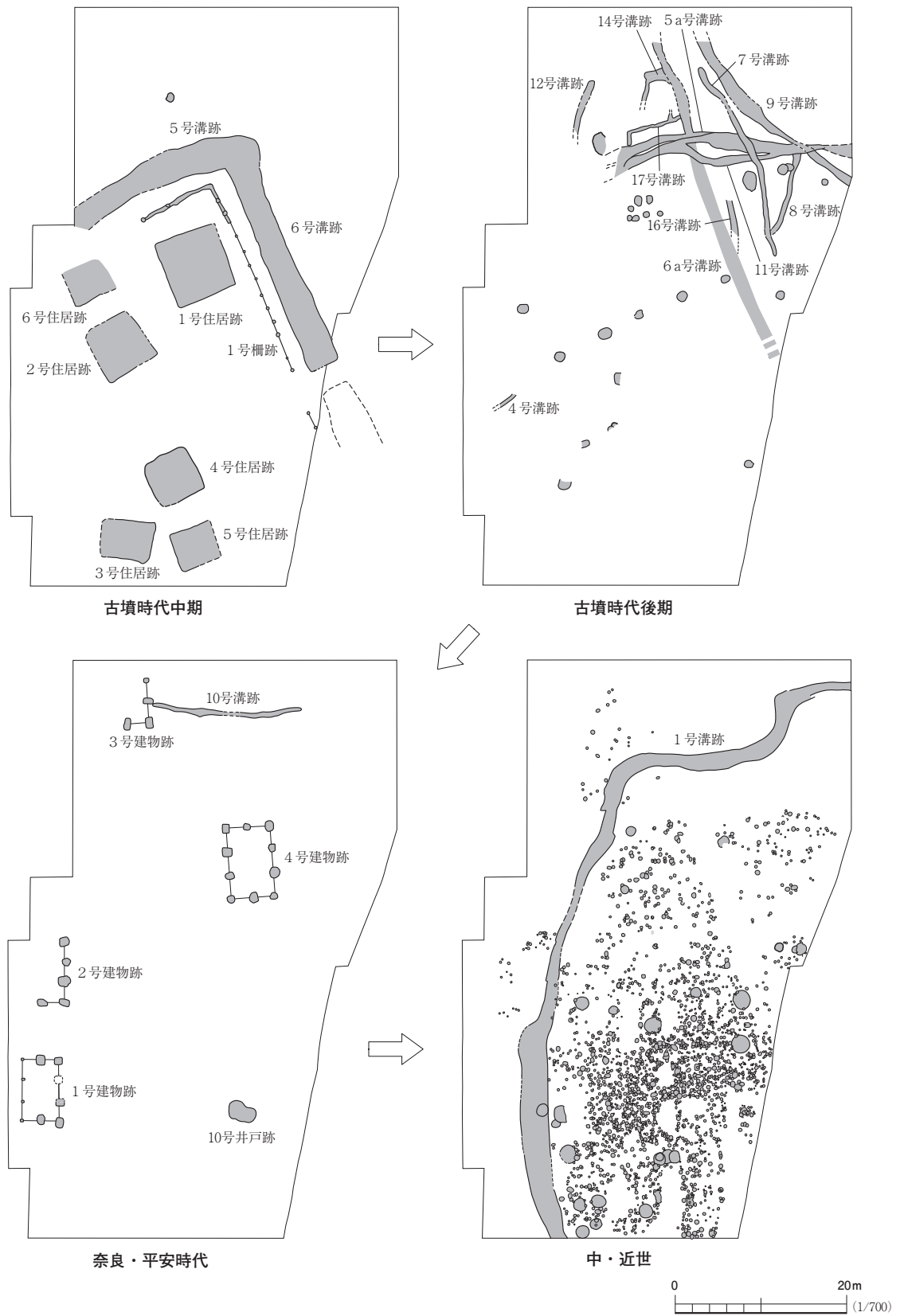


図74 遺構変遷図

1～4号建物跡はすべて南北3間、東西2間の南北棟と推測され、底面に礎板を伴う。主軸が南北方向で一致することから、4棟はほぼ同時に存在したものと推測されるが、1・2号建物跡に対し3・4号建物跡の主軸方向がわずかに西に傾いているため、時期差がある可能性もある。

10号井戸跡については後述するが、4号建物跡の真南に位置しており、4号建物跡の柱筋を意識して作られた可能性が考えられる。10号井戸跡に使用された木製品は、掘立柱建物跡の礎板と加工痕が似ており、年代測定結果も重複することから、同時期と推測した。

調査区北部に位置する10号溝跡は、東西方向に直線的に伸びており、この遺構も方角を意識して作られたとみられる。

また、4号建物跡の中軸線の北方に近接して存在する78号土坑に関しては、軸線方向が4号建物跡とほぼ同じであることから、4号建物跡に付随する施設の可能性も否めない。

これらの遺構の詳細な時期は不明であるが、4号建物跡は6a号溝跡が完全に埋まった後に掘られていることから、おおよそ奈良・平安時代と判断した。また、10号井戸跡内出土の土師器甕や遺構外出土の土師器高台付杯は当期のものである。

なお、本遺跡の南東方向に隣接する竹花遺跡からも礎板を伴う掘立柱建物跡が確認されている。出土遺物から古墳時代後期とみられているが、本遺跡の掘立柱建物跡と柱穴の大きさや柱間寸法が近似しており、本遺跡と同時期の可能性が高い。

中・近世

中・近世には1号溝跡の他、掘立柱建物跡の柱穴と推測される無数の小穴、18基の井戸跡、多くの土坑が作られる。

1号溝跡は調査区北東端から南端まで湾曲するように伸びており、1号溝跡に囲まれた範囲内に小穴や井戸跡、土坑が集中する。1号溝跡は区画や排水の役割を担っていたとみられ、中・近世の幅広い時代の遺物を含んでいた。小穴は密集し、重複も激しいことから、建物跡を特定することが困難であった。井戸跡も狭い範囲に密集して掘られており、12～19世紀の遺物が出土している。以上の事から、本遺跡では長期に渡り人々が生活していた様子が推測される。

なお、本遺跡の北東1.5kmの南海老南町遺跡でも中世の集落跡が見つかっている。

延文3年(1358年)の「相馬親胤讓状」によると、本地域には「仁木(右)田村」があったとされており、本遺跡がその一部であった可能性が高いとみている。また、瓦質土器が多量に出土していることから、城館や寺院に関係する立場の人々が生活していた可能性がある。隣接する竹花遺跡の南方に存在した観音堂や、本遺跡の西約700mに所在する薬師堂、北西約2kmに所在する16世紀中葉～17世紀初頭の城館跡である田中城跡との関係も考えられる。

10号井戸跡について (図75・76)

10号井戸跡の大きな特徴として、井戸枠が丸木舟転用の可能性があること、大きな掘形と土留め施設を持つこと、井戸枠の内外に円礫が詰まっていることの3点が挙げられる。

本井戸枠は最大長1.26 m、最大幅67.5cmを測り、内部を削り貫いて、横断面形が「コ」の字形を呈する2つの樋状の材を組み合わせたものであるが、縦断面を見るとそれぞれの外面が片方だけ内湾している。図76-1に示すように並べてみると、丸木舟のような形状に復元でき、外面の内湾具合からそれぞれ船首付近、船尾付近と推測される。側面上部の逆三角形もしくは逆台形の切り込みは、類例が少なく断定はできないが、櫂を設置するためのものと考えられる。船底に当たる部分にはそれぞれ2ないし3個の穴が存在する。これは井戸枠転用時に取水目的で開けられたとみられる。また、手斧による加工痕が全体に明瞭に残り、使用痕はみられず、左右側面の厚みが違うことから、井戸枠転用時に全体を再加工しているものと推測している。

全国的に見た場合、丸太を削り貫いて井戸枠とする例は、弥生時代から近世にいたるまで確認され、丸木舟を転用した例も多く報告されている。図75に示したのはその一部である。この他にも最近では、新潟県阿賀野市石船戸東遺跡で中世の丸木舟転用井戸枠が出土している。いずれも横断面形は「コ」の字形に近い半円形で、船首と船尾の端部を切り取り、胴部を分割し、筒状に組み合わせることで井戸枠に転用しており、本井戸枠と形状がよく似ている。丸木舟の他の痕跡としては、滋賀県守山市弘前遺跡では座面などを構成する部材を取り付けた穴が内面に残り、富山県氷見市鞍川D遺跡では外面にフナクイムシの食害痕が認められる。

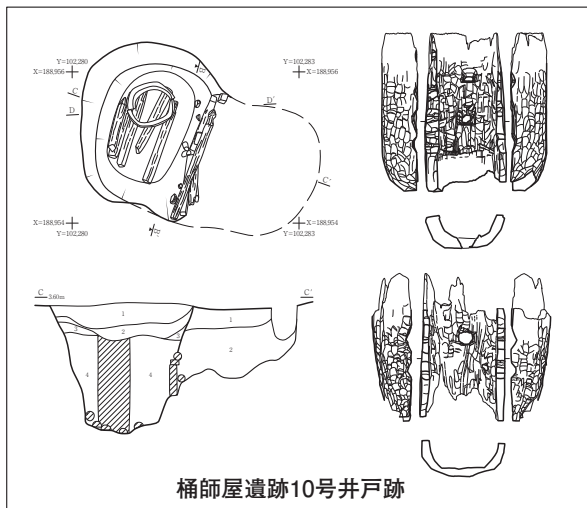
県内では会津若松市屋敷遺跡、湯川村桜町遺跡、いわき市岸遺跡等で丸太削り貫き井戸枠の出土例が認められるが、本遺構のように大型で、井戸枠に丸木舟を転用した例は認められない。相双地区では浦が多く、大正時代まで丸木舟を利用していた記録があり、さらに遡る時代にも本遺跡の近郊で丸木舟を使用した生業が営まれていたことが推測される。

大型の掘形と土留め施設を持つ井戸跡については、現段階では類例を確認できなかった。土留め施設に使用された木製品は建築部材の転用とみられ、付近に転用元となった建築物が存在したと考えられるが、遺物から転用元の建築物を想定することはできなかった。図58-1・2の板材は加工痕や炭化部分が共通しており、同一の建築物、それも火災に遭った建築物から持ち出された可能性が高い。また、図76-3に示したように、宝珠状の丸太材(図57-1)と、根太材(図59-2・3)は組み合わせが可能であり、柱と梁の部材のように復元できる。

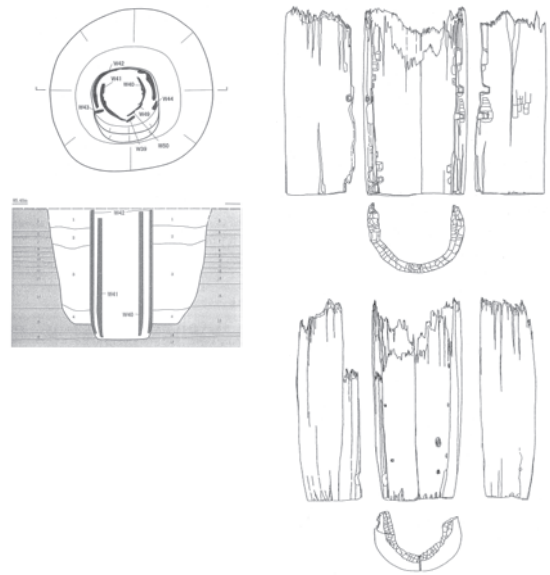
井戸枠の内外を円礫で埋めている点については、事実報告で記述した通り、水の浄化を目的としたものと考えている。井戸枠内部の礫層は55cmと厚く、礫層上面が井戸の底面と考えられる。

また、井戸枠と根太を放射性炭素年代測定した結果、7世紀末～9世紀中葉という結果が出た。

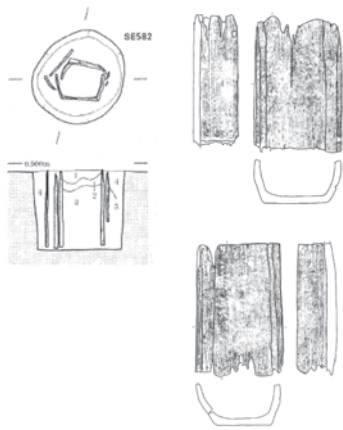
以上のように本井戸枠は丸木舟を転用した可能性が高く、本遺跡が真野川の河口付近に位置することからも、古代以前に丸木舟を使用した生活があったことが想定される。また、土留め施設に使用された木製品は、近隣に転用元の建築物が存在したことを示唆している。これらの特徴に加え、根太を敷くことや、円礫を井戸枠内外に入れることなど、特異な作り方をしている井戸跡であり、類例を探し出すことはできなかった。このような井戸跡を作った目的や使用時の状況など、解明できなかったことも多いが、今後調査事例が増えていく中で判明する事を期待する。(菅野)



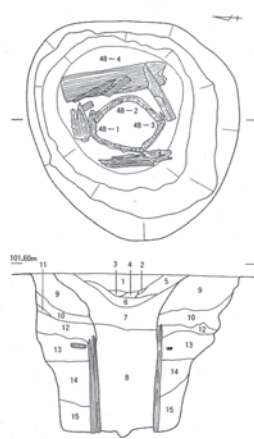
桶師屋遺跡10号井戸跡



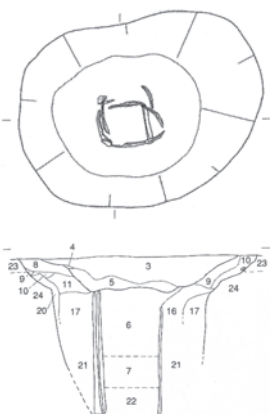
滋賀県・弘前遺跡（古墳時代後期）



秋田県・洲崎遺跡（中世）



山形県・高瀬山遺跡（平安時代）



富山県・鞍川D遺跡（中世）

各報文から転載
 (遺構 1/100、遺物 1/60)

図75 丸木舟転用井戸枠出土類例

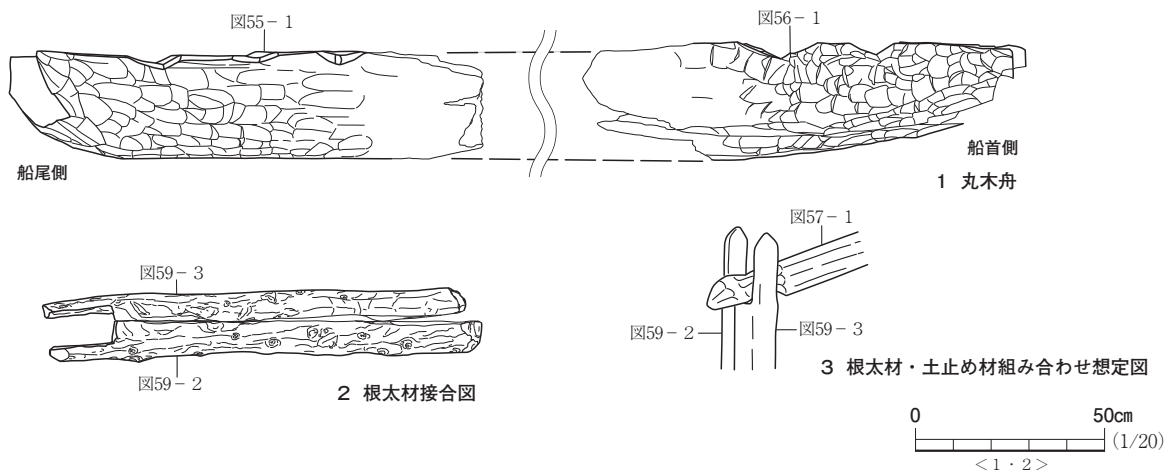


図76 10号井戸跡出土木製品転用前想定図

第3節 ま と め

今回の調査により、本遺跡は主に古墳時代中期から近世の複合遺跡であり、時代ごとに様々な空間利用がされていることが判明した。

本遺跡では、盛期を迎える前段階のものとして、少量の弥生土器が出土した他、古墳時代前期の土師器甕が埋められた土坑が1基見つかった。

古墳時代中期には、区画溝跡と柵跡に囲まれた集落跡が形成される。竪穴住居跡は5軒が主軸方向をほぼ揃えて作られており、各住居跡の貯蔵穴からは土師器がまとまって出土した。集落内では石製模造品を使用した祭祀も行われているが、継続的な集落ではなかったと推測される。なお、近隣の調査から、同様の区画溝跡に囲まれた集落跡が真野川沿いに複数存在した可能性が考えられ、今まで明らかにされなかった古墳時代中期の人々の生活の一端が垣間見える。

古墳時代後期には、調査区北側に複数の溝跡が形成される。溝跡は排水溝として機能したと考えられ、遺物が多く出土したものの、住居跡等は確認されなかった。

奈良・平安時代には、主軸を南北方向に揃えた掘立柱建物跡からなる集落跡が形成される。掘立柱建物跡はすべて同規模と推測され、柱穴底面には礎板を伴う。近隣の遺跡からも同様の建物跡が確認されていることから、当地域に掘立柱建物跡により構成される集落跡が存在したことが推測される。また、10号井戸跡から県内初の丸木舟を転用した丸太半裁割り貫き井戸杵が出土したことは特筆される。

中・近世には、掘立柱建物跡や井戸跡を何度も作り替えながら、長期に渡って人々が生活していた様子が認められた。無数の小穴群や狭い範囲内に近接して検出された井戸跡がそれを物語っている。また、瓦質土器が多く出土し、城館や寺院との関係もうかがえる。

以上のように、今回の調査では新たな発見もあり、地域史に新たな1ページを追加したと言える。この成果が地域の歴史の解明の一助になれば幸いである。

(菅野)

引用・参考文献

- 会津若松市教育委員会 1993 『屋敷遺跡』
- 青山博樹 1999 「古墳時代中～後期の土器編年―福島県中通り地方南部を中心に―」『福島考古』第40号記念号 福島県考古学会
- 秋田県教育委員会 2000 『洲崎遺跡 県営ほ場整備事業(浜井川地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 石野博信他編 1991 『古墳時代の研究 第3巻 生活と祭祀』 雄山閣
- 石野博信他編 1991 『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』 雄山閣
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』 海青社
- いわき市教育委員会 1981 『朝日長者遺跡・夕日長者遺跡』
- いわき市教育委員会 1990 『岸遺跡』
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 宇野隆夫 1982 「井戸考」『史林』 史学研究会
- 岡山県教育委員会 1997 『津寺遺跡4 山陽自動車道建設に伴う発掘調査14』
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
- 鹿島町 1999 『鹿島町史』第三巻 資料編2 「原始・古代・中世」
- 鐘方正樹 2003 『井戸の考古学』 同成社
- 木本元治 1989 「福島県内の黒色土器(古墳時代～奈良時代)」『東国土器研究』第2号 東国土器研究会
- 久保和也ほか 1990 「原町及び大薨地域の地質」『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』 地質調査所
- 佐久間正明 2004 「福島県における五世紀代古墳群の研究―石製模造品を通じた正直古墳群の分析を中心に―」『古代』第117号 早稲田大学考古学会
- 佐久間正明 2015 「石製模造品からみた阿武隈川流域における首長層の動向」『阿武隈川流域における古墳時代首長層の動向把握のための基礎的研究』 福島大学行政政策学類
- 滋賀県教育委員会 2008 「弘前遺跡Ⅰ 守山市赤野町・矢島町」『ほ場整備関係(水質保全対策)遺跡発掘調査報告書35-1』
- 篠原祐一 2007 「祭祀石製品」『季刊考古学』第99号 雄山閣
- 高松俊雄 1995 「福島県における祭祀遺物の様相」『論集しのお考古』
- 富山県氷見市教育委員会 2006 『鞍川D遺跡 鞍川バイパス遺跡群発掘調査報告Ⅱ』
- 中山雅弘 1988 「福島県における中世土器の様相」『東国土器研究』第1号 東国土器研究会
- 奈良文化財研究所 1985 『木器集成図録 畿内古代篇』
- 新潟県埋蔵文化財調査事業団 2017 『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成28年度』
- 野馬追の里原町市立博物館 1999 『相馬のやきもの―収蔵資料を中心として―』企画展図録
- 氷見市立博物館 2015 『特別展 とやまの船と船大工―船が支えた人びとのくらし―』図録
- 福島県教育委員会 1988 『国道113号バイパス遺跡調査報告Ⅳ』
- 福島県教育委員会 1992 『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅲ』福島県文化財調査報告書第281集
- 福島県教育委員会 1995 『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅴ』福島県文化財調査報告書第310集
- 福島県教育委員会 2011 『常磐自動車道遺跡調査報告62 館越遺跡』
- 福島県教育委員会 2011 『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告10 桜町遺跡(2次)』
- 福島県教育委員会 2015 『東日本大震災復興関連遺跡調査報告1』
- 福島県教育委員会 2016 『農山漁村地域復興基盤総合整備事業関連遺跡調査報告1 天化沢A遺跡』
- 福島県教育委員会 2016 『東日本大震災復興関連遺跡調査報告2』
- 福島県教育委員会 2016 『東日本大震災復興関連遺跡調査報告3』
- 福島県教育委員会 2017 『農山漁村地域復興基盤総合整備事業関連遺跡調査報告2 五畝田・犬這遺跡』
- 北陸中世考古学会研究会 2001 『中世北陸の井戸』第14回北陸中世考古学会研究会資料集
- 南相馬市 2011 『原町市史』第三巻 資料編Ⅰ「考古」
- 水澤幸一 1999 「瓦器、その城館的なもの―北東日本の事例から―」『帝京大学山梨文化財研究報告』第9集
- 三野与吉 1942 『地形原論―岩石床より観たる準平原論』 古今書院
- 宮城県教育委員会 1983 『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』
- 宮城県教育庁文化財保護課 2016 「平成27年度宮城の発掘調査パネル展」配布資料
- 村田晃一 2007 「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』 東北学院大学文学部
- 柳沢幸夫ほか 1998 「相馬中村地域の地質」『地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)』 地質調査所
- 柳沼賢治 1989 「福島県中通り地方の土師器」『シンポジウム 福島県に於ける古代土器の諸問題―特に5～7世紀を中心として』 万葉の里シンポジウム実行委員会/鹿島町教育委員会
- 山形県埋蔵文化財センター 2000 『高瀬山遺跡(2期)第2・3次発掘調査報告書』

付章 自然科学分析

第1節 出土加工材の樹種同定

株式会社 加速器分析研究所

1. 試料

桶師屋遺跡は南相馬市鹿島区北右田字桶師屋に所在し、真野川の河口付近に形成された自然堤防上に位置する。本遺跡では、古墳時代中期及び奈良・平安時代とされる住居跡・掘立柱建物跡から出土した加工材と中世または古代の可能性があるとされる井戸跡から出土した加工材について当時の木材利用状況を調査する目的で、木片計8点の樹種同定を行った(表2)。

なお、同遺跡から出土したFB-OSY-01～09の9点のうち、FB-OSY-01・04・06・09の4点を含む5点の放射性炭素年代測定が実施され、古墳時代中期頃から平安時代頃の年代値が示されている(本章第2節 年代測定報告参照)。

2. 分析方法

試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の切片を採取し、封入剤でプレパラートに固定して生物顕微鏡で観察し、現生標本の形態に基づき同定を行った。

3. 結果

同定結果を表2に示す。柱材のFB-OSY-01はコナラ節、FB-OSY-02はクヌギ節であった。礎板のFB-OSY-03・06はクリ、FB-OSY-04はイチイ科またはイヌガヤ科、FB-OSY-05は針葉樹であった。井戸の土留め杭のFB-OSY-08はクヌギ節、根太材のFB-OSY-09はクリであった。以下に同定の根拠を示す。

・イチイ科またはイヌガヤ科 (Taxaceae or Cephalotaxaceae)

同定した試料はFB-OSY-04である。早材から晩材への移行は漸進的で、晩材部の幅は大変狭く年輪界がやや不明瞭である。放射断面では仮道管壁に多数のらせん肥厚が見られるが、有縁壁孔は溶けかかっている。放射組織の壁も溶けかかった状態で分野壁孔は確認できず、細胞内に多数の菌糸が入り込んでいる。樹脂道は垂直・水平ともに確認されない。仮道管にあるらせん肥厚がやや対になる傾向があることからイチイ科のカヤの可能性も考えられるが、菌類による腐蝕が全体的に激しいため詳細な同定は避けた。

・針葉樹

同定した試料はFB-OSY-05である。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部は薄い年輪

界は明瞭である。仮道管の有縁壁孔は薄くなっており放射組織の壁が薄く、分野壁孔は確認できない。接線断面では単列の放射組織が見られ、樹脂道は垂直・水平ともないことがわかる。仮道管壁に薄くスジがあるように見えるが、仮道管壁が溶け落ちていることも考えられ、同定不可能で針葉樹とした。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状に小道管が配列する環孔材。道管の穿孔板は、単一で放射組織は同性で単列ないし時々2細胞幅となる。FB-OSY-09に関しては年輪幅が狭く小道管の配列がほとんど確認できなかったが、観察できる範囲内で広放射組織が確認されなかったことと、単列放射組織中に2細胞幅になる部分があることからクリと同定した。

・コナラ属コナラ節 (*Quercus* sect. *Prinus*)

年輪最初に大きな道管が数個塊をなして、その後徐々に径を減じて火炎状ないし波状にやや角張った薄壁の小道管が配列する環孔材で、2-3mm程度の間隔で横断面に広放射組織が現れる。道管の穿孔板は、単一で放射組織は同性で単列と多細胞幅の広放射組織がある。

・コナラ属クヌギ節 (*Quercus* sect. *Aegilops*)

年輪最初に大きな道管が数列配列し、その後徐々に径を減じて波状に厚壁の円い小道管が配列する環孔材で、横断面に広放射組織が見える。道管の穿孔板は単一で、放射組織は同性で単列と多細胞幅の広放射組織がある。

4. 考 察

本遺跡の柱材はコナラ節とクヌギ節、礎板はクリ、イチイ科またはイヌガヤ科と針葉樹が使われていた。福島県では、コナラ節やクヌギ節は炭化した住居構築材としての出土例が、古墳時代から平安時代でやや目立つ。古代では、荒田目条里制遺構の出土例において柱材にクリ、コナラ節、礎板にクリ、クヌギ節、針葉樹が利用されていた類例がみられる(伊東ほか 2012)。本遺跡で確認された樹種はこうした傾向に調和的である。

井戸構築材はクリとクヌギ節であったが、これらは水湿に対する耐久性があることから利用されたと考えられる。

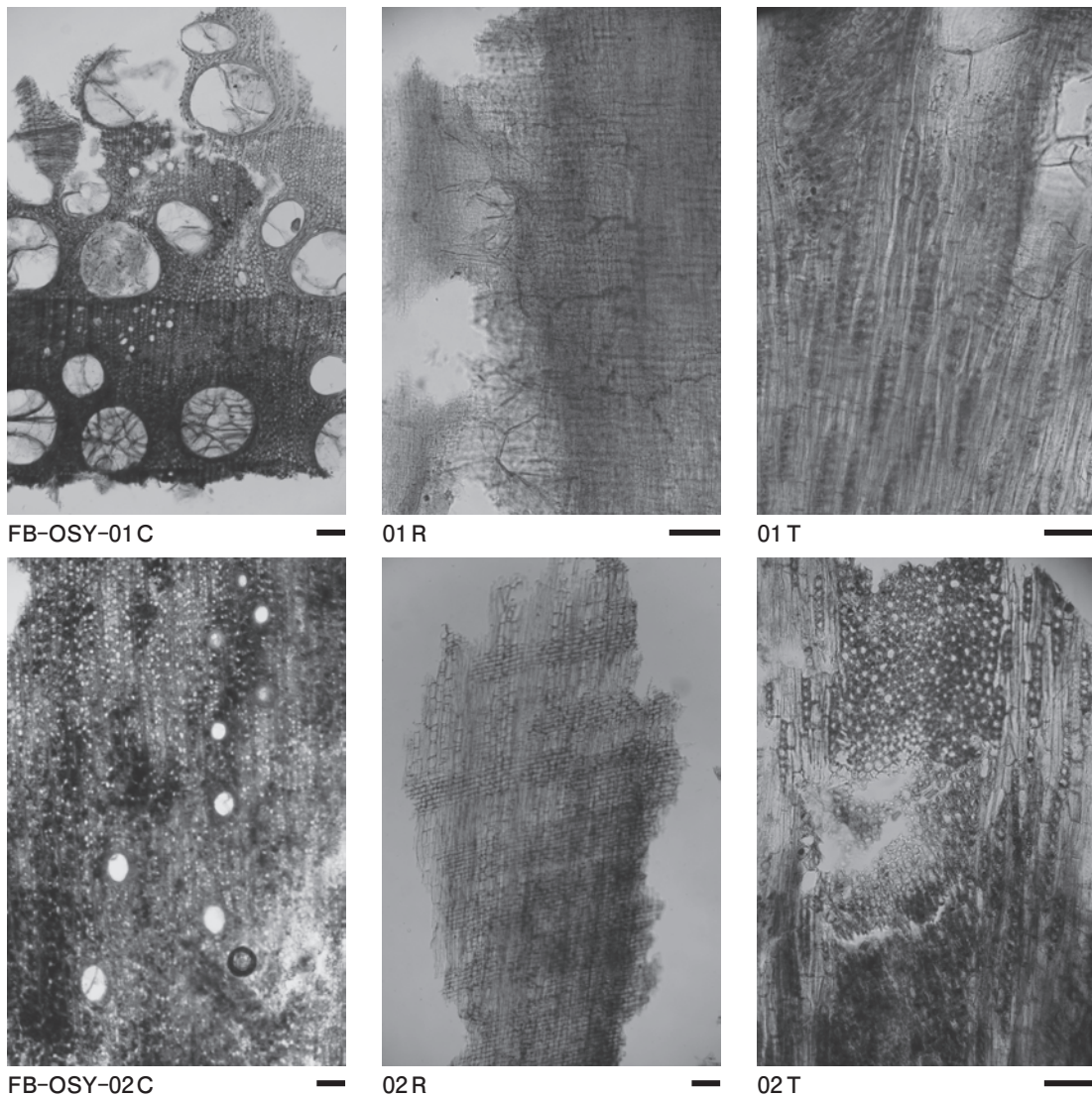
※)本分析は、古代の森研究舎の協力を得て行った。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久(編) 2012 『木の考古学 出土木製品用材データベース』 海青社

表2 出土加工材の樹種同定結果

試料番号	遺構	層位	種類	樹種
FB-OSY-01	SI01 P3	ℓ 13	柱材	コナラ属コナラ節
FB-OSY-02	SI02 P6	ℓ 4	柱材	コナラ属クスギ節
FB-OSY-03	SI02 P6	ℓ 4	礎板	クリ
FB-OSY-04	SB03 P2	底面	礎板	イチイ科またはイヌガヤ科
FB-OSY-05	SB03 P3	底面	礎板	針葉樹
FB-OSY-06	SB04 P10	底面	礎板	クリ
FB-OSY-08	SE10	南側土留め	杭	コナラ属クスギ節
FB-OSY-09	SE10	底面	根太材	クリ



C : 横断面 R : 放射断面 T : 接線断面 スケール : 0.1mm

図77 出土加工材 (1)



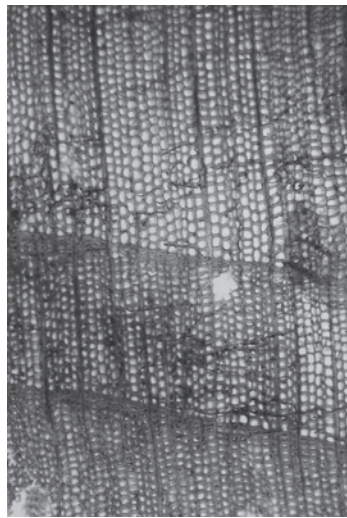
FB-OSY-03C



03R



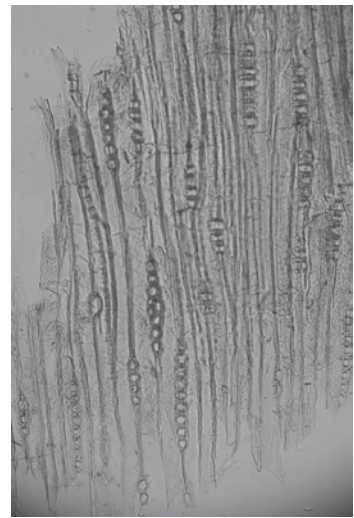
03T



FB-OSY-04C



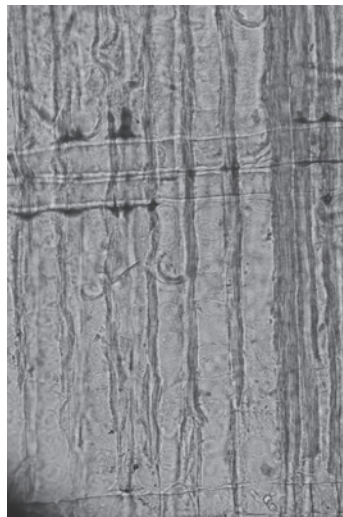
04R



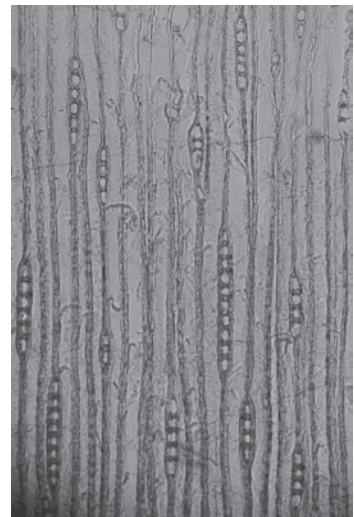
04T



FB-OSY-05C



05R



05T

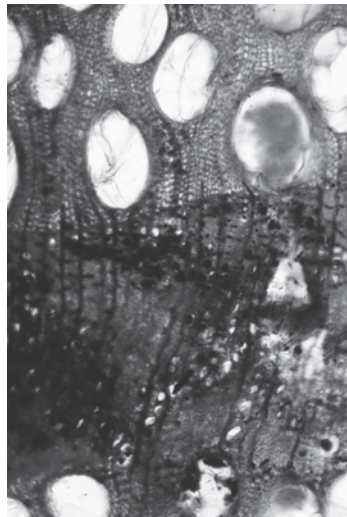
C：横断面

R：放射断面

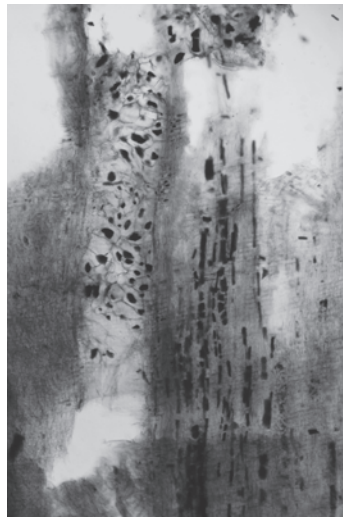
T：接線断面

スケール：0.1mm

図78 出土加工材（2）



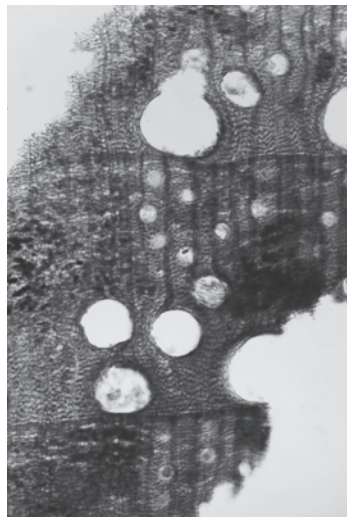
FB-OSY-06C



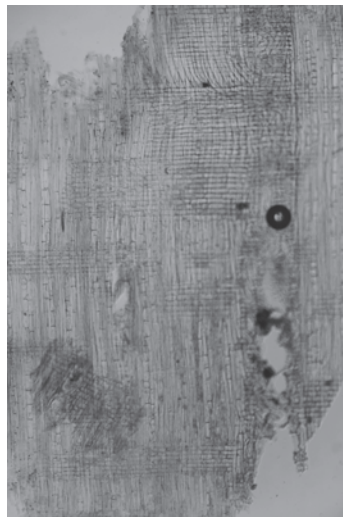
06R



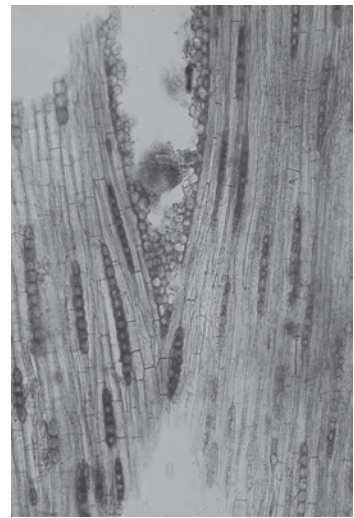
06T



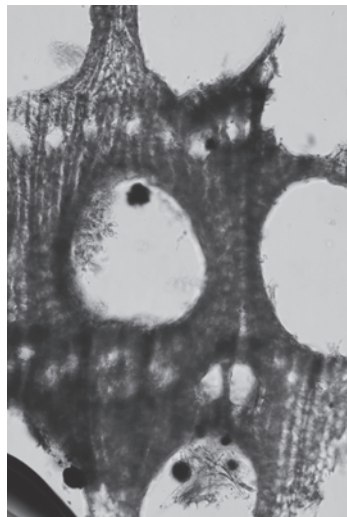
FB-OSY-08C



08R



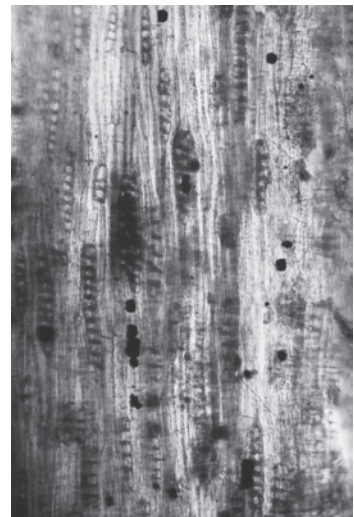
08T



FB-OSY-09C



09R



09T

C：横断面

R：放射断面

T：接線断面

スケール：0.1mm

図79 出土加工材（3）

第2節 出土加工材の放射性炭素年代

株式会社 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

桶師屋遺跡は、福島県南相馬市鹿島区北右田字桶師屋(北緯37° 41′ 50″、東経140° 59′ 35″)に所在し、真野川の河口付近に形成された自然堤防上に位置する。測定対象試料は、竪穴住居跡や掘立柱建物跡の柱穴、井戸跡から出土した木片合計5点である(表3)。FB-OSY-01は1号住居跡(S I 01)の主柱穴(P 3)から出土した柱材、FB-OSY-04は3号建物跡(S B 03)の柱穴(P 2)の底面、FB-OSY-06は4号建物跡(S B 04)の柱穴(P 10)の底面からそれぞれ出土した礎板、FB-OSY-07は10号井戸跡(S E 10)から出土した井戸枠、FB-OSY-09は10号井戸跡(S E 10)の底面に配置されていた根太材で、それぞれ残存する最外部から採取された。なお、同遺跡から出土したFB-OSY-01～09の9点のうち、FB-OSY-01・04・06・09を含む8点の樹種同定が実施されている(本章第1節 樹種同定報告参照)。

試料の年代は、FB-OSY-01が古墳時代中期、FB-OSY-04・06が奈良・平安時代、FB-OSY-07・09が中世または古代の可能性があると推定されている。

2. 測定の意義

1号住居跡出土柱材の測定では、出土遺物の年代と測定結果の整合性を確認する。また、遺物での判断が難しい遺構の年代を明らかにする。

3. 化学処理工程

- (1)メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2)酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表3に記載する。
- (3)試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4)真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5)精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6)グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表3)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表4に示した。暦年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6. 測定結果

測定結果を表3・4に示す。なお、年代については佐原(2005)の編年を参考とする。

推定年代が古墳時代中期のFB-OSY-01の¹⁴C年代は 1640 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は389～424calADの範囲で示される。古墳時代中期頃に相当し、推定された年代と一致する。

推定年代が奈良・平安時代のFB-OSY-04の¹⁴C年代は 1480 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は563～609calADの範囲、FB-OSY-06の¹⁴C年代は 1240 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は694～858calADの間に4つの範囲で示される。FB-OSY-04は推定された年代よりもやや古く古墳時代後期～終末期頃、FB-OSY-06は推定年代とおおむね近い値となった。

推定年代が中世で、古代の可能性もあるFB-OSY-07の¹⁴C年代は 1250 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は694～772calADの間に2つの範囲、FB-OSY-09の¹⁴C年代は 1220 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)は731～867calADの間に4つの範囲で示される。奈良・平安時代頃に相当し、可能性の指摘される年代と一致するが、主要な推定時期である中世よりは古い。

今回測定された試料の一部で年代が推定年代よりも古い値となった原因の一つとして、以下に記す古木効果を考慮する必要がある。樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は樹皮直下の最外年輪の年代で樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は最外年輪からの年輪数の分古い年代値を示すことになる(古木効果)。測定された試料の中で樹皮が残存するものはなく、本来の最外年輪を確認できた試料はないことから礎板等の本来の年代は測定された年代よりも新しい可能性がある。さらに、これらについて古材が転用された可能性もあるため、素材となった木が死んだ年代から材が製作されるまでの間にも時間差が生じる可能性が考えられる。

試料の炭素含有率は、FB-OSY-09を除く4点は59%を超える適正な値である。FB-OSY-09は28%とやや低い値となっているが、測定結果に大きく影響するほどではないと考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), pp.337-360.
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years calBP, *Radiocarbon* 55 (4), pp.1869-1887.
- 佐原 眞 2005 「日本考古学・日本歴史学の時代区分」『ドイツ展記念概説 日本の考古学』上巻 佐原眞/ウエルナー・シュタインハウス監修、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集 学生社 pp.14-19
- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19 (3), pp.355-363.

表3 放射性炭素年代測定結果（1）（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）

（試料Noの頭部「FB-OSY-」を省略表記）

測定番号	試料No	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-170118	01	SI01 P3 ℓ13 柱材	木片	AaA	-31 ± 0.16	1,640 ± 20	81.55 ± 0.23
IAAA-170119	04	SB03 P2 底面 礎板	木片	AAA	-31 ± 0.19	1,480 ± 20	83.17 ± 0.23
IAAA-170120	06	SB04 P10底面 礎板	木片	AAA	-31 ± 0.21	1,240 ± 20	85.73 ± 0.24
IAAA-170121	07	SE10 井戸枠	木片	AAA	-29 ± 0.24	1,250 ± 20	85.58 ± 0.24
IAAA-170122	09	SE10 底面 根太材	木片	AAA	-30 ± 0.17	1,220 ± 20	85.93 ± 0.24

表4 放射性炭素年代測定結果（2）（ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

[参考値]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-170118	1,740 ± 20	80.48 ± 0.22	1,638 ± 22	389calAD - 424calAD (68.2%)	345calAD - 371calAD (6.2%) 377calAD - 432calAD (79.3%) 491calAD - 531calAD (9.9%)
IAAA-170119	1,570 ± 20	82.2 ± 0.23	1,480 ± 22	563calAD - 609calAD (68.2%)	547calAD - 635calAD (95.4%)
IAAA-170120	1,340 ± 20	84.68 ± 0.23	1,236 ± 22	694calAD - 746calAD (42.4%) 763calAD - 778calAD (12.7%) 792calAD - 803calAD (6.0%) 843calAD - 858calAD (7.2%)	688calAD - 752calAD (46.0%) 759calAD - 780calAD (14.7%) 788calAD - 875calAD (34.7%)
IAAA-170121	1,310 ± 20	84.92 ± 0.23	1,250 ± 22	694calAD - 747calAD (58.5%) 763calAD - 772calAD (9.7%)	678calAD - 779calAD (85.9%) 791calAD - 828calAD (5.4%) 839calAD - 864calAD (4.0%)
IAAA-170122	1,300 ± 20	85.03 ± 0.24	1,218 ± 22	731calAD - 736calAD (3.5%) 769calAD - 779calAD (8.6%) 790calAD - 830calAD (32.4%) 837calAD - 867calAD (23.7%)	714calAD - 744calAD (12.8%) 765calAD - 886calAD (82.6%)

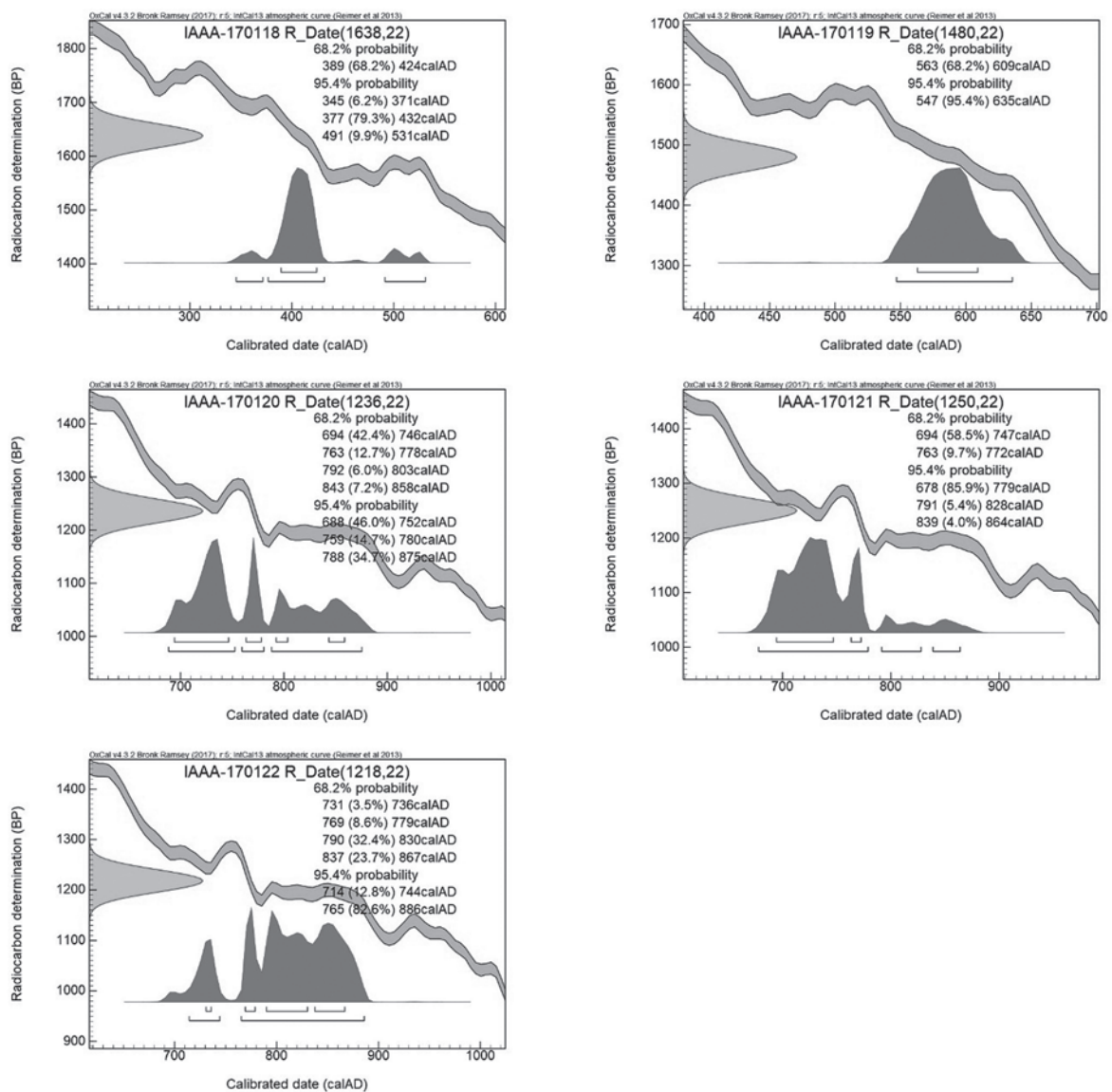


図80 暦年較正年代グラフ

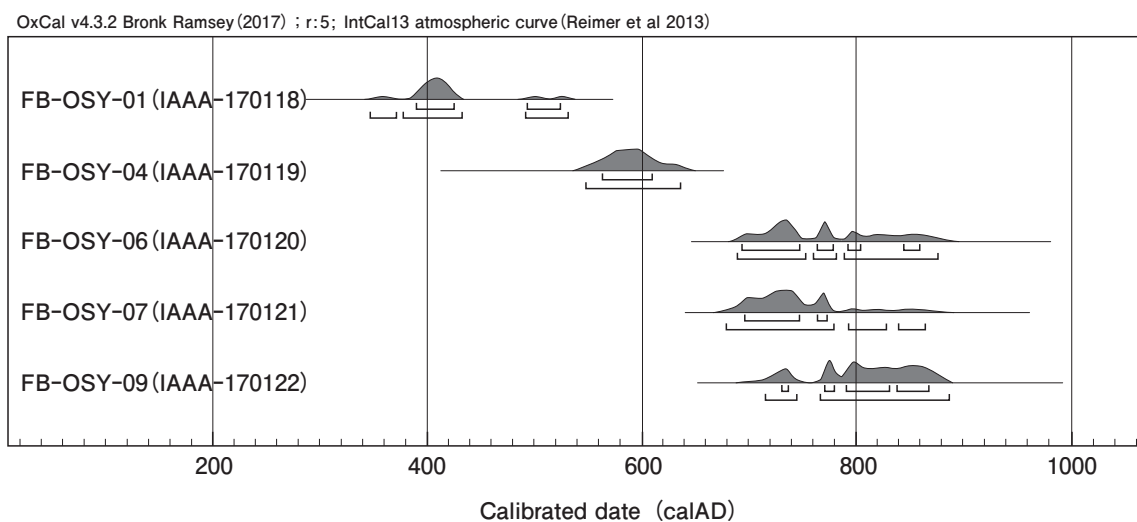


図81 暦年較正年代グラフ (マルチプロット図)

第3節 テフラ分析

株式会社 パレオ・ラボ
藤根 久・鈴木正章

1. はじめに

桶師屋遺跡は、南相馬市鹿島区北右田字桶師屋に所在する遺跡である。調査では、古墳時代の溝から火山灰と思われる堆積物が検出された。ここでは、これらの堆積物について鉱物組成や火山ガラス等の特徴についてテフラ分析を行った。

2. 試料と方法

分析試料は、6号溝跡のℓ3(分析No.1)と9号溝跡のℓ2(分析No.2)の2点である(表5)。

表5 試料とその特徴

分析No.	遺構	層位	時期	試料No.	試料の特徴	1φ篩残渣中の粒子の特徴
1	SD06	ℓ3	古墳時代	FB-OSY-1(乾燥)	暗褐色(10YR3/3) 中粒灰白色軽石	灰白色軽石(最大1mm前後)、 石英・炭化物少量
2	SD09	ℓ2	古墳時代	FB-OSY-2(湿潤)	にぶい黄褐色(10YR5/3) シルト質粗粒砂	碎屑物(最大4mm:深成岩、緑色岩、 泥岩質、片岩)、石英、褐鉄鉱

各試料は、以下の方法で処理した。

分析No.1が湿潤重量8.17g、分析No.2が湿潤重量22.03gを秤量した後、1φ(0.5mm)、2φ(0.25mm)、3φ(0.125mm)、4φ(0.063mm)の4枚の篩を重ね、湿式篩分けをした。4φ篩残渣について、重液(テトラプロモエタン、比重2.96)を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。軽鉱物は、水浸の簡易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と火山ガラスの形態分類を行った。火山ガラスの形態は、町田・新井(2003)の分類基準に従って、バブル型平板状(b1)、バブル型Y字状(b2)、軽石型繊維状(p1)、軽石型スポンジ状(p2)、急冷破碎型フレーク状(c1)、急冷破碎型塊状(c2)に分類した。

重鉱物は、封入剤カナダバルサムを用いてプレパラートを作製し、斜方輝石(Opx)、単斜輝石(Cpx)、角閃石(Ho)、ジルコン(Zr)、磁鉄鉱(Mg)を同定・計数した。

4φ篩残渣中の火山ガラスおよび角閃石は、横山ほか(1986)、横山・山下(1986)に従って、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率測定を行った。

3. 結果

以下に、各試料の肉眼的特徴、粒度組成、重・軽鉱物比および鉱物組成、火山ガラスの形態分類、火山ガラスおよび角閃石の屈折率測定結果について述べる。

分析No.1(SD06 ℓ3 試料FB-OSY-1)

試料は、暗褐色(10YR3/3)中粒の灰白色軽石からなる。1φおよび2φ篩残渣は、白～灰白色軽

石(最大1mm前後)からなり、極少量のチャート、石英、炭化物を含む。1φ~4φの粒度組成は、3φ残渣が多い。重・軽鉱物比では、軽鉱物が多い(表6、図82)。

重鉱物組成は、角閃石が最も多く、斜方輝石を伴い、単斜輝石は僅かである(表7、図82)。

軽鉱物組成では、長石が多く、火山ガラスは少ない。火山ガラスの形態分類では、軽石型スポンジ状(p2)が特徴的に含まれ、軽石型繊維状(p1)や急冷破碎型フレーク状(c1)を伴う(表7、図82)。

軽石型火山ガラスの屈折率測定では、範囲1.4993 - 1.5017(平均1.5008)であった。また、角閃石の屈折率測定では、範囲1.6784 - 1.6867(平均1.6814)であった(図83)。

分析No.2 (SD09 02 試料 FB-OSY-2)

試料は、にぶい黄褐色(10YR5/3)のシルト質粗粒砂である。1φ篩残渣は、碎屑物(最大4mm)を多く含み、深成岩類、緑色岩類、泥岩類、その他片岩、石英、褐鉄鉱を含む。

1φ~4φの粒度組成は、3φ残渣が多い。重・軽鉱物比では、軽鉱物が圧倒的に多い(表6、図82)。

重鉱物組成は、角閃石、単斜輝石、斜方輝石のいずれも多く含まれていた(表7、図82)。

軽鉱物組成では、長石が多く、火山ガラスは非常に少ない。火山ガラスの形態分類では、軽石型スポンジ状(p2)、バブル型平板状(b1)、バブル型Y字状(b2)を僅かに含む(表7、図82)。

火山ガラスの屈折率測定では、範囲1.5002 - 1.5015(平均1.5008)であった。

4. 考 察

分析No.1は、中粒の灰白色軽石からなり、4φ篩残渣中の軽石型火山ガラスの屈折率から、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)と同定される。ただし、角閃石の屈折率はやや高い値を示す。

分析No.2は、火山噴出物(テフラ)以外の主に碎屑物からなる。なお、火山ガラスを少量含むが、4φ篩残渣中の火山ガラスの屈折率が榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)の火山ガラスの屈折率に近似することから、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)の可能性があり、降灰後の二次的な火山ガラスと思われる。

榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)は、6世紀中葉に榛名火山から噴出した降下軽石(pfa)、火砕流堆積物(pfl)からなり、分布は北東に300km以上の仙台まで及ぶ。主な鉱物は、角閃石(ho)、斜方輝石(opx)からなる。火山ガラスの屈折率が範囲1.500 - 1.503、斜方輝石の屈折率が範囲1.709 - 1.710、角閃石の屈折率が範囲1.672 - 1.679である(町田・新井 2003)。

引用文献

町田 洋・新井房夫 2003 『新編 火山灰アトラス [日本列島とその周辺]』東京大学出版会 p.336

横山卓雄・檀原 徹・山下 透 1986 「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』第25巻 pp.21-30.

横山卓雄・山下 透 1986 「温度変化型屈折率測定装置(RIMS-86)による斜方輝石・角閃石の屈折率測定の試み」『京都大学教養部報告(九十九地学)』21 pp.30-36.

表6 試料の湿式篩分け・重液分離の結果

分析No.	処理湿重重量(g)	砂粒分の粒度組成(g)					重液分離(g)	
		1φ	2φ	3φ	4φ	≥4φ	軽鉱物	重鉱物
1	8.17	0.1935	2.2166	3.8684	0.1372	6.4157	0.0890	0.0470
2	22.03	3.5458	4.6845	4.9667	2.2943	15.4913	0.4031	0.0376

表7 4φ篩残渣中の鉱物組成

分析No.	分類群	石英 (Qu)	長石 (Pl)	不明 (Opq)	火山ガラス						ガラス合計	軽鉱物合計
					バブル(泡)型		軽石型		急冷破砕型			
					平板状 (b1)	Y字状 (b2)	繊維状 (p1)	スポンジ状 (p2)	フレーク状 (c1)	塊状 (c2)		
1		14	123	101			1	14	1		16	254
2		21	81	142	1	1		2			4	248

分析No.	分類群	重鉱物					重鉱物合計	
		斜方輝石 (Opx)	単斜輝石 (Cpx)	角閃石 (Ho)	ジルコン (Zr)	磁鉄鉱 (Mg)		不明 (Opq)
1		19	7	80		105	60	271
2		60	67	79	1	5	38	250

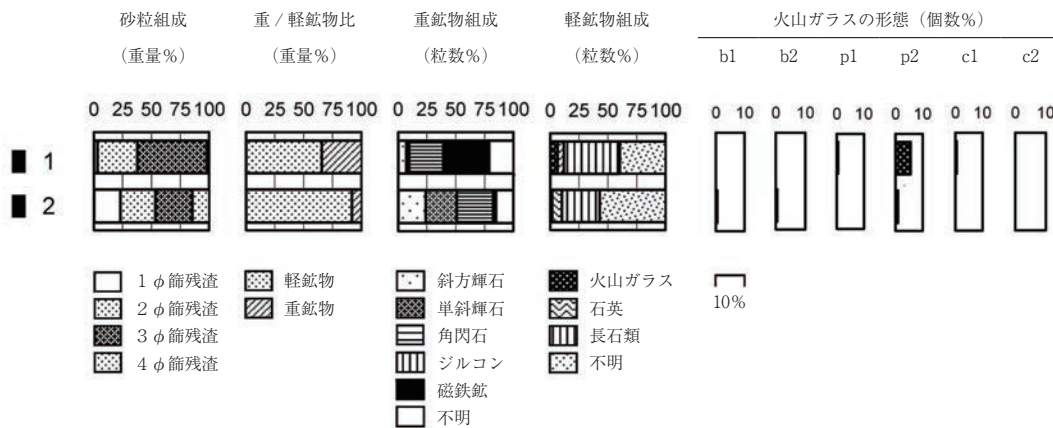


図82 分布図（粒度組成、重・軽鉱物比および鉱物組成、火山ガラスの形態分類）

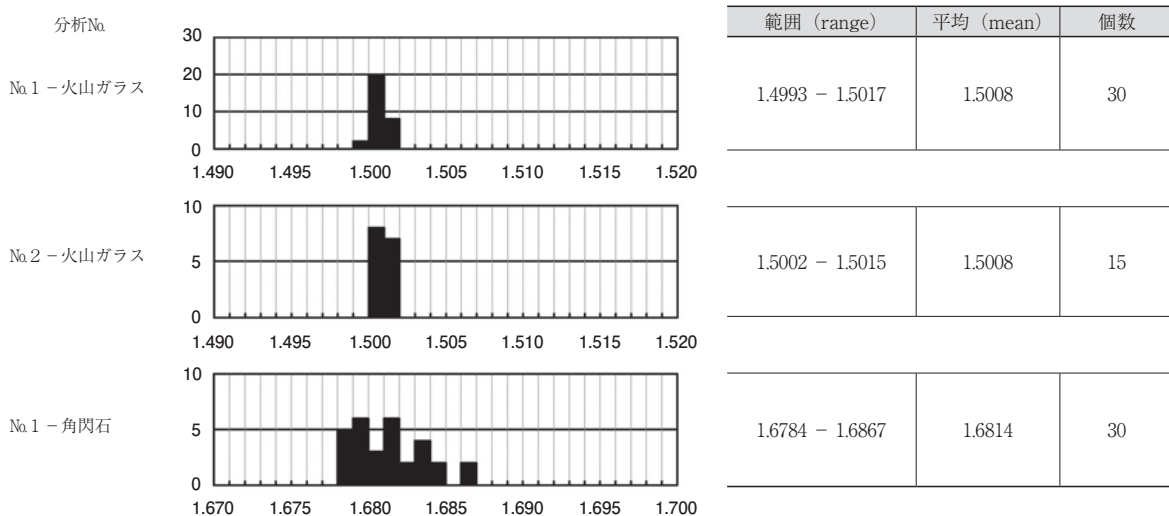
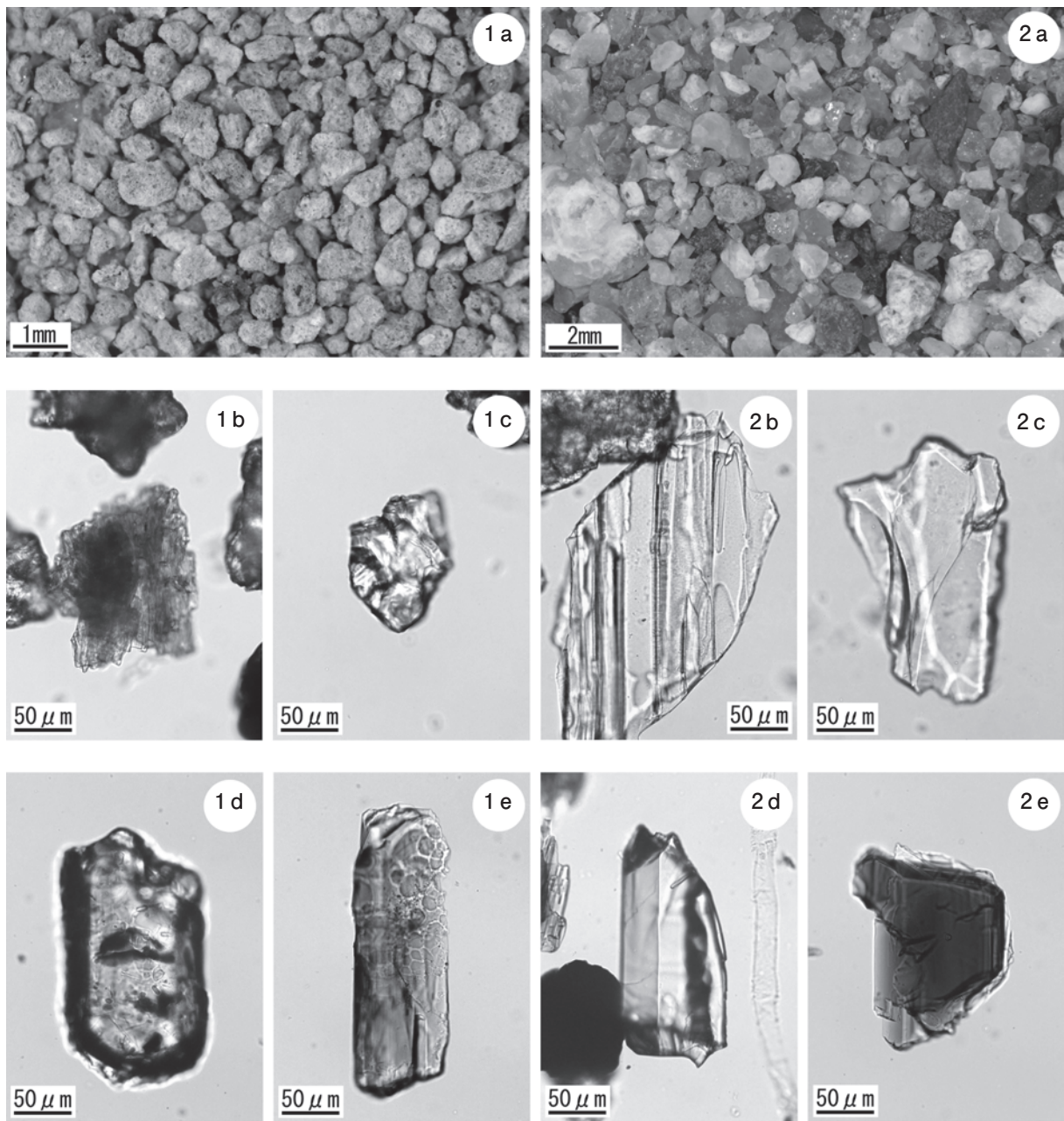


図83 火山ガラスおよび角閃石の屈折率測定結果



分析No.1

1 a. 1 φ 篩残渣 1 b. 軽石型スポンジ状ガラス 1 c. 急冷破碎フレーク状 1 d. 斜方輝石 1 e. 角閃石

分析No.2

2 a. 1 φ 篩残渣 2 b. バブル型平板状ガラス 2 c. バブル型Y字状ガラス 2 d. ジルコン 2 e. 角閃石

図84 1 φ・4 φ 篩残渣中の粒子の実体および偏光顕微鏡写真